
ロザリオとバンパイア ~ Another story ~

じーく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロザリオとバンパイア〜Another story〜

【Nコード】

N0415U

【作者名】

じーく

【あらすじ】

ある日の仕事帰り・・・俺は死んだ・・・

そして 死んだ俺の前に現れた女神？によって 新たな世界へ・・・

Prologue・・・死と旅立ち！（前書き）

例によって・・・主人公の死から 始まります！

ほぼ作者の妄想・想像で 話は進みます。

原作ではまだ語られて無い部分も想像＋妄想で表現してます！

そして 主人公は 強いです！ 作品中の登場人物は原作と異なったりします！不快感のある方は 読まない方が良いかも・・・ベタですが 処女作なので 温かい目で見ただければ嬉しいです。

意見・感想 大感激です （笑）

Prologue・・・死と旅立ち！

『俺・・・死んだのか・・・』

別に死ぬのが嫌だったわけじゃない、

ただ・・・死ぬ勇気がなかったただけだった。

俺の生前の名は、御剣 陽介

普通の小学校、中学校、高校まで行き さっさと就職しようと考えて

某会社に就職した。

そこでの人間関係はけして良いものではなかった・・・

「仕事は よくやってる。でもお前の人間性が問題なんだ！」と上司に言われた。

具体的などこは一切言わず、会社の飲み会の席で気分良く酔っ払いながら

話してきた。

『そんなこと言われてもな・・・』という考えで頭の中がいっぱいになった・・・

会社に入ってこんなんばっかだ・・・

『何もかも嫌だ・・・しんどい、疲れた・・・』

頭の中がこの単語でいっぱいになった・・・

飲み会が終わり・・・車で自宅に帰宅中・・・ちょっとした不注意でそれは起こった。

キキー　ガツシャーーン!!!

前方より飲酒運転の車が逆走し軽自動車(俺の)と大型トラックの正面衝突。

どうなったのかは　言うまでもない。

俺の車は大破、相手のトラックは　フロントガラスが壊れたぐらい。

そのまま死んだ・・・

『まあこれでよかったかもな！いろいろ悩まなくていいし！未練なしだな！』

「へえ・・・めずらしいねー」

(うおっ!!なんだ?)

いきなり後ろから声があったので振り向くと・・・

真っ白のドレスを着た女性(かなりきれいノノノ)が立っていた！とゆーか浮いてた。

『誰ですか？貴女は？』

って言ってみただけど、ま……大体は想像はつくね。死んだんだし、神様？いや女性だ

から女神様か…… いるんだねーほんとに、たまにキリスト教を信じなさい！

的な宣伝カー見るけど、こりやもっと真剣に聞いてたら良かったかな？

「へえー こりやまた驚いた。アンタ何者よ？」

『いや、何者って……いきなり声かけてきたのアンタじゃんか！』

半分あきれるように言葉を返した。

「あははは、そりやそうね。ごめんごめん！今までのこついう不慮の事故で死んだ人間って、死んだことに理解するのかなり時間かかってたんだよねー その上死んだの認められなくてそのまま自縛霊になっちゃったり…… 経験上さ！なのに貴方は直ぐに死んだの理解して受け止めて…… 尚且つ私の正体も推察してたからさ！あたし驚いちゃって！」

（てへへって顔されてもなー）

顔はめちゃくちゃ美人だからちよつと話すの照れくさかったけど意外とスムーズに会話できた自分に驚きながら話を続けた。シャイなのにねー 俺って

『なるほど、つてことは貴女は俺が考えてたとおりの存在で間違いないんですね?』

「そうだよー びっくりした?アタシも君みたいなタイプの人間初めてだからビックリしたよ!」

なーんか 話が和んできたな・・・楽しいけど・・・

『はあ・・・じゃ早速天国でも地獄でもどこでもつれてって下さい。もう未練はないですから』

と目を瞑り、空を見上げながら話した。すると意外な返事が返ってきた

「いや つれてつてあげたいのは山々なんだけど・・・ゴメンネ!君の死は天界では予定されてなかったんだよねーこれが!」

は???

「????つて顔してるけど事実なんだよ。君はここで死ぬ予定じやなかったの!だから天国にも地獄にも行くところがないんだよ!どっちも今は不況でね! 予定のない人間を入れてあげる余裕なんてないんだ!」

つてことは?

『・・・何それ幽 白書かよ・・・で、現世に残って働けつて言うんじゃないだろうな??某有名漫画みたいに!』

「あはははーそれもいいんだけど、これから忙しくなるんだよ!

ほら下界でナントカって言うテロ組織の頭殺っちゃったでしょ？その報復が・・・ えーどこでだったかな？ 忘れちゃったけど 行われる予定なんだ！死者は軽く1万は超えるんだよ！ 其の対処もしなくちゃならないから！今幽霊成り立ての君に出来ること何もないんだ！」

そんな明るい+きれいな顔で言わないでよ・・・ 怒るに怒れん

『で、どーしろって言うのさ！ このまま世間をゆらゆら揺蕩ながら身を任せて浮かんでろって言うの？ 永遠に??』

マジでそれは嫌だ！鬱どころじゃない！転生すらできんじゃない！

「！！ それ！それだ！！」

『どれさ??』

あきれ顔でつつこんだ！とゆーかこの人？考えが読めるんだな。さつきから読まれてるし

・・・いい気はしないかな。

「ま いいじゃない女神様の特殊能力だからさ！大目に見てよ！」

『わかりましたわかりました！本題に入ってください！』

やれやれ・・・

「えーつとね 君さつき転生って言った(考えた)じゃん!本来別の人間に生まれ変わるにはいろいろとめんどーなのよ!行き先だったり、時代だったりで そ・こ・で! さつき漫画の話してたけど 君漫画好きなんでしょ?漫画の中に転生してあげるよ!それだったら簡単だし!」

(・・・は?それって・・・マジ?ってかその方が難しそうなんだけど・・・実在しないフィクションなんだし)

「ノープロブレム!」

『だから考え読まないでよ・・・も、いいけどさあ でほんとに問題ないの?』

期待しながら聞いてみた。

「ええ 漫画つてのは有名・無名関係なく魂が宿るんだよ!作者の思いからね!その思いに(魂に)干渉して 二次元世界を歪めて書き換えたならそれくらい簡単なのさ!実際世界観きまつてるから 現実よりも遥かに簡単なんだよ!(仕事も楽だし、このままうろろうされてたら上司に名に言われるかわかんないし・・・)」

(・・・おい!最後の聞こえたぞ!俺でも!ま いいか!)

『そうならそれでヨロシク!ずーっと悠久の時を生きる?より何万倍もいい!..!』

「おっけー!ならなんの漫画にする?確か 前に先輩が言ってた人間はネギ〇って世界だったらしいけど君もそうする?」

(先輩って・・・それに何でネギ○知ってるの？ ま いいか つこまないつつこまない・・・)

『ネギもいいけど・・・ううーむ』

5分ほど考えて・・・

(そうだロザリオとバンパイア！最近買った漫画だし！原作大体覚えてるし！)

「おっけーロザバンだね！！お安い御用だよ！」

『(もー何もいわん) うん！それで！あの漫画は妖怪が出てくる漫画だただの平凡な人間だったらすぐ死ぬから(つくねは生きてるけどね・・・笑) 特殊能力なんかも持たしてよ！書き換えるってことはそれくらいはできるよね？』

「うん！できるよ！いいよ！なーんでもいつてー!!」

(んー・・・魔法使い？ゆかりちゃんがいるし・・・タライおとすだけってのもな・・・
ん？でも自分で考えた能力つけれんのなら、関係ないか・・・だったら精霊使いに
ワ ピースより自然系の付加能力つけて・・・でも魔法も使えて・・・こんなもんかな？)

「いいよ！！それでも！！ってかメチャチートだね。ワピの自然系って・・・覇気使えんかったら 完全に無敵じゃんww ま面白いからいいかな！笑」

(なんで女神様がそんなんしってるのさ？さつきと
ま いーか)

「もう頭の中読むのはスルーなんだね！つつこ楽しんでたの
に！ま おいといて・・・能力はおっけー転生場所はどこにするの
？どこでもいいよ。」

『えーつとね 三大冥王と顔なじみになりたから アルカードと
対決する前にして欲しいかな？場所は朱染城そば 勝手に侵入する
からさ！んでもって アルカード戦が終わったらセカンドシーズン
に飛ぶからね！パーティが固まってからのほうが絡みやすいし！転
校生ってことで理事長に入れてもらおう予定！』

「おっけー！（ついに声に出して言っちゃったな〜なんか腹立つ！）
おほん！それじゃ準備はいいかな？？」

(ふん そう何度もからかわれてたまるかい！)

『いいよ！ヨロシク！』

「んじゃ！いーってらっしやーい！ー！」

(なんだ！ー空に吸い込まれる！ー！)

『つつわあああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

・・・

「ふーよかったー 気分よくなってくれて〜 実を言っちゃおうと

あなたが死んだのワタシの不注意だったんだよね・・・ほんとにはあの飲酒運転の人間が死ぬ予定だったんだけど・・・ばれて 天界に行かれてたら ワタシ先輩に大目玉だったよー！はあーよかった！

「へえ そんな裏事情があったのか！良かったな シェリア・・・」

ビクッ ま まさか・・・

「せ せんぱーい！！！！なんで ぞーして！！！」

「お前は隠し事してる時は癖があるからな！跡をつけてみたらこれだ！さあーゆーっくりはなそうか？」

ひいひい！！

「ごめんなさー！！！！い！！！」

陽介にはもちろん聞こえてはなかった。

Prologue・・・死と旅立ち！（後書き）

何だろ？この女神様・・・

ブローグなのに長い暗いー！！

そしてもっと旨くなりたい！

文字をうまくつかいたいー 笑

主人公 プロフィール(前書き)

主人公の詳細です！

主人公 プロフィール

プロフィール

氏名： 生前 御剣 陽一 アルカード編 ジャック・ブロウ
学園編 御剣 怪斗

年齢： 没20歳 不明・・・（妖怪）

身長： 188？

体重： 75？

種族： ロギア 自然系 エレメントマスター 精霊使い…
分類的には 魔法使いの最上位 存在は確認されているが

謎の種族

能力： 自然系形態（マグマ 火 水 風 土 光 闇・・・etc）
c)

魔術（古文書 テレパシー 飛翔 結界術・・・etc）

性格： 理屈屋でマイペース 情にはもろい面もあるが 基本的にはめんどくさがり

自分自身が面白いと判断すれば 積極的になる
しかし・・・本心は・・・ 作中で！

主人公 プロフィール（後書き）

自然系って 強いですよね！

最初にでてきた時は

『どうすんのこれ！』って
思いました。

同じ気持ちの人もいるのでは??

第1話 転生の成功 そして出会い

転生!!

陽介 side

ひゅ~~~~どろっ

『いててて……ん?ここは……』

(頭が霞む……俺はいつたい……)

『そうだ!たしか女神の姉さんに転生してもらったんだっ!で、ここは?……ツとその前に能力確認確認!』

ん~實際悪魔の力ってどうやってるのかわからんし……あたりまえだ!

おおっ 頭の中で思い浮かべたら能力が浮かんできた!しかも俺が知ってる自然系なら全

部使えるみたい!!便利~!!

『じゃ まず! むむむむ……かあ!!なーんちゃって!こんな言わんでもいいんだけどね。』

一人乗り突っ込みもぬなしからさっさとやる……

《マグマグの力》(実じゃなく力にしましたw)

『サカズキ好きだったんだよね！んじゃ・・・大噴火！！』

ドゴオオオオオオオオン

ううーん快感！ってか技名パクツちゃだめだよな！考えとこつと

「だれだ！！」

！！！！マズイ　ここつて朱染城のそばだったんだっけ

陽介side out

「貴様何者だ！！さっきの衝撃は　われわれに対する攻撃とみなすぞ！」

ううん　バンパイアだよな？　めんどくさいけど　アカーシャさん達とは　仲間になりたいからな・・・

『すまない　いきなり訪問して　君たちへの攻撃のつもりは無い俺の眷属がこの辺りに脱走してな。それをとらえていたんだ』

とっさの考えにしてはうまく言ったな！なかなか悪くないかな？多分・・・

「それを信ずる証拠が無い。その眷属とやらはどこにいますというのだ？」

やっぱいきなりは信じてくれないかな。ううむ

『そこにいるぞ?』

指差した先は。まだかなりの熱気を纏い赤みを帯びた岩石だった。

「な　なんだこれは??　火?　違う溶岩か!」

『悪い　眷族を突き出して吐かせれば良かったんだがな、そこにいるとは言ったが　溶かしたから原型を留めてないけど信じてくれるか?』

バンパイア男side

何だ?この男は・・・

あたりの熱気・・・初めは衝撃音で気づかなかったが　この尋常じゃない熱気はまさしく

溶岩のそれだ・・・人間であれば近づいただけ　焼け爛れてしまっただろう。

それ以前に溶岩を使う力なぞ聞いたこともない・・・バンパイアである俺たち(5人います。笑)

でも　溶岩なんぞを食らえばひとたまりもない。

どう出ればいいか・・・一茶様に知らせに行くか?あるいは・・・

『あー　俺からは絶対手は出さんぞ!でも攻撃してくるなら話は別だ。だから後者はおススメはできん!俺としては朱染家とは仲良くしたいんだ。』

「!!! なっ」

考えを読まれた？こ こいついったい・・・

『館の主は一茶というのか？よし！連れてきてくれ！ああ 主相手につれてくるってのは無礼だな・・・よし 手数だが案内をしても
られないか？』

「・・・」

どうすればいい？

バンパイア男 side out

男たちは陽一の声に全く反応せずこの溶岩の力を完全に警戒していた。

やれやれ どうしたもんかな？まあ マグマの力をいきなり出したのがまずったな・・・ん？

「何をしてるの？」

緊迫した空気（緊迫してたのは主に5人のバンパイアたちw）を破ってくれたのは 若い姿の女性だった。

第1話 転生の成功 そして出会い (後書き)

次回はいよいよ あの人の登場です！
お母さん！

原作ファンの方は分かるかと！

第2話 アカーシャ・ブラッドリバー

「何をしてるの？」

緊迫した空気（緊迫してたのは主に5人のバンパイアたちw）を破ってくれたのは 若い女性だった。

あれ？この人ってたしか・・・

「ア アカーシャ様！帰られていたのですか？」

やっぱし！この美しい容姿間違えんな！／／／ かわいい／／／

ううん！ ぶるぶる顔を振るって惚けた頭を必死に戻した

「ええ 一茶さん達との旅行が終わったからね 楽しかったわよ！
みんなにお土産あるからね で 騒がしかったからここへ・・・
いったいなにがあったの？」

「そ それが・・・」

『あー 俺から説明するよ面倒を起こした張本人だし。まずは挨拶を・・・初めまして アカーシャ・ブラッドリバーさん 私の名は ジャック・ブロリと言います。』

丁寧に挨拶をし挨拶をした。よしジャックって名前にしよう！この
辺は！学園編では新たに考えよつとw

「丁寧にもありがとうございます。しかし、なぜ私の名前を？」

「そりゃそうだよな・・・接触方法ぜんぜん考えてなかったからな・・・」

それに2人で話したいからな。このバンパイアA B C D Eたち邪魔だな・・・w

よし直球で行こう！

「知ってますよ！もちろん」

ブウウン

俺は直接頭の中に語りかけた

「実はあなたに会いに来ました。真祖のバンパイア アカーシャさん」

「!?!」

そりゃビックリするよな。見知らぬ男に正体をしかも真祖であることとまばれてんだからさ

「落ち着いてください。私は貴女と2人で話したい、例のもうひとりの真祖・・・アルカードについて・・・問題なければこの人たちを帰してくれませんか？」

アカーシャ side

・・・見知らぬ男の人に私の正体を見破られただけでなく あのアルカードのことまで

知ってるなんてこの人はいったい・・・それに屈強な館の警備員たちの慌て様・・・

只者じゃないわね・・・ それにさっきの頭に直接話しかけてきた所を考えると

この考えも筒抜けのはずね・・・ここは応じましょうか。

アカーシャ side out

「！！あ！ごめんなさい！よく考えたらジャックさんが私のことを知ってるのは 当然よね」

「え？そうなのですか？」

男達があわてた様子で尋ねた

「ええ もう3年ほど前になりますか・・・ヨーロッパに行っていたときに知り合ったの ジャックさんが初めまして！なんていうから戸惑ってしまったわよ・・・」

照れ笑いながら話を繋いでくれた

やっぱいい人？だねアカーシャさんって・・・／／／

うづん やっぱし顔が赤くなるのがとめれんw

「貴方たち 彼は大丈夫です。私が保証します。持ち場に戻ってく
れてかまいませんよ」

「・・・分かりました」

バンパイア男 side

完全に男を信用したわけではないが、あのアカーシャさんならば大
丈夫だろう！

一茶の側室であるアカーシャの言葉は信用するに足ることをこの男
たちは知っていた

為 割とあっさりこの場を離れた

Side out

「さて、ここじゃなんだから 私の部屋に行きましようか？」

ええ！アカーシャさんの部屋に！！そ それはマズイ・・・いろん
な意味でw

『いえ 人妻であり美しい女性であるあなたの部屋に入るのはちょ
っと

体裁が悪いですね・・・』

必死に照れてるのを隠しながら おどけて見せたw

「ぷっ！」

ん？

「あはははは！貴方って愉快な方なんですネ！最初の印象がどこかに行ってしまったよ？」

おお！なんかいい感じになっちゃった？ 期待しちやいそう・・・
駄目駄目！俺こんなキャラちゃう！！

『ほめ言葉として受け取りましょう！さて 本題ですが・・・』

「ええ まずは貴方の方から聞きましょう できれば なぜ私のことを知ってるのかも教えて欲しいわね」

『では 3年前っていう設定はそのままにしましょうか！ま ぶざけるのは終わりにして・・・まず事の発端は アルカードという化け物に 私の交友関係のあった村を滅ぼされたことから・・・』

この話は原作完全無視のオリジナルだけど実際に起きた事としていけるよねー

女神様に書き換えられたんだし！ w

「・・・そんなことが」

さっきまで笑顔だったアカーシャの顔が沈む

『すみませんこんな話から・・・』

「いいです 顔に出ちゃいましたね ごめんなさい！」

プルプルするしぐさ・・・かわいいなあゝ いかんいかんシリアスに・・・w

『私が村についたのは もう見る影もない状態でした・・・そこで 死に掛けの友人に会いアルカードのことを知ったんです。そして 貴方達のこと調べました』

「貴方達？」

また驚いた顔をした、その顔もかわいいw

『ええ うーん口で説明するより実際やった方が早いですね。・・・
アイカイブ
古文書 』

手をかざした先に映写機のように何も無い空間に映像を映した。

「これは？」

『これは 私の魔術で 簡単に言えばパソコン、インターネットのようなものです。この世界のさまざまな精霊達に語りかけ情報化しそれを映像化することによって貴方達を調べました。アルカードを追っている3人の戦士 退魔師 御子神 天明 妖術師 東方不敗 真祖 吸血鬼 アカーシャ・ブラッドリバー・・・』

「・・・今日は驚いてばかりね。あなたの力も未知数というか 反則きみね プライバシーの侵害よ？」

笑いながら 話した 笑ってるのもかわいいなー よし
! もー慣れた!!! w

「私達を知っていた分けは分かったわ! それで目的は? 想像がつく
けどね。」

『ええ想像通り、共闘したいだけのことです。だから私はこの極東
の地まで来たんです。友人たちの敵をとるために. . . .』

「. . . . 気持ちは分かったわ でもアルカードはこの世でもっとも
危険な妖怪. . . . 生半可な力では吸収されてしまう。貴方のことだ
から調べてると思うけどね. . . . だからこそ3名の屈強な仲間だ
けで 討伐しようと考えていますから. . . .」

『私の力を見たい. . . . ということですね?』

不適な笑みでアカーシャを見つめた。

「ええ 幸いなことに東方不敗さんは今日、日本に来てます。御子
神さんはいらつしやらないですが、3名中2名が認めれば 問題な
いと思うので」

今までのアカーシャがうその人格に思えるほど 鬼気迫るオーラを
出していた

ジャック side

さすがは不死の吸血鬼 冥王の首領となる女だ. . . .

俺は心底喜んでた 女神にチート能力を授けられた故圧倒的な力
で滅ぼしてお終いに

なるのか・・・と心配していたが アカーシャの雰囲気を見て敵の
力量も大体把握

そこそこいい勝負ができる！

笑いが自然とこみ上げていた。

第2話 アカーシャ・ブラッドリバー（後書き）

ありがとうございました。

個人的には 表モカよりアカーシャの方が好きですね

もっとがんばります！

第3話 力を魅せる

数時間後・・・

「アカーシャよ・・・その男が 先ほどの？」

場所は少し変わり 結界を張り進入できない空間にした 朱染城そばの峡谷である。

「ええそうです 4人目の戦士として ふさわしいか我々に見せていただくため貴方を呼びました。」

「ふむう・・・」

なんだ？この爺さん・・・ってそっか妖力を押さえ老人の姿をしてるんだっただけ？

じじいの姿だったらやりにくいし その上 手ごたえなさそうだ・・・よし

『・・・俺の力量を見るのなら その姿じゃ無理だろ？東方不敗さん？』

「By my instruction...」

(我が命により・・・)

「It is a person of , , being possible to appear , , its warrior in this place!」

(この場に 姿をあらわせ 偽りの者よ!)

「Liberating!」

(解放!)

パアアアアア

「ぬおおおお　こ　これは!!なぜわしの体が・・・」

『ああ心配しなくていい。妖力を抑え偽りの姿をしていたのを俺の魔力で引きずりだしただけです。』

東方不敗　side

ばかな・・・このような術聞いたことがない、わしの場合は妖力を抑えて　姿を変えていた

妖力を封じる術ならまだしも　引き出す術?メリットが全くない。
あるとすれば　全力の相

手と戦いたいという思考の持ち主　戦闘狂なのか?なんにしても
全くつかめん男じゃ・・・

Side out

アカーシャ　side

思ったとおり・・・

力を見たいといったがその理由は力量を信じてなかったわけではない、絶対的ともいえる

力量を感じ取った故の行動だった。

あの人の言うことはまだ100%信じたわけじゃないけれど……
何か暖かい感じもする

圧倒的な力とは裏腹にすべてを包むような優しさのような……

Side out

『さ やりましようか！東方不敗さん？』

驚いた顔が瞬時に消え、若かりし姿の東方不敗もまた 不敵な笑みをこぼし

「ふははは……面白いのう！ ワシもわくわくしてきたぞ！年甲斐もなくな…… こい！」

臨戦態勢に入る

こいつでいくか！ 『焰の力 自然系！』
ロキア

『プロミネンス 紅き焰炎』

ポオオオン

左右の腕を炎化し 不敗に飛ばす

「ふん!!」

バァン!!

妖気をこめた呪符を掲げバリアのようにジャックの攻撃を防ぐ!

「ぬううう!!」

(なんじゃ?この力は!唯の炎じゃない。封炎作用のある符を使用しているのに消えん!)

「かあ!!」

呪符を何重にも加え 消し去ることに成功する

『マジか・・・流石は 世界最強の妖術師!あの炎を消し去るかよ
』!

実際に驚いている。自然系の能力は体のすべてをその属性にでき体の原型も留めていない、更にその属性を発生させることができるつまりは 尽きる事のない炎!それを消す・・・

(チートは結構お互い様ってことか?楽しくなってきたぜ)

「お主もな・・・あのような炎・・・伝説の不死鳥フェニックスや炎龍サラマンダーを見てきたがそれ以上じゃよ・・・」

(ふふふ・・・あれだけの攻撃で 妖力を根こそぎ持っていかれたようじゃ 使うか?次元刀・・・)

ブウウン

『マグマの力 自然系^{ロギア}』

(くるか？あれは確か崩月次元刀・・・)

ってか力見るだけなのになかなりマジバトルになってんじゃんか！

って自分に突っ込んでみたw

「ジャックよ ワシの最高の秘術を見せてやるっ！」

(やっぱりかよ！)

『ああ いいぜ！俺のもさっきの炎とは 桁が違っぜ！』

ポコポコポコ・・・

左右の肩から腕まで マグマ化する

(炎の次はマグマか！ 聞いたこともないぞ マグマなんぞ使う術は・・・確かに桁が違っ様じゃな・・・)

『溶岩驟雨^{いんがふしう}！』

トトトトトトトトトトトト

大量の火山弾が雨のように降り注ぐ！

「くっ 次元回避！」

フッ

（次元をずらして 回避したが・・・ 火山噴火の様な攻撃をして
くるとは・・・下手に出れん！）

『次元刀で空間外に逃げたか！』

マズイな・・・次元回避って気配も消えるのかよ。超人系の空気開
閉も習得すりゃ良かったか？

考えていたのは数秒間だったが・・・

（！！）

「隙ありじゃ！」

ザシユ！！

『ぐあああつ』

ジャックの両の腕、足を切断した。！

「しまった！本当に切ってしまったわい！アカーシャ！彼を早く治
療を！！」

（妖怪でも切れたら 治療なんてできんのかな？不死者のア
カーシャならともかくさ・・・）

「やりすぎよ！二人とも！！でも黙って見てた私も同罪ね 急いで

家の救護の者を」

(そろそろ 反撃するか・・・あんま倒れた振りしててもかっこ悪いし)

ボコボコボコ・・・地面を溶かし・・・東方不敗の背後に回りこんだ！

「な!！」

マグマの拳を東方不敗に当たる寸前で止める

『これでおあいこだな？ 別に治療はいいよアカーシャさん。・・・で、まだやるかい？』

「ふははは・・・ワシの負けじゃ。 お主は規格外じゃな！これは認めるしかないのお ここまでの化物がおるって事をな。力量は十分すぎる。アルカード討伐に大きく力になってくれるであろう。のう アカーシャよ。」

心底楽しそうな笑顔でアカーシャの方を見た。

「ええ、私も正直ここまでとは 思ってたませんでした・・・ジャックさん貴方の提案の共闘・・・分かりました。 いえ こちらからもお願いします。あのアルカードを倒すためにも」

深々と頭を下げジャックの方を見つめた

(そんなに見つめなくても・・・／／／ ええい！)

顔が赤くなっているのを誤魔化しながら

『ありがとうございます。アカーシャさん 東方不敗さん！これからよろしくお願いします。』

こちらも丁寧に返事をする。そこに・・・

「ええい！ジャックよ！その 敬語はいい加減やめてもらえるか？
戦ってる時とギャップがありすぎて気持ち悪いわい！そういうギ
ャップ萌えは 二次元美少女だけでええわい！」

『はぁ二次元????』

「ああ この人は 日本の漫画が大好きでね 今かなりはまってる
なのよ・・・かるく流してくれていいわ」

あ・・・そういえば この人って二次元オタクだったっけ？

「流すとは ひどいぞ！二次元は浪漫！浪漫なんじゃ〜!!!」

東方不敗の悲痛な叫びが木霊した・・・

第3話 力を魅せる（後書き）

このころ漫画って あるのかな？？

自分で書いてて 自分でおかしいと思った・・・

不敗さんはそっちのイメージが強いんで・・・

第4話 三大冥王 + 集合

「で……この男が例の？」

東方不敗との一戦が終わり数日後……アルカードがある場所で暴れているという情報を掴み行動を開始していた。

そして後の三大冥王となる御子神 天明と俺は出会った

(例によって 素顔が見えないな……この人)

原作どおり！御子神の素顔はフードによって 目元がよくわからなかった

まあ いったか w

「ええ お久しぶりね。御子神さん……いえ 今は御子神理事長といった方がいいかしら？」

理事??んー……あ。そういうことか

もうこのとき既に陽海学園できてるってことか？

「ふ…… まだ 学園を立ち上げようと 計画したばかりの段階だ…… 名前すら決まってるよ。名も無い学園に理事だけいても仕方なからう。」

苦笑しながら 御子神は言った

なんだ・・・まだだったか 苦笑

『そちらが 最後の仲間の一人って事かな?』

(知ってるけど まあ してんのもおかしいし辻褃あわしとかな
いとな)

「ああ 御子神と言う 君がアカーシャと不敗が言っていた ジャ
ツクか・・・ 見たところ・・・む?」

なんだ?人の顔見るなり 難しそうな顔して・・・

いい気はしない・・・って しないこと多いな・・・俺 ストレス
溜まりそう 苦笑

『なんだ?』

とりあえず 嫌なんで聞いてみた

「気にするな 君は何の妖か気になってな・・・ 見たところかな
りうまく正体を隠してるみたいだ。それで眉間に皺を寄せてしまっ
たんだよ。」

・・・それで 初対面なのに ギロリっ っとみてたの・・・

『一応 納得したよ。初対面の相手に睨まれるのには慣れてないモ
ンでな ちよつと警戒した。』

苦笑 しながら警戒を解いた

「そういえば わたしも貴方の名前しか知らないわね？ 貴方はなんていう種族なの？」

・・・そういえばって 結構アカーシャさんっておとぼけキャラも出来るんだねー カワイイけど

『聞いたら最後一生後悔する事もあるんだよ？』

つてかつこつけてみたけど・・・

「あなたの性格ならそう言いつつてわかってたわよ！・・・癖が出るからね」

(ええ！なんで??)

「ほら 動揺した(笑)」

(はぁ・・・ 叶わないな・・・この人には)

俺は しみじみそう思っただった。

「話は戻すが・・・ワシもお前のことには興味があるのお。あの術にしても見たことが無いものじゃったし。」

後ろにいた東方不敗も俺に詰め寄ってきた

(何これ？尋問かよ・・・)

3人にいつの間にか詰め寄られていた。

『はあー わかった 負けたよ・・・』

勘弁してほしいね・・・ この空気

『まったく まるで猛獣に囲まれた気分だよ・・・』

「ふふ 貴方がカッコつけてるからね こっちも対応しただけよ。それに私達の事は知ってるのに 貴方の事知らないなんて不公平じゃない？」

「わしらは 結構な付き合いじゃから チームワークは侮れんぞ？」

「ふむ 私は単純に君に興味が湧いただけなんだがな」

やれやれ・・・ くわばらくわばらってこつ言つときに使うんだよな。

『ふう・・・ 俺の名は もう知ってるよな？ 種族・・・か 難しい内容だ。』

ジャック side

この世界に来たとき・・・自分の種族 いわゆる設定について

女神様は俺のリクエスト通り精霊使いエレメントマスターという存在にしてくれた。

その種族は 存在は確認されてもなその多い種族だった そして・・・その実滅んでいるという事実も・・・

確かに 設定はしてもらった。滅んでるのは そういうことにしな

いと世界バランスが崩れてしまつらしい・・・そして精霊おれ使いとしての悲しみも・・・

(悲しい気分になるな・・・やはり)

俺はその事を仲間に話した

みんなは黙り込んだが 筋違いの同情はよしてくれと頼んだらみんな察してくれた。

『まあ 種族が滅んだのはそれが運命だったんだ どんなものでもいつかは 滅ぶ・・・それが自然の掟だ。 だが・・・アルカードだけは あいつのやったことだけは運命って言葉だけではすまされん。かたを付けたい。』

そして 知り合いの村が滅ぼされたという話も・・・作り話でなく 確実に現実として俺の脳裏に焼きついていた。

(軽はずみな事を願つもんじゃないな・・・設定なんかさ)

こんなに 苦しいなら・・・な

この時、俺はもうこの世界と完全に同化したと確信した

ジャック side out

「・・・ほんとに」

『ごめんは いらないよ。俺のせいで又暗くなつたな 忘れてくれ。』

『

「強いな・・・貴様は」

御子神はジャックという男の底知れない闇とそれに勝る決意を見た
きがした。

「確かに・・・のう」

見た目はどこにでもいる青年の姿をしている・・・だが、いったい
どれだけの事を経験しているのか・・・

『強い・・・か 俺なんか・・・な。』

そうつぶやく。

アカーシャ side

彼の心の闇・・・ 知り合いの村がアルカードに・・・という話は
聞いていたけど

ここまでとは・・・

軽はずみに彼の心に踏み込んだような気がしていた自分に後悔して
いた

(でも・・・ここで 誤ったところで・・・)

私は 謝るのではなく明るく振舞おうと考えた。これ以上彼に気を
かけさせないように・・・

アカーシャ side out

「さあ 彼の事も分った事だしこの話はおしまい!...ね?」

アカーシャは 話題を変え...今後の行動について話し始めた。

第4話 三大冥王 + 集合（後書き）

小説考えてると気持ちが入ります！

でもその気持ちに文章が追いつかない・・・

次回は 決戦です。

第5話 決戦直前（前書き）

この話は短いです。

第5話 決戦直前

数カ月後・・・

アルカードの正確な居場所を掴んだ4人は

今暴れている場所へ急いで向かい　そして・・・とうとう見つけた。

「見つけたぞ奴だ！」

一番前にいた　御子神が叫んだ

「奴め・・・いったいどれだけの人間と妖を食らったというのじゃ
以前にも増してでかくなっておる」

「アルカード・・・」

『・・・』

想像以上・・・　その4文字しか　頭に浮かんでこなかった

アルカードは妖や人を食らうことで巨大化するという・・・

それにしても　でかすぎる。原作で見たそれ以上に・・・

なぜ・・・だ？

(原作で見たのよりはるかにでかい・・・そして妖力・・・)

ブレイクどころではない。自分のチート能力を使ったところできれるか・・・

不安が頭をよぎったが・・・

『やるしかないだろ！これ以上はやらせない！！』

「もちろんね。まずは 出来るだけ広い場所に誘導しないと。」

「うむ。」

「ああ。」

4人は臨戦態勢に入った。

第6話 決戦・アルカード

幾つもの 時を費やし 強大に成りすぎたといっても過言ではない
真祖・アルカードを

ついに4人の戦士は追い詰めていったのだった。

「これ以上時間を費やし奴を暴走させていると世界が滅ぶ、ここで
終わらせるぞ！」

御子神が先陣を切り 破邪の杖を用い 退魔の障壁を四方に展開！

「邪なる怨念よ・・・退け」

「スベリッ退邪悪・クラッシュエッジ破砕封波！」

アルカードの体の一部であり 眷属である無数の触手の動きを封じ
つつ 破砕していく。

そして アルカード本体が見えた

「今だ！ 不敗、ジャック！」

その背後より・・・

『まかせろ！』『うむ。』

「崩月次元刀！」

『雷の力』
『自然系』ロキア

次元の刃と神なる雷が合わさる……

『「天覇・次元斬」』

バリバリバリツズツシャアアン！！

一面のアルカードの体の部分が吹き飛び 粉々になっていく……

『どうだ？』「ふう、あれでこられたら流石にたまらんわい……」

「つつ……確かにキツイな……」

アルカードを人のいない荒野へ誘い出すのに膨大な力を使い続けた
為か皆満身創痍だった

（ちっ不安があつたが、全盛期がここまで厄介とはな……）

俺は 一瞬 意識を乱してしまった。

「いけない！！」

バツ

背後に回りこんだ アルカード本体に唯一気づけた アカーシャが
皆を庇う様に 仁王立ちをした。

ドストドストドスッ！！

無数の触手が俺の目の前で アカーシャの体を貫いた！

アカーシャが気づけたのは偶然と幸運であった。

アルカードの放った 肉片はひとつずつが意思を持ち新たな怪物・
・アルカードの眷属

として 4人に襲い掛かっていたのだ。

アルカードは本能的に 自分と同じ真祖 アカーシャをこの中で一
番警戒していた為、

無数の眷属を使って アカーシャと御子神・東方不敗・ジャックを
切り離していたのだ。

・ 故に 一番後ろにいたアカーシャがアルカードの接近に気づけた・

『アカーシャ！！』

ズツシャツ

大量の血を流しながら 膝をつく

「油断・・・したわね」

虚勢を張っていたが・・・

「いかん 血を流しすぎじゃ！いくらお主でもこれ以上は命にかかわる！」

(不死のアカーシヤにここまでするとは・・・いったいどうすれば)

東方不敗が回復の術を展開・御子神が辺りに四天結界を展開させた。

「ちっ このままだとイタチごっこだ・・・ 奴は 深手を負わしても時とともに再生する」

ジャック side

・・・俺は馬鹿だ！

自分の力に過信していた自分を呪った、アルカードの力量を見余りその上アカーシヤにも

自分の油断で 深手を負わしてしまった・・・

原作を知っている俺はアルカードを封じるのは同じ真祖のアカーシヤの力で封じていた

ことは知っていたが それでは このままアカーシヤとモカの運命が原作通り悲しいもの

となる。

それを防ぎたかったのだ。しかし・・・力量を見余った今 それは不可能と悟った

(くそっ どうすれば・・・)

ジャックside out

「ジャック・・・そう自分を責めないで 仲間でしょ？仲間を・・・大切な仲間を助けられるのだったらこれくらいどうでもないわ。」

『っ！！』

アカーシャはまるでジャックの考えを読んだかのように言った

「・・・ふふふ もう結構な付き合いでしょ？貴方が何を考えてるかなんて顔を見れば分かるわよ？貴方ほど正確にはわからないけどね・・・っっ」

ごふっっ・・・

鮮血が 辺りに舞った

「アカーシャ！喋るでない！今は休めるんじゃない！」

不敗がアカーシャを注意している際 後ろで御子神が叫んだ

「くそっ アルカード・・・回復してやがる！雷撃による身体麻痺作用を起こしているはずなのに！」

アルカードは雷撃で結ぶことの間かぬ体の部分を自分から破壊し自身の再生能力を持

第6話 決戦・アルカード（後書き）

さて・・・どうするんでしょうね？（笑）

突っ込みどころ沢山でしょうが
まあ適当に流してください！

第7話 決戦・揺るがぬ決意

ジャックside

手が無いわけじゃない・・・しかし 力量を見余った今、倒しきれ
るかどうかが 分からなかった。

自身の数多の自然系ロギアと魔術を駆使した まだ試したことのない力・

（いくらアルカードとは言っても元は バンパイア・・・異常な回
復力を上回る 力で破壊すれば再生前に絶命するはずだ・・・しか
しおれ自身も唯では済まされんな・・・）

自然系ロギア・・・ワ ピースからパクツたチート能力 某漫画では2つ
口にしただけで体が粉々

なって死ぬという。 しかし俺自身は 全ての力を使ってもどうで
もなかった。

・・・

しかし それは別々に使ったらの話だった。

ジャックside out

アカーシャ side

「はあはあ・・・？ジャック・・・？」

今にも動き出しそうなアルカードを見つめている ジャックを見て不安感がよぎった……

これまで決して長く共にいた訳ではないが ジャックという男の事を理解していた。

決して 仲間を裏切らない・見捨てない・そして仲間の為なら……
理屈っぽくて

マイペースなところもあるけど

それは 本人が無意識に本心を照れ隠しているのだということも分かっていた。

(考えが読めるのにそのことは 一切 面向かって否定しなかったしね……)

思い出しただけでも笑みがこぼれる……あの 赤面した顔を思い出すと……

そのジャックの今の顔は……不安・悲しみ……そして……
強い決意が現れていた。

アカーシャ side out

『みんな聞いてくれ……』

ジャックが口を開いたと同時に

「だめよ！！！ うっ……」

アカーシャが痛みを抑えながら 叫んだ。

「どうしたのじゃ？」 「無理はするな！」

2人は興奮したアカーシャを宥めた

「はあはあ……何をするつもりか分からないけど 自分が犠牲になろうだなんて思わないで！」

『っ！！』

(叶わないな……この人には……だが)

『アカーシャ……いいから聞け。そして2人も聞いてくれ……』

3人は ジャックの方を見た。

アカーシャはまだ納得したわけでは無かったが、傷の深さと有無を言わさぬジャックの迫力に

口を閉ざした。

『これから 最後の反撃に出る。 ただし出るのは俺1人だ！』

この言葉を聴いた瞬間

「」「」「ふざけるな！」「いでー！」

3人が八モるかの様に声をそろえた

(ここまで 言われるなんてな・・・ほんとにいい仲間巡り合えた。俺は幸せ者だ・・・な。)

「さっき言ったじゃない！そんなこと絶対認めない！ゆるさない」

「わしも認めんぞ！ジャックよ！」

「このままでは、世界は確かに滅ぶかもしれん・・・だが 貴様を犠牲にした勝利などに価値などは無い」

みんな・・・

涙が出そうだ・・・ だけど

『みんな勘違いしてないか？誰も命を捨てるなど言っていないぞ？』

「」「は??」「」

また八モったな・・・うけるよ・・・さすがにな

『これからやる術は 俺自身試したことが無い！そしてほぼ全ての魔力を消費する(多分)全て消費すれば 俺は身動きが全く取れなくなるだろう。そこで動けなくなった俺を助けるために 皆は俺から離れたとこで待機してもらいたいんだ。』

・・・まぎらわしいわ！！って怒られたけど流石に信じにくいよう

だ特にアカーシャは・・・

「本当に？信じていいの??」

・・・上目使いで見ると照れる／／／

『ああ 俺が約束破ったことあるか?』

「数ヶ月間だからのう・・・約束みたいなのした覚えがな・・・」

(空気読め!!二次オタジジイ!!)

本気で突っ込みそうになったわ!!

「ふふふ・・・分かったわ。信じてる」

「私も異議なし・・・だ。 貴様に賭けてみよう」

「ふつ 倒れた後はワシらに任せておけ 丁寧に扱ってやるわい」

『頼むぞ!マジでさ (苦笑)』

俺は アルカードを見なおした。

(あ・・・いかんいかん成功率100%なら言わんのだがな 一応
言っとくか・・・)

『アカーシャ。』

首だけ振り返り言った。

『もし・・・倒しきれなかったら、その時は・・・』

「わたしの妖力で封じるのね・・・」

！！分かっていたのか

「あれでも同じバンパイアだから わたしの力の方が同調して封じやすいだろうって考えは初めから分かってたわ でも それは弱らせないと不可能だから・・・」

そういうことか・・・ だが分かってないな 自分の力で封じる意味を・・・ 今言っただとこで

意味は無い・・・ 万が一の時は絶対やる人だ・・・ どんな危険があってもな・・・

『自分を犠牲にするな。か・・・ こんな考えはお前に似たんだぞ？アカーシャ・・・』

「え！！」

『俺が心を読めるのは知っているだろ？お前の弱点は優しさだ。優しすぎることに。愛するものを守るためなら・・・ 信頼する仲間の為ならばどんな事でもする！お前は この旅の間 そうよく考えていたんだぞ？自覚ないかも知れんがな・・・』

「ちよっと・・・それって・・・」

ひゅっ!!

アカーシャが答える前にアルカードに向かい飛んだ。

第7話 決戦・揺るがぬ決意（後書き）

頑張れ！オリ主！！

後1話挟んで 戦闘再開です

第8話 決戦・拭えぬ不安（前書き）

残された3名の会話です。

第8話 決戦・拭えぬ不安

アカーシャ side

今のは 念話？ 周りには聞こえてなかったみたい・・・

わたしの考え・・・思いに似たって・・・

「ジャック!!!」

アカーシャ side out

3人side

「いかん！アカーシャここから離れるな！」

バリリッ

「きゃあ！」

何？ 見えない壁が・・・

「奴め 我々の周辺一帯に結界を張ったな？この結界・・・見たことも無い構成でできているな・・・」

簡単には破れない・・・瞬時に理解した。

「みたいじゃな・・・結界術を生業とするわしでも 直ぐには解けんぞ!・・・アカーシャよ。あやつを信じるんじゃ・・・最後の念話ワシも聞かせてもらった」

不敗が口を開いた

「え?」

予想してなかった為 驚き東方不敗を見つめた

「奴の使う術は得たいが知れんが、念話は相手の精神に潜り語りかけているようじゃ。それぐらいならワシにもできる。骨が折れたがな。不安になるのも分かる・・・それだけ奴にとっても不安なんじゃろう。ならば奴を信じ抜いて 奴の不安を少しでも削ってやるうではないか・・・」

口ではそう言っても 仲間1人に任せてしまった無念感は拭えそうに無いのは アカーシャにも

理解できた

「不敗さん・・・」

御子神も横で頷いている・・・彼も又同じ気持ちだった。

「そ そうよね・・・わたし達が心配してたら、彼も力いっぱい戦えないわよね?」

嫌な予感なんて・・・無い!!

信じてる・・・

絶対あんな奴になんて負けないって!!

3人side out

第9話 決戦・完全なる終焉

『よし・・・行くか!!』

目の前の強大な真祖を前に覚悟を決めた

「うごごごごご・・・」

俺に気づいたのか、アルカードも回復した頭部をひねり俺の方に向けてきた。

『アルカード・・・大した奴だよお前も、憎しみ・悪意だけを見ればだが・・・な。ここまでなれるものなんだな・・・』

この世の全ての人間を滅ぼす執念のみでここまで進化したアルカードに対して 俺が純粹に

感じたのは敬意だった。

『だが、貴様は間違った方に 進化したといわざるを得ない! 貴様の進化はたった一人で人間はおるか妖しの世界をも狂わせる・・・未来を作れない歪な進化だ! だから ここでお前という存在を終わらせてやる!!』

「ぐるおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

決戦がはじまった!

(アルカードが動けない今しかない！)

『ぬづづづづづううううう……！！』

自身の魔力の全てを両手に集中させる！

『All spirits of the deads…』

(全ての精霊達よ…)

『Gather in my place』

(我が下へ 集え…)

『Coming abnormal phenomenon…a q
ency of Providence!』

(来れ 森羅万象・神代の力！)

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

(か からだがバラバラになりそうだ…無理があったか？ 自
然系の全てを融合^{スパーク}させて巨大な魔力として使うなんて…)

意識が飛びそうになる…その時

「決めろ！負けるな！」

『！…！』

(今…確かに…)

「主ならばやれる。必ず！」

(気のせいじゃ・・・ない！)

「あなたを信じてる！！！」

『・・・へっ あいつらぁ！！！！』

先ほどの苦しみが消えたようだ

『ここまで言われちゃあ、やらなきゃ男が廃るってもんだ！！！！』

『うおおおおおおお！！！！』

自然系ロギアの力はうねりを上げながらジャックの両の腕に宿った。

『これが・・・世界みんなの力だ！！！！』

再度意識を集中させる

『The world・・・』

(世界は・・・)

『All lives start from nothing.』

(全ての生命は無より生まれる)

『That is, the zilch is a creat
ion dogg.』

(即ち無とは創造神である)

「!!! ぐるおおおおおおおお!!!」

アルカードが暴れだした。

(はあはあ・・・何が起こるか悟ったか・・・だが無駄だ。先ほどの天覇・次元斬には身体麻痺以外にも退魔の力を刷り込んでいる・・・細胞を粉々にして再生したとしても後遺症・・・直ぐには動けない!)

「ぐるがあああああああ!!!」

動けない 自信に気が狂ったのか

アルカードはただただ暴れまわった

『Then...Does the opposite?』

(ならばその反対は?)

『Everything is returned to nothing.』

(生誕の逆 全てを無にする)

『It becomes chaotic power.』
(混沌の力となる)

『The taboo is broken now.』

(今禁忌を破り)

『Assume the power of ruin and
to my origin...』

(破滅の力として我が下へ・・・)

異常な力が・・・ 大気が 地面が 全てが震えだした

『これで 最後だ!!アルカード!』

『COMPLETE END!』

(完全なる終焉^{おわり})

キユンキユンキユンキユンッ・・・・・・・・

ド

ン

!

それは まるで ビックバン この世の始まりにして終わりのよう
だった・・・

ジャックの生存は・・・

「ジャックーーーーー!!!」

アカーシャの悲痛な叫びが木霊した・・・

第9話 決戦・完全なる終焉（後書き）

詠唱は考えてたらなーんか 恥ずかしかったです・・・苦笑

いろいろ参考にさせてもらった 台詞も・・・

分かる人にはわかるかとw

どうなったのかな・・・

第10話 激闘の果てに

大爆発が起こった後・・・

仲間たちを護るかのように覆っていた結界が露と消えた

それが意味するのは・・・

「ジャック!!」

アカーシャは結界が消えたのとほぼ同時に駆け出した

「わし等も行かず!」「ああ!」

不敗・御子神らも あたりを警戒しつつ アカーシャの後に続いた

アカーシャ side

「なんて・・・」

周りの状況は 言葉では表せない程

凄まじい光景だった。

半径はどれほどまで及ぼうか・・・

ジャックとアルカードを中心にあたり一面が吹き飛んでいた。

「・・・ジャック 待機してろって 言ったのは まさか この事
だったんじゃないで・・・ しょうね・・・? こっ ここにいれば、
わたし達も巻き込まれるから・・・ ジャック!! 答えて! 約束し
たじゃない! みんなで帰るって!」

アカーシャの悲痛な叫びが辺りを木霊した。

アカーシャ side out

「アカーシャ・・・」 「くっ・・・」

2人は言葉が出なかった・・・

かけがえの無い友を失った・・・

その思いが 自らを責める

なぜあの時無理にでも止めなかったのかと・・・

「!」

アカーシャが何かに気づいた!

それは灰のような物に埋もれていた

「まさか・・・」

急いで　そこへ向かう。それに気づいた2人も後に続く。

倒れていたのは・・・

「ジャック!!」

感極まりながらアカーシャは彼の体を抱き起こした

しかし・・・

ジャックは何も言わない。

「ジャック・・・?」

「アカーシャ!ジャックは無事か?」

東方不敗も少し遅れて到着した

「それが・・・息はあるのに　体温が異常に低くて　鼓動も弱いので・・・」

ジャックを抱きかかえながら　顔を青くしたアカーシャがジャックの容態を伝えた

「見せてみる!」

退魔師である御子神がジャックの体を調べたところ・・・

「心配ないとは　言えんな・・・　おそらく魔力を極限まで消費した代償だろう・・・　巨大なエネルギーとは術者の生命力にリンクし

ていることがある。ジャックも行く前に言っていたらどう？」

確かに・・・術を使えば身動きが取れなくなるといつていた。

「でも 大丈夫なのよね？」

「ああ、 時がたてば 霧散した 奴の魔力が回復じゃろう。 . . .
・アカーシャよ落ち着け。 普段のお主ならば このくらい気づくじ
やろうに」

(アカーシャの性格上それは皆無か・・・)

ジャックの言うようにアカーシャの最大の弱点は優しさにある

瀕死の仲間の手前 冷静にはなれないことは分かっていたことだった。

「そ そうね・・・ごめんなさい。 取り乱して・・・」

「何を誤る？」

「そうじゃ 皆無事じゃった。 その上 アルカード討伐にも成功した。 誤る場面じゃないじゃろ？ 早く安全な場所へジャックを連れて行ってやろう。 約束したしな 丁重に扱おう。」

そう言っつて御子神・不敗は笑いかけた。

「そうよね 早く彼を療養させないと・・・」

アカーシャがジャックを抱えた時。

「・・・ア・・・カ・・・」

ジャックが呟いた。

第10話 激闘の果てに(後書き)

ありがとうございます。。。

第11話 晴天霹靂

「ジャック!!」

アカーシャは驚いた

仮死状態に近い彼がこんなに早く意識を取り戻したからだ。

「おお!意識を取り戻しおった。」

「やはり・・・貴様は大した男だな。」

2人も駆け寄りそれぞれ労いの言葉をかけた

「みんな・・・な・・・まだ・・・だ・・・」

息も絶え絶え ジャックは答えた。

その言葉を聞いたその時

ドゴオオオオ!!

背後の地面が抉れ アルカードの本体が出てきた

「「「な!」「」」」

3者3様に驚きを隠せなかった

あれほどの大爆発で跡形も無く消えたと誰もが確信していたのに

その希望が打ち碎かれるように

アルカードはその姿を現した。

「・・・やるしかないわね」

これ以上は ジャックに負担をかけれない・・・

何より 今彼は瀕死の状態・・・

今度は 私が護る!

アカーシャは覚悟を決めた

「ああ・・・ 無論だ。」

御子神も同じく

「これ以上無い活躍の場じゃ。ジャックに全て持っていかれてはかなわんしな。」

そして東方不敗も同じ思いだった

3人が臨戦態勢に入ったその時

アルカードの異変に気づいた

第11話 晴天霹靂（後書き）

生きてましたね〜

どっちも反則です・・・苦笑

第12話 真相 そして決着

アカーシャ side

(おかしい・・・奴の妖力が感じられない・・・)

アルカードは・・・真祖の吸血鬼の力は普通のバンパイアの力を遙かに凌駕する

妖力はバンパイアにとって力の源だ

そしてその妖力も強大。

戦ってきた間でも健在だった妖力が全くといっていいほど感じられたのだ

「彼の攻撃を受けて？でも 全てを払ったのになぜ動けるといっの？」

全く理解できなかった。

アカーシャ side out

皆が異変を感じている時

ジャックが答えた。

『ふう・・・まだ 回復には・・・ほど遠いが・・・』

喋りながら上半身を起こした

「無理しちゃ駄目よ！あれだけの力を使ったんだから。」

アカーシャが心配そうにジャックの方に向く

「今の主はいわば 抜け殻の様なものじゃろ？ならば 安静にしておらんか。ここからは引き受けたからの」

東方不敗も答える。

「いや あのアルカードの様子は 明らかにこれまでとは違う、ジャックの攻撃を受けて妖力が消えたと言うのか？」

御子神は アルカードの異変をそのままジャックに尋ねた

『俺の術は 8割方成功したが、残り2割が問題だった・・・』

まだ満足とは言えないが

喋れる程度まで回復したジャックは続けて説明した。

『あの時・・・アルカードは 防御の意味もなさないと判断し咄嗟に俺に攻撃し 攻撃によって 俺の力を相殺・・・ 防御に変えやがった・・・ そのおかげで 術の2割は失敗し、アルカードを完全には消し去ることが 出来なかった。』

（あの状況でそこまでするとはな・・・ほんとにこいつこそが、反

則気味な化物だよ……)

『だが、俺の闇の力を前面に展開し妖力を封じる事には成功した。だが、デカイの食らわした後に無茶をしたもんだから しばらくああいう姿になっちまったんだ』

ロギア
自然系のひとつ

『闇の力』 闇とは全てを引きずり込む…… それは 妖力とて例外じゃない……

(代償はあるがな……)

苦笑をし その後みんなに言った

『みんな、今のアルカードは無防備とっていい！頼む。これでけりをつけてくれ！』

「「「ああ！」「うん！」「」

3人は一様に理解し アルカードに最後の妖力をもって 封印を行った。

「ぐ う お お お ……」

最後の断末魔だというのだろうか？

その叫び声は 低くいつまでも耳に残るかのような 不穏な叫びだった。

第12話 真相 そして決着（後書き）

ありがとうございました！

第13話 消え逝く者

不穏なアルカードの叫びも消え・・・

アルカードの封印は完了した。

アルカードの封印はやはり アカーシャが行い アカーシャの妖力で行った為 2人の真祖の血が同調

した。

(この場面^{シーン}を変えたかったんだがな・・・)

後悔はあったが・・・

大切なものを失わずにすむことに感謝をしていた。

『アカーシャ・・・これからは 最初に言った通り アカーシャの覚醒がアルカードの覚醒に繋がる・・・だからお前は、自らの妖気を抑えなければならないいん・・・』

「わかってるわ」

最後まで言うまもなく アカーシャは納得した。

封印を施すと時に全てを俺が話していた為覚悟は決まっていたのだ。
った。

アルカードの封印を見守るといふ・・・そして　モ力を・・・悲
しき宿命を・・・

『そうか・・・』

俺は安堵した。

護りたい・助けたいという思いはあったが　この女性には護る必要が
無いほどに・・・

とても強かった・・・

力だけでなく心も・・・

「わし等も何かあれば　直ぐに駆けつける。　一人にだけ任せるわけ
にはいかん」

「同感だ。それは私とて同じ・・・」

御子神・東方不敗も互いに助け合つと堅く誓った。

「ええ、ありがとう・・・　みんな。　さあ　帰りましょう。」

アカーシャが　振り返ったその時

しゅわんわんわんわんわんわんわんわんわんわんわんわんわんわん

ジャックの体が 金色の霧に包まれながら

少しずつ・・・消えていくのが見えた

「えー！」

この出来事に思考が停止してしまった

第13話 消え逝く者（後書き）

ありがとうございます！

第14話 また 会える

アカーシャ side

なぜなぜなぜ?????

生きて帰ると約束した人が 消えていくの きえてくの キエテ
イクノ……???

我を失い そうになる寸前

「消えないでええ！」

声を振り絞り……叫んだ!

アカーシャ side out

他の2人も言葉が見つからず 立ち尽くしていた

アカーシャは目に涙を溜め、流しながら何度も叫んでいた

そして 戦いの疲労からか ジャックの所まで駆け出すことができ
ずその場に倒れた

そこに

ポンッ

ジャックがアカーシャの頭に手を置いた 優しく・・・ 包みこむように・・・

『・・・ しばらくお別れだアカーシャ・・・それにみんな。』
ジャックが口を開いた

「貴様！絶対に死ななと言ったではないか！我々との約束を違える
きか！」

御子神もその場で声を振り絞り叫んだ。

「うっうっうっ・・・」

アカーシャは倒れこむ前に 最後の気力を振り絞り叫んだためか、
声がこれ以上出てこなかった。

「女を・・・女を泣かせたまま 去ると言うのか！お主は！」

東方不敗も又声を振り上げた

『これは闇の・・・禁忌のひとつを限界まで使用したことへの代償
なんだ・・・ 体が闇に喰われる・・・ 魔力と自然の力で闇
を抑制しながら本来なら使うのだが・・・ その余裕が無かったか
らな・・・』

(闇なのに金色の霧とは・・・な これが 闇に消えるものへの闇
からの餞別なのかもな・・・)

ジャックは声を細めながら答えた。その後声を振り上げ

『だが、信じてくれ。必ず帰ってくる！このまま 女を泣かせたままでは終わったりしない！』

そして 再びアカーシャの傍に行き

『何十年かかるか分からないが、必ず会いに行く！その時 までお別れだ、みんな・・・ そしてアカーシャ、会いに行ったとき お前の子供を見るのを楽しみにしているからな・・・ 一茶と仲良くな。』

そして 上半身まで消えかかったところで・・・

「わたし・・・達は かならず・・・？」

『 ああ かならず・・・』

焦点の定まらない目でジャックを見つめ

ジャックもアカーシャを見つめた・・・

いつもと変わらぬ笑顔で

『「・・・また 会える！」「』

今度は約束を破らない・・・

堅くそう誓った

『じゃあ またな・・・俺の・・・最高の仲間たち・・・』

金色の霧に包まれ ジャック・ブロウは背後の暁の空へと消えた

第14話 また 会える（後書き）

ううー

主役が消えるってどうなんだろう？？

良いのかな？

もっとうまく表現したいですが

難しいです。。。

とりあえず 第一部 完！って感じですかね？

苦笑

第15話 勘違いと嘘 (前書き)

消えちゃった 主人公・・・

どうなるのでしょうか！

続きをどうぞ！！

お気に入りに登録してくれた方々 感謝感激です！評価してくれた人も！

まだまだですが 暖かい目で見てくれたら 嬉しいです。

第15話 勘違いと嘘

・ ・ ・ 全く無茶したねー君も・ ・ ・ (笑) ・ ・

いつまでも続くかのような深遠の闇の中

それは聞こえた

前触れもなくなね・ ・ ・

『ん・ ・ ・ 誰だ？ 朝か？』

声に向かって 話しかけた

・ ・ あんたさー 朝か？つて ンな分けないでしょ！まったくい
くらなんでも あんな無茶したら死んでしまっつてわかんなかった
の？？ ・ ・

姿は見えない・ ・ ・

だが 声の正体はすぐに分かった

『なつかしい声だ・ ・ ・ あのとときの女神さんか？』

・ ええそうよ！ つて こんな会話すんじゃ無くて・ ・ ・ ・ ・

声は 徐々に大きくなってきた

「せつかく もう一度の人生として 送り出してあげたのに なんであっさり死んじゃうのさ！もうちょっと賢く出来たんじゃないの？まったく・・・」

多分？目の前まで来てるであろう 女神に尋ねてみた

『・・・やっぱし 俺はまた死んだのか？』

2度死ぬってどんなんだよ・・・

わざわざ チート能力までつけてもらってさ・・・

「まったくだよ！よく分かってんじゃん！せつかく能力あげたのに
ー 能力の代償はもともと知ってたんでしょ？なのに あんな無茶をしてさ」

あ そうだ この人？頭ん中読んだった・・・ 忘れてたけど
やっぱいい気はしない・・・

そもそも 闇の副作用はテキストに考えたのがいかんかったかな・・・

俺消えちゃうし・・・

苦笑しながら まだ見えてこぬ声に向かって話を続けた

『ああ・・・でも俺は後悔はしてないよ・・・』

「え？なんで？ たった数ヶ月間しか生きてないじゃんか！」

あれ？考えてること読めるんじゃないかなかったっけ？ ま いいか

『大切なものを・・・ かけがえの無いものを 護ることが出来た・・・ 貴方の言ったとおりだったよ。作者の思いの世界・・・ 素晴らしかった。フィクション漫画と言っても 実際に会ってきたのは本物だ嘘の存在じゃない・・・ 俺のもとのいた世界じゃ出来なかったものを作れたそして護れた・・・後悔はしてない。』

『そして・・・ 悔いも・・・ない。』

言葉を絞るように そう言った

「へー 最初に会ったときは 変わり者だと思っただけど アンタ変わったね・・・ なんかカッコいいよ！人間の癖にさ！」

最後のは余計だよ・・・ ま 女神にここまで言わせられたってのも 凄い事なのかもな・・・

「そ 凄い事さ！ でも アンタ 1つ勘違いしてるよ それに嘘もついてる！」

は？

嘘ついてる???

『後悔してないのは 断じて嘘じゃないぞ！ あのアルカードは俺と同じ 反則系だ。直感で、っていうか 戦ってみて分かった あれの強さは俺のせいだ！本来なら3人で仕留め、封印処理できていた（原作より）はずなのに、4人でも圧倒されかけた。俺と言う存

在をあの世界に書き換えたから 歪みが生じたんだろう。その化物から かけがえの無い仲間を護れたんだ！後悔したとは言わせないぞー！！」

興奮しながら訴えた

アカーシャ・御子神・東方不敗・・・ 彼らとの絆は俺にとってかけがえの無い宝だ！

絶対に後悔など無い

「頭イイね！多分あんたの言ったこと 正解だよ。書き換えにはさまざまな バグがおこることがあるって 先輩がいつてたし・・・
(忘れてたけどね！笑)」

最後の！最後の聞こえた！！忘れるなよ ンな大事なことを！！

「後アンタ嘘ついてるって言ったのは そのことじゃなくて・・・
悔いのことだよ！」

『えっ？』

驚いたように 返事をした

「アンタ悔いがないって言ったよね？それが嘘！・・・泣かせたまま
でいいの？」

『つつー！！』

赤面してるのが自分でも分かる

「凄いよね〜 相手は 男いる女なのに あそこまで 大切に思っ
ちゃってさ！不倫しちゃうんじゃないの？（笑）」

「こら！人聞きの悪いこと言うな！！ 親愛だ！親愛！

「んー 親愛か・・・ちよっとつまんないかもね〜」

『つまんないってな・・・』

苦笑した・・・ もう読まれてもいいや！

「あはは！やっぱ アンタといて 退屈しないや！後もうひとつ勘
違いしてるってのは・・・」

次の瞬間 辺りに光が満ちてきた

「アンタはまだ死んじやいない！ 世界は始まったばかりだよ。

まだ 終わりじゃないよ・・・ 貴方の物語は続いている・・・
最後まで がんばんなさいよ・・・」

・・・光が満ちてくると同時に 声が小さくなり 聞こえなくなっ
た・・・

第15話 勘違いと嘘 (後書き)

最後まで頑張ります！
笑

第16話 亜愛とモカ（前書き）

ここで原作に介入します！

長かったなー……苦笑

といつてもほとんどが原作です・・・

後決戦からメチャクチャ飛んでますが 気にしないでください。
（笑）

第16話 亜愛とモカ

ひゅ~~~~どちゅっ

『いててて……ん？こじは……』

って こんなの前にもあつたような…… いったっけ？忘れた。

『女神さまの加護……ということなのか？なら、ありがたく受け取っておこうか…… ありがとう』

天に向かい礼を述べた

ジャック side

しばらく歩き……

『こじは どこだ？』

見覚えがあるような無いような……

『あ 見覚えがあるわけだ ここ朱染城の傍の溪谷じゃん 不敗と一戦やったとこだ 懐かしいな……つと 場所も分かったし 今は何年だ？』

意識を集中させ、自然系の精霊に語りかけた。

ひゅつひゅつうう．．． 風の精よ．．．

『ん．．． 2002年．．．あれから 190と6年後．．．か
それにしても、ずいぶん飛んだな．．．』

俺のこと 覚えてるかな？ アカーシャ、みんな．．． 忘れてて
も仕方ないよな？2000年だし．．．

『特にアカーシャか．．．とりあえず 会いに行ってみるか 後陽
海学園と香港のほうもな。』

俺は、まず朱染城に向かい歩き出した。

ジャック side out

???? side

ざわざわ．．．

「おい！こいつただのガキじゃねーか」「どうすんだよ？こんな
捕らえて」

男たちが会話をしていた

(中国語．．．?何だこいつらは．．．? く．．． さっき口
を覆われたとき．．． 何か薬を吸わされたか？ 体の自由が利か
ない．．．)

亜愛を探していた時、見知らぬ男達に捕らえられていたのは 9歳
になったばかりのモカだった。

「さて お嬢ちゃん 1つ教えて欲しいね 今日あの家に来たね
の女が来なかったか？ 日本名は亜愛 私達 その女殺しに来たね」
モカの髪を乱暴に引っ張り上げながら 問いかけた

(な・・・ こいつらの目的は朱染家じゃなく亜愛なのか？)

混乱しながらも男たちに問いかける。

「な・・・なぜだ？お前らはいったい・・・」

「おい・・・おしゃべりの 必要はねえよ あいつにかかわった奴
は皆殺しにすりゃあいい まずはこのガキをバラバラにして 館
に投げ込んでやるうぜ」

男の一人が サーベルを舌なめずりしながら モカに近づいていっ
た 周りの男も一気に沸いた。

「やれやれまつたく・・・ みんな相変わらず野蛮なこと考えるね
カワイイのにもつたいない・・・ でも確かにそれ位しな
きゃ 私達の怒り 収まんないね」

鬼のような形相をしながら リーダー格の男が呟いた・・・

「ははは そうこなくちゃ」

1人がモカの足を持ち上げた

「なっ!？何をッ・・・」

「まずは このかわいいあんよから ブツた切りましょーか・・・
せーの!」

容赦なく男はサーベルを振り下ろした

「うああああ」

side out

ジャック side

『なんだ?今の・・・殺気?それに血の臭い・・・だなこれ。 複
数いるな 朱染城から まだ結構離れてるのに・・・ 様子を見に
行くか・・・』

バンパイアは好戦的な種族でよく殺し合いにまでなるほどの戦いを
身内でしてるときもあるが・・・

少しばかり大袈裟気がした為、俺は殺気がする方へ 向かった。

そこで見たのは・・・

ジャック side out

「ブツ殺・・・」

ドド スペア!!

ビシャアアア

手刀で男達を切り刻む。

鮮血が舞った・・・

「・・・私に恨みがあるならば 最初から私を狙ってこい それも出来ない小物のくせに 私の大切な妹にふれるなよ」

男に冷徹な目で睨み 血の着いた手を払った

・・・悪・・・魔め・・・

それが男の最後の言葉だった

モカ side

「・・・すごい・・・」

モカは 自身についた返り血に触れながら思った

(恐ろしいのに見とれてしまった・・・ その強さに圧倒的残虐さに)

モカ side out

敵が 全滅したのを確認した亜愛は

ぎゅっ・・・

モカに抱き呟いた

「無事でよかった・・・ さあぁ おうちへ帰ろう」

モカは赤面しながら

「あ ああ・・・ 助けくれてありがとう 亜愛姉さん」

命を救ってくれた 姉にお礼をした

「っっ！」

さっきまで モカに微笑んでいた 亜愛が急に表情を変え 後ろを向いた

「ど どうしたんだ？ 亜愛姉さ・・・」

最後まで言う前に 亜愛はモカの口を手でふさいだ。

第16話 亜愛とモカ（後書き）

このシーンで主人公がモカを助けたらカッコいいんだけど

亜愛との絆の方が微笑ましいのでそちらを優先させました！

ありがとうございます！

第17話 少女達との出会い

「……誰？そこにいるのは！」

さっきまで 全く気配を感じなかったのにいつの間にか かなり近くに誰かがきていたのを感じた。

(この私が これほどの接近を赦した？ ……只者じゃない)

亜愛は 戦闘態勢に戻った。

「……パチパチパチ」

現れたのは ジャックだった。

『これは驚いたな…… 崩月次元刀…… 誰に教わったんだい？可愛らしいお嬢さん』

ゆっくりとした 足取りで 亜愛に近づいていった。

「誰？貴方？貴方も私に恨みを持つ連中の一人かしら」

質問には 答えず警戒を強めた。

(次元刀のことを知っている…… この術を知ってるなんて……
ますます 只者じゃない 何者？この男 隙が全く無い……)

背中に 冷たい汗を感じながら 相手の出方を伺っていた。

(モカがいる・・・ 必ず護らなきゃ 私の大切な妹を)

一瞬モカを見つめ決意を強めた。

『警戒しなくても大丈夫だよ。俺は敵じゃないし、君のことも知らない(知ってるけどね!) アカーシャに会いに来てただけなんだ。館かい?』

モカ side

(なんだろ・・・この人 何か 温かい感じがする・・・)

「亜愛姉さん この人は大丈夫だよ きっと」

後ろにいた モカが呟いた。

モカ side out

「うっん・・・ ホントにそうかな? でも モカがいうなら」

警戒深い妹^{モカ}が気を赦すなら・・・

モカの方をむいて話していたその時

ひゅっ

ジャックは一瞬で間合いを詰め モカの前に移動した

「っっ！」

一瞬の出来事に驚いて モカそのまま動けなかった。

「モカ！！！」

亜愛は油断した 自分に腹を立て 男に攻撃をした

「次元刀！」

ぶふうん

次元刀で切り裂くはずだった・・・

しかし

ガキイイイン！！

男の手刀で止められた

「なっ！全てを切り裂く次元刀を・・・」

驚きを隠せずほんの数秒思考が停止してしまった

『あ！いや ごめんごめん！この子・・・モカちゃんだっけ？
この子を見てちよっと驚いてね』

「わ わたし？」

似てるな！

内心喜びながら モカを見ていた

『そうそう ひよつとして君 アカーシャの子かい？』

もう分かっていることだが 話の都合上！尋ねた。

「あ ああ そうだ」

(隠しても意味はないから問題ないな)

それを聞いたその時

抱きついてしまった

「なっ！」

いきなり抱きつかれたことに驚いてしまい。

「ごらーーーー！！モカに何するのよー！」

亜愛はいきなりモカに抱きついてきた男を罵倒した

『はははは ごめんごめん！なんか うれしくてね・・・モカちゃ

んか いい名だ。・・・約束を・・・果たせた』

亜愛は怒っていたが 男の言葉で 少し怒りを納めた・・・心な
しか 男の目には涙が溜まってるように見えた。

「約束？」

疑問を投げかけた

『ああ アカーシャさんとは だいぶ前に約束してたことがあつて
ね 必ず また会いにくるって 君の子供に会うのを楽しみにして
るってな・・・』

「ううん くくるしい・・・」

抱きしめられて身動きが取れないモ力は 結構な力で抱きしめてく
る・・・しかも男性に

(男に抱きしめられたのって 初めてだが・・・この人さつき感
じた通り やっぱり 温かい感じがする・・・わ 私何を言って・・・)
)

ぶるぶる顔を振り 惚けた顔を戻した

やばっ 強すぎたか！

『ごめんごめん うれしくてつい強い強く抱きしめちゃったね・・・
悪いんだけど アカーシャさんに会わせてくれないかい もうひ
とつの方の約束も果たさないといけないから』

抱きしめていたモカを開放し 彼女達に頼んだ

「いいぞ。 いいよな？ 亜愛姉さん」

「ええ 彼が 敵じゃないってことは はっきりしたしね アカ―
シヤさんに驚かせてあげようよ！モカ」

まだ、完全に気を赦したわけじゃないが

ひとまず警戒を解いた。

温かい感じをモカのように感じた為でもあった。

「ははは 亜愛姉さんはもう・・・」

そして 3人は 館へと向かい歩き出した。

第17話 少女達との出会い（後書き）

モカがいきなり気を赦すとは思えませんが…
話の都合上って事で勘弁してください…苦笑

モカたちの事知ってたのに 実際には会うとやっぱり嬉しいんですよ
うね〜オリ主はって考えてみました！

ありがとうございます！

第18話 親愛なる女性

館へ行く道中……

「……ちよつといい？」

館へ先導するモカには 聞こえない大きさの声でジャックに話しかけた

「ん？なんだい？」

温和なキャラを演じるのもしんどいけど この子達かわいいし苦じやないな。

「わたしの次元刀……どうやって止めたの？」

『ああ それ 彼の……東方不敗のと同じ力じゃないけど……
うーん やっぱり企業秘密ってことで！』

そう言つて 亜愛の口元に人差し指を当てた。

「なっ！……もう／＼／」

『ははは！悪い悪い』

ちよつと ネタバレすると あれは俺の魔力で無理やり次元を歪まして防いだ。

次元刀とは、結界術の応用 自分の存在する次元をずらして物体を透過し破壊する・・・

ならば 相手と同じ次元にずらし 受け止めればいい。

そうすれば、ただの手刀同士になる。

説明するのめんどくさいし ッて理由じゃないよ！！話さない方が警戒して、もう攻撃してこないかもしれないから。

それに、東方不敗と違って乱用は出来ないし・・・ すごく神経使うから・・・

「そういえば・・・」

前を歩いていた モカが後ろを振り向いた

「自己紹介がまだだったな？わたしの事は 知ってると思うが モカだ もうすぐ9歳になる」

モカは挨拶し ジャックに向いた

「わたしは亜愛よろしくね」

亜愛もモカに続き挨拶を交わした。

『ああ そうだったね、俺の名はジャックっていうんだ 君のお母さんとは 古い付き合いでね』

「ジャック・・・？」

まさか・・・ この男 東方不敗の記述にあった 三大冥王と共に
戦った伝説の精霊使い ジャック・ブロウ？ でも彼は あの戦い
で命を・・・

（あ この子なら 俺のこと知ってるかもしれないかな・・・ん
〜 どうすつかな 追求されたら・・・まあいつか遅かれ早かれば
れる事だし）

「貴方、もしかし」ああ よろしく。 もう屋敷は見えてきたぞ」
・・・」

モカちゃん、なんとというタイミングの良さ！

よしもう面倒だから このままで、

『おつ ほんとだ ・・・懐かしいな 2000年ぶり・・・ か』

（2000年・・・ やはり 私の考えで間違いないな三大冥王・・・
いや 四人だから誤りね・・・ 四大冥王のひとり 精霊使い ジ
ヤック・ブロウ・・・ どうする 厄介ね・・・ 力の正体は詳し
く載ってなかったから・・・）

なに考えてるか 分かってんだけどね

（原作どおりであれば・・・ この子を止めれば アカーシャはア
ルカード食われることは無いが・・・ この子をどうにかすれば

アカーシャが黙ってない・・・か 俺がここにいる事で この世界の運命が変化してるのならば どうなるかはわからないのも事実・・・ 傍観しているのが一番だな・・・少なくとも今は)

「ん？ どうしたんだ・・・？」

考え込んでいたジャックにモカが話しかけた。

『・・・いや なんだかほんとに懐かしくてね・・・感慨にふけていたんだよ。』

うん うまくごまかしたな！

「ん〜 じゃあさモカ アカーシャさんを呼んでこようよ！ きつと喜ぶよ 古い友人が訪ねて来たの知ったらさ」

「そうだな じゃあ ジャックさんは 一階の客間にいてくれ 母さんをよんでくる」

『ああ 2人ともどうもありがとう』

いよいよ 再開か・・・ やばい 緊張する。 どんな顔すればいいのか・・・な？

約2世紀ぶりの再開。

あの時は 盛大に泣かした上 何十年って言ってしまったから・・・

まさか 2世紀も飛ぶなんて思ってもいなかった。

モカ・亜愛 side

「ねーモカ！」

「何？姉さん」

二人は歩きながら話をした。

「あのジャックって人 昔のアカーシャさんの恋人だったのかな？」

「え？母さんの・・・？」

モカは顔を紅潮させて考え出した。

（あの人・・・確かにそんな感じがするけど・・・でも何か違うような・・・よくわからないけど）

子供とは言っても女の子、色恋沙汰には興味津々のようだ。

亜愛とて例外じゃなかった。失礼だろ作者！『ごめんなさい・・・』

「あははは そんなに考えなくてもいいんじゃない？私から言っていてなんだけど！あの人温かい感じがするから 浮気！！って感じじゃ無さそうでしょ？」

笑いながら モカに話した。

「もー やめてよ 姉さん！母さんが浮気なんて！」

子供でも浮気についての知識は一通り理解しているようだった。

・・・浮気ダメ！

モ力の中では 浮気〃許せない！！という考えだった。

（でも あの人は違う・・・姉さんが言うように。よくわからないけどそんな感じがするな・・・）

二人は談笑しながら アカーシャを迎えに行った。

第18話 親愛なる女性（後書き）

ここまで 信頼されたら、アカーシャさんとは結ばれませんね！笑

演技上手みたい・・・

ありがとうございました。

第19話 再開 果された約束

3人 side

「誰なの？モカ？ 亜愛？？」

「いいからいいから！」

「そうそう あつてのお楽しみ！」

モカと亜愛に連れられて アカーシャは戸惑いながらも一階の客間の傍まで来た。

「あ モカ！ ちょっと 用事があつたよね？」

「え？ 用z・・・もがつ「いいからいいから！（2人にさせてあげようよ）」（息！息が！）」

半ば強制的に 亜愛はモカを連れて かなりのスピードで離れた。

3人 side out

モカ・亜愛 side

「モカ！ここはやっぱり 2人きりにさせてあげようよ！その方が絶対良いって」

（それに、隠れてみててもあの人にはバレちゃうと思うし）

半ば強制的に連れ出したモカに話しかけると・・・

「きゅっ・・・」

モカは息が出来なかった為 酸欠で目を回しながら、気絶していた。

「きゃーゴメンモカ!!しっかり!!」

モカが目を覚ましたのは それからしばらく立ってからだった。

モカ・亜愛 side out

アカーシャ side

「ふう いったい何かしら?」

亜愛の行動がおかしいのでちょっと不安になったが、

「まあ 会えば分かるか・・・」

軽い気持ちで 客室の扉を開けると・・・

アカーシャ side out

「・・・アカーシャ 久しぶり・・・だな。」

えっ・・・

アカーシャは目の前の光景が信じられなかった。

あの大戦からもう約200年は経過している　もう死んでいるんだと・・・会えないんだと　あきらめかけていたのに・・・

『おいおい・・・酷いな。　死んだなんてさ！　ちゃんと約束したる？　必ず　また　会えるって・・・先に君の子どもたちにあつたから順番逆になつたけどな。』

・・・この考えをあつさり読んで聞かせる感じ・・・　この　温かい感じ・・・

「ほ　本物・・・??？」

真つ白になりかけた頭で語りかけた。

『ああ　本物だ・・・　随分と待たせてしまったな。　アカーシャ・・・　ただいま』

「ジャック!!!」

アカーシャは飛び出し、抱きしめた。

その存在が嘘じゃないと確かめるように。

「遅い・・・遅いよ・・・　何年・・・　何年たつたと思ってるのよ」

『196年かな?』

「ばかぁ!!!」

しばらく アカーシャは泣き続けた・・・

そしてジャックも目に涙を溜めた・・・

その二人の顔には 幸福で満ちていた・・・

あつという間に数時間たって・・・

これまでであった出来事、家族が増えたこと、様々なことを

ジャックに伝えた。

そして モカのことも。

ジャックは微笑みながら話を聞いていた。

『一茶と仲良くやってるのに 不味くないかな？これ』

ニヤニヤ と微笑みながら耳打ちした

「仕方ないじゃない！そんなの！早く会いに来てくれなかったジヤックが悪いー！！」

顔を真っ赤させながら怒ったように答えた。

「でも・・・本当に大丈夫なの？体の方は・・・」

ここ数時間・・・何度聞かれたか分からないくらいその会話が続いていた。

その度 『大丈夫だって』 と答えていた。

(こんなに心配性だったっけ？俺のせいか・・・ やっぱり)

軽く失笑していた。

「そういえば 不敗さんや御子神さん達には会ったの？」

アカーシャが聞いた。

『いや 彼らにはまだあつてないよ。何よりもまず 君に会いたかったからね。』

この一言で アカーシャは再び顔を紅潮させた。

「もう！からかわないでよー！！」

『ははは、嘘じゃないのにな。でも君を一目見れて良かったよ。これからは君にも会えたことだし、ちよっと人間界へ行こうと思ってる。』

今後についてをアカーシャに伝えた。

「人間界へ？どうして？」

アカーシャが聞き返した。

『いつかは・・・人と妖は共存できるっていうのを信じてるんだ俺もな・・・だから彼らの陰と陽を長い時間をかけてみたいと思ってるな』

つてことにして 御子神たちに会いに行こう 陽海学園編に突入って事で。

「貴方らしいわね・・・良いとこだけじゃなく悪いところも余すことなく見たいなんてね・・・」

側面しか見ていない人間と妖が多いが故に人間と妖は幾年月もいがみ合っているのだ。

「素晴らしいことだと思う・・・ 私も見たいけど・・・」

顔が少し曇る。

『君には かけがえの無い護るべき家族がいるじゃないか・・・今はその時じゃないさ』

微笑みかけながら 話す。

「そうね。今は無理でもいつかは・・・ね」

・・・

『・・・地下のアレに関する 問題もあるが・・・ いつかは 君もモ力ちゃんたちとでも見て見たらいいさ』

「やっぱり 分かってたのね 家の地下のこと」

(うん、まあ もちろんね)

ジャックは頷いた

『じゃあ そろそろ俺は行くよ。一茶に会えなかったのは残念だが、よろしく伝えておいてくれ』

「ええ、わかった・・・」

少しくらい顔をした アカーシャが頷いた

『アカーシャ・・・ 俺は生きている。前と違ういつでもって分けにはいかないが、また会えるさ』

アカーシャに笑いかけた。

「ふふふ やっぱり貴方は変わらないわね・・・いつてらっしい気をつけてね。また・・・ また 会いましょう。その時はモ力達と遊んであげてね！」

『ああ そうだな　楽しみにしてるよ。』

そう言い残し　ジャックは姿を消した。

しかし　この時点で知る由も無かった・・・

この約束は守られる事は無いということ・・・

第19話 再開 果された約束（後書き）

もうちよい 滞在しろよ！って自分で思ったりしてます！笑

なーんか後の暗い未来を暗示してるかのような 終わり方です…
まだ 考えてませんが 苦笑

ありがとうございました！

第20話 人間界へ（前書き）

人間界へやって来ました。

いろいろ考えてはいますが、なかなか難しいものです… 苦笑

なにやらアクセスが増えました…こんな駄文に付き合っただきありがとございます。

第20話 人間界へ

ジャックは人間界のとある場所にきていた。

『やっぱり 元人間の俺でもちょっと違和感があるんだな… 人間界って。』

アルカードとの戦いで数ヶ月・闇の狭間で2世紀、過ごしたジャックはもはや前世の記憶は保持していても、身体機能から構造まで人在らざる者に成った事を実感していた。

『でも… なんだろう。違和感があってもやっぱり懐かしい感じはするな… こんなに良いとこだったっけ？人間の世界って？』

自問自答に苦笑しながら ジャックは人間界に来たことを実感しながら、歩き始めた。

街中を歩いていると…

『ん？ なんだ？ この感じ… 妖気… だな。人間界にあるまじき力だ。』

街中の路地裏で不穏な力を感じていた。

『やれやれ こういうことは勘弁してもらいたいものだ… トラブ
ルがあるのなら止めに行かんとな。』

やれやれと だるそうにしていたが、ジャックは路地裏に入っ
てい

ジャック side out

「な 何ですか？ 貴方！さつきから私を付けたりして！！」

それは 若い人間の女性の声だった。

「ギヒヒヒ これはこれは申し分けない… 可愛い人間にはち
やんと名乗らないとな…」

舌なめずりしながら ジリジリと女性に近づいていった。

「俺の名前は 絶貴ゼンキ以後よろしく！」

そう 怪しげな顔をしながら話した。

「な 名前は 分かったは！そ それで… 私に何の用があるって
いうの？？」

普通じゃない 気配に恐れながらも 気の強い女性は勇気を出し男
に問い詰めた。

「いやあ 貴女のような気の強い尚且つ可愛いお嬢さんにスト
ーカー（とりつく）するのが 好きなだけだよ??それにアンタ

気が強いのはふりで本当は 怖がりなんだろう？ 周囲にはれない様に虚勢を張ってるだけなんだろう？ バレバレだぜ。目えみりゃだいたい分かる。」

男が 全部見透かしたかのような眼で見つめた。

「ツツ！！」

女性は一気に体が固まった。

この男が言っていることは 全て正しかった。

幼少時代、女性は友達と山の中で遊んでいた。その時 とても人間と思えない化物に襲われたことが

あったのだ。

幸い 襲われた場所のそばには 神社があり その化物は靈的に清められた場所に恐れを無し

逃げ出したのだった。 友達共々無事に生きて帰れたが… そのことが ト라우マとなり極度の怖がり

となってしまうたのだ。 気の強いふりは 周囲にそのことがばれない様にした偽りの姿だった。

このことから 彼女はプライドが高い人間なのかもしれない。

「ヒビヒビ… やぁーっぱり凶星だな」 さっきも言ったが そうい

う人間にとりつくのが大好きでねえ　ゆっくり　魂を食べさせて
もらおうか…」

男は　完全に怯えた女性を見るとその姿に満足し　詰め寄って
いた。

「や　やめて…　　お　大声を出すわよ？」

女性は　勇気を振り絞り男に訴えた。

その姿にますます　男は興奮し、

「やれるものならやってごらんよ　アンタはもう逃げらん無いし…
何よりここは人気の無い路地裏…　誰も気づかないさ」

女性の誤算は　唯のストーカーならば撃退するつもりだったことだ
ったことだった。　だから　路地裏に

来たこともさほど問題にしてなかったのだった。

しかし　相手がまずかった。

「ひっ…」

女性は　叫びたいのに言葉にならなくなった喉を必死に押さえ叫ば
うとするが…

全くといっていいほど声が出てこなかった。

「さあゝ　十分怖がらしたし　恐怖に震えてキンキンになった魂っ

てのも格別なんだよな…これが。じゃ いただきます」

(きゃああああ)

言葉は出ない… だが 必死に叫ぼうとしていたが… それでも何も出なかった。

その時

ガシッ

女性の目に飛び込んできたのは 飛びついてきた 男の体が空中で止まっている姿だった。

第20話 人間界へ（後書き）

元ネタが妖怪漫画なので やっぱり問題が起きないと思って思いながら 考えてみました。

駄文失礼します…

ありがとうございます！

第21話 トラブル発生 天邪鬼 (前書き)

大物以外と初めてやり合う話です！

やり合うとまで いかないかな？ 苦笑

第21話 トラブル発生 天邪鬼

妖し? side

「な なんだ?? 体が動かねえ!!だ 誰だ!」

首根っこを万力のような力で握られ身動きが取れなくなった男は

姿の見えない相手に向かい叫んだ。

妖し? side out

ジャック side

『…妖気を感じた時から 嫌な予感がしてたんだよな……』

『まあ 人間が妖しをいじめてる(滅多に無いけど (笑)) だつたら もっと厄介だったからまだいいか』

確か 人間界において 人間に危害を加えるのは御法度だったよな?

どんな理由があっても…あの学園では……

そんなことを考えながら気配を消しながら ジャックは2人のほうに近づいていったのだった。

ジャック side out

『おいおい こんな可愛らしいお嬢さんに手を出すなんてそれでも男かよ？ ああ 男なら仕方ないか… この子カワイイしw でも同じ手を出すにしてもナンパとかにしときな。』

ポイツ

首を掴みあげながら無造作に放り投げた。

ガシャ！ガツシャアアアン！！

「ぐああああつ」

男は路地裏に置いてあつた大量の材木に頭から突っ込んでいった。

『ふう、マナーも知らん奴が多いみたいだな？ やっぱし…』

やれやれと言わんばかりにため息を出しつぶやいた後女性のほうを見た。

一瞬女性は ビクツ っと体を震わせた。

『大丈夫大丈夫。 何もしないから お嬢さん怪我は無かったかい？』

そういつて 笑いかけた。

(さっきの会話を聞くとこの子はかなり妖しに対してトラウマがあるだろうから 近づかないほうが良いな…)

自分が近づけば 更にショックを起こし やばい状態になるかも知れないと判断し、

近づかず落ち着かせようとしたのだった。

「え？ ええ、あ ありがとう……」

まだ ショックから回復した訳ではないが 話せるようになった為
一先ず 助けしてくれた人にお礼を言った。

『……はあ やれやれ 又ため息が出ちゃったよ。お嬢さん？動けるなら早めにここから離れたほうが良いアイツが起きて来そうだ。』
そう言つて 先ほど男を投げ飛ばしたほうに向きなおした。

???? side

今日は 人生で2度目の最悪の日だ……

襲われた女性は襲われる瞬間までそう思っていた。

だが、訳が分からぬうちに 襲ってきた男はもう1人の男に吹き飛ばされてのびていた。

そして 目の前の男は 私を確認すると、笑顔で大丈夫？って言つてくれるし

何かいろんなことが同時に起きて更に混乱するけど

助けてくれたこの人？（人か分からないけど）は悪い人じゃない気がする…と言うか助けてくれたし。

お礼は言わないとね。

お礼を言った後… 男の人が 向こうを向いて頭をかいてさっきの人が起きてくるって言った。

多分…動けるようになったと思う。 この人が心配してくれてるし。

それにここにいたら 絶対邪魔になる。

急いで離れないと！

??? side out

「え ええ 大丈夫です。動けます…」

ジャックに向かって言った。

『そうか 良かった。ならここから直ぐ離れたほうがいい。ああいう男は間違いなくぶっ飛ばされから、ムキになって突っかかってくるの見えるから ここにいたら 巻き込まれちゃうよ?』

そう言っつて この場からの退避^{エスケープ}を促した。

「は はい！ 分かりました！ あの……気を付けて」

そうやって この裏路地から逃げ出した。

その後…

「てつめー！！何しやがる！！人の楽しみ+食事を邪魔しやがって！！死ぬ覚悟はあるんだろっなコラア！！」

復活した男が怒りを露にしながら 向かってきた。

『おい……』

冷たく鋭い眼で軽くその男を睨みつけた。

「ぐっ！！」

その威圧感に押されたのか、一瞬男はたじろいだ。

「大体お前も 妖しだろうが！人間は俺等の敵だろ？何でその人間の味方をすんだよ！この裏切りモンが！！」

いやいや、まず仲間になってないし、今日初めてあつただろうがよ…

男の言い分に頭を掻き、若干失笑しながらジャックは答えた。

『人と妖しは共存できるんだ。それぞれがルールを守ってな。その共存の中で 絆が生まれたら素晴らしい事だろ？お前が言うように完全に敵って言い切ったら どっちかが滅ぶまで争うってのか？そんなのは さらさら ご免だな。それに俺は人間を敵なんか思っちゃいねえ。』

(元人間だしな……)

男に向かって怒鳴った。

「ッは！共存？クソ食らえだよ！人間は俺のオモチヤで食料だ！何いってんだよ馬鹿が！そのオモチヤを奪おうってんなら……」

言い終えると……

メキメキメキツ

男が人間の姿から本性を表した！

「てめえから殺つてやんよー！！」

それは 2、3mは有る赤色の鬼だった。

『はあ……いきなりこんなところで正体なんぞ見せんなよな。騒ぎになつたらどうするんだよ……』

(路地裏つてのが この際良かったな……)

『で 正体は何だと思つたら天邪鬼かよ……』

姿かたちから俺は男の正体を言った。

「ぎゃははは、そつだ！覚悟しろよ？この俺は本性を見せたときの腕力は 数倍に跳ね上がる！さっきのようにはいかねえぞ！覚悟しやがれ！ぶつ殺してやらあー！！」

そういつと天邪鬼は拳を振り上げ一気に打ち下ろした。

が…

ガシッツ

男の拳が全く動かなくなった。

それどころか腕も動かさず！

「な 何……?? ま まったく 動かねえ！ な 何しやがったお前！」

『何って受け止めて掴んでるだけだけど？』

拳を掴んだまま 『それがどうした？』 と言わんばかりに答えた。

「ば 馬鹿言えツ ! こツ この辺の妖しで俺の本気をんな片手で受け止める奴なんざいるわけが……」

『いるじゃん、ここにさあ』

なるほどこの辺の妖しのガキ大将ってとこだったんだな？ コイツ…

この辺りにはこんな感じの

奴がいっぱい要るって訳か… 考えただけで頭痛てえ。

『こづいつ手合いは口で忠告しても無駄だよな？ 体で分からせんと』

そう言つて ジャックは天邪鬼の腕を思いつきり捻り持ち上げた。

「いだだだだだ！」

腕がねじ切られるかのような力で 持ち上げられた天邪鬼は ただただ痛みを叫んだ。

「わ わかった！ 俺が悪かったー やめてー」

『ん……？さっきの大言は如何したんだよ。まったく… だが』

グググググッ

腕に力を入れ。

『お前の行動を見て、ただで赦す気はサラサラ無い』

ポイツ！

また無造作に投げる。

今度は廃ビルであろう建物に。

ドッガラッ ガッシャアアアアン！！

「ぎゃあああああああああ」

男は今度は鉄筋コンクリートに頭から突っ込み完全にノックダウンした。

『喧嘩売ってくるんならまず相手の力量を正確に測れるようにするんだな。』

動かなくなった。男に忠告を施した。

第21話 トラブル発生 天邪鬼（後書き）

ありがとうございました！

一口妖怪辞典… 作者都合上w

天邪鬼。

かなり有名な日本の妖怪です。

人間の心を見抜く力があり、人を唆して悪いことをさせる。いつも相手と相手と反対のことを言うひねくれた妖怪。とりつかれると本心が言えなくなってしまうという。

…らしいですが、今回は、人間にとりついて 怖がらせたりするのが大好きで

怖がった人間の魂が大好物！（ありがちな妖怪ですw 原作では鏡のリリスから少しとりました。）

かぶってるのは 心を見抜く力だけです… 苦笑

失礼しました！

第22話 人間との共存

『やれやれ……』

パンパンッ

手を払いこの場を去ろうとした時

「あの！すみません！！」

後ろから女性の声でしたので振り返った。

『ああ 君はさっきの。』

それは 先ほど天邪鬼に襲われていた女性だった。

「はい！ちゃんとお礼が言いたくて待ってました。ありがとうございます。ごじいます。」

『いいよ。そんなにかしこまらなくても、俺はやりたいうようにやっただけだしね』

(ん？待ってた？？ツてことは…)

『君…さっきの見てた？俺がぶっ飛ばしてたところ』

「はい！それはもうはっきりと！」

言い切っちゃったよ… ってかキャラ変わってないかな？この人

『ええっと… 俺もそのさっきの奴と同じかもしれないよ？大丈夫？さっきの会話聞く限りじゃ君かなり怖がりで なんか トラウマ抱えてそうだし』

直球ドストレートで聞いて見た。

「確かに私は 幼いころあんな感じの化物に襲われる以来大の怖がりになったけど… 貴方なら…」

『ん？』

最後のほうが声が小さくなったので、聞き返した。

「貴方なら大丈夫です！！私を助けてくれたし！何よりカッコいいし、優しいです！！」

そこまでストレートに言われると流石にてるんだけど…

『はははは ありがとう 俺もご想像通り妖しだ。でも さっきのような奴とは違う、君たち人間と本当に手を取り合って良ければいいって思ってるんだけど、まだ夢物語だけだね。』

「それは すばらしいことだと思いますよ…」

ちよつと表情を崩して話す。

『無理はしなくてもいいさ、君は襲われたばかりなんだから…』
でも これだけは 分かって欲しい 無数に存在する妖しの中には

俺のような考えを持つものもいるって事をさ。全部があんなクズじやないって事をね…。ちよつとでも思ってくれたら 救われるかな？」

表情を崩した女性の心を読み、且つ自分の思いを伝えた。

「あ いえ ごめんなさい…。顔に出てしまいましたね…」

ジャックの言葉で 自分がどんな顔をしているのかを気づき謝罪した。

『今有ったことを考えると仕方ないよ。それじゃ 俺はもう行くから、これからは気をつけなよ。あいつらも大っぴらには 手を出したりしないと思うしね。とりあえず 路地裏みたいなベタなどには入らないように！それじゃあね』

手を挙げ俺は 歩き出した。

「あ あのちよつと！！」

『ん？』

ジャックを呼び止めた。

「あなたのお名前は何ですか？私 明石美佐って言います！」

そういえば 自己紹介してなかったね…

『これは失礼…。そういえば 名乗ってなかったね。俺は ジャック。ジャック・ブロウっていう。』

軽く頭を下げ名を告げた。

「ジャックさんですか… あのジャックさん今日はほんとにありがとうございまして！あ あ…又 会えますか？」

「ん… そうだね。縁があればまた会えるさ。」

そう言って微笑んだ後

『それじゃあ 美佐さん また。』

ヒュンッ

一瞬にして その場から煙のように消えていった。

「妖しって… 子供のころの記憶で恐怖の塊にしか感じなかったけど… あんな人もいるんだ…」

美佐の妖しに対する考えが完全に変わったわけではないが、今日あった出来事をいつまでも忘れないと誓ったのだった。

後日……

この周辺で 縄張りを持っていた天邪鬼が人間を襲おうとしたら逆

に誰かにボコボコ

にされたとうわさが広まり、

周辺の妖し達が恐れ 人間に襲い掛かったりしなくなったそうです。

『まっ 結果オーライかな？でも力で抑えるのはちょっとヤダだけ
ど…』

共存って難しいな…… まあ気長に…だな。

第22話 人間との共存（後書き）

何か人間女性といい感じになりそうでしたが…
何も無いと思いますw

ありがとうございました！

第23話 陽海学園（前書き）

結構飛んでいます… 苦笑

陽海学園へ行っちゃいます。

温かい目で見守ってください！

第23話 陽海学園

あれから数週間……

ジャック side

いろんな都市を巡って見たが、やはりどこに行っても妖し達は人間を襲っていた。

命まで取ろうとした者は極まれだったが、それは 人間が大掛かりで動いてきたら今後

動きづらくなるからと言う理由なんだろう（妖しの1匹を締め上げて聞き出した）

『やれやれ……… こんなんでもほんとに共存なんてできんのかな？ 最近自信なくなっただかも………』

確かに襲う妖しが悪いのは当然だったが…

人間のほうに非がないと言えるば嘘になる。

他者を踏み台にし自らを肥やす為に悪事を働いているものや通りすがりの老人が肩にぶつかった

からと言って好き勝手に暴力を振るったりしている者もいた。

『前途多難… だな、こりや。でも 長い時間をかけて見るって決めたし、何よりアカーシャに宣言してるからな… 泣き言言つのも かつこ悪いか。』

道中歩きながら そんなふう考えていると、

トンネルが見えてきた。

『ん??このトンネル… 普通じゃない… な。』

空間が歪んでいるような感じがする…

トンネルの先は光がまったく無く漆黒の闇のようだった。

立ち止まり、考え事をしていると1台のバスが目の前に止まった。

「ヒビヒッ」

バスのドアが開いた運転席には、意味深な笑いをする運転手がいた。

(あ この人?確か… ああ思い出した学園の謎の運転手だ 御子 神の古い友人の)

頭で考えていると、

「その兄さんどうだい?乗っていかないかい?」

乗車を進められた。

『おや? 乗っていいのかな 無一文なんだけど』

「ヒヒヒ いいさ、理事長にツケとくよ。それに君は陽海学院に興味があるのдарう？」

『ん？そんな事言っただけか？俺』

「隠さなくてもいいじゃないか、ジャック殿…」

やっぱりバレてるかだよな、気づかないふりしても意味無いな、もう。

『ははは やっぱバレてたか、それで 御子神理事長は元気にしているかい？』

気づかないふりを止め 運転手に問いかけた。

「ああ 元気すぎて困るくらいにね… まあ あの学園を切り盛りする為には そうでなけりゃ勤まらんがね。」

又 意味深な笑みを浮かべ話した。

『ああ 元気ならいいんだ。そろそろ アイツにもあっておこつと思つてたところだよ。無料で乗せてくれるんなら 好都合だ。陽海学園までよろしく頼むよ。』

無一文だし… 日雇いのバイトくらいしたほうがいいかなあ？ 苦笑

「ああ 任せてくれ。」

バスのドアが閉まり 静かに走り出した。

（バスの中で）

『そついえば 御子神は俺が帰ってきてるの知ってるのか？』

運転手に問いかけた。

「なぜそう思うのかな？」

また ヒヒヒッと笑いながら 話してきた。

（結構癖になるなこの感じ。）

苦笑しながら答えた。

『いや あの異次元に繋がってるような トンネルが不自然なタイミングで現れて、その学園行きバスまで狙ったかのようなタイミングで来たからね。そう思うのが自然だと思うが？』

「君は 鋭いね。察しの通り 私は 理事長に言われて君を探していたのさ。この辺りにいるってことはわかってたからね。」

（ん？何で分かったんだろ？）

「学園の不良たちの間で うわさになってるよ。君は 人間を襲おうとしたら いつの間にか背後にたって叩きのめされるって話、赤みが掛かった茶髪に長身・真紅の瞳をした妖しだってね。君じゃ

あないのかな？」

(そういえば 何かと最近そういう場面シーンに遭遇するからうわさになったのか… 多分しらばっくれても意味無いな)

そう考えながら、

『あらら、うわさになるほど活発に行った覚えないんだけどな。まあ ばれてるなら否定はしないよ。全部が俺かどうかわかんないけど、最近そういうことしてんのは、俺だからな』

答えた。

「ヒヒヒ 人間に手を気軽に出す奴は 血の気が多い若い妖しかその土地でグループを作って組織的に襲ってる奴らが多いからね。だから うわさが広がったんだと思うよ。」

(なるほど、ワルのネットワークって結構凄いつて事か)

説明を受けて 理解した。

「さあ着いたぞ。ここが陽海学園だ」

ひゅうつつドドロドロドドろって効果音を付けたくなるような雰囲気だった。

空の色は、赤紫っぽくて 雷がゴロゴロしてて 怪しい雰囲気……

『流石は妖怪ならぬ陽海学園、ぴったりな印象だよ』

「だろっ？いいとこだよ〜ここは。それじゃあ ワシはこの辺で。」

あれ？案内してくれないの？って 言いたかったけど、

『ああ ありがとう。』

学園をいろいろ見て回りたいし、自分で御子神を探すことにした。

第23話 陽海学園（後書き）

ありがとうございました！

第24話 黒い生徒（前書き）

第24話 黒い生徒

しばらく歩き続けて……

……

……

……

『………広い』

想像以上に広い学園内に自分で探すと考えたことを後悔していた。

『ええつと…… 確かここつて、1・2年棟？だったっけ？ああもう！
！何でこんなに広いんだよー』

あれこれ悩みながらも とりあえず校舎の中には入れた。

周りの視線が痛かったが……

（制服姿じゃなし 仕方ないか…… 女子にじろじろ見られるのは慣れないな……なかなか。）

やれやれ といった表情で職員棟を目指し歩きだした。

「おい！貴様止まれ！……！」

突然背後から 声がしたので振り向いた先に、黒い制服姿の学園の生徒（多分）がいた。

『俺に何か様か？』

「貴様 学園を私服姿で登校していいと思っているのか？ ルールを守れん奴には肅清する必要があるな…」

物騒なことを言いながら数人で詰め寄ってきた。

『いや 俺ここの生徒じゃないんだけど…』

とりあえず 騒ぎになるのも面倒なんで事情を粗方説明したが…

「そんなものは信じられんな、本当にそうだとしてもならば 貴様は侵入者ということだ…侵入者は始末しなければならん 学園の平和のために」

学園の平和？

俺って悪???

なんで???

思わずつつこみそうになった。

（黒い制服…そしてこの物言い…こいつらあれか 公安委員会か…
又めんどくさい事に…）

思わずため息をしてみました。

そうしたら気に障ったのか、

「貴様！今のため息、我々に対する侮辱ととる！さあ こっちにこい」

（めんどくさいことになったか… 周りの生徒達も何か怯えているようだし、ここから離れてあげた方がいいな。）

『わかったわかった。付いていくよ。そんなわり終わったら理事長室まで連れて行ってもらうってのが条件だ。いいな？』

ざわざわざわ……

（何だあいつ、公安に条件なんか出して… 分かってないのか？こいつらの事…）

ギロリッ

公安のリーダー格っぽい男が周囲に睨みをきかせると 一瞬で皆黙った。

「くくくくつ いいだろう。貴様が無事で帰れたら…な。」

（やっぱり 随分恐れられてるなこいつら… まあ分かってたことだが。）

公安委員会

それは 学園守護と掲げ力で悪を取り締まるため結成された武闘派
集団

生徒によって組織された学園警察ともいえる部隊。

なのだが…

（確か 原作でも腐ってしまったって言ってたな… ああ 実際腐
ってるわ、こいつら。まあてきとうにあしらうか…）

そして公安の本部でもある学園の地下牢にいった。とゆうか連れて
行かれた。（笑）

めんどくせー……

第24話 黒い生徒（後書き）

ありがとうございました！

一度ツイッターでつぶやいただけで、メチャクチャアクセスしてくれてる……

ありがたい気持ちでいっぱいです……
大した文じゃないのに

第25話 公安委員本部（前書き）

拉致されてしまいました…… 苦笑

場所は原作を知ってる方なら分かるかと！

リーダーはもろ原作のキャラのパクリです。

では！ よろしくです。

第25話 公安委員本部

ジャック side

(ここマジで広いな、まだ着かんのかな…？ はあ、面倒に巻き込まれるし学園は広いし… 案内してもらったらよかった…)

後悔後に立たずとは、まさにこの事であった。

(ここいづらも むさ苦しいし… 何が楽しくて男に囲まれにやならんのだ！)

ジャックは 公安に付いて行くと言ったことに後悔していた。

後悔する事が多いよ！

ジャック side out

く地下牢にてく

やっと着いたよ……

『さっ ぶつすんのかな？要望通り付いてきたけど。』

リーダー格の男に話しかけた。

「くくくくつ まあ 無駄なを抵抗せず付いて来たことに関しては
評価してやらんでもないが、その態度はいただけんな……」

リーダー格の男が周囲に目をやると10数人の公安委員が詰め寄ってきた。

それぞれ木刀を持って。

（評価ってなんだよそれ、はあ……こいつも自分に酔ってるくちなんだな…… それにしても木刀って……）

『ああ そういう趣向でくんの。まあ分かりやすくいいけど、怪我したくなかったら来ないほうが身のためだぞ？』

男達はその言葉に薄ら笑いを浮かべた。

（ん？何か面白かったか？こいつらの笑いどころはいまいちつかめんなあ……）

頭をかきながら苦笑していると。リーダー格の男が、

「この状況で去勢が張れるとは大した男だ。もしくは只の馬鹿なのか？まあいい…… かかれ！」

男の号令と共に一気に男達が沸き上がり襲い掛かってきた。

『よっ、よっ』

ヒュッ

足に魔力を溜め すばやく移動をし 何人かを同士討ちさせた。
所謂 縮地と呼ばれ術である。

「ぎあっ」「ふじっ」「ぎゃっっ」

それぞれが面白い発音をしながら倒れていった。

『あーあ 痛そう… かわいそうになあ』

取り囲んでいたはずの男がいつの間にか 背後に回りこんでいた。

「き きさまー！ー！」

男達は怒りを露にし、再び襲い掛かった。

リーダー格の男 side

これは……どういうことだ？

公安に揃っているっ連中は 武闘派集団に相応しい能力を持った者
で結成している。

それが 10数人もいるというのにまるで子ども扱いだっただ。

(こいつ等が腑抜け過ぎるのか… あの男正体は分かんが まっ
たく何も感じん…

確にスピードは厄介だが見切れんほどではない。)

S i d e o u t

「くそがー!!!」

又殴りかかってくるが…

スカッ

ガッシャアアン

「うがっ」

勢いづいたまま 盛大にすっころぶ こんな感じなのが10分ほど
続いていた。

(さ 大分同士討ちでリタイアしたけど そろそろ手を出したほう
が良いかな? 人数少なかつたら同士討ちもしなくなって 埒が明か
なくなるし。)

と 思っていると…

「もういい! 貴様らでは話にならん 下がれ!」

怒鳴り声と共にリーダー格の男が出てきた。

第25話 公安委員本部（後書き）

ありがとうございます！

第26話 公安委員長 歐龍（前書き）

なんかセンス無い名前…
バトルの真っ最中です。

第26話 公安委員長 歐龍

後ろに立っていたリーダー格の男が、しびれを切らし出てきた。

「歐龍様…」「歐龍様がやるぞ！みんな 巻き込まれんうちに離れろ！！」「お願いします！！！」

（よほど 信頼されているのか もしくは恐れられているのか…
おそらく後者だな。なかなかの妖気だ）

欧龍と呼ばれる男が発する妖気を見て、

さっきの連中とは比べ物にならないことを確信した。

（まあ 比べるほどのもんじゃないしな さっきの連中じゃ。）

倒れている男達をみて失笑した。

「貴様… 大言を吐くだけの力は持っているということか… ならば 私が直々に相手をしてくれる！」

叫びあげた瞬間…

ヒュッ

先ほどの縮地を持って歐龍の懐に行き、

『もう 戦いは始まってんだろ？無駄口たたく余裕があんのかい？
欧龍とやら』

バキッ

盛大に蹴りを水月に向かって打ち込んだ。

「ぐああっ」

ドガアアアンッ バッシャアアン！！

欧龍は 壁を突き破り外にあった池まで吹っ飛んでいった。

パンパンッ

蹴った方の足を払い。

『公安のボスってこんなもんだったのか？まあ 学園内じゃこれくらいが妥当か。』

あまりに齒ごたえの無いボスに向かいつばやいた。

『さ 理事長のいるとこに案内してくれんか？ なんなら 職員室
でもいいけど？』

残った公安の残党に 戦いの前に要求していた 理事長に合わせる
という約束を

守ってもらおうと話しかけた。

しかし……

「へへへへへ……」「はははははは……」「あははははは……」

またまた いろんな口調で今度は笑い出した。

(こいつら コント集団かよ。いちいちやることがおもしろえ。)

『何がおかしいのかわらないけ… っっ！！』

背後に殺気を感じ、咄嗟にその場所から跳んだ。

バシユウウウウウ！

ズツガアアアン！

まるで ビーム…青い光線のようなものが背後から襲ってきたのだ
った。

第26話 公安委員長 歐龍（後書き）

ありがとうございました！

第27話 龍種 水龍（前書き）

公安のボスがキバをむきますー
さあどうなる？

第27話 龍種 水龍

ジャック side

正直……

ビビッた…… 苦笑

背後からの攻撃をかわしたジャックは…そんな事を考えていた。

(油断大敵… 自然系ロギアに成ってないと生身だからな… 多分痛いじやすまんかったな…今の攻撃。格下相手とちよつとなめてたな。)

ジャック side out

「ほお 今のを回避するとは やはり 速さは一級品だな… ひよつとして貴様の正体は人狼ウエアウルフか？」

さつき蹴り飛ばした歐龍がいつの間にか すぐ後ろまで来ていたのだ。

「へえ 気配の消し方 上手いな… 攻撃の瞬間まで気づかなかつたぞ？ 後 正体についてはノーコメントだ。」

初めて ジャックがこの妖しを褒めた。

(この姿… コイツ龍種か…)

水色の鱗に頭には角…そして龍のような姿… 歐龍の正体は 龍種
水龍だった。

人間の世界では 荒ぶる水害は全て水龍の仕業と恐れられたという
伝説の怪物。

(そら こんだけ偉そうにもなれるな… 龍種の末裔だったら)

「くくくく… さあこの姿を見た貴様は生きては帰れん！我が公安
にしてくれた暴行罪、貴様は死刑だ。」

『おいおい、因縁つけてきたのはそっちだろ？どんだけ自分勝手な
んだよ！お前は！』

半ばあきれたように言い返した。

「私こそがこの学園の正義… 私がやることは全て正しいのだ。反
論の余地など無い。」

この男は自分こそが正義…自分がこの学園の治安を守っていると信
じて疑わない男だ。

そして正義しぎんに逆らう者、従わない者は、みんな悪。

正義しぎんの為だったら何やっても良いと思っている。

(…大体のこいつの思考は理解した。なるほどな、自分自身を絶対
的正義と信じて疑わないか……
もう いい加減失笑を通り越してむかついてきたな……)

ジャックという男は、基本めんどくさがりで、マイペース。

面倒事を極端に嫌い、極力争い自体も好まない性格なのだが…

どうやら、歐龍の高慢な考え、物言いに…

「なんだ？今度は黙りこくって、念仏でも唱えてみるか？」

よほど自信が有るのだろう… 正体を見せた欧龍は先ほどの人間形態の時よりかなり高慢

な物言いになっていた。

『…せえ』

「くくく 気でもふれたか？ぶつぶつ言いやがってそろそろ死ぬ！」

まるで竜そのもののようなデカイ口を開けた。

「ハイスプレッシュ ショットガン高水圧・水散弾！！」

先ほどのビーム状とは違い、水の礫を散弾銃のようにして打ち出した。

(いくら スピードに自信が有ろうがこれほどの量の弾丸をかわし

切るなんて不可能！)

「さあ 断末魔の叫びを聞かせて見る！！」

散弾銃と化した水礫がジャックに襲い掛かる。

『雷の力…』

『自然系！』
ロギア

約2世紀ぶりに ロギア 自然系の力を解放した。

第27話 龍種 水龍（後書き）

ありがとうございました！

一口妖怪辞典… 作者都合上w

龍種 水龍

その名の通り水を統べる竜である。

古代中国黄河文明にて、人間にとって母なる黄河を頻繁に洪水を起
こし

人間達を苦しめたという。

人間達は、水害から都を守るため、生贄を出し水龍を静めたという。

結構てきとうですw

軽くスルーしてくださいね！

苦笑

第28話 自然系開放

歐龍から打ち出された散弾は、公安本部自体をも破壊しながら、ジャックに向かってきた。

バシユシユシユシユシユ！！

ジャックの体中に水の散弾が浴びせられていく。

「ふっ 死んだか…？」

あたりは水煙でいっぱいとなっていたが、

体を貫いた感触は確かめれた。

故に勝利を確信したが…

『ふっ…』

水煙を払うかのようにしながら

首をコキコキッと振って何事も無かったかのように、出てきて歐龍を見直した。

「ば ばかな！！我が弾丸を受けてなぜ無傷なのだ！！」

『…つるせえって言ってんだろが、クソ飢餓が！』

歐龍 side

馬鹿な…

理屈に合わん 確かに体を貰いたというのに何事も無いように立っているなど…

それになんだ？この男… 先ほどまでと雰囲気が変わった！

Side out

『学園内でのさばってただけのクズが、俺にここまでイラつかせるとはいい度胸だ。もう穩便には済まさんぞ！』

ギンツ！！

冷たく鋭い目つきで殺気を混じえながら 睨み付けた。

「ぐっ！！」

(この私が睨まれただけで… 凄まれただけで… びびらされたた？)

「ふ ふざけるな！こ この私を誰だと思っている！！！」

歐龍は圧力に耐えかねて、ジャックに向かって飛び掛った。

ヒュンッ

飛び掛って来た歐龍をかわし、

『…雷神らいじん一天いつてん』

拳に神なる雷を纏わせる。

『崩拳ほうけん！』

キユンッ

ド
ンッ！

それは 雷速に匹敵するほどのスピードで歐龍の鳩尾をジャックの拳が貫いた。

「ぎあああああああああああああ！！！」

水と雷… どちらが相性悪いのかは言うまでも無い…

歐龍は、またもや吹き飛び… 体を痙攣させ動かなくなった。

『外の世界を知ったうえで得意げな口を出すんだな ぼーや。』

完全に痛みと麻痺作用で動けなくなった歐龍に忠告を出しその場を離れた。

〈公安本部〉

「そんな！！欧龍様が！！」 「そんな馬鹿な！！」 「いつたい誰が！！！」

ジャックが出て行った後 なにやら公安本部が騒がしくなった。

どうやら 出払っていた公安委員の他のメンバーが戻ってきたようだ。

（やれやれ この展開… 九曜（原作より）と同じになったな。

でもこの先輩あつてのあの後輩か……)

何年か後に幹部となるものを思い出しながらそう考えていた。

『あ！ 理事長室の場所……』

肝心な事を聞き出すのを忘れてしまっていた。

『…自力で探すか、戻るのも面倒だな。』

めんどくさそうに……この場所を後にした。

それにしても… 俺ってこんなにキレやすかったっけ？

ちょっと大人気なかったかも…

反省!!

第28話 自然系開放（後書き）

ありがとうございました！

水の竜に雷はひどいですね…

自分で書いてて同情してしまいました 苦笑

もっとうまく表現できないかなあゝ 悩

第29話 再開 御子神典明

数時間たって…… だからドンだけ広いんだよ！ココは！！

と突っ込みながらも 何とか理事長室に辿り着いた。

『やっとついた…… 長かったな〜 妙な連中に絡まれたり…女子生徒に追っかけられたり… 学校ってしんどいかも…』

理事長室を見つけ 安堵しながら入った。

（理事長室）

「やあ ジャック久しぶりだな。200年ぶりか。それにしても学園に着いていたのは知っていたがずいぶん時間がかかったな？ここまでくるのに。」

相変わらず フードをかぶり目元が見えない御子神典明と再会した。

『正しくは196年な、遅くなったのは私用があっただけ。ってか軽いな〜。約2世紀ぶりって言うのに…』

苦笑しながら話した。

「ふふふ、私に久しぶり！っとか言われて抱きつかれたほうが良か

「ったのかな？」

『それは勘弁だな。マジで。』

想像しただけで…

想像もしたくない。

男同士でなんかな…

「まあ 冗談はさておき 君がこの世に復活してたのはアカーシャから連絡があつたから知ってたんだよ。」

なるほど……

『納得納得そういうことか 通りでタイミング良く現れたもんだあのバスが。』

謎は解けたって感じだな。

「ふふふ 奴は古い友人でな。案内を任せただ。いい奴だっただろ？ちなみにバス代の件は私が立て替えているから安心したまえ。」

意味深に笑いながら 話した。

『ああ そういえばそうだったな。バス代ってジョークじゃなかったんだな… さて、本題に入ろうか？ 俺に用があつてここに呼んだんだろ？』

（ん……？そういえば御子神の考えが読めんな… 腕が落ちたか？

俺。)

読心術がうまく働かない……

(でも モカや亜愛やアカーシャ……この学園でも聞けたんだけどな
?)

不思議がっていると……

「ああ 今私の体には特殊な術式を書いているからね。そう簡単には
今の私の考えは読めんよ。」

ジャックの考えを読んで答えた。

『なるほど 結構俺のこと警戒してんだ。』

苦笑しながら答えた。

「いや 警戒じゃなくて考えを簡単に読まれるのはいい気がしない
じゃないか。」

(そりゃそうだ 俺も嫌だったし……by女神)

納得し話し出した。

「では君に頼みたい事があってな、その前に君が最近人間に悪さを
する妖しを止めていることは知ってる。そうする理由はなぜなのか
をまず教えてもらえんか？」

御子神が頼みごとを言う前に最近の行動の意味を聞いてきた。

『ん？アカーシャに聞いてなかったのか？俺は人と妖しは共存できると信じている。今は無理でもいつかは本音で語り合えるまでに…な。その為に少しずつ…焼け石に水だと思うが、行動していったんだ。後は人間たちの観察かな？』

ジャック自信の本心を話した。

「ふふふ やはり…君は頼もしい存在だよ。我々陽海学園の目的も人間達との共存を掲げていてな。まず手始めに人間社会に溶け込めるように化けるところから入っている。まあ君の言うように本音で語り合えるようになるのが一番だがそこまで出来るとは思ってははいない。少なくとも今はな。」

学園で学ぶ事、目的を一通り説明した後。

「君に頼みたいのは人間界に入った時妖しが何か悪さをしていればこの学園に引っ張ってきてくれないか？完全に更生させるのは無理だと思うができる限りの事はしたい…もちろん街中で見かけたら…程度 of 感覚でかまわないが？」

ジャックに妖しを特に人間界で溶け込めてなく、尚且つ人間を襲うような妖しを学園に連衡してくれというものだった。

『なるほどね…それならかまわない。バチバチに働けて事じゃなさそうだし、何よりココなら安心できるしな』

(下手に痛めつけるだけで終わったら逆切れして人間を襲うようなやつも増えるかもしれないし…)

その気がありそうな妖しは徹底的に痛めつけたので、今までは特に問題なかった。

(力で抑えてもな…それは理想とはいえないから。)

「ふふふ 君はそういつてくれると信じていたよ。では 期待している。この学園にはいつ来てくれてもかまわないし、VIPカードも渡しておこう、これがあれば怪しまれたりしないからな… 先ほどのようなトラブルも起こらなくてすむ。」

おそらく公安委員との絡みを言っているのであるうか。

『ありゃ！ばれたか… やっぱり… 悪いな いきなり暴れて。』

ジャックは素直に謝罪した。

向こうも十分悪いとは思っているが…な… (怒)

「いや 問題ないさ。公安かれらの行動は特に近年は目を見張るものがあると思っていたしな。だが、やる事が多すぎて手が回らなかったんだ。これで少しは落ち着いてくれれば ありがたいが、まあ無理だろうな。血の気の多い連中だから。」

(分かってるなやっぱ。)

さすがは理事長、実際に数年後に新聞部と公安の問題事件が発生するから、あながち外れでもない。

『良いなら良いさ。じゃあ 俺はまた人間界へ行くとするよ。実は温泉旅館に行きたかったんだ。』

冗談ではなく本気である。

前世の日本人の血がそうさせるのか…？ (笑)

「ふふふふ… 温泉か それはいいな。わかった。ではいつでも来てくれ。期待している。」

『ああ、まあ任せておけ。後…なんだ…その久しぶりに会えてよかったよ。戦友。』

「ああ、私も同感だ。」

御子神と握手を交わし、理事長室を… 陽海学園を後にした。

第29話 再開 御子神典明（後書き）

ありがとうございました！

第30話 温泉

陽海学園を立ち去る際……

「何あの人！」「この学園の生徒かな？」「ってか かつこいー」
など言われながら 追い回されていた。

(おかしいぞ！前話ではもう後にしたってあったのに！！)

『何でこんなことになってんだー！』

「まってー！！」「どのクラス？？正体は何？？名前は？？」「き
やー！！！！」

『ちよっ！そんなにいっぱい聞かれても答えらんないってっ！
！！！！うわっ何だこの数！！』

容姿は普通だと思ってた……

何でここまで？？って正直思ってたけど……

追われているなら逃げるが勝ち！

『じゃ！！！また今度』

「まってよー！」「まちなさーい！」「ギラッ！逃がさない……」

最後のこわっ……

決死の大脱出はしばらくたった後だったと言っ。

『っ 疲れた……』

女子生徒のパワーは凄いものです。

御子神 side

「ずいぶん学園内が騒がしいようだな？」

理事長室に呼んでいた教師に話しかけていた。

「そうみたいですネ？さっきも大変だったんですよ？公安がつぶされたーとか騒いでいたり。でも何か黄色い声援が聞こえてますから物騒な感じではないですネ」

猫目： 後の月音たちの担任となる教師である。

「くくくく…… 奴の容姿のせいで女子生徒に追い回されているんである。なんとも微笑ましい状況じゃあないか。 ……不敗がみたらどつなるか…… くくくっ」

「はこや??」

御子神は意味深に笑いながら、またアイツが学園にやってくるのを心底楽しみにしているのであった。

陽海学園を去り数日たった後…

ジャックはとある温泉宿に観光に来ていた。

「はい〜 ご予約のあった御剣さんですね?お待ちしておりました。どうぞこちらへ…」

『べつもありがとつ!』

一通り旅館の設備・時間帯の説明を受け、部屋でのんびりしていた。

『あの温泉発言マジだったの?って言われそうだけど、俺マジで温泉好きなんだよね〜』

感じのいい旅館で、女将さんも雰囲気がいい感じで…… 日雇いバイトしてお金貯めて……

『ここのところ、復活したばっかなのに戦ってばかりだから、たまには良いよね〜こつこつのも!さあ 温泉温泉 』

ウキウキランランツといった感じで温泉に向かった。

ジャック side

く露天風呂く

『はあ〜 良い湯だな〜… 星空が綺麗だ…』

ここは山の中腹にある温泉旅館…

眺め最高 星空最高だった。

疲れがお湯の中に溶けて行くような幸せ感を満喫していたのだが……

「お…！ お…なく… さ…ぐな！」

何やら夜の山の中で不穏な気配と話し声が聞こえてきた。

『ん〜？？……人（妖し）が良い気分で温泉に入ってたのにプチ壊すのは誰だよ…』

口では 文句を言ってるが…

『…行かんわけにはいかんか… 妖し関係だったらある程度何とかしとかんといかな。』

さっさと片付けてまたは入ろうと言った感じで、早々に温泉を上がり声がしたほうに向かった。

第30話 温泉（後書き）

ありがとうございました！

温泉って良いですね。。。

大好きです！ 26日は風呂の日ですw

さて…またまたトラブルが起こりそうです。
どうなるのか！！！！

後、又登録評価人数が増えています。

登録してくれた人にもただチラッと見てくれただけの人も評価して
くれた人にも。

ただただ感謝感激です。

駄文に付き合っていたいただきありがとうございます！

第31話 少女と3人の男達

声がしていた方は…

そこは夜になれば闇があたりを支配し、人を寄せ付けぬ雰囲気を纏った森の中だった。

??? side

「やっと追い詰めたぞ！ちよこまか逃げやがって。」

男が3人…

話の内容から察するに、誰かを追いかけてこの森に入ったのだろう。

「お前は 俺らに売られたんだ！つまり俺らが御主人！その後主人から逃げだすつたーどういうことだよコラァ！！」

男の一人が怒鳴りあげた。

「っっ……」

怒鳴られていたのは…

10代ほどの女の子だった。

（やれやれ… これまた物騒なこと言ってるな… 大体売られたっ

てなんだよ？日本でそんなんあるのか？ まあ裏の世界って奴か？
…やつと目が慣れてきた)

慣れた目に飛び込んできたのは……

3人の男達に囲まれた少女の姿だった。

「っっっ!!」

少女は喋れないのか、言葉にならないような声を出し、必死に助けを求めているようだった。

「ったく てこずらせやがって…てめえ！」

男の一人が乱暴に少女に掴みかかるようにするが。

「よせよ。とりあえず捕まえられたんだ。それに ガキとは言っても大妖のガキだ、あまり刺激するな。コイツは将来、我々に役に立つてもらわなければならない。」

おそらくその男達の中ではリーダー的な存在なのだろう。

男の発言に渋々従った。

「わーっただよ！ならさっさと引き上げようぜ。」

「同感だ！さあ さっさとたて！」

男達が少女の手を握り無理やり立たせた。

「あんまり 刺激してやるな。親に捨てられたショックからか、力が出せてないようだ。だが万が一がある。」

「兄貴は慎重すぎなんだよ!」

「お前らが軽率すぎなんだよ!」

少女を連れ出しながら醜い言い争いを始めた。

s i d e o u t

(親に捨てられた…か 妖しの世界でもそんなんあるんだな…)

不思議なことではない。

人間の世界でも親が子を…子が親を…なんてことは日常茶飯事とまでは行かず

とも良くあることだ。

(何にしても胸糞悪い… やるか…)

ジャックは気配を殺し、男達に近づいていった。

第31話 少女と3人の男達（後書き）

ありがとうございます！

今回はとある大妖が出てきますW

一人は少女一人は・・・ですW

さて 誰でしょうか！！

お楽しみにですW

期待を裏切らないように……頑張ります。

第32話 人でなしじゃない

ジャックは限りなく気配を殺し…男達に近づいていった。

「…む？」

リーダー格の男が急に立ち止まった。

「兄貴？」「どうしたんです？」

不審に思った二人も足を止めた。

「…誰か…いるな。そんな気配だ」

ジャックは限りなく気配を消し近づいていったのだが、男は僅かな気配を察知し

後ろを向いたのだった。

「何にも感じませんか？」

「いいから黙ってる！」

有無を言わさぬ迫力で、部下の男達を黙らした。

「誰だ？俺達をつけているのは？」

まだ姿が見えないが…気配のした方へ声を上げた。

（ふうん… 中々やるな？あいつ… 気配を殺しても何かを感じ取ったか…）

ジャックは バレたなら仕方ないと、姿を見せることにした。

「だれだ？てめえ」

「俺らをつけてたのか？」

「……………」

部下の男達は前に出て威嚇していたが…

リーダー格の男は後ろで見ていた。

『いやなに… 温泉にゆつくりつかつてたかったんだけど、そこに物騒な声が聞こえてきたもんでね、気になったから見にきて、ついただけだ。』

両手を広げながら、説明をした。

（あの気配を感じたのは 偶然だ……まったくのな、それだけで分かる… この男只者じゃない。まずは出方を…）

「なめてんのかてめえ！」

「ぶっ殺すぞ！！！」

部下の2人は 態度が癪に障ったのか、ジャックに掴みかかるように詰め寄った。

（まったく…あいつら軽率すぎだ… だが 泳がせるか…）

リーダー格の男は傍観していた。

『ん… 俺は基本的に争いは好まんが…』

「なんだ？怖がってんのか？コラ」

男が更に詰め寄り掴もうとしたが…

『あんな幼気な女の子を乱暴するような輩を見逃すほど人でなしじゃない。』

男が掴みかかった手は空をきり…

ドボツ！！

ジャックの蹴りが男の脇腹を捕らえめり込んだ。

ボキボキボキッ

「がッ はッ！！」

ドゴオオン！！

骨の碎ける音を出しながら、男の一人は夜の闇へ吹き飛んでいった。

「てめえ！！やりやがったな！！！」

もう1人の男は擬態を解き、男に襲い掛かった。

『半漁人か？なら……』

人差し指に魔力… 雷の力を集中させる。

『雷閃！』
らいせん

指先を密着させ… 纏わせた雷の力を解放した。

「ぎゃあああああ！！！」

一瞬で男の体内の隅々まで雷撃が走り、体の内から焦がし倒れた。

（妖しだしこれくらいじゃ死なんだろ。（多分！）これだったら指先だけの魔力ですむ。自然系は結構疲れるしなあ。）」
ロキア

男の体をどかし、最後の1人の男の方に向いた。

第32話 人でなしじゃない（後書き）

ありがとうございました！

一口妖怪辞典… 作者都合上w

半漁人

二腕二脚だが、鱗やエラを持つなどの特徴があることから水棲人^{すいせいじん}とも呼ばれ、英語ではマーマン（Mer man）と称されることが多い。

つと紹介しましたが、あっさりいなくなりましたねw（笑）

最初の一人も同じ半漁です。あしからずw

第33話 御伽の国（前書き）

ここで原作には無い御伽の国の連中が出てきます。

ヨロシクです！

第33話 御伽の国

男2人を倒して…

残り1人となった男（おそらくリーダー格）を見直した。

『で…？君はどうする？聞いてた感じ、君はその子の扱いもそこま
で酷くなかったし、争いをあまり好まない身とすればこれで終わり
にしてその子を離してもらいたいんだが。金の問題なら考えもある。』

もちろん御子神のことだ。

何言われるかは分からんが…

（まあ 出世払いで 苦笑）

「うちの身内をボコボコにしといて争いを好まないといっても全然
説得力無いがな…」

皮肉を交えながら話した。

「あいつらは良い… 軽率すぎるしあそこまで出来が悪いと思わな
かった。むしろアンタに興味がある。」

『男に興味を持たれてもうれしくないがな…』

うん！絶対ゴメンだ。BLは無理w

「まあそういうなよ。アンタみたいな男が仲間になってくれたら、助かるんだ」

???

『仲間には？俺は女の子に乱暴するような輩の仲間になるのは御免なんだが？君はそこまでひどくなかったけどな。』

即答で答えた。

「そういう聞いてくれ、アンタも見た所妖しだろ？正体は分かんが… それにこの子にはもう乱暴はしないさ。」

『まあ 話くらいは聞こうか。』

とりあえず おそらく組織的な連中だと感ずいた為、実態を探ろうと話を聞いた。

「ははは、そうこなくっちゃな、俺達は妖しの敵である人間社会の転覆を目論み闇で活動してる御伽の国フェアリーテイルって言う組織なんだ。そしてこの子燦って言う名前なんだけど。この子も素晴らしい力を秘めていてね。来るべき目的のために優れた仲間が欲しいってわけさ。」

男はそういつて自分達の組織についてを語った。

(フェアリーテイル 御伽の国…ここで出てくるか… まあ創立とか知らんし、合つて

も不思議じゃないか。)

「俺は御伽フェアリーテイルの国第23支部長 神無木 聖司だ。あんた程腕の立つ男ならVIPとして歓迎するがどうかかな？」

ジャックに問いかけた。

返答は…

『答えはNOだ。』

これまた即答した。

「ほう… してその理由は？」

『俺は 人間を敵と思ってない。むしろ最近仲が良い！(笑)そして 何か組織の名前が気に食わない。御伽の国??どの辺が御伽なんだ??って感じだ!』

思ったことをはっきり微塵も曲げず話した。

「…へえ 妖しなのに人間の味方をすんの… じゃあ アンタはただの敵ってことになるな。後、組織の名前については大きなお世話だ。」

静かな口調で話していたが… どこと無く怒っているように話した。

(あれ?コイツひょっとして人間の味方で仲間になるの拒否した事より、御伽フェアリーテイルの国を馬鹿にしたこと怒ってんのかな?そんなに気に入ってんの?)

苦笑しながら、

『そ。その人間達を滅ぼすって言うのなら… 俺がお前らを滅ぼしてやるよ…』

臨戦態勢に入った。

第33話 御伽の国（後書き）

ありがとうございました！！

多分原作では23支部までないと思います……苦笑

第34話 海の大妖 セドナ(前書き)

オリジナルの妖怪ですww

神無木 聖司という名前はテキトーです。

笑ってやってください…w…

第34話 海の大妖 セドナ

臨戦態勢に入ったのはいいんだけど……

女の子を巻き込むのはな……

『さ、まずその子…燦ちゃんだったっけ？ まず巻き込まれんように離れさせてあげな、聞く限りじゃ大事な戦力なんだろう？ その子も』

「ああもちろん。アンタに加えてコイツも失うわけにはいかないんで…ね…！」

男は少女の方に向くと見せかけ、振り向きざまに水を弾丸の様に放ってきた。

『つと…！』

夜の闇のせいかな… 視界が悪いため少し被弾してしまった。

「へえ…あれを交わすのか… やっぱりアンタ惜しいよ。ここで殺してしまうのはな。」

冷徹な目で睨みつけてくる。

『まあ あんたは俺の気配に唯一気付けたし唯者じゃないって思ってたけど、正直ここまでとは思ってなかったな。先ほどの攻撃…大』

したものだ直前まで殺気を隠し、その上夜であることも利用して打ってくるなんてな。』

最近の水を使う奴とばっか戦ってる様な気がする…

俺って水難の相があるのかな？　苦笑

以前戦った水龍　歐龍の水の攻撃より遥かに錬度が違った。

（まあ　アイツは自分に自惚れすぎてたし…　比べてもな…）

苦笑した。

「そっついながら、アンタもおかしいぜ？　当たった筈なのに涼しい顔してよ」

間違はなく当たってるのにこたえた様子がない為攻めきれずにいた。

『そうか？　まあ俺もいろいろ経験してるからな…　じゃ　こっちのターンでいいか？』

というと同時に、

縮地を使い距離を一気に詰めた。

「っな！！（はええ！！）」

ドボッ！！

男の脇腹めがけて蹴りを放った。

が…

『防いだか?』

脇腹を直撃するはずだった一撃を男は右腕でガードし耐えていた。

多少はダメージはあるようだが…

(やるな…こいつ。)

「スピードにはビビったが(マジで)その蹴りは一度見せてもらったからな、馬鹿正直に同じところ蹴りにきたら防御するぜ?普通」

ガードした右腕を振りながら話した。

「でもま、アンタはやっぱりつええ…人間擬態のままですこまでするたあな…出し惜しみしてられねーみたいだわ。」

しゅっしゅっしゅっ

男は人間の姿から徐々に姿を変えた。

『この姿…セドナか!』

セドナ…海の大妖の一角。イヌイット神話で語られている冥府の王。

(確か…人間を殺すことに至高の喜びを感じるたちの悪い妖しだったな?)

「ははは！かなり強い相手だ。なら全力でいかなければならんだろ？」

ゴゴゴゴゴッ

背後に広がっている海（実は山の裏側は海が広がってます！）から津波が襲い掛かってきた。

「俺は海を統べる妖しの一角… この大津波から逃れられるかな？」
ビックウオール

『おいおい！馬鹿か？その子まで流されるぞ！』

ジャックは蹲っている女の子まで移動し抱きかかえ縮地を使いこの場所から離れた。

「言っただろう？出し惜しみすれば俺の方が殺られる可能性がある、その女の力は惜しいが貴様を始末する方を優先したまでだ！」

そう言い 呼び寄せた津波を纏い。

「トルネイヴ水竜巻」

ジャックの飛んだ先に向かって放った。

それは まるで水が意思を持つてるかのように徐々に迫ってきた。

（どうする？俺だけなら楽に防げるが、この子がヤバイ… まあ見捨てるなんて選択は無いがな）

そう思いながら女の子を抱えている腕に力を強めた。

第34話 海の大妖 セドナ（後書き）

ありがとうございました！

一口妖怪辞典… 作者都合上w

海の大妖 セドナ

イヌイト神話の海の神。冥府の王でもあり、人間を溺死させることに至高の喜びを感じている。

セドナは海底で、海の死者の国の管理者となっていたという。

ホントは冥府の女王で海の女神… 分類的にも名前的にも女性ですw
テキトーですw
すみませんw

第35話 もう1人の大妖（前書き）

これを読んでくれて（ありがとうございます！！）、尚且つ原作を知っている人は…

名前を見て気づいていたと思いますw

個人的にはかなり好きな原作キャラです。

第35話 もう1人の大妖

『必ず守ってやるぞ。』

やさしく包み込むように……

ジャックは女の子を抱えなおした。

「つつ……」

ジャックの腕に強く抱かれた女の子は、

正気を取り戻し

女の子はジャックを見上げた。

『大丈夫だ。俺に任せて置け。』

優しく笑いかけた。

その笑顔を見て安心したのか落ち着いたのか、女の子から強い妖気

を感じた。

「なんだ???この妖気は?アイツじゃない...まさか...」

妖気を感じるのはあの男の傍から... ならば答えは一つしかない。

「
」

パツキヤアアン!

襲い掛かってきた水の竜巻が弾き飛ばされた。

『これは...なんて綺麗な...歌声... セイレーンの歌...か?というか君もしかして...』

(そういえば燦って名前... あああ!!今気付いた!!!!)

少女の正体は音曲の大妖セイレーン・そして後の陽海学園生徒となる音無 燦だった。

(今気付いた... なんで この子がここに?施設じゃなかったっけ?確か???)

おそらくはジャックが存在していることからの歪みから生じる現象だろう。

と気付いたのはしばらく後である。

「あ あの…」

完全に敵の攻撃を防ぎ終わった後 ジャックを見つめた。

『（かわいいなやつば）（どうもありがとな。こんな事できるのなら俺でしゃばったかな？）』

笑いながら話すと。

ふるふるふる！

頭を左右に振り否定した。

『ははは！』

かわいいな燦ちゃんって。

和やかな空気だったが。

「貴様ら——俺を無視するな——！」

男がそれをぶち壊した。

（…ぶっ飛ばす——！）

男に向きなおし。

『じゃあ 燦ちゃんだね？確か…後は大丈夫任せて。』

そついい自分の背後に燦を隠し、

『さて… 闇の力 自然系ロキア』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

闇の力を解放した。

以前使用した禁忌の術。使用法を誤れば自分自身を滅ぼす諸刃の力。

さあ今回はどうなる？

第35話 もう1人の大妖（後書き）

ありがとうございました！

一口妖怪辞典… 作者都合上w

音曲の大妖 セイレーン

ギリシャ神話等で知られる海に住む半人半鳥の妖。
元々は神であったといわれ、その歌声は聞く者を惑わし
精神を破壊する強い力がある。

原作より引用…ですw

燦は非常に優しく綺麗な心の持ち主ですw

結構ひいきしてますね…

あまり活躍してませんが… まだ子供って事で仕方ないかとw

第36話 決着 引力と斥力

闇の力は非常に危険だ…

以前は体が闇に食われ約2世紀の間異次元の狭間を彷徨ってしまっ
た。

(まあ 同じミスはしないがな。)

「最大級の水竜巻トルネイヴを食らわしてやる！先ほど程度では防ぎきれんし
ベルじゃないぞ！食らえ！！」

「水竜巻トルネイヴ！！！！」

再び海を纏い解き放ってきた。

『ふん！！』

ジャックは両方の手を合掌させ。

『ブラック・ホール
超重力』

黒球を作り出し 水竜巻に向かって放った。

「その程度で防げるとも…んがっ！！」

それは突然起こった！

「な　なに…　地面に…吸い込まれる！き　貴様！　なにをしたあ
！！！」

空中に飛んでいた男がまるで何かに引つ張られてるかのように大地へ引きずり込まれていた。

もちろん　己の技と共に。

『海つて結構重力に影響されやすいんだぞ？干潮満潮だって月の引力の影響で水位が変わってんだからな。』

男はついに大地へ引き摺り下ろされ、身動きが取れなくなっていた。

「重力？？まさか！」

『そのまさかだよ。今放り投げたのは重力の塊だ。お前の技は付近の住民の皆さんに迷惑が掛かるからな、少々疲れるが荒っぽい手段を使わせてもらった。』

呼び寄せた津波と男は大地にへばり付き、津波は広がらなくなった。

ボキボキボキッ

「がああ！」

ついに重力に耐え切れなくなつたか、体の骨が折れ始めた。

「おのれ！！こうなつたら道連れだ！俺の体内には強力な爆弾を仕込んである！お前らもろとも吹き飛ばしてやる！！！」

カチツ…

男はスイッチをいれた。

『…参考までに聞くけど 後どれくらいで爆発すんの?』

高笑いしている男に話しかけた。

「はははは!!後10数秒ほどさ!この爆弾はかなり強力だ!周囲数キロまで吹き飛ぶ!貴様の大好きな人間も巻き込んでな!!はあー!!はっはっはっはっはっはっは!!」

狂ったかのように笑い続けた。

『よし 10数秒あれば十分だ』

「は?」

男が話すまもなく今度は一気に空中へ浮いた。

「な なに!!!!!!」

状況がつかめない さっきまで凄まじい力で大地に縛られていたはずなのに今度は一気に

空へはじき出されてしまった。

『重力・引力を使えんのなら 斥力だって使えるって思わなかったのか？まあそれどころじゃなかったんだろっがな』

ジャックは反転魔術を使用し、ブラックホールリパルション超重力を超斥力に変え解き放っていた。

上空のかなたへ。

「クソーーーーー！！うわあああああああああああああああ！！」

男が見えなくなったと同時に。

ド

ンッ！！

男が言うように凄まじい威力の爆発が起きた。

『能力は大したもんだが一手二手先を読むのが大切なんだぜ。』

もう吹き飛んだ相手に忠告を促した。

(でも…飛行機とか飛んでたらどっしょよっ…… それにこの山の有
様…)

共存を考える身とすれば…

心配事が尽きない幕切れであった…

第36話 決着 引力と斥力 (後書き)

ありがとうございましたw

第37話 音無 燦

一晩明け…

空は朝日が立ち上っていた。

フェアリーテイル
御伽の国との一戦も終わり…

『ん。とりあえず旅館の方に戻るか。燦ちゃんも付いてくるかい？嫌じゃなければだけどさ。』

燦に話しかけた。

「……………」

しかし、燦はジェスチャーをして必死に伝えようとするが、話そうとはしなかった。

（そうか… 確かこの子、妖力が強すぎて親に捨てられたことがトラウマでセイレーンの妖力ちからの源である声を出すのをやめたんだっとな……（原作より） それに確か極度の照れ屋だったっけ？）

『ああ ちょっと待ってね。』

そう言うとジャックは少し大きめのメモ帳とボールペンを取り出した。

「!?!」

意図を感じたのか、驚いた表情でジャックを見つめた。

『…悲しいことがあったんだろ?」「声」を出すことにさ。なら無理する必要は無いさ。相手に意思を伝える方法は何も声だけじゃないしわ。』

そう言い取り出したメモ帳とボールペンを差し出し、そして笑顔で話しかけた。

『はい。とりあえず筆談から始めよう。慣れるまでさ。』

その言葉に燦は目に涙を溜めながら… ボールペンを走らせた。

>どづも…ありがとうございます…<

『ははは どういたしまして。さ どうする?俺と来るかい?』

>はい…!私にはもう頼りがありません。どうかよろしく願います。<

『よし分かった。じゃあ行こうか。』

そう言って手を差し出した。

燦はその手をじっと見つめた。

『ん？ああ、ごめん手をいきなり繋ぐのは抵抗があるかな？』

ちよつと無神経だったかな？と思いながら苦笑した。

>そ そんなことありません！ 唯…誰かと手を繋いで歩くのって初めてで…<

また 目に涙を溜めながら話した。

『そつか、じゃあこんな俺で良ければよろしくね。』

そう言つて再び手を差し出した。すると…

>は はい！<

今度は迷い無く手を取った。その顔は幸せそうな笑顔だった。

第37話 音無 燦（後書き）

ありがとうございます！

第38話 心優しき人

「旅館にて」

『ごめんなさい〜!』

旅館は朝早かったため鍵がしまっていた。

「あらあら ジャックさん。どうして外に？」

てっきり部屋で休んでいるとばかり思っていた為、驚いた様子で女将さんが聞いた。

『ああ すまない… 昨晚俺の姪っ子が家出したって連絡があつたね。一晩中探していたんだ。だから野宿する羽目になつてね…』

苦笑しながら話し、燦に向かってウインクした。

その意図を感じ取ったのか。

>ごめんなさい… 私のせいで…<

筆談で詫び話を行い、会話を繋げた。

「そうでしたか… それは大変だったでしょう。さあお風呂も入れます。ゆっくりしていつてください。」

『どうもありがとう。この子の分の料金もちゃんと払っよ。』

一礼をした。

「いや いいですよ！分けありなんですよ？そのこの分はサービス
って事で。」

女将さんは優しい笑顔で答えてくれた。

『そんな 悪いですよ！』

サービスしてくれるのはうれしかったが、流石に悪いと思い答えた。

「本当にいいんですよ。お嬢ちゃんもゆっくりして行ってね。」

>女将さんどうもありがとう…<

筆談で話した。

「…じゃあ 暖かい料理をもてなすわね。」

女将さんは筆談で話す燦を見て話せない子と思ったのか少し言葉に
詰まったが、

直ぐ笑顔になり 話し返した。

（本当に…良いとこだなココ… 今度来ることがあったら絶対寄る
う。）

俺はそう心に決めたのだった。

『はあゝ 美味しかった!』

旅館の料理を堪能し、しばらく部屋でゴロゴロしていた。

『そういえばさ ほんとに良かったの?俺と同じ部屋でね。』

話によると燦は今年で13歳になるらしい…

子供とはいえっても女の子…抵抗があるのでは?と思い聞いたのだが。

>いえ… そこまでしてもらわなくてもいいです。凄く恥ずかしいですけど… 嫌じゃないです…<

顔を赤面させながら答えた。

『そっか、ならいいんだ。』

この子は、親の愛情に飢えているんだと思った。

妖力が高すぎるが故、恐れられ手が付けられなくなっただらう。

(逆に一人にするのは良くないか…)

とりあえず 落ち着いたところで陽海学園への編入の話をしようと考えた。

第38話 心優しき人（後書き）

ありがとうございました！

第39話 実の娘のような…

暫く休憩した後…

『さて！また温泉を堪能してきますか！』

手をグーツと上に伸ばし少し背伸びをした。

>おんせん??<

燦は温泉のことを良く知らなかったようだった。

『ああ、温泉はね…ん、大きなお風呂かな？ お風呂はお風呂でもお湯に含まれる成分が普通のお湯と違って………』

詳しく話そうとしたが、

???

話すたびに??が増えているような気がしたので 話すのをやめ。

『とりあえず 普通のお風呂よりずっと気持ち良いお風呂かな?』

簡潔に説明した。

>そんなに??<

『うん。なんだろうな…… 疲れがお湯の中に溶けて行くような……
… とりあえず入って見たら分かるよ。でも ここ確か混浴だから
先に入ってくるかい?』

> こんよく??<

混浴についてもよく分からないようだった。

『混浴って言うのはね… 普通は男の子・女の子って別に用意して
いるでしょ?トイレとかさ。で、この旅館は1つしかないから男の
子と女の子、一緒に入るって事だよ。』

一通り説明すると……

燦の顔が一気に赤くなっていった。

『ああー だから! 別々に入ろうって話してたんだよ!! 混浴だから
らって一緒に入らなきゃいけないってこと無いからさっ!』

なんで俺まで赤くなってんの!

相手は小学生6〜中学1年生なのに!!

ここまで 初心つがいな感じをされたら仕方ないか。燦は娘みtain感じ
だしw

> あ あの……<

しばらくして燦が筆談はなしかけた。

『ん？なんだい？あ 先に入ってくる？いいよ待ってる。』
笑顔で話し返した。

> い いえ… その… 嫌じゃなければ… <

再び顔を赤くして。

> わたしと… その…一緒に入ってもらえませんか?? <

『えっ?』

不覚にも少しフリーズしてしまった…

> だめ… ですか…? <

『だめってわけじゃないけど… どうしてかな? ツて思って 男だし俺、逆に大丈夫なのかい?』

聞き返すと、顔を赤めながら。

> わたし… あまり外の世界のことを知りません… だから… 1
人じゃ不安で。 <

なるほど、じゃあ仕方ないな。

『わかったよ。燦ちゃんが嫌じゃないなら、一緒に入るっか?』

> はい!よろしくお願いします。 <

顔は赤くしていたが満面の笑みで答えた。

温泉では…

一通りの入り方を教えた。

シャワー・かかり湯・定番の100まで数えること……

そして 燦は髪の毛が非常に痛んでいるようだった。

女の子にとって髪の毛は大切なきゃいけないことを教え、

頭を洗ってあげた。

すっかり借りてきた猫のように大人しかった。

最後は、露天風呂に連れて行き、星空を見上げながら一緒につかった。

頭はヒヤヒヤ体はポカポカこれって何だ？とクイズを出すと、

>温泉!!<

つと元気よく筆談こたえた。

（まさかココまでスケッチブックを持ってくると思わなかったが）
笑（）

そして、温泉から上がり湯冷めしないように早く体を拭いて着替えるように教えた。

もちろん体を拭いたのは燦自身である。

そして…

『な？ 凄い気持ちよかっただろう？』

と笑いかけると、

>うん！ とつても！<

と とびっきりの笑顔で答えてくれた。

燦は俺にとって、実の娘のようだった。

第39話 実の娘のような…（後書き）

下心は無いと思いますよ…！…！
多分…w

第40話 燦 陽海学園へ（前書き）

展開が早いような……苦笑

とりあえず原作レーンに戻してあげる事にしました。

ちょっとしたネタバレですが…

原作では母親の様な人は出来ましたが、父親のような人は
まだ出来てません…

そのかわりになれたら〜っとか

考えちゃいましたw

失礼しますw

第40話 燦 陽海学園へ

数週間して…

しばらく俺と燦は一緒に行動していた、

人間の世界についてさまざまなことを教え、見せていた。

燦との旅は…

とても…とても楽しい時間だった。

時間がたつのを忘れるかのように…

しかし、やはり一人前になる為には人間との共存についてを…学業を…一通り覚えないと

この人間社会では生き残ることはできない……

そこで俺はそれとなく陽海学園への編入を薦めた。

>わたし… お父さんと離れたくないよ…<

涙ながらに訴えてきた。

燦はこれまで一緒にいるんなところを旅したが、非常に聞き分けがよく、逆を言えば

子供らしくないと心配していたのだが…

（燦が子供らしい発言をしてくれたのは何かうれしいな… 後お父さんって読んでくれたのもなんかくすぐったい…）

微笑みながら燦に話しかけた。

『燦… 何もこれでもう永遠のお別れってわけじゃないんだよ。会いに行くさ。それにこれは君のためなんだ… 確かに俺も君と離れたくない。だけど、この世界のこと・学業のことを考えると、やっぱり俺だけじゃ無理なんだよ…』

>でも… 今までだってお父さんいろいろ教えてくれた… <

もうほとんど泣きながら筆談^{はなし}た。

『人間の世界で一人前に働くのは非常に大変なんだ… 学校も出てなかったら尚更… ね。俺も凄く苦労した… 燦には同じ思いをして欲しくないんだ… 必ずまた合いに来るから… 俺が約束を破ったことあるかい？』

何かワンパターンのような気がしたが…

>…無いく

少し顔を暗めながらもきっぱり答えてくれた。

>…わかった。お父さんの言う通りにする…<

最後には 燦は分かってくれた。

俺達は、陽海学園へ向かった。

以前貰ったVIPカードには、妖力を送ることによって 陽海学園のバスとコンタクトを取れる

ようになっていた。(今まで気付かなかった… (苦笑))

陽海学園のバスが来るまで2人は、バス停のベンチに座って待っていた。

くいつくいつ

燦がジャックの服を引っ張り、

>やっぱりどうしても…別れなきゃ駄目なの…?<

と筆談きいた。悲しそうな顔をして…

『燦…』

ジャック自身も燦のことを自分の娘のように思っていた。

離れるのは非常に辛い選択だが…

自分が成すべき（できるか定かではないが）人間と妖しの共存…

ここ最近は燦とともにいることからか、争いがありそうな気配がしても向かってなかった。

まだ子供の燦に戦いをあまり見せたくなかったのだ。

そして他の妖しを攻撃する俺の姿を…

ぎゅっ

ジャックは燦を強く…強く抱きしめた。

想いが、伝わるように……

>
<

燦はスケッチブック（買ってもらった）を落とし、抱きしめ返した。

（想いが伝わればいいな…）

そんな風に考えていた。

第40話 燦 陽海学園へ（後書き）

ありがとうございました！

アカーシャさんが親愛なる女性なら、
燦は親愛なる娘ですかね？

ヒロイン…どっしょっか……

第41話 陽海学園？

（陽海学園）

「さあ 付いたぞ。」

バスから降り、

『ああ ありがとな。』 > ありがとございました。 <

一礼した。燦も筆談にてお礼をした。

「ヒヒヒ いいさ、しかし君はほんとに優秀のようだ。人間界での活躍聞いているぞ。流石は冥王の1人といったところか？」

冥王という話を聞き、

『ん？俺は三大冥王とは違うぞ？』

ってか何で知ってんのかな？

不思議だったがとりあえず否定した。

「確かに 呼ばれてはおらんがね、わたしがそう思ってるだけさ…
気にしないでくれ。それじゃあまたな。」

そう言ってバスを走らし トンネルへと消えた。

>お父さん…冥王って何のこと？<

燦が不安そうに筆談きいたが、

『そうだな、お父さんがずーっと昔にこの学園の理事長や他の仲間達と共に悪い奴をやっつけたから、その名前が付いたんだよ。』

笑いながら話した。

>ほんとかな？それ<

クスクスと笑い、談笑しながら理事長室に向かった。

〈理事長室〉

今回は何事も無くこれでよかった…

あの時(26)~28話参照)みたいになっただらやだったからね。

「やあ ジャック…思ったより早かったな。連絡は受けている。その子については安心したまえ。既に編入手続きの方は取っている。」

御子神には燦については一通り説明していた。生い立ち・妖力が高い。

そして正体はセイレーン。音曲の大妖くだということ。

> あ あの… よろしくお願いします。 <

筆談で挨拶をした。

「ああこちらこそ。この学園は君のような孤児も沢山いるからな… 彼らのことを君ならわかってやれるそうだろう？そして新しい家族は本人次第でできるということもな。」

燦は自分と同じ境遇の子達だ沢山いることを聞いて、

> はい！ <

力強く筆談こたえた。

「説明はこの猫目先生がしてくれる、分からないことは何でも聞きなさい。」

そっぴい猫目先生がきて。

「はあい！よろしくね！！燦ちゃん。」

元気良く話しかけた。

燦は少し驚き、たじろいだが、

> こちらこそ、よろしくお願いします。 <

と挨拶を交わした。

第41話 陽海学園？（後書き）

ありがとうございます！

これで新聞部部长〜銀・灰次の更正〜まりんさんとの出会い〜マデ
いけたら良いけど…w

第42話 運命のときへ…

ジャック side

(良かったな…)

俺はそんな風に考えていた。

燦は人見知りをしてしまう性格だったのだが、

思ったより早く、学園の先生と打ち解けていた。

『御子神…』

俺は御子神に話しかけた。

side out

『何かな?』

神妙な顔つきのジャックに不安を抱きながら聞きかえした。

『くれぐれも燦をよろしく頼む…な あの子は俺にとって…もう特別な存在だ。』

自分の思いを伝えた。

「…やはり お前はアカーシャと同じだ。」

確信したように御子神が語った。

『え？』

「お前は… お前の最大の武器でもあり、弱点でもあるのは 優しさ… アカーシャと同じな… 優しさだけでは何も変わらないと思っていたが… その優しさがいずれこの世界を変えるのかも…」

ジャックにそう伝えた。

『ふ… そうかも…な。 だが 俺はその感情は絶対に手放さない… 情と言う感情は墓場まで持つていくつもりだ。 御子神… 1 つ頼まれてくれないか？』

御子神のほうに向きなおし 小さな宝石のようなものを取り出した。

「これは？」

『これは、俺の魔力で作った精霊石だ。せいれいせき この石を燦に渡してやってくれ。俺の替わりだ…』

それは、あの時たかいと同じような悲しみ…揺ぎ無い決意が表れていた表情をしていた。

『お前… 何を考えている…？ 何をするつもりだ？』

あの時の事が脳裏に浮んだのか…

御子神が声を荒げて聞いた。

『ははは！なんでもないさ。 気にするな。 娘同然と思っていた燦と別れるんだちよつとナーバスになっただけだ。』

笑いながら答えた。

(悲しみといえは確かに分からないでもないが、あの表情は気になるな…)

御子神は少し不安を消せなかったが、状況を考えると仕方の無いものだと考えた。

「ふ アカーシャといえば今度モカを預かるという話が出てな。近々来るはずなんだ。」

御子神が話題を変えジャックに話しかけた。

するとジャックは驚いた表情になった。

『…それは 確かなのか？御子神… モカが来るって言うのは…』

顔つきが真剣になり聞き返した。

御子神は不思議に思ったが、

「娘のモカとお前は面識があるんだろう？なぜそんなに驚くんのだ？娘には平穩な暮らしを…それがアカーシャの望みでな、だいぶ前からこの事は決まっていたんだ。アカーシャの性格少しを考えればわかることだろ？」

問題ないと言った様に話した。

『いや… 何でもない。そういえば久しぶりに会うかもしれないかな… なあ御子神そういえばモカはもう何歳になるんだ？』

『確か… 明日が誕生日らしいから、もうすぐ10歳だな。』

！！！！

再び驚いた表情になった。

「さつきからどうしたんだ？ 驚くほどの会話をしているとは思わんのだがな？」

御子神にすればジャックがそこまで驚く理由がわからない為、不思議には思ったが、不安感はそこまで無かった。

『運命の 때가 近い… か…』

御子神に聞えないほどの大きさの声で呟いた。

「なんだって？」

聞えなかった為、御子神は再度聞きなおした。

『いや 何でもない…』

御子神に背を向け燦のほうに向かって歩き出した。

『燦！どうだ？この学校についてはよくわかったか？』

いつもと変わらぬ笑顔で聞いた。

>うん！とてもよくわかった！私学校つてところに憧れていた事すっかり忘れてた…もう大丈夫だよ！将来…お父さんに迷惑がからないようにしっかりする！>

『そうか…それはよかったな！じゃあ燦少し俺は出かけてくるな。何十年来の友達に会う用事が出来たんだ。』

そう言うつと燦は少しくらい表情をした。

『お前はまだまだこの学園で勉強しなきゃな。それに友達も出来るかもしれないぞ？』

頭を撫でながら答えた。

すると、少し暗かった表情が明るくなり、

「うん…お父さん…気をつけてね。」

筆談では無く燦自信の声で答えてくれた。

『！…ああ ありがとな。』

驚いた表情を見せたが…すぐ笑顔になり、燦に笑いかけた。

『じゃあ 行ってくるな。』

< 気をつけて… >

筆談に又戻ったが……

(あの一瞬でも十分…だな)

そう思いながら理事長室を後にした。

第42話 運命のときへ… (後書き)

ありがとうございました…!

第43話 Happy Birthday(前書き)

この話はほとんど原作引用ですw

幸せの絶頂って感じだったので、好きだったので乗せてみました！

第43話 Happy Birthday

ジャック side

『俺がこの世界に再び来て1年程か…』

陽海学園のバスに乗り俺は朱染城に向かっていた。

(モカがもうすぐ10歳という事は… アルカードが復活する時期だな…)

原作を知っている身とすれば、どうなるのかは知っている。

もはや完璧な未来予知のようなものだった。

(だが… 相手の… アルカードの力量を前回は見余った。そして倒しきれなかった… やはり変えられないのか？ 肝心なところは…)

不安感で押しつぶされそうになったが…

己を信じる以外他無かった。

side out

朱染城 side

ドン！ ドドン！

花火が盛大に打ちあがっていた。

それはモカに対する誕生日プレゼントだったらしい。

「Happy Birthday Dear MOKA Happy
Birthday to you」

『モカちゃん10歳の誕生日おめでとう~~~~~』

一気に会場が盛り上がった。

次はプレゼントタイムに入る予定。

『ジャーーン！これ私からのプレゼントよ。モカちゃん、がんばって作ってみたの〜』

そう言っつて一番手 刈愛は自信の身長よりも大きいプレゼントをモカに渡した。

空けてみると…

????のぬいぐるみだった。

モカは何のぬいぐるみかハッキリせずとりあえず、

「わあ〜い 手作りくまさん！」

つと試つてみたが…

「あはは…一応つさぎさんなだけど…」

ばつちり間違えたらしい…w

「つさぎさん！嬉しいなあ！！つさぎさん！」

それでもぎこちない笑顔で喜んだ。

ちよつと複雑だった刈愛だったがモカが喜んでくれた為、さほど気にしていなかったが…

『カルア姉さんて意外と不器用よね〜』

心愛の痛烈な一言で一気に落ち込んでしまった。

擬音をつけるとすれば「ガン！」がふさわしいだろう。

そして二番手 心愛は小ぶりなサイズなのに鉄製のテーブルを揺らすほどの

重量感のあるプレゼントを出した。

「わたしのはもっと可愛いわよ〜」

「はは 何かな？しかしいつもケンカしてるココアがプレゼントを

くれるなんて何か照れる…」

顔を赤面させながらプレゼントを開けると…

バケバケコウモリがでてきた…

「あたしが捕らえたバケバケコウモリのこーちゃんよ！特技は武器に変身すること！モカお姉さまの式神にどうぞ！」

自信満々にモカに渡した。そして手渡す直前に、

『欠点は体重が100kgもあることだけど 後めっちゃごはん食べる』

その言葉を聞く前に変身したコウモリを持った為、

「重ーーーーッ」

重量感たっぷりで一気に両腕と腰が下がってしまった。

「アハハハハ… え…遠慮するよ」

モカがコウモリを返し心愛の頭の上に乗せてあげた。

「えええええ！なんで!?!」

自信満々だったのにまさかの返品に驚いた心愛は声を上げて聞いた。

「こいつは私より怪力のお前向きだし、何よりもうすっかりお前に懐いているじゃないか。」

心愛の頭の上に乗せたコウモリはよほどその場所が気に入ったのか
動こうとしなかった。

そして撃沈者は2名になった・・・

「ん〜 じゃあ私のは気に入ってくれるかな?？」

そして三番手 亜愛はドレスをプレゼントした。

「……………！ 真紅のドレス…！」

それはモカの可愛らしさにピッタリのドレスだった。

「バンバイア私達は10歳ごろからぐんぐん妖力が伸びて大人の仲間入りをし
ていくの。それにあわせて服も色っぱいの着なきゃね！」

亜愛は顔を赤面させながら「あいや〜」っと想像以上の可愛らしい
モカに見とれていた。

そして心愛は 鼻血を出した！ シスコンだな…かなりのW

「クワイ可愛 とってもよく似合うよ！モカ」

満面の笑みでモカに微笑みかけた。

モカは感慨きわまったのか…目に涙を浮べ

「アクア姉さん…みんな… ありがとう… とっても嬉しいよ
本当に…ありがとう」

会場からは拍手が沸き起こった。

おそらくモカは今まさに最高の幸福感で満ちているだろう…

しかし… それは その幸福感は音をたてて崩れていくのだった。

第43話 Happy Birthday(後書き)

ありがとうございました!!

本当に幸せそうなシーンですww

見た事無い人は一回見てくださいね!オススメです

第44話 運命は動き出した

ジャック side

ジャックが朱染城の傍まで着いたのはモカの誕生日の翌日だった。

（確か 歪みが無いのなら、今日の朝… アカーシャと亜愛が…）

今の時間じゃ戦いを止めに行くのは時間的に間に合わない…

彼女達が戦うのは 避けられないだろう…

世界はどこまで歪んだのかまでは分からない…少なくともアルカードの力は健在のはずだ。

せめてモカの誕生日は把握しておくべきだったと後悔していた。

（後悔してても仕方ないか… やれる事をやる…だけだ！）

アカーシャだけじゃなく、モカもやられる… そんな最悪の未来を回避するために…

まだ 少し離れている朱染城へジャックは全力で向かった。

（朱染城）

「後悔してないの？アカーシャさん。モ力をここから追い出した事…」

広い朱染城にいるのはたった2人だけ…

アカーシャと亜愛だけだった。

「おおかた…私の「正体」を知って避難させたんだと思うけど…正直意外だったもの。あなた達親子は何があっても離れないと思ってたから…」

「いつも一緒…当然のように支えあって、誰よりも深い絆でつながっているようだった…ずっと羨ましかった…」

亜愛は少し悲しそうでそれでいて羨ましそうな表情をしてつぶやいた。

「モカはね…すごい難産で…生まれた時には殆ど死んでいたの…」

じつと窓から外を見ていたアカーシャが口を開いた。

「死んでいた…？」

話が見えなくなりアカーシャに聞きなおした。

「そう… その時 初めて神様に祈ったわ…そしてあの人も…
「モ力を護って…私はどうなってもいいから…この子だけは助けて
ください」って…」

あの人??

亜愛は口を挟もうとしたが躊躇った。

「その想いは今も何一つ変わってないわ」

優しい笑顔でアカーシャは言い切った。

亜愛はゆっくり目を瞑りながら…

「…私も大好き… モ力の事、一緒にいるだけで不思議とあったか
い気持ちに慣れる。」

「あなたには特に懐いていたものね」

アカーシャは笑いかけながら話した。

「是是^{シーシー} 性格は正反対なのに逆にそれが相性ピッタリです」

つられて亜愛も笑いながら答えた。

「…だから感謝しているの あの子を館から避難させてくれて。本
当はもっと早くに行動するつもりだった… でも、モ力の事を考え
るとどうしても二の足を踏んでしまって 気付けば一年以上が過ぎ
ていたわ…」

亜愛はアカーシャにゆっくり近づきながら… 表情を一気に変えた…

「だ… だってあなたが死んだら… モ力は酷く悲しむでしょう？」

はたから見れば… 悲しそうな表情に見えるのだが… その顔は酷く冷徹な顔にも見えた。

「私には目的がある それはかつて最強と呼ばれたアルカードのよう
うに「真祖」の力を得ること… だから血が必要な アルカード
を倒して三大冥王と呼ばれたあなたの… 「真祖」の血が！」

アカーシャは決して笑顔を崩さず。

「それで… 真祖になってどうするの？ アルカードのように自分を
苦しめた人間達の世界を滅ぼすつもり？」

亜愛は少し表情を崩した。

「… いいのよ 遠慮しないで、私は逃げも隠れもしないし、今日こ
の棟に誰も近付かない様言ってる… 邪魔は入らない」

「… 謝^シ謝^エ恩^エに^エきるよアカーシャさん」

アカーシャは笑顔のまま

「 亜愛… 人間を苦しめるのだけはダメ… あの人が命を捨ようとして
まで護った存在だから… それだけは分かってもらおう… か
かってらっしゃい… あなたが抱えている想い私が全部受け止めてあ
げる… 」

2人は臨戦態勢に入った。

第44話 運命は動き出した(後書き)

ありがとうございます！

始まってしまいましたね…

避けられない事って あるんですねw
オリ主！ガンバレ！！

第45話 アカーシャvs亜愛 …そして甦る魔(前書き)

ほぼ原作引用です。。。

ん〜 難しいw

よろしくお願いします！

第45話 アカーシャVS亜愛 …そして甦る魔

〈アカーシャVS亜愛〉

アカーシャは妖力を抑えている上、相手は義理の娘…相手が悪すぎる。

アカーシャは亜愛の崩月次元刀を防ぎきれず

幾らか食らってしまった傷を負っていた。

明らかに本気を出していないアカーシャに苛立ちを感じた亜愛は

「ん〜 どうしたの？私の事受け止めてくれるんでしょ？私が欲しいあなたの「力」…こんなものじゃないはずよ。真祖とは星のように気高い存在… その強さは普通の吸血鬼バンパイアを遥かに凌ぎ、強大な妖気は漆黒の闇よりも深く…そして美しいのだという…」

アカーシャの血の付いた血を振り払い近付いていった。

「そろそろ見せてよ アカーシャさん。伝説にまでなった真祖あなたの實力ちを」

アカーシャは黙って聞いていた。

表情は決して変えず…

「ふふ… 確かに強いよね。でも あなたこそまだ遠慮しているんじゃないの？この程度じゃ 私にダメージは与えられないわよ…」

シューウウウ ジュオオオオオオ

次元刀で付いた傷が…

「……………！ 何…！」

(傷が… 治癒していく…！)

「あなたは自分が思っている程 冷徹な娘じゃないわ。たとえ血が繋がって無くても「母親」の私にはよく分かる…」

全ての傷がふさがり… 初めて表情を崩した…悲しい顔に…

「つらいならやめたっていいのよ亜愛…」

！！！

生涯孤独ですごし母の愛などとは無縁ですごしてきた亜愛は顔を赤くしながらも激情した

「……………ッ！何をッ…！」

切りかかろうとしたその時…

「やめてええ…！」

館に戻ってきたモカが叫んだ。

「どうなってるのこれ……… 何でお母さんが血まみれなの？ ひどいよ！アクア姉さん お母さんを傷つけないでえ」

モカは叫ぶと同時に駆け出した。

「モカっ どうして戻ったの！？来ちゃダメっ！」

近付いてくるモカに初めて動揺したアカーシャが叫んだ。

「…モカ………」

亜愛はモカを見つめた。

モカが亜愛を見る目はいつもの温かい目じゃない…

怒りの目… 亜愛が見た事が無い目…そして表情だった。

（ああ… そうか、アカーシャさんの言う通りだね… 私はまだ躊躇ってたんだ… あなたを悲しませる事 あなたに憎まれる事… おかしいなあ、出会ったときからいつかはこうなるって分かってたのに… わかってたのに…）

亜愛は目を瞑り上を見上げ… その次の瞬間ッ

「危ない母さん………ッ!!」

次元刀… アカーシャの体は1つから2つに分かれた、

鮮血が舞い飛ぶ…

亜愛は敵を見る鋭い目で…

「…………… お世話になりました」

アカーシャにこれまでの…そして今の対話たたかいに対して礼をいった。

「お母さんーッ！ーッ！」

倒れた母に駆け出そうとしたとき…

「来ないでモカ… 見ない方がいい…」

亜愛が立ちふさがった。

「どうして…………… どうして……………」

モカは目を白くし… 涙を流しながら体を振るわせた。

「ごめんね…………… モカ… これが本当の私…………… 昨日館の地下で見せたでしょ？今も眠り続けるアルカードの姿を… 人間を憎み… 世界を憎み… その全てを破壊する事で運命に抗おうとした孤高なるバンパイア……………」

アカーシャの返り血を舐めモカを見つめた。

その表情は悪魔のような目つきをしていた…

そう1年前館の外で惨殺した中国の妖しを見るような目を… そして一筋の涙を流し答えた。

「私はその遺志を継ぐアルカードの血族なの……」

モカはその目を見て俯き…呟いた。

『……………け……』

よく聞えなかった為、亜愛はモカの方を見直した。

その次の瞬間ッ

「どけええええー……………」

ゴッ！！！！

中国拳法をベースとし向上させてきた亜愛が回避できないほどのスピードと重さの蹴りが

亜愛の左側面頭に直撃した。

「がふ……」

ボキンッ バキバキッ

ドカアアアアア！！

辛うじて防御は出来たが、防御した左手・首の骨が折れた。

そしてそのまま吹き飛ばされた。

「う うう う うわあああああああ……！」

モカが泣き叫ぶと同時に

モカは凄まじい妖気で包まれた。

「なっ…… こ……これはっ……」

(凄まじい妖気……まるで漆黒の闇があふれ出てくるような……)

「ま……まさか あなたが……」

亜愛は自分の目が信じられなかった…… なぜならそれはアカーシャにあるはずなのだから……

(真祖……！ そんな……どうして？真祖の力は遺伝しないはずじゃ……)

亜愛が混乱していたその時

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ
ズ
ズ
ンッ

朱染城が大きく揺れた……

運命の歯車は回りだしたのだ……

第45話 アカーシャvs亜愛 …そして甦る魔（後書き）

ありがとうございました！

最近すつごく暑いです… 熱中症気味ですー！

仕事休みたいー！

愚痴失礼しました…w

第46話 封印の儀（前書き）

今回も原作引用です…その上長いですwなんかそればっかな様な気がします… ううーむ

原作の話に無理やりジャックを入れてみましたw

違和感があるかもです〜

第46話 封印の儀

ジャック side

『ッ!!!あれは!!!』

後数秒で館に到着できる距離にまで来ていたジャックが目にしたのは…

館を覆いつくす 巨大な無数の触手だった…

忘れるはずが無い…あの姿を…

『アッ…アルカード…遅かったか…』

館を次々と壊していくアルカードを見てそう呟いたがすぐ気持ちを
入れ替えた。

『アカーシャ!モカ!みんな 待っている!!!』

side out

御子神 side

「ちっ…奴の様子がおかしいのと、引き取るはずの娘が来ないから嫌な予感はしていたが…まさかこのような事に成っているとはな…」

歯軋りしながら朱染城を取り込む触手を睨み付けた。

「り…理事長…」

運転していた神父も冷や汗をかきながら車を走らせた。

御子神は声を荒げながら

「急げ…！ あれは決して眠りから覚ましてはならぬものだ…あれが再び目覚めれば世界が滅びるぞ…！！」

神父に檄を飛ばした。

く朱染城く

モカはアルカードにつかまり捕らわれていた。

『モカあ…！！』

それを見た亜愛は助けに行こうとするが…

ボコオオオツ

背後より現れた触手に捕まってしまふ。

「あッ」

ガブウツ

その触手の1つ1つには口が付いており、その1つが亜愛の首元に噛み付いた。

「し…しまっ…」

モカと同じように捕らわれる事を覚悟したその時。

スパアアアツ

亜愛に纏わりついてた触手が2つに分かれた。

「…き 気をつけて亜愛 この触手に捕まると血も肉もアルカードに吸収されちゃうわよ…」

亜愛が振り向いたその先には…

「200年の眠りであいつは腹を空かせている 下手に妖気を発すれば「餌」だと思われて… モカのように狙われちゃうわ」

またもや自分の目を疑った… そこには…

「…！嘘… あ…あなたはこの手で真っ二つにしたはずじゃ…
アカーシャさん！」

アカーシャが立っていたのだ。

「生憎丈夫な体でね… 真つ二つくらいじゃ私は殺せないわよ」

亜愛は臨戦態勢をとろつとした。

しかし

「ごめんね亜愛… さっきはあなたのことちゃんと受け止めてあげられなくて」

一瞬で自分の間合いに深く入られた為 亜愛は身を硬くした。

「…本当はもつと力になりたかったけど、このままじゃモカがアルカードに吸収されてしまう… あなただってそれは望んでないでしょ？」

亜愛に語りかけた。

亜愛は一瞬考えたが… 臨戦態勢を解き手を下ろした。

「じゃあ これからの事… 今のうちにあなたにお願いしておくわね」

アカーシャは亜愛の耳元で何かを呟いた。

「な…何よそれ… どういう事！？ それじゃ あなたはどうなるの！？ それにモカは…」

取り乱しながら叫んだ。

「私も…これだけはやりたくなかったけど 仕方ないの… 魔力を助けるには他に方法が無いの… お願いしてもいいわね？ あなたは立派な「お姉さん」なんだから…」

亜愛を見つめ答えた。

「…お…おカー…さん……？」

意識が朦朧としながらも無事な母を見て涙を流した。

「待つてなさいモカ… 私がすぐにそこから助けてあげる」

アカーシャが2000年ぶりに自信の妖力を解放した。

『私じゃ無く…私達が…だろ？アカーシャ…』

「!!!？」

突然声がした…懐かしい声だ… その方を向くと

『遅くなった。アカーシャ 悪い…』

軽く謝罪をした。

「ふふ、そうね…でも以前ほどじゃないわよ？」

『ふふ、まあな。再開を懐かしむのは後回しにしたほうがよさそう

だ… 周囲の触手は俺と亜愛がやる。アカーシャはモカを助け出せ。いいな亜愛!』

後ろにいた亜愛に言った。

「ええわかった。」

突然現れた男に驚きながらも、ジャックと確認しすぐ臨戦態勢に入った。

「たのんだわ。ジャック。」

アカーシャはモカがいる方に向かった。

『モカを返してもらおうよ!』

亜愛が飛び出した。

『崩月次元刀!』

スパアアッ

無数の触手を切り裂いた。

『だめだ! 亜愛! こいつらは切っただけではとめられない!』

切り裂いた触手が瞬時に元に戻り亜愛に向かってきた。

ドゴオオオオ！

間一髪、亜愛を抱えて回避する事ができた。

『こいつらを止めるには…こいつが一番なんだ。』
『雷の力』

『ロギア
自然系』』

左右の手を合わせ巨大な雷の槍をつくる。

『らいじんそつ
雷神槍』』

バリバリバリッ　ズガアアアッ

ギエエエエエエ

巨大な雷の槍はあたりの触手を雷撃をもって蹂躪していく…

『俺の親愛な人達に…又、手を出そうってのか？アルカード…』

睨み付けながら言う。

『…させねえよ！凶に乗るな！！』

（凄い…次元刀が効かなかった触手が…粉々になって再生も出来て
ない…）

「あ　あなた　やっぱり、冥王の1人のジャック・ブロウ？」

亜愛は思わず口に出し聞いた。

『隠す意味はもう無いな…その通りだ。亜愛いいか。この辺りの触手は粗方やった。暫くは復活しない。復活しても決して捕らわれなようにしろ！俺はアカーシャの方へいつてくる』

亜愛を地面まで下ろし、伝えた。

「まって！私も…」

最後まで言う前にジャックは人差し指を亜愛の口元に付けた。

『亜愛…お前はアカーシャと約束があるだろ…』

亜愛を見つめて答えた。

「そ　それは…」

俯きながら答えた。

『亜愛：アカーシャが言うように君は立派な姉だ…目的はあったかもしれないが、この1年はお前にとって宝のはずだ…モ力を頼んだ。』

そう言うときアカーシャの方へ向かった。

「ジャック…」

暫く亜愛はジャックが向かった方を見つめていた。

アカーシャは迫りくる触手を蹴りで次々破碎していった。

(数が多すぎる！)

無数の触手のせいでモカに近付ずにいた。

「いや…お母さんッ…」

アルカードがモカの拘束を強めながらゆっくりと後退していった。

(まずい…アルカードがモカを連れて逃げてしまっっ…)

「させるかッ」

触手を無視し　モカのほうへ飛び出した。

その時

アルカードの腕から無数の針のような触手が飛び出してきた。

(くっ　こんなの相手にしてたら間に合わない…)

アカーシャは連れ去られていくモカをみて覚悟をきめた。

『そんな覚悟はしなくていい！』

すぐ後ろまで来ていたジャックがアカーシャを掴んだ。

「ジャックッ！！」

アカーシャを触手から庇った。

無数の針の触手の前で仁王立ちする… そう…あの時のアカーシャの様に…

ドドドドドドドドドド

無数の針がジャックの体を貫いた。

「ジャック!!」

アカーシャは叫んだ。

『アカーシャ!!』

ジャックはこっちを向き止まろうとしたアカーシャに怒鳴った。

『来るな! …行けッ!』

『…うん』

アカーシャはモカの前に行き ロザリオを首に架け封印の儀を行った。

第46話 封印の儀（後書き）

ありがとうございました！

第47話 さらば…愛しき人達よ

ジャック side

ジャックはあのアルカードが出した無数の針は単なるの針ではないと瞬時に理解した。

形状が異形だった為だ

針のように鋭いのに凝視すると肉眼で確認するのが難しい程の穴が開いている…

突き刺し…妖気を…あらゆる力を吸収する針だと確信した。

ならばいかに不死のアカーシャでも妖気ちからと血を同時に吸われたら…動けなくなる…

そうなればモ力を…モ力を助けられない…

未来は変えられない… アカーシャの運命は変えられない…

むしろ俺が来たことによって、アルカードの力が有り得ないほど強大になっている。

そう… 全て（原作）を壊すかの如く…

200年間も眠らされていたというのにこの妖力ちからだ…

アルカードの力は俺が背負う…

そう思いアカーシャを逃がしたのだ。

せめて…モカだけでも助かるようにと…

『また… 約束を破りそうだな… モカ達と遊んでやるって言ったのにな… 燦との約束も… みんな… ごめん… な…』

封印の儀を行うアカーシャ… そしてアルカードに喰われるアカーシャ… 全てを見とどけた後…

ジャックは意識を失い

…そして アルカードに取り込まれていった。

ジャック side out

陽海学園 side

「はあい！燦ちゃんこの記事ヨロシクね！高校生になったら絶対新聞部に入ってね」

そう言いながら 猫目先生は学園新聞の作り方を燦に教えていた。

>うん！がんばるね！<

笑顔で作業をしていると…

パキヤアアアン！！

首に下げていた御子神理事長からもらったジャックの入学祝の宝石が粉々に砕け散った。

(！！お お父さん…に貰った石が…！！？)

それが意味するのは分からなかったが不安感は拭えず

「さ…燦ちゃん？？どうしたの」

燦は涙を流していた……

自分でも涙は止められなかった…

嫌な予感が燦を襲っていた…

第47話 さらば…愛しき人達よ（後書き）

2回も死ぬなよ！

自分で作つといて突っ込んでしまいました…

じつは学生編に飛ぶ伏線です。

そろそろ小説のストックが無くなって来ましたので…
更新が遅くなるかもです…

付き合ってくれてる方々…

本当にありがとうございます！！

見てくれている方々に質問です！…一気に投稿してるのはどうですかね？？

毎日1話ずつ…とかの方が良いですかね？？

不規則な仕事のため…出せるとき（元気な時！）にバーンと一気に
出してるのですが…

意見があれば聞かせてもらえませんか？？

ヨロシクですw

第48話 切なる願い

アルカード体内

アカーシャ side

自分自身がどうなっているのかも分からない…

身動きが取れない…

まるで漆黒の闇に捕らわれているような感覚だったが…

アカーシャは安堵していた。

そして体内から封印処理を施したアカーシャは、

後はモカの幸せ…そして庇ってくれたジャックの幸せを願うだけだった。

しかし…

アルカードの体内で…彼女はジャックを見た。

無数の針に刺されまるで磔拷問を受けてるかのような彼を…

(な…なぜ？ 彼は…彼の力なら無傷ですんだはずなのに…)

ロギア
自然系の能力については一通り理解をしていた。

物理的な攻撃は無効のはずなのに…

（どうして！　なんで貴方まで…　あの時はあなたが護ってくれた…だから今回は絶対私が護るって誓っていたのに…）

「ジャックーーーーー！」

呼びかけてもピクリとも動かない…

そして徐々にアルカードに吸収されていくように無くなっていった。

（わ　わたしは　なんて無力なの？　仲間1人助けられないなんて…
ただ見ているだけしかできないの…？）

絶望…

その二文字が頭の中にくるぐる回った…

彼と娘達の幸せ…　それが願いだっただのに…

「やれやれ…君、又無茶をして…　はあ…なんでここまで自己犠牲神を出しまくってくるかな？こいつは…まったく…前世でもこんな感じだったのかな？？」

アカーシャは確かに見た…

アルカードの体内なのに…白く輝く女性を…

(誰!!)

声はもう出せなかったが、必死に出そうとしたら…

「あれ??君私のこと見えるの?」

こちらに気付いた人?が話しかけた。

(貴女は誰?)

頭の中で会話した。

「君マジで見えてるんだね… おかしいな?この世界で私のことが
彼以外に見えるなんて…なんでだろ?これも歪みが生じたせいかな
?」

(何を言ってるの?)

又頭の中で話した。

「見えてるんなら、いつか全て教えちゃおっかな…」

女神 シェリアはこれまでの事を全て話した。(簡潔に)

話した内容は…

ジャックはこの世界の住人ではない事…

そして、彼の思い…

そして、彼と同じ世界から来た私なら彼を助ける事が出来るということ…

(漫画の世界なんていつたらこんがらがりそうだしこれでいいか！見えちゃうのマジでおかしいんだけどな… まあいつか。見えちゃったのは仕方ないし…)

一通り説明し普通は眉唾で簡単に信じないと思うのだが アカーシヤは信じた。

(彼を助けられるのなら神にでも悪魔にでも祈る)

アカーシヤはそんな風に考えていた。

「いや、私神でも悪魔でもなく…まっ いつか。それよりほんとに貴女を助けなくていいの？普通はこの世界に関与していいのは彼(この世界に転生させた本人から)だけだけど、君にも私の姿見えてるし助けられると思うよ？」

(私がここを出たらこいつを解き放つ事になるから…)

そう アルカードに取り込まれた目的は内部より封印するためだ。

ここから出てしまえば再び蘇ってしまう…

「やれやれ…君も彼に負けずと劣らずのおひとよしだね。」

女神は笑っているようだった。

（1つお願いいいですか？私を助けなくていいのでその代わりのお願いを…）

「んー！何でも言っつて叶えられる事ならしてあげるよ。」

女神は笑いかけた。

（彼の…ジャックの記憶を…消してもらえないかしら…？）

予想外の願いに女神は驚いた。

「その理由は？」

読心術を使うのも忘れ問いだした。

（彼の事…知ってるわよね…？彼がここから出れたとしても私のことを覚えてる限り絶対無茶して助けようとするから…もうこれ以上見たくないの…！彼が苦しむ姿を… お…お願い…！）

それは心からの願いだった…

シエリアはここまで澄んだ心を見たのは初めてだった。

「わかった… 本当によいのね？彼は貴女を本当に大切に思っているのよ？そんな彼から記憶なんか消してもいいの…？」

（…ええ お願いします… 彼を…）

意思は固いようだった。

「もう言わないわ、あなたの意志の強さ見ちゃったから…でも1つだけ断っておくけど完全な記憶の消去は無理だからね。記憶の綻びは必ず残ってるから 全てを思い出す可能性もあるって事だけは覚えといてね…」

シエリアはアカーシャに言った。

（わかったわ… もう…意識が…持ち…そうにない… どう…か彼…を…）

そして アカーシャは意識を失いアルカードの体内奥深くへゆつくり沈んでいった…

「あなたの命がけのメッセージ… 確かに受けとったよ… 彼が惚れるのも分かる気がするわ… 約束は守らないと…ね 彼が聞いたらすごい怒りそうだけど…それもすごい剣幕で… でも、こっちの願いも相当…重いから…」

そうシエリアは呟き ジャックを救い出し…アルカード体内から脱出した。

第48話 切なる願い（後書き）

ありがとうございました！！

第49話 心に開いた穴（前書き）

暑い… 暑いですね…

マジで！

熱中症気味です…

みなさんは気をつけてくださいね！

第49話 心に開いた穴

???? side

ここは…どこなんだろう…

俺は…何をしてるんだろう…

男はまるで空中に浮いているような感覚捕らわれながら。

そんな事を考えていた。

『確か… 俺1度死んで…二次元の世界に飛ばされて…』

そこからの記憶がハッキリしない…

まるで… 心を黒く塗りつぶされ、ポツカリ穴が開いているような
感覚に襲われていた。

『……夢だったのか…? でもまったく思い出せない…… 思い出
せない… 大切なことがあったような…』

護りたい、という強い気持ちは顕在していたが…

『護りたい…? 誰を?』

side out

女神 side

自問自答している男を見ている者がいた。

(あっちゃあ… 記憶消しても想いまでは消えないんだっ…この分じゃすぐに思い出してしまつかも…)

記憶を消し…この世界へ男を誘った張本人…

女神・シエリアだった。

(…あの娘との約束を簡単に破るわけにはいかないからね。…よし！)

シエリアは何かを思いついたのか、男に向かって飛んでいった。

side out

「やっほー！」

背後から突然声が聞えた為驚いて振り向くと…

『あ！貴女は…確か俺が死んだときに会った…』

女性の姿を見て思い出した。

『そういえば俺…貴女に転生してもらって、そこから確か…』

女性の顔を見ながらなにやら思い出すように話し出したが…

「いやーごめんね！！私の手違いで、ロザバンの世界に送れなくて…
別次元に送っちゃって…君ずっと亜空間を彷徨ってたんだよ
！！（嘘）」

なーんかぎこちない笑顔で説明を受けた。

『へ？そうなんですか？でも…今まで何かあったような…思
い出せない夢を見ていたような…』

説明を受けても違和感を取り除けない…

その様子を見ていたシエリアが。

「まあ 私の手違いだったんだから深く考えないでよ！ それより、
今度は間違いなく送ったげるよ！準備は良い？」

勢いで…話を折られたような気がしたが…

『まあ いかーじゃさ、前にも言ったけど 三大冥王と…』

つと言おうとしたけど…

「ああー ごめんそれ！！ その時代には送れないんだ！以前

アナタに言われてその時代に飛ばしたんだけど… さっき言ったとおり手違いで亜空間に送っちゃって… その間にその時代の話終わっちゃたんだ！送ろうと思えば遅れないことも無いけど… かなり時間が掛かっちゃうよ？」

（苦しいけど… 何とか言えたかな？？）

何とか今までの事を忘れた上で、あの世界じだいに帰って欲しいと思っているシエリアは即興の作り話を作った。

『あ… そーなんですか… 女神様でも結構できない事ってあるんですね…』

残念そうにため息を吐いた。

「（… 腹立つけど 我慢我慢…）そーなんだよー ごめんね！経験不足でさ。時間的に送れるのはそうだね… 一番手っ取り早いのは… やっぱりシーズン？からかな？？に行きたいって言ってたけど、早くて正確に送るのならそれがベストだよ！」

（ん… 冥王と顔なじみになるのが結構楽しみだったんだけどね… まあしょうがないか… また変な空間に行くくらいなら。）

『そうそう！変な空間にこちらとしても行ってほしくないんだよ！後処理大変だし！』

…この女神人こひつの考え読むの忘れてたな…

『はいはい… 分かりました。じゃあ？でお願いしますよ！』

ツッコミを入れず 早々に決めた。

「おっけー！んじゃ！いーってらっしやーい！..！」

（なんだ！..！空に吸い込まれる！..！あれこんなの前にもあったよーな...）

『って、うっわあああああー.....』

.....

「ふうー とりあえずこれでいっか！後は彼が楽しくあの世界で暮らせれば！これで記憶がもどっちゃったら...ま、仕方ないって事で！...とりあえず、あんたとの約束ちゃんと護ったからね...これで正しかったのかどうかは分かんないけどさ！」

そう言いながら、

シエリアは 姿を消した。

第49話 心に開いた穴（後書き）

ありがとうございました！

記憶が無いってどんな感じなんでしょうかね？
やっぱり 分からない事は表現しにくいですねw

駄文！失礼しました！

第50話 学園生活へ(前書き)

いよいよ！原作突入！学園ドタバタ ポコポコ ラブ？コメディ（
飯）へ突入です！
よろしくお願いします！

50話までくるって思ってませんでした…苦笑
大した話・文じゃありませんが 付き合っていたいただきありがとうございます！
ざいます！

第50話 学園生活へ

ひゅ〜〜どぢゅっ

『いててて・・・ん？こじは・・・』

(んんん！この感覚…前にも何回があったよつな… ああもう！
やっぱしわからん！)

心に霽が出来ているようでかなり不満だった。

いろいろ 考え事をしていると…

「ケケケ… 今年は…生徒が増えそうだなあ… 主よ…感謝します
ぜ アーメン…」

すこーし妖しい〜コワ〜い感じの神父？が目の前を横切りなにやら
落とし物をした。

『おー！これって…』

その落とし物は、陽海学園への入学に関するチラシだった。

『おお！やっぱりそうだった！… 冷静に見るとすごいな… こ

れこんな簡単に入学できるなんて… 怪しさ抜群なのにこれで入っちゃった月音って結構なお惚け君だよな… あ その家族もかな？
(苦笑) よし！早速俺も入学しようっと！』

チラシを見て即効で入学を決めた。

〈陽海学園のバスの中〉

窓の外をぼーっと眺めている少年がいた。

「何もかも人並み… でも まさか高校受験に全部落っこちるなんてなあ…」

(んん… あゝ寝てた… …… って あれ月音じゃんか！)

バスに乗り学校に着くまでとりあえず寝ようと考え眠っていた間にもう1人…このバスに乗車していたのだった。

『やあ！』

「うわっ！…びっくりした！！」

いきなり 後ろから声が聞えた為 月音は驚き振り返った。

『君も陽海学園に入学するのかな？』

分かっていた事だが、話の都合上そう問い出した。

「ああ、はい。そうですか？」

『やっぱりそっか。実は俺もなんだ。よろしく頼むよ。』

「こちらこそ。（何か感じのいい人でよかった…結構不安だったし…）あ、俺は青野月音です。よろしく」

『ああ、俺も自己紹介しないとな。俺の名前は御剣怪斗（テキトーです）って言うんだヨロシク。』

俺達は 互いに自己紹介をした。

自己紹介の後世間話をしていると…

「…あんた達…話を聞く限りじゃ陽海学園に入学する生徒さんだね？」

バスの運転手が話しかけてきた。

「あ はい。」 『ん。そうだよ。』

返事をする…

「ヒヒ だったら覚悟しておく事だ…ヒヒヒ この長いトンネルを抜けるとすぐ学校だ」

「はああー!」「ほづ。』

不気味な声、雰囲気は驚く月音とその月音を見て楽しむ俺！（笑）

「ヒヒヒ…陽海学園は恐ろしい学校だぞ〜〜〜!」

「ええええええ!」

月音の驚く声… そつ奇々怪々な学園生活(もちろん月音にとって)
が今始まったのだった。

(さ!楽しもう!)

第50話 学園生活へ(後書き)

ありがとうございました!!

第51話 記憶の片鱗（前書き）

はあ、仕事しんどいです…

お気に入りに登録してくれた方々！すみませんおそくなりましたあ！
ヨロシクです。

第51話 記憶の片鱗

そして…

長いトンネルを抜け、殆ど別世界といっても過言じゃない陽海学園のバス停に着いた。

「ヒヒ…着いたぞ 少年達… 気をつけてな…」

『ああ!どうもありがとう。』

俺は運転手に礼を言った。月音は放心状態になっていた。

(そりゃそうか… こんなおどろおどろしい場所じゃな)

楽しみながら見ていたが やっぱかわいそうかな?と同情をした。

ほんの少しね (笑)

「…ちよつといいかな?少年…」

閉まったバスのドアが再び開き運転手が話しかけてきた。

『ん??何かな?』

話しかけてくるのが意外だったが… 聞き返した。

「いや 君の雰囲気が私の知る友人に似ててね… 君、ジャック

って言う男を知らないかな？ 赤みの掛かった茶髪に真紅の瞳の男
なんだが…」

運転手は、いつもの（原作）雰囲気じゃなく真剣に聞いてきた。

『ジャック…?? んゝ 知りませんね。』

この世界に着たばかりだし知ってるはずも無い事だ。

「そうかい…悪かったな、引き止めて… ヒビヒ…じゃあ頑張ってくれ…」

『いや 別にいいですよ。ではまた』

ズキツ…

突然頭痛がはしる…

(…っ！何だ…)

頭痛はすぐに治まったが…

妙な違和感が頭の隅に残った。

『…ジャック?』

聞いた事ないことは無い… 外国の映画の主役ではこの名前の人物が多いし…

(なんだろ… この感じ…)

考えていても答えは出なかった。

(とりあえず 月音のところに戻るか…)

月音の方へと歩き出した。

第51話 記憶の片鱗（後書き）

御剣怪斗君。

髪色 生前の色と同じ黒。

顔立ち 整った顔をしている。（ご想像してくださいw）

目 普段は真っ黒w バトルする時は赤くなる模様…

性格・身長は 以前のプロフのままw

ありがとうございました！！

第52話 赤夜萌香と青野月音 With 怪斗(前書き)

よろしくお願ひします！

第52話 赤夜萌香と青野月音 With 怪斗

頭痛も治まり…

月音の方へ行くと…月音と誰かが倒れていた。

(あれ？ 月音誰かというな…)

何やら 倒れているので近くまでいってみると…

(あ！モカだ！！さっそくの！そういえばここが初めて会う場所だったっけ？月音とモカが…)

それは、倒れたモカの太ももに手をあてがうと言っなんともつらやま…オホンツ セクハラな展開だった。

『へえ〜 月音もいきなりでやるな〜 初対面の美人にいきなりそんな事をするなんてな〜』

ニヤニヤしながら 2人に近付いていった。

「い いや、これは事故で…」

俺の言葉で自分がしたことを思い出したのか、

小さな声で「太もも触っちゃった〜」っと言いながら、鼻血を出した。

(やれやれ メチャ純情っていうのかな？ これで鼻血出すやつ初めてみたw)

月音リアクションの反応を見ながら楽しんでいると…

モカはいきなり正体を暴露！そして月音の血を吸っていた。

「うぎゃあああ 血いーー吸われたー！ー！！」

「ってバンパイアー… あの十字架とかにんにくが嫌いな！
??.」

いろいろ忙しいやつだ… まあ仕方ないといえば仕方ないか。

『月音。もちよい落ち着いて話せ。こんな美人相手に落ち着けんのはわかるが いくらなんでもやかましい。』

半分呆れ顔、半分にやけ顔で言った。

「でもーー 血吸われたんだよ！！」

パニックになっていた… 笑

「はい ぐちそうさまです あなたの血つてすくくくおいしいんですね！すくい…」

『はははは…』

笑いしか出てこないな… なんとお賑やかな

「あ！あなたも新入生ですか？はじめまして！私は赤夜萌香あかしやもかって言います！こうみえてもバンパイアなんです。あなたは月音の友達ですか？」

つと またまた正体を暴露した。

まあ…知ってるんだけどさ。

『あ！こちらこそ よろしく！ 俺の名前は御剣怪斗みつるぎかいとっていいです。後彼とは学園に来るバスの中で初めてあったからね。まあこれから…って感じかな？君と同じで。』

「そうですか。私も一人で不安だったんです… こんなわたしでよかつたら友達になつてください！」

『いいとも、こっちこそよろしくね！ …そろそろ落ち着いた？月音』

挨拶を済ませると、月音の方に向いた。

「あ ああ うん…大丈夫大丈夫…こっちこそあらためてよろしくね。モカさん、怪斗」

（バンパイアっていったい…でもって なんて怪斗はナチュラルに会話できてるのかな？）

不安でいっぱいだったが、（主に月音がw）とりあえず陽海学園へと向かった。

第52話 赤夜萌香と青野月音 With 怪斗(後書き)

ありがとうございました!!

第53話 陽海学園の正体（前書き）

よろしくお願いします!!

第53話 陽海学園の正体

「えーみなさん、ようこそ！陽海学園に！ 私はこのクラスの担任になった猫目静ねこのめしずかです」

入学式が終わり… 教室で説明を受けていた。

（良かったなー 同じクラスになれて、月音とモカの！）

別クラスになってしまったら、楽しみが減ってしまう… この偶然に感謝していると…

担任教師がこの学園の学ぶべき事・人間と妖怪について…一通り説明をしていた。

（あ！メチャクチャ動揺してるw 席後ろだからよく分かるんだよね〜）

担任の説明の時俺は 月音の方を見た。

案の定 体ごと左右に動いたり突然震えだしたり…

気持ちはわかる…

とても不謹慎だと思うけど…

（やばい…リアクション 反応がおもしろー！）

俺は声に出して笑いそうになるのを必死に抑えていた。

「センセエ〜 人間なんてみんな喰ってしまえばいいだろ 美女
なら襲えばいいし」

そこで生徒の1人が過激な発言をした。

たしか… 碎蔵？だっけ？はぐれの…

過激な発言だったが、

そこはやっぱり陽海学園！

「おおーーー カゲキーーー」

って盛り上がるばかり。

そう1人を除いて

月音 side

(ひひひひひひ)

頭の中が混乱！の文字がうるうるしていた。

(何だーーー!!!? 何だこれ)

月音はバスの運転手の言葉を思い出し、体を振るわせた。

その最中…

「この学園は結界の中にある学園ですからね！この存在を知った人間には死んでもらってます！なんつちゃって〜」

クラスが笑い声で包まれる…

（ひいひい オレ正体バレたら殺されるー！ 何でだ？？何で人間のオレがこんな学校に…？）

月音は親父に貰った妙な学園入学チラシを渡され、入学したの思
い出した。

初めはかなり不安で入学を拒否したが、

何せ全ての志望校に滑った親不孝息子…

全力で拒否するのはさらに親不孝者だろう…

そしてしぶしぶ入学したのだった…が…

（親父ー！ 確かに高校も入れないの親不孝だっと思ったけど
流石にこんなとこやっていけないよ！！ 早く…一刻も早くオレこ
こから逃げ出さないと…）

side out

怪斗 side

(いやはや 席教室の後ろの方でよかった!!)

ちよつと性格悪いかな?つと思いつつ、明らかに挙動不審な

月音の姿を楽しんでいたw

(まあ いきなりこんな学園とこにきたらこうなるのも無理ないか...
影ながら応援するぞ) 月音!

とか何とか考えていると...

遅れて入ってきた生徒がいた。

第53話 陽海学園の正体（後書き）

ありがとうございました！

第54話 モカとの再開（前書き）

よろしくおねがいます！

第54話 モカとの再開

モカだ。

「すみませんっ！入学式の後後者に迷ってしまって… 遅れました」

「あら大丈夫よ 空いてる席に座って まあかわいいーコ」

モカが入ってきたら教室は大騒ぎ！

「美しい！」「こんなことクラス同じになれて幸せ！」「変化にしてもあんなに美しくなれるやつなんていないぞ…」

なーんて会話の嵐…

(確かに改めて見ると綺麗な子だな…)

クラス中が盛り上がってるその時、

モカは月音を見つけると抱きついた！

この行動にクラスは大騒ぎ。

「やあ ご両人。今は一応授業中だよ。愛し合うのは学校が終わってで良いんじゃないか？」

抱きついているモカに皮肉を交えながら話しかけた。

「あ… カイト!! あなたも同じクラスだったの!? うれしい!!
2人ともいてくれて!!」

『おおつと!!』

月音の腕を組んだ状態で、怪斗の腕も空いたほうの腕で組んだ。

両手に花（男版）である。

（流石に恥ずかしいかな…）

月音、モカ、怪斗は改めて挨拶をし、それぞれ机に付いた。

HRも終わり…

3人は学校内を探検していた。

「すごいね!! この学園! 廊下とかも広い! 2人ともあっち見
てみようよ!!」

「う…うん そーだね」 『コラコラ…廊下は走らない。なんてな!』

「だって時間すごくもったいないし!!」

手を繋ぎながら足早に校内を移動していた。

（な… 何だコレ 夢だ今日はまるで夢の中にいるみたいだ… こ

んな幸せな思いできるなら 妖怪とかどーだっついていいかもーっ)

明らかにぎこちない対応を月音はしていた。

(やっぱし、オモシロイな月音w リアクション 反応が！ウブすぎ… ん…？オ
しも結構シャイなのは何で結構スムーズに会話してるのかな？？)

何か引つかかるものがあった。

まるで前にも会った事があるような…

(な わけないか…)

気のせいだろうと深く考えるのを止めた。

っと頭の中で考えていると、周囲が騒がしくなってきた。

「うわっ！！美しいッ」「あんな美少女見た事ねえぞ！！」「つつ
… つきあいてえ…！」

初めは のような会話だったが… 次第に怒気・殺気が混ざりなが
ら…

「両手の男は何だよコラ…」「知るか！どけよッ！！コラッ」「ど
かねええと殺すぞテメエ達」 「殺す…」

っ的な声が聞えてきそうだった。

当然の如く月音は悪寒を感じ、体を震わせていた。モ力には感じて
おらず「？」って顔をした。

オレはもちろんスルーw

「へえ〜 やっぱカワイイな〜」

前にいた男が話しかけてきた。

第54話 モカとの再開（後書き）

ありがとうございました！

第55話 困ったナンパ男（前書き）

よろしくお願いします。

第55話 困ったナンパ男

前に立った男はクラスメイトの・・・

「あんた赤夜萌香あかしやもかっていうんだってな オレ 同じクラスのこみやさい小宮碎ぞう蔵ぞう！よろしく！」

周囲の怒気・殺気がおさまり…ざわめき出した。

「ところで 何でアンタみたいな美人がこんな男達らと仲良くしてんだ？つりあわねえだろ？」

碎蔵は怪斗を突き飛ばし、月音の襟首を掴み持ち上げた。

「ぎゃっ！…！」「おっと…！」

怪斗が突き飛ばされた為、モカはバランスを崩し怪斗の手を離れた。

モカが倒れそうだった為、空いたほうの手で支えた。

「うわわっ！…！？」

月音はまったく手が出ず成すがままの状態になっていた。

(…いつ…さっきの…)

月音が碎蔵の事を思い出しているその時、碎蔵は乱暴に月音を叩き

下ろした。

「碎蔵だ！あいつあの小宮碎蔵だよ」「何でもタチの悪いはぐれ妖らしくて相当女好きで人間の女襲ったりしたらしい…」「人間社会あっちで問題起こしすぎてムリヤリこの学園にぶち込まれたらしい」

また周囲がざわめきだした

「こんなクズみてえな男どもよりオレの方がずっとマシっしょ？今から2人でどっか遊びに行かない？」

さらに一歩近寄り

「なあ？ちよっとつきあってよ」

「わ！」

顔を近づけてきた。

（モカさん月音を連れてここから離れて！俺が話しつけるから）

小声でモカに伝えた。

（でも…）

（いいからさ！ここ学校だよ！とって食いやしないでしょ？）

軽くウインクをして小声で話した。

モカは頷き

「ごめんなさい!」

つと言いながら月音の手を握り走って離れた。

月音はその行動に赤面w

(普通は男が女の手を引つ張って助けてあげるんだよ?? 月音君?)

その姿に苦笑しながら碎蔵の方に向いた。

「オレは…にがさねえぜ… お前みたいないい女…」

舌なめずりをしながら呟いていた。

『女はもっと丁寧に対うもんだぞ? 碎蔵君?』

ため息を吐きながらもっともな事を言った。

「へっ… うるせえよ。女にフラれた分際でエラーな事言っんじやねエ!」

イキリ立ってきた為…

『いやっ お前「ごめんなさい!」って 言われてんじゃん…
そう考えたら俺よりやばくね? 断りの定番だろ? ごめんなさいって
さあ…』

的外れな事を言われた為、さらにため息を吐き言い返した。 清清しいカウンターのようにw

「んあ！！ 何だと！？ テメエ！！」

この言葉で切れたのか、

手の形状を変え殴りかかってきた。

『よつと！』

その拳をサラツとかわし、

『俺は つまんないケンカはしたくないんでな。 じゃあな 連れを
待たしてるもんで』

「なんだ！逃げんのかコラア！！」

つと碎蔵が振り返った先には…

もう怪斗はいなかった。

「っけ…覚えてやがれ モカを手に入れた後はテメエを潰してやる
…」

悔しそうに碎蔵は廊下から姿を消した。

第55話 困ったナンパ男（後書き）

ありがとうございました！

モカさんは渡さないし、潰されませんね！
なんてw

第56話 あれ能力は？

怪斗 side

『さて… モカと月音はどこかな？』

怪斗は一通り学園内を散策していた。

『あ！そういえば、能力確認しないと… 展開が早くて確認できなかった…』 《ごめんなさーい！！》

(ん？何か聞えたような… まあいいか、)

いきなり校舎で技なんかぶっ放すと流石にまずいので屋上に移動する事にした。

side out

シエリア side

そんな怪斗を見ている女性がいた…

「ヤバ！！ 能力そのままにしてたら、流石に前の仲間達に正体ばれるかも… それで思い出したりしたら…」

たった数日で思い出されてしまったら…

流石に彼女に悪いわね…

見ていたのは女神シエリアだった。

「よし！」

何か思いついたのか、

怪斗の方へ向かった。

side out

怪斗 side

『さて… 能力確認確認！』

ん〜実際悪魔の力ってどうやってるのかわからんし…

(ん…… 何かそれらしき感じないな…)

思い浮かべても、何やら集中してみても何にも起こらなかった。

(確かに、体術は申し分ないね… 一瞬で動けたし… 確か縮地法？って言うのかな？ でも肝心の自然系は〜？)

考えても分からない為、とりあえず…

『この鉄パイプで自分をちょい どついで見るか！使えてるのなら無効のはずだし』

屋上に落ちていたいかにも不良が使いそうな鉄パイプを持ち…

『そりゃ!』

自分に向かって打ち下ろした。

スカーン!!

『いったーーーーー!!』

ある程度加減したとはいってもそこは鉄のパイプ!

おまけに頭に打ち下ろした為…

『痛い… クラクラする…』

フラフラしながら立ち上がった。

『何だよ… あの女神さんちゃんと付けてくれてないじゃん…!も
ー! 欠陥能力じゃんか!』

第56話 あれ能力は？（後書き）

ありがとうございました！！
能力が消えたー！！

ってか 消されたんですがねw
あの人に 笑

第57話 精霊魔導師（前書き）

なにやら

お気に入り数約400、

総合評価で1000も

付けてくれました。

駄文に付き合っていたきありがとうございます！！

本文ですーよろしく願いします！！

第57話 精霊魔導師

いろいろ騒いでいると...

「や...!」

いきなり 後ろから声が聞えた。

(...この展開は...)

後ろを振り返ってみると...

『やっぱり あなた 女神か!』

姿を確認すると声を上げて話した。というか叫んだ。

「いやー 君が私のこと噂してるんじゃないかなって、思ってちよっと降りて来ちゃった」

(絶対嘘だ...どっかで見てたんじゃないか?)

「あはは、まあ細かいことは無しにして... 本題に入るけど... ゴメン!」

いきなり笑顔から真剣な顔になり手を合掌させ謝罪をしていた。

『...何がですか?って聞こうと一瞬思いましたが、いいです。能力の件ですね?』

考えを全て読まれる為、何の事かは分かっていた。

彼女の考えの方はちつとも読めんに…

「私の考え簡単に読めると思ったら大間違いだよ！　なにせ女神様だし」

ちよつと前まで謝罪してたはずなのにあつという間にケロツつとした顔をしてた…

『はあ…　良いですよもう。　で？頼んだ筈の自然系ロギアの力は？最終的に俺って何が出来るんですかね？』

とりあえず、考えを読まれる為　思った事すぐに伝えた。

「えつとね…　ワン〇の自然系ロギアだけ…　やっぱし君はバグが起こる体質？なんだね…　もしくは私のせい？分かんないけど　所謂エラーが出て使えなくなってるの！。　ちゃんとインストールしたんだけどな〜　いやー不思議！」

話し方を見るとついさっきの謝罪の感じは綺麗さっぱり消えていたw

「まーまー　そう睨まないでよ！　てなわけで、君に新たな能力をあげる為に来たんだよ！」

その一言で怪斗はとりあえず嫌な顔を止めた。

『ホントですかー？もー貴女には何度いっばい食わされた事か…』

「あはは… ちょっと否定できないのがあれだけど、とりあえずこれをどつぞー!」

そう言つてシエリアは拳より少し小さい赤く光る宝石を差し出した。

『ん？何ですかソレ？ 俺男だから宝石もらつてもそこまで嬉しくないんだけど…』

金が欲しくないとわけてあげないが、生前は確かに欲しかった!!

何度宝くじに願つたか… (苦笑)

しかし…今は金では決して買えない事をしている為か、そこまで執着は無かつたのだつた。

「ちがうちがう! お金だつたら直接現金で渡すよ! その方が簡単だし こんなまどろっこしい真似しないつて。」

もつともらしい事を言つたのでとりあえず納得した。

『で？コレは??』

改めて聞きなおした。

「これはね^{エレメンタルトゥール}精霊魔石つていつて、とりあえず、君最初に魔道士つて言つて(考えて)たでしょ? これを体内に取り込んだら使えるよつになるよー!」

一通り説明を受けたが…

『じゃあさ… 自然系ロキアを使える石とかないの？その方が良いんだけどさ〜』

もっともだ。

元々の希望はそっちだったから、

何よりそんな昔（Prologue・・・死と旅立ち！より…）の事良く覚えてるよなこの女神ひと…

「記憶力はいい方だからね！んで自然系だけど… あれ結構大変なんだよ？パソコンに例えたら容量が異常に高いんだ… 何せ体の構造をまったく別物に変えるんだからね〜 初期段階でプログラミング成功してたら問題なかったけど〜 壊れちゃってるみたいだから… 一から書き直すとなるとメチャ時間がかかる… 希望通りに作っても今回みたいなケースもある訳だから、成功するかもわかんない… だからとりあえず〜コレ試してみてよ！」

ん…なんとなく分かったような…わからんような…

とりあえず自然系ロキアは、諦めると…

（チート使えない二次元転生つてな… まあコレも修行？って感じで考えとくか… 無い物は無いんだし。）

「そそ！無い物は仕方ないって！ってな訳で…早く使ってみてよ！」

『はいはい！分かりましたよ！』

又読まれてしまった…っと思しながら、宝石を体に身に着けてみる

と…

体に入ってしまった！通り抜けるように。

『いや！ちよつと！！入っちゃったよ？……………お！』

何やら体の奥から…

……………

……………

…

『何にも起こらんやんか！コラア！！！！』

期待したのに…

「あははは！いいよ！ナイスそのボケ！」

女神大うけ俺はボケ？

どうでもええわ！

「まあまあ落ち着いて！もう来てるはずだよ？」

『ん？あれ…？そういえば…』

頭の中で…呪文？見たいな文字が… それに図形が…

「分かった？君はこれから精霊魔導士！まあ早い話、今思い浮かんだ文字はご想像通り詠唱文だよ！それ唱えたら使えるって訳、んでまあその辺のRPGみたくレベルが必要！！っとかは無いから安心してね〜w」

(……これはこれで面白い力だな……)

「ありゃ？放心してるね〜 まあ気に入ってくれたならそれで良いよ！んじゃね〜」

そう言っただけで女神シェリアは消えた。

『……ってあれ？もういなくなっちゃった…… 一言礼言わせてくれても良いじゃん……』

そう言いながら自分の力を確認しつつ、教室へ戻った。

シェリア side

「……よかったあ〜 即興の作り話にしては良く出来たかな？？しかし疲れたね…… もうそろそろ業務外ってことで…… 眠いし…… まあ 後は何とかなるでしょ……」

大きな欠伸を1つ

シェリアはフラフラと飛びながら、

空へと消えていった。

s
i
d
e

o
u
t

第57話 精霊魔導師（後書き）

ありがとうございました！

精霊魔導師……

無敵な体じゃないけど、

そこはやっぱり主人公（笑）

強いと思います！

苦笑

ジャックさんよりは弱いと思いますが…

第58話 人間と妖（前書き）

よろしくお願いします！

第58話 人間と妖

それから…

月音とモカの3人で校舎内を探検した。

並び的には、モカ、月音、俺の順番。

（なんか…この2人初々しい感じがするから、横で見ているほうが楽しいんだよね）

そう感じながら、探検を続けていた。

「2人とも！あっちにいつてみようよ！！」

モカは、月音の手を握る。

「う…うん！」

まだ全然なれてない月音はメチャ動揺しながら返事をした。

（おい！もうちょっとナチュラルに返事してやれよ月音）

小声で耳打ちした。

（む…無理だよ！なんか幸せすぎて…目まいが…）

ダメだこりゃ

まだ時間がかなりかかるなあ〜って考えていると…

「ほら！カイトも！」

モカは空いたほうの手で怪斗の手を握った。

月音・モカ・怪斗の順番になった。

『はははは…』

やわらかくて小さな手だな…

……………

（なんだろ？やっぱり初めての感触じゃ無いみたいだ… 気のせい
か？うっーむ…）

そう感じながら、学園探検を再開した。

「見て！月音！カイト！ここがこれから生活する学生寮だっ！」

『ん？？』『寮…？』

モカが指差す方を見てみると…

『ほう…なかなか味のある校舎だな… ピッタリといった感じかな

『?』

吟味するように校舎を見ていた。

横で月音はプルプル震えていた(笑)

(ええ!!変わってない??怪斗!こんな不気味なとこだよ!!!)

(??? そうか?この学園にはピッタリって言う印象はあるけど
なかなか良いと思うぞ?)

(うそ!!!)

(ほらほら!こそこそ話してないで、モカが折角ふってきたんだ、
話せよ。)

男同士の秘密会議終了)

「ね…ねえモカさん、こ…こんなところで3年間も生活を…」

つとモカの方を見ると…

「すてき… 威厳と風格のある建物…」

うつとりと見とれていた…

『だよな…』

怪斗も同意し話をあわせた。

「えええ！モカさんも！？うそ！ 趣味変わってない！？」

まさかのモカの発言に驚きながら話すと…

「あれ？つくねってば、こういうの苦手なの？妖怪のくせに そういえば つくねとカイトは何の妖怪なの？」

（あ… 一気に血の気が引いたみたいに顔白くなってる！会心の一言だな）

つくねはそんな顔をしていた。

「え…いやそれは…」

ワザとらしい咳をしながら

（に…人間なんですけど…）

っと考えていた。

「あ… 正体バラスのって校則違反だっけ？ごめんね 今の質問ナシ！」

あはは…と笑いながらモカは話し…

つくねもあはは…と笑いながら話していたw

『まっ、今は授業中じゃないし…よく見ると周りは俺たちだけだし

…俺は別に良いよ言っても。モカさんも教えてくれたしね。つくねはねがすごい真面目そうだから言えないってのも分からは無いけどさ」

つくねは、カイトが正体をバラしてもいいと言った言葉でメチャ動揺して、

次の軽いフォローにはメチャ安心していた

「ホント？ありがと〜！！じゃ、つくねには又いつかおしえて貰うとしよっかな？」

モカは笑顔で話した。

『ん。俺はね、エレメンタル・マスター精霊魔導師だよ。』

校則違反2人目！正体カミングアウトをした。

「えええ！それって何かの本で見たことあったけど、確か存在だけは確認されているけど実態は分からないって言う種族だよな？一説には魔術師の祖先って言われているとか…」

モカは手を口に当てながら興奮したように話した。

「そ…そんなにすごいのか？」

バスで話したり、校舎で話したりした感じは普通の感じがしていた為、

つくねは、驚いたように話した。

「そうだよー つくね！すごいレアだよ！空想上の伝説の存在って言われてるんだよ？」

『はははは… 確かにそんな感じだけど。普通に話してね？正体とか抜きにしてさ！モカさんもバンパイアって西洋の大妖怪なんですよ？俺もお目にかかれて光栄！って感じだったよ。』

興奮しっぱなしのモカを落ち着かせるように話した。

「そんな事無いよ！私なんて！ でも…そうだよね！友達になっただし… えへへ そういうのは何かおかしいよね！ゴメン」

とりあえず落ち着いた為いつもの感じに戻った。

（2人とも… スツゴい存在なんだ…モカさんもこんなにかわいくてやさしいし…カイトは初対面の俺に対してやさしい学園唯一の男子だし… 本当に人間じゃないのか…）

つくねは放心しかけながらそう考えていた。

『つくねも俺のこと普通の友として扱ってくれるかな？』

第58話 人間と妖（後書き）

ありがとうございました！

第59話 胸元の十字架

ただいま放心中です！…って感じの…

そんなつくねを見ながら話した。

「え… あ、うん！もちろんだよ。……そんなに凄いつて思わなくて… ちょっと驚いたけどもちろんだよ。」

ちよつと遅れて答えた。

その目は真実を語っている目だった。

「そういえば2人ともどつから見たって人間にしか見えないよ？
本当に…その…」

言葉に詰まりながら聞いた。

「うん もちろん。」

『そうだな…ちよつと見せてやるか。』

カイトは脳内にインプットされている術の一番初級であり害の無い力を選び。

『いくぞ？ 焔の追撃…』

掌の上に拳大ほどの大きさの炎をだし…

『氷結せし飛沫…』

炎を一瞬で凍らし 手で砕いた。

『まあ 手品みたいだからあんまり驚かないかな？』

2人のほうを見てみると。

「そんなことないよ！凄かったよ！！」「う…うん！凄い！！（あんなの見せられたら信じる以外無いよな… 仕込みって感じしないし…）」

つと答えた。

「わたしはね… カイトみたいに見せられないんだ…人間っぽいってのかもしれないの。」

そして胸元の十字架ロザリオを見せ、

「私はね、この胸のロザリオを外すと凶悪でコワ〜い 本物のバンパイアになるんだよ。私はもともと争いとか嫌いだからさ 自分からロザリオを付けて力を封印してるんだ。」

「…ロザリオ」

（凶悪なバンパイアになるっていうのは信じられないな…）

『なるほど… 正体がバンパイアなのに十字架ロザリオを付けてるからお

かしいと思っただけどそういう理由だったんだな。』

モカの説明を聞き2人は言った。

『でも、モカさん、本物のバンパイアって言うのはあまりいい発言じゃないと思うよ俺は。』

「え？なんで??」

カイトの言葉を聞いて少し驚いて話した。

『そういう言い方すればさ、今のモカさんが偽者って言う風に聞えたんだ。そんな事無いだろ？モカさんはモカさん、そして『力』を持ったバンパイアもモカさん・・・だろ？つくねもそう思うよな?』

「うん！そうだね・・・！俺もそう思うよ。」

つくねはいろいろ有り驚きっぱなしだったが、カイトの言葉には嘘偽り無く同意した。

「・・・2人とも・・・どうもありがと・・・」

少し涙目になりそうにモカが話した。

「あ でもね、封印しても『血』は欲しくなっちゃうんだ！」

あれ？さっきの感動の表情は??

って聞きたかったが・・・

スルスルつと俺は後退しつくねを前に行かせ・・・

「ちよっ・・・カイト！ あっえっ・・・わ モカさ・・・」

至近距離までモカが来ていたので顔を紅潮させたその時。

「すきあり」

かぷり！ちゅー ちゅー ちゅー

「いってえええええエエエ」

『はははは・・・』

微笑ましくも見えたため、暫く2人を眺めていた。

第59話 胸元の十字架（後書き）

ありがとうございました！

第60話 ナンパ男の嫉妬

カイト side

『うーん・・・眠い・・・ あー もうこんな時間か・・・』

目が覚めるともうすっかり朝だった。

『昨日はいろいろあったしな・・・ 疲れじゃないと思うけど・・・ いい夢見れたし！ さて、学校に向かいますか。』

一通り身だしなみを整え制服に着替えて学園方面へむかった。

『あれ・・・？まだ全然生徒がないや・・・』

いない筈、今の時刻は学園の時計で6時だった。

『あらら・・・あの部屋の時計・・・メチャずれてるじゃん。ふう・・・ 暫くうろろろするか・・・ 教室でじっとしてるのもつまらないし。』

カイトはそのまま教室には行かず、歩き出した。

side out

(夜が明けてしまった・・・ 万が一に備えて退学届けなんて書いてしまったけどオレ本当にこの学校に残るか辞めるかどっちにしよう・・・ モカさんやカイトと別れるのも・・・)

あまり寝れなかったのが、つくねはげっそりとした表情で登校していた。

そこに・・・

「さてよ・・・ 色男」

男がいきなりつくねに掴みかかってきた。

(碎蔵ッ！)

「テメエ 昨日は赤夜萌香と遊びほづけたらしいなッ 許せねえッ
何だてめエは!!」

ものすごい・・・ 清^{シエラ}しいほどの嫉妬だ。

碎蔵はつくねを掴むと学園を囲んでいる壁に叩き付けた。

「が!？」

背中に走るあまりの衝撃でつくねは声を上げた。

「テメエの正体は何なんだ？ああ！正体はッ!!」

腕に力を入れながら、詰め寄った。

(やっ やばいっ・・・人間ってバレたら殺されるッ)

「正体?? オレは そのっ・・・バ・・・バン パイア・・・とか」

つくねは妖の種類をよく知らなかった為とっさに思いついたバンパイアを名乗った。

その言葉にイラついたのか碎蔵は、わざとつくねを外すように壁に拳をいれた。

ガコーーーーーン!

「うわーーーーー」

コンクリートの壁は粉々になった。

騒ぎになるかと思いきや、

そこはサスガの陽海学園!

「おおーーーーー」 「パンチで壁がコナゴナに!!!」 「ほーーーーー」

拍手喝さいがあがった。

「バンパイアだど!!!バンパイアは不死で凶悪な西洋の大妖怪だぞ

！「力」にかけては妖怪一とも言われる！！テメエがそのバンパイア！？ ふざけんなッ！」

手のみ擬態を解きつくねの頭部を軽く鷲掴みに出来るほどの巨大な手でつくねを威嚇した。

「ひーーーーー！手がっ……」

完全に腰が抜け立てなくなったつくねを見て。

「とにかくテメエ 二度とモ力に近づくんじゃねえ 次にあいつと話しただけでも殺すぞ！もう1人のやつにも言っとけッ！」

そう言い残し歩いていった。

「………」

つくねは言葉が見つからなかった。

第60話 ナンパ男の嫉妬（後書き）

ありがとうございました！

第61話 人間と妖・深い溝（前書き）

よろしくお願いします!!

第61話 人間と妖・深い溝

(シャ・・・シャレにならない・・・)

つくねは寮から急いで荷物を持ってきてバス停近くの墓場まで来た。

(ヤバイ！ヤバすぎるッ！素手でコンクリ ブツ壊すし・・・妖
恐怖すぎるッ！殺されるーーーーッ)

墓場でバス停の方へ行ったり来たりしていた。

カイト side

『・・・ふあああ・・・ムニヤムニヤ・・・ いかんいかん二度
寝ってしまった・・・』

カイトは暫くはうろろしてたが、やっぱり眠たかった為、

木の上で暫く眠っていたのだった。

『ん・・・??あれつくねとモカじゃん・・・何してるんだろ??
・・・降りるか。』

そう言い、木から下へ降りて言った。

「ダメ！人間の学校なんて行っちゃ！私人間なんて嫌いだもん！」
その一言でつくねは表情を曇らせ固まった。

「私ね…ね 実は中学まで人間の学校に通ってたんだ…人間なんて誰も妖怪を信じてないから自分が変に思えてくる… 私は皆と違う私はいない方がマシだっと思って思えてきて… 孤独だった… ずっとずうつと辛かったの…」

つくねは複雑な表情でモカの話聞いていた。

「でも！つくねやカイトがバンパイアでもいいって言ってくれたから 私初めて一人ぼっちじゃないって思えたんだよ…」

笑顔…どこと無く寂しい表情と笑顔が混ざった…そんな表情で話し、

「言っちゃダメ！この学校で一緒にがんばろ…」

「もし…！」

！！突然つくねが話し出したため少しモカはたじろいだ。

「もしオレがその…君の嫌いな人間だっって言ったら…
それでも引き止める？」

「え…？」

予想外の言葉に表情が固まる・・・

「人間・・・なんだ 人間なんだオレ！ 何かの間違いでこの学校に入っちゃったけどモカさん達とは違うんだ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！うそ・・・！人間がこの学校に入れるわけ
ー・・・・・・・・・・うう・・・・・・・・」

一歩・・・いやおそらく半歩ほどだろう。

モカは後ろに下がった。

それを見てしまったつくねは・・・

「モカさん・・・オレが人間って分かったとたんそんな顔をするんだ・・・ そうだよ・・・な・・・ カイトもきつと・・・ やっぱここは俺のいる場所じゃない！」

モカに背を向けた。

「ま・・・待つて！ 本当なのつくね！私・・・」

つくねの肩を掴む。

つくねは・・・

「放してよ！人間なんて嫌いなんだろ！ オレも妖怪の友達なんてゴメンだー！！」

モカの手を振り払い走って離れた。

「つくねーっ!!」

モカは叫んだがつくねが振り返る事は無かった。

『ちっ　おい!!待てつくね!!』

木から下りたときはもう遅かった。

つくねは、走ってバス停へと去っていつていた。

『モカ!ちよつとここで待っててくれ。つくねは今はいろんなことがあったばかりだから、心が乱れているだけだ。』

そういつてモカを残し、バス停の方へと走って向かった。

「.....つくね・・・」

聞えてなかったのか　頭に入らなかったのか、

モカはカイトの言葉は耳に入らなかった。

第61話 人間と妖・深い溝（後書き）

ありがとうございました！

第62話 月音の一大決心（前書き）

よろしくお願いします！

第62話 月音の一大決心

ジャックオーランタンの時刻表の前で…

つくねは立っていた。

（家に帰ればまた…ありふれた日常へ戻れる…でも…
…これで良いのか？…オレは…）

退学届けを見ながら考えていると、

ブロロロ…

バスが到着した。

そして自動ドアが開き

「ヒヒ…やっぱり逃げ出すかい　なぜかあなたはそうなるような気がしていたよ。いいんだな？少年…　思い残す事が無けりや乗りな…」

運転手がそうつくねに告げた。

（オレは…）

『…それでほんとに良いのか？つくね…』

！！

すぐ後ろにカイトがきていた。

『モカの…あの娘の孤独な思いを知ってそれでも逃げ出すのか？つくね…』

「だって…オレは人間なんだよ！モカさんはバンパイアだし…君は
エレメンタル・マスター
精霊魔導師だし…」

つくねは俯きながら答えた。

『違うな…本気で逃げようと思ったのならこの学園の正体を知ったその日の内に逃げる筈だろ？お前が逃げようと決心したのはモカがお前を人間と知って見せたあの表情のせいだろ？』

「…っ…！」

つくねは一瞬体を震わせた。

『それは許してやれよつくね… たった数日しか付き合っていないが、モカがあんな寂しそうな顔をするなんてオレも思わなかった……よほど苦しい思いをしたんだろうな…人間の世界で…』

神妙な表情をしながらいった。

「でも…」

つくねはまだ俯いたままだ。

『まず間違いないのはこのままだと、モカの心に酷い傷をつけるこ』

とになる。初めての友達との突然の拒絶と別れでな。…それでいいのか？』

つくねは俯いた顔を上げた。

「…1つ聞かせてくれないか？」

『なんだ？』

「カイト… カイトはどうなんだ…？オレは人間だ… カイトはどうなんだ？」

真剣な表情で聞いてみた。

『……………キザなことかと笑われるかもしれないが… 人間であろうと妖怪であろうと同じ命だ。流れる血は違ってもな。大切なのは中身なんじゃないか？人間にしろ妖怪にしろ… 俺の正体を知ってお前に友か？つと尋ねた時お前は嘘偽り無くもちろんだと答えてくれただろう？ その気持ちで十分…人間だろうが妖怪だろうが関係ない。それがオレの答えだ。』

カイトの答えを聞いたつくねは…

「オレ… モカさんともう一回話してくる。」

決心した表情は、さっきまでの暗い表情じゃなかった。

『ああ。モカもきつと待ってるさ。行ってこいよ。』

「うん。」

つくねは走り出した。

「ヒヒヒ… 少年… 君もよっぽどのお人よしなんだな… もしくはおせっかいか？」

話を聞いていた運転手が話し出した。

『ふ… そう簡単に逃げ出されてもつまらないし、何よりいい結果にならないだろ？ …オレとしてもつまらない…という考えより寂しい…の方になってきたな…』

「ヒヒ… あの男も君のような感じだったよ… 君は奴の生まれ変わりなのかも知れんな…」

運転手はそうつぶやいた。

『ん??何か言った??』

「なんでもないさあ… 君も彼らのところへ行ったほうがいい…」

そう言い、バスのドアが閉まった。

『…!!あ!そういうえば碎蔵がくるんだった!!』

バス停を後にし走ってつくねたちの方へ向かった。

第62話 月音の一大決心（後書き）

ありがとうございます！..！

第63話 十字架の開放（前書き）

よろしくお願いします!!

ウラちゃん出てきます。

こっちのモカさん……

メチャク久しぶりに出てきたようなく苦笑

第63話 十字架の開放

碎蔵は本性を現し、

割り込んできたつくねを片腕で払うように吹き飛ばした。

「ぎゃ……」

ドコーン

「つくねーーーーー！」

モカはつくねの方へ駆け出した。

「ハハハハハハハハハハ！どうした？自称バンパイアくんよッはぐれ妖のオレでも力では最強と呼ばれるバンパイアとは力比べしてみたかったんだぜ？ もろすぎだろ！カスがッ！！」

血だらけで倒れているつくねを見たモカは

涙ながらにつくねに話した。

「ひ…ひどい…… せつかく戻ってきてくれたのにこんなっ…
ごめんね…やっぱり…人間と妖怪はこんなにも違うんだね…」

モカの目から涙が流れ落ちる…

「私だってバンパイアだもん 血を吸って人間を傷つけちゃう…
本当は…本当はずっと… 人間の学校でも友達欲しいって思って
たけど… やっぱりムリなんだね… 私もきつとつくねを傷つける
事しかできないんだ…」

モカの言葉と流れる涙で気がついたつくねは…

モカの肩を掴んで、

「た…確かに…」

「つくねっ!!」

「オレ…弱くって…何のとりえも無いやつだよ…」

必死に自分の思いを…言葉に繋げた。

カイト side

カイトは墓場まで到着した。

『ちっ… 遅かったか… って…おう!?!』

何やら甘い感じのラブの様な空間が…

今はさすがにタイミングが悪そうだと感じたカイトは、

とりあえず見守った。

(今2人の世界に割り込んだら野暮はオレだな…つくね…しっかり伝えるよ。)

side out

「でも…気付いたんだ このまま逃げ帰ってモカさんと…別れるなんて嫌だ… オレはモカさんと友達になりたいから…」

その言葉にモカは目を見開いた。

「たとえばバンパイアでも… オレはモカさんの事… 好きだよ…」

思いを…全て伝えた…

(よく伝えたな…つくね…)

すぐ近くで隠れていたカイトがつくね達の近くまで来た。

『それでこそ、男だつくね。よく頑張った。』

「カイト……」

つくねの視界にカイトが映った為、

必死に片手をあげ…親指を上げてウィンクをした。

『に…』

カイトもそれを返した。

「何言つてやがるッ！お前らオレを無視しやがってッ！寝てるやカスがーッ！」

つくねの背後に迫っていた碎蔵に蹴り上げられた。

「つくねーッ！」「ちっ テメエのこと忘れてた！」

つくねはモカの方に倒れこんだ。

(に…逃げて… モカさん…)

手を伸ばしたが…

モカに届く寸前で力尽き、

腕が落ちた…

モカの十字架と共に…

「う…うそ… ロザリオが… 外れ…た？」

ズ
ンッ

モカを中心に…

この場所の全てが震えているような感覚が走った。

第63話 十字架の開放（後書き）

ありがとうございます…！

第64話 モ力覚醒（前書き）

久々の大量更新終了} 笑

ストツク切れです…… 苦笑

第64話 モカ覚醒

「うおッ！！ なっ何いいッ！？」

あまりの圧力プレッシャーに気圧される…

『これが…モカの…』

倒れたつくねの側でモカの正体を見ていた。

「…う…ん…」

つくねも圧倒的な存在感を感じ、目を覚ました。

そしてモカの言葉を…怖いバンパイアになるといった事を思い出した。

(モカさんの髪が…銀色に…)

体を起こしモカの方を見た。

『おい、つくね！ムリするな。大した怪我なんだぞ？』

つくねの体を支えた。

「あ…ありがとう…でも…モカさん…」

『モカの本性つて事だ、あれが。』

夜の闇がさらに深まるようにな感覚が…

「な…何だ コイツツ… こ…この威圧感ツ 別人だ！赤夜萌香じやない！！」

『そんな言い方すんな。あれは同じモカだ。ただ違う方の…だけどな。』

つくねにとりあえず回復術をかけた後

カイトは碎蔵の側まで来ていた。

「なつ！！何でツ テメエはこの威圧感の中ツ そんな簡単に動けてんだよツツツ！！」

モカの威圧感に殆ど動けていない碎蔵は、

その中を悠々と歩くカイトに驚いていた。

その後ろでは…

キリイイイ……………

モカが目を見開いた。

(これが… バンパイア…)

つくねはモカの十字架ロザリオを握り、

僅かに震えながら見ていた… 決して目をそらさないように。

「噂通りの赤い瞳！！ そして強大な妖気 こいつが…こいつがあの
大妖バンパイア!?」

「……………どうしたはぐれの…」

モカが初めて口を開いた。

それだけで碎蔵は巨体を振るわせた。

「私が…欲しいんだろ？得意の力づくで… 奪ってみるよ… ほら
… どうぞ?」

動けなかった碎蔵だが…

ここまで挑発されたら…

「うっっ！ うおおおおおおおおお！…」

モカの体ほどある腕を一気に振り下ろす。

「モツ… モカさん!!」

それを見たつくねは思わず叫んだ。

が、

「はっ…?」

「…この程度の力でこの私を襲うとは」

まったく腕が動かない…

(な…なんでよけねエ 何でビクともしねエー…ツ)

「身の程をわきまえるがいい」

ゴッ キャ!!

碎蔵の側頭部にモカの蹴りが打ち込まれる。

「ぎゃああああああア」

骨の折れる音をさせながら墓場の方へ吹き飛んだ。

「でかいだけの低級妖怪が力比べの相手にもならないな」

モ力は手を払いながらそう告げた。

『…………オレの連れに手を出したんだ… それだけで終わると思うなよ…』

モ力の横にいたカイトがそう言つと、

カイトは、人差し指と中指を立て、

空間に図形を書いた。

『アイシクルペイン
氷神の鉄槌……』

碎蔵が吹き飛び倒れた頭上に碎蔵の巨体2〜3個分はありそうな巨大な氷塊が現れた。

「がふっ… は… はあ？… な…に… コレ…」

薄れ逝く意識の中で碎蔵は…巨大な氷塊を見た…

ズズンッ！

碎蔵は叫ぶまもなく…

氷塊の下へ…

第64話 モカ覚醒（後書き）

ありがとうございました！！

第65話 友達（前書き）

仲良くなるのが早いような気が・・・
カイトくんの器量が良いという事で 笑

第65話 友達

(すごい…2人ともだけど…特にモカさん…怖いけど…思わず見惚れてた…どっちが…本当の?)

つくねはフラフラしながら、立ち上がった。

ゆっくりとモカはつくねに近づく…

(ああ…もうダメ…だ…)

つくねはその場に倒れそうになった。

それをモカが抱きとめた。

(ああ…凄く…い…い…におい オレの大好きな…モ…カ…
さ…んの…)

そのままつくねは意識を失った。

さすがに心配になったので

邪魔かな?と思っただけど、

2人の側にまで来た。

「気を失っただけだ…な…ふう よかった。まあただの人間なのに大分頑張ったからな…」

無事を確認し、肩を下ろした。

「はは…つくねを優しく介抱しているモカを見たらさっきの容赦ないモカが嘘みたいだな…」

「ふん…お前こそ、あそこまでする必要なかったんじゃないか？あの程度に。」

僅かに顔を赤らめてモカはカイトに話しかけた。

「まあ 結構腹が立ったからね。それを言うならモカもあそこまで蹴り上げなくても良いんじゃないか？盛大にすっ飛んだと思うけど？」

「この私に挑んできたんだ あのくらいの代償は当然だろ」

っと笑った。

「へえ… 笑うモカはやっぱり どっちも素敵だな。綺麗な笑顔だ。」

思った事をそのまま言った。というか声に出してしまった。

「なっ！！」

ヒュンッ！

それを聞くと殆ど同時に蹴りが来た。

『おおっと！！』

そのまま蹴りをかわした。

『ははは……いきなりとは結構酷いね。ビックリしたよ。』

苦笑しながらそう答えた。

「ちっ……軽く回避してよく言っ……」

互いに苦笑しあっていた。

『さあて……モカ、つくねをこのままにしておけないだろ？ そろそろ行かないか？』

そう言っ……

「ああ……少し待て」

モカは十字架をとった。

「久しぶりに目覚めたばかりだから……まだかなり眠いんだ。すまないが外させてもらおうよ。……お前にはこれから手数をかけると思うがな、もう1人のおセンチなモカも見てやってくれ」

『はは その役はつくねだな。できるだけフォローはするさ。俺たちは友達だしな。オヤスミ、モカ。』

友達…

その言葉に僅かだがモ力は反応していた。

長い間封印されていた為か、

あまりなれない単語だったのだろう。

(……友か… 悪くは無いな…)

空を仰ぎながらそう思っていた。

「ああ……ではまたな。」

そう言つて十字架ロザリオを付けたモ力は、元の桃色の髪…元の瞳に戻り気を失った。

『あらら、運ぶのが2人に… まあ仕方ないか…』

つくねはともかく、モ力を乱暴に運ぶのは気がひけるので、

つくねは浮遊術サイコキネシスを…

モ力はお姫様抱つこの要領で寮の方へ運んだ。

差別じゃないかって？

………

そんな事は無い!!

どっちも大切な友達だ。

でもやっぱ2人運ぶとしたら、

こうなるよな〜！

つくね、モカの組み合わせじゃ誰でもさ！

うん！

……とか何とか……

そういろいろ考えながら、寮のほうへと向かった。

第65話 友達（後書き）

ありがとうございました！！

第66話 血は大切に……（前書き）

よろしくお願いします！

第6話 血は大切に……

翌日……

『ふあああ〜 やっぱ疲れ溜まってんのかな？メチャクチャ眠い……』

欠伸を1つ2つとしながら、

学園に向かって歩いていった。

「おはよー！ー！カイト！ー！」

うしろから声が聞えた。

モカだ。

『おはよ。昨日はよく寝れたか？』

「うん！なんとかね！ー！ いろいろと……あつたけど、つくねも戻ってきてくれたし」

ううん！

笑顔がまぶしいとはこの事だろうなあ。

そう思いながら、モカと一緒に登校していた。

『そういえばさ、ロザリオが外れたときのモカと今のモカは完全な別人格なの？』

知っている事だが…

やっぱり 本人から直接聞いてみたいからね。

「うん。そうだよ。 覚醒して人格が入れ替わっても意識はあるんだ。ぼんやりと曖昧だけどね。昨日のことも覚えてるよ。全部終わってわたし達を寮まで送ってくれたのカイトだよな！どうもありがとう」

そう言っつてモカは抱きついてきた。

『……オレも一応健全な男子生徒だからね。 照れるよ。 モカ』

自分の心臓がバクバク動いているのがよく分かる……

つくねだったら、動けない上に言葉も出ないだろうな……

なんて考えていた。

「あはは…… 嬉しかったから、 ついつい抱きついちゃった！……でも……」

???

なにやらモカの様子が……

「カイトは妖だよな？ エレメンタル・マスター 精霊魔導師って言っつてたし……」

抱きついた状態で、じつと顔を見られていた。

『……んん！そつ そーだよ？（近い近いって！！）』

顔が赤くなるのは止められない……

とうにかこの状態で照れない男やつがいたら見てみたいもんだ。

「……だよね…… おかしいな…… わたし……」

そう言うと首元に顔を近づけてきた。

「欲しくなるのは人間の血なのに…… つくねの時だって、あんなに吸いたいと思ったわけは正体が人間だったからだし…… 今朝で貧血気味だから……かなあ……」

もはや会話では無く。独り言だ……

オレは確信した。

（血を吸われる！！）

「いい香り…… ちょっとだけ！いいかな……」

モカは、ボーっとした状態だった。

『ちよーーッと待った！！！！』

流石にいきなり吸われるのは……抵抗がある！

相手は吸血鬼バンパイアだし…

注射を不快に思う子供かッ!!

って思ったけど、でも吸われるのは……注射の比じゃないよな??

それにこの役はつくねのはずだ!

「あ!そー言わずにちよつと味見するだけでいいから。ね?」

モカはウィンクしながら手を合わせてねだっていた。

『そんなかわいい顔してねだってもダメ!飲み物扱いしないでよ!
オレ第一人間じゃないし!』

拒否していたが…

モカに上目使いで見つめられながら、頼まれると…

か・な・り心が揺らぐ……

必死に戦つてると……

そんな時救世主が現れた。

……つくねだ。

なにやら封筒?のような物を両手で握り締めていた。

『ほっ ほら！モカ！つくねがいるよ。大本命血液所持者の！
ネラル、コク… サイコーなんだよね？』

じりじり追い詰められてた為、

思い切ってつくねを差し出すかのようにモカに言った。

「あ！ホントだ！！…昨日の事つくねにもお礼を言わないと…」

標的？が変わった瞬間を見た！！（笑）

『（やりー！）だったらさ、早く行こう！朝の挨拶も兼ねてさ。』

「うん！」

そう言ってカイトとモカはつくねの方へ向かった。

「つくね、おっはよー！」

がばっ！

「わー！」

後ろからつくねの背中に抱きついた。

その反動で、封筒が音をたててやぶれ、

それと同時に強めの風が吹き、飛ばされていった。

『おっす！おはよ。つくね！』

少し遅れて、カイトもつくねに挨拶を交わした。

「カイト、モカさんおはよう。」

2人の方に振り向き挨拶を返した。

『おー！……てか なにやら飛ばされていったけど大丈夫なのか？
破れてるし。』

そう返すと……

「うん。もう良いんだ！」

(間違つて……無いよな そりゃ不安もたくさんあるけど)

清らしい顔でつくねは答えた。

『そっか…… じゃ、教室へ行くこうぜ。』

「うん！」

3人は教室へと向かった。

「そつだ！つくね… 昨日はありがとう… つくねの言葉… わたし絶対忘れないよ！」

道中 つくねに伝えた。

「いや… そんな…」

モカの言葉に顔を赤らめた。

「あああ…… もう…… ダメ…」

「へ？ モカさん??」

つくねにゆっくりと近付き…

「…我慢もーできない…」

かぶり！ちゅっつっつっ

「!!!!!!? いってええエえッ！」

(つくね…… サックス！)

横で2人を見ていたカイトは、心の中でつくねに礼を言っていた。

「また吸われたーッ」

つくねは首を押さえながら左右に行ったり来たりしていた

「ごめんねー つくねってやっぱりいい香りがあるから…」

『ははは……相変わらず反応が面白いよな』つくねって、
リアクション

2人は動き回るつくねを見て笑いながら言った。

「ね……？カイト！」

カイトの方にモカが向き。

『ん？』

「いつかは……吸わせてね カイトの血もさ」

とびっきりの笑顔で言われた。

『……………はああ わかった。考えておくよ。』

「やたー」

もう断れる自信が無くなった。

反則だよその笑顔……

「2人とも笑わないでー！……ってかモカさん！オレを食料にしないですよー！それにカイト！……オレの反応で楽しまないですよー！……」

つくねは首を押さえながら腕を上下に振りながら言った。

言葉の内容からして、俺とモカの会話は聞いてないみたいだ。

さてどうなるか…

もし オレの血をモカが吸って気に入ったら、

つくねは嫉妬する方に100円!!

うーんしかし……

やっぱり^{リアクション}おもしろいな

この瞬間はとても妖怪の学校と思えないくらい。

穏やかな時間だった。

第66話 血は大切に……（後書き）

ありがとうございました！ちょっと長めな話でした！

第67話 勉強と女子生徒の群れ？（前書き）

よろしくお願いします!!

第67話 勉強と女子生徒の群れ？

とりあえず

遅刻しそうだったんで急いで教室へ！

もちろん血は死守！！

というか、つくねの血でモカは大分満足したみたいだった。(笑)

『さてこれから授業…か… うつむやっぱり眠くなる…』

授業…

眠くなる原因の大部分だろう。

おそらく同じ意見の人も少なくないはずだ。

ぼーっとしていると……

「はいー！じゃあここの間を… 御剣君に解いてもらおうかな？」

ありがちなパターンである……

早速ご指名されてしまった。

この後の展開は…

俺「ううー 分かりません!！」

先生「ちゃんと聞いてたのー? だめよー ぼーっとしてたら!！」

クラス「あははははー」

って感じに!

にはならない!

『三角比の定義を使った問題ですね。えーっと (省) です。』

黒板に答え書き先生の方を見た。

(まあ この程度なら…問題ないな。)

そう考えていた。

「はい完璧よ!よく出来ました。」

「おおおおお!」「すーい!」「きゃー!」

クラスから驚きの声が沸く。

(いやいや…そこまで難しいかな？数？レベルだし… ってか「き
ゃー!!」って……)

ちよつと疑問に思ったが……

ここは陽海学園。

あまり深く考えないようにした。

生前……

というか転生前は、

学業がおろそかになってしまったら、阿修羅のような凶悪な教師(部活動の)に、

グラウンドでボコボコにされてた いやーな記憶がまだ鮮明に残ってる……

だから、ある程度はできるようになったんだよね……

出来るまでは地獄のようだったけど… 苦笑

思い出しながら、冷や汗をかいていると。

(すごいねーカイト！勉強得意？)

すぐ後ろの席のつくねが声を掛けてきた。

(いやいや、普通に教科書見ればのってるし！！勉強は大嫌いだが、赤点は取りたくないからな)

(！！教科書見ただけで分かるの？オレなんか数字と英単語の呪文にしか見えないよ！)

(……ちよつとはべんきょーしろ！つくね。久しぶりに聞いたわ！その数字の呪文って表現！)

あーや こーやとやり取りしていると

「じゃ次の問題は… 赤夜さんお願いね！」

「はい！」

モカは立ち上がり、黒板に公式等を使い、

スラスラスラーっつと解いた。

「はい！赤夜さんも完璧ね。よく出来ました！」

「おおおおお！」 「やつぱモカさんもすごい！」

またまたクラスが沸いた。

(ほれつくね、モカもあーやってばっちり解いてるだろ？ちょっとは見習ってだな…ん？)

つくねの顔を見ると…

(モカさんスゴイ…)

ぼえくつと呆けていた。

(ダメだこりゃ…)

その後…

つくねにも当たったが…

自分の世界から帰って来れず全く問題を聞いてなかったため、

全く答えられなかった。

クラスが違う意味で又沸きあがった。

(……まあ 赤点はとらんようにな、つくね)

キーンコーンカーンコーン

「はい 今日の授業はここまでね。みんな、もうすぐ実力テストがあるからしっかり勉強しておきなさいね。」

「うげえええ！テストなんてあんの？」「うわー全然自信ないし…」
「うー！テストいやあ！」

「じゃー！がんばってねえ〜」

クラス中で悲鳴が上がってるのを尻目に

先生は教室から出て行った。

『やーっとおわったあ…オヤスミ…』

授業が終わると同時に、

机に頭を下ろし寝始めた。

「あははは…カイト…ちよーっといいかな？」

つくねが話しかけた。

『む？つくね… オレは眠いんだ。聞いてやるが簡潔にな。15文字以内に話せよ。』

うつぶせのまま答えた。

「テスト全然自信ないから手伝って。」

…やるな つくね 15字ぴったるか。

『眠い…オヤスミ。』

「つて、えええ！スルーなの？今の？」

『…聞いてやるかといったが答えるとは言っていないぞ？つくね。』

「そんなー！ひどいやー！」

『これもつくねを思ってたの事だ。』

「嘘だ！！絶対楽しんでる！」

『嘘じゃないぞ！多分な』

「多分って何！」

「コント終了！」

「いや！コントじゃないから！頼むよ〜 このままじゃオレやばいんだって…」

流石に可愛いそうになってきた為

『…やれやれオレじゃなくてもモカに教わればどうだ？話するチャンスだし、何よりオレよりきつと頭いいと思っぞっ。』

つと促してやった。

「…もちろんそれも考えたけど… いきなり勉強教えてっていつもの……」

俯きながら話した。

『やれやれ、カッコ悪いわな… はいはい。多少なら手伝ってやるよ。どこが分からないんだ?』

「ありがとう!えつとね…」

つくねがノートを取りにいったその時、

「カイト君!!」「ちよつとさっきの授業で…」「数学なんだけど…」

あっという間に他の生徒に囲まれた。

女子生徒に!!

『へ???』

いきなりの事で戸惑っていると。

「ちよつと!私が最初なんだから!」「何よ!わたしの方だよ!!」「ああもう!!!」

こんどは喧嘩が始まった。

『ああー!ちよつと!!喧嘩はやめて!ちゃんとみんな教えるから。』

止めようとしたのだが…

「このー!」「このー!」「なによー!」

ポカポカポカつと喧嘩が始まった。

子供の…

(このままだと… ね…寝れない… しかも 聞いてくれないし!)

という訳で、この場から脱出した。

「ああ!カイト教えてくれる件は??」

暫く呆然と見ていたつくねはカイトが移動していくのが見えて聞いた。

『ちょい 今日パス!! なにやら嫌な予感が…』

的中!

カイトがいなくなったのに気づいた女子達は、

「」「あ!!--まって!!--」「」

いっせいに走って向かってきた。

『ちょ!!-- うぎゃあ~~~~』

もはや一瞬の出来事、

瞬く間にカイトは女子生徒達に

押しつぶされるように沈んでいった……

(オレが何したのさー！ー！)

「あははは……」

つくねは苦笑いするしかなかった。

「つくねー！カイトー！ジュース飲みにいこ」

モカがつくねのほうに駆け寄ってきた。

「ってあれ？カイトは？？」

さっきまでいたのに……と、聞いてみると。

「あそこだよモカさん。」

指差した先には、

「まってよーカイト君ー」 「教えてよー君の事をさー」

！」「グフフ……逃がさないわよー！」

『待つて待つて待つてー！ー！一度には絶対ムリ！！ とうるか休ませてよー！ー！』

必死に廊下を逃げ回るカイトの姿があった。

なにやら、生徒数も増えていた。

「あははは…… カイト…… スッゴい人気あるんだね…… ちよつと妬けちゃうかな……」

「えええ！！モカさん！！」

モカの言葉に驚き声を上げた。

「わっ！どうしたの???つくね??」

驚いて聞いてみると……

「いっ……いや…… 何でもないよ！そろそろカイトを助けてあげないかな……って言おうと思って……」

「そうだね！あの時はカイトがつくねとわたしを逃がしてくれたし、今回は助けないとね」

そう言って、2人はカイトのほうへ向かった。

（うっーん…… やっぱカイトもてるし…… 勝てそうに無いや……）

つくねは、さっきのモカの言葉にかなり落ち込んでいるのだった。

『とうとうか早く助けてー！ー！』

第67話 勉強と女子生徒の群れ？（後書き）

ありがとうございました！！

第68話 カイト救出作戦？（前書き）

よろしくお願いします！

第68話 カイト救出作戦？

『うつむ… 昨日は酷い目にあつた……………』

カバンを片手に登校していると、

「おい！カイト！！おはよう！」

……………この声は、

『やあ つくね君…………… 昨日は助けてくれてどうもありがとう……………』
くらしい声でつくねに礼を言った。

……………礼？って感じじゃ……………

「うつむ…………… うつむめん…………… もう許してよ……………」

つくねは涙目になってしまった。

〈回想〉

昨日……………

モカとつくねはあまりにも、カイトとその他大勢の女子生徒が、走り回るため、手分けして「カイト救出作戦A」なるものを遂行していた。

しかし……

運悪くモカのほうではなく、つくねの向かったほうにばかり、

暴動の女子生徒とカイト出現した為、

唯の人間であるつくねには、抗う術が無かったのだ。

だけど…

追われている身からすれば……

目の前を横切ってるのに、救いの手も差し伸べず、苦笑しながら傍観してるようにも見える。

そして遭遇が10回目に差し掛かったところ… カイト救出作戦J！

勇気を出したつくねが女子達とカイトの間に割って入ってきたのだ。つた。

その直後！

キーン〜コーン〜カーン〜コーン〜

「あー！予鈴！」「次移動教室だったよね？」「あん！もうちよつとでももの出来たかもののに……」「頭もいいし、運動神経もいいなんて… グフフフ…次は…」

ツと言いながら女子生徒の集団はあっさり解散した。

コワッ…

同じ女子だよな？グフフフは……

「あれ??」

覚悟を決め身構えていたつくねであったが……

あっさりと解散した女子生徒たちを見て、拍子抜けしていた。

「あはは…… 大丈夫？カイト…」

横でぜえーぜえー言ってるカイトに話しかけた。

『つ…つくね!!……はっ走ってる最中につ!……ちらちら！見えっ…た…』

息も絶え絶え…

当然ながら昼休みも全て消費しオマケに睡魔とも闘っていた（追い回されている時はササガに忘れていたが）カイト君は、

体力的というより精神面に深いダメージ！を喰らった為、

予想以上に、しんどくなっていた。

『はあ〜はあ〜……………』

とりあえず息を整える…

「だっ だいじょうぶ??？」

その背中をつくねが擦る。

『…………つくね… お前俺を見捨てたな????』

軽くつくねを睨んで話す。

「そっ！そんな事無いよ！！中々手が出せなくて……………」

『いや！結構お前とは遭遇したのに！！ってか、何度か目もあつた！！でも、手を貸すどころか苦笑しながら見るだけ！！しかも予鈴と同時って…………狙ってんじゃない！！』

「へっ！！！」

『うつがー！ー 思い出しただけで腹が立ってきたぞ！！！ もー
ーべんきょー自分で何とかしろー！！！』

ハーレムって空想上の世界の出来事と考えていたが…………

(こんなんはいらん！！！！)

ブンブンしながら去ろうとすると……

「わー！ー カイト！……！ゴメンってば！……！まってよー！ー」
つくねは後から追いかけていききた。

（男のハーレムなんざもつといらん！……！）

『やかましー！もうこれ以上オレに走らせるなー！』

……

……

…

その日つくねは、カイトの機嫌取りに精を出したそうなの…。

教室に戻り机で寝ていると…

モカが帰ってきた。

「あははは…大変だったね、カイト！」

『うづむ……何であんなにパワーがあるの？女子って……』

「あはは！女の子は強いって言うからかな？？」

モカは笑顔で答えた。

『ううー そういえばモカは何してたのさ…… オレがリアル鬼ごっこしてる時に……』

机に突っ伏したまま聞く。

「あのね、あまりにも追いかけてっこ範囲が広がったから、つくねと手分けしてカイトを追いかけてたんだ！私の方は運が悪くてゴメンね！」

それで今までの間も探してくれてたのか……

授業開始直前まで……

『ううー』

「ん？どうしたの??」

『ありがとなー!!』

そう言うとモカに抱きついた。

「ひゃああ!!」

黄色い声上がる。

「!!!!」

つくねは驚愕の眼差しでこっちを見てくる。

「ああああ!!!」「ちよつとー!!!」「カイト君!!!」
「!!!」「モカさんを!!!」「殺す……」

クラス中からも一斉に殺気・怒気が上がる……

モカ・カイト2人に対して。

暫く……といつても2〜3秒ほどでモカを放した。

クラスのプレッシャーもあつたが、何より冷静になってきたからだ。

『ごめんごめん……何かうれしくなつてな……つくねとはえっらい
違いようだったからな』

そう言つてつくねの方をキッと睨む。

つくねは、暫く驚愕していたが……(さっきのハグシーンで)カイト
の視線に気付き、両の手を合掌し謝罪のポーズをとる。

「いついや!いいよ? 別に……驚いたただけだから……」

モカは顔をそらせながら話す。

(なーんか気まずい……)

『あ!そーだ!!!今度!お礼はするよ?モカだけは!』

「ううー許してよ……」

つくねは更に落ち込む……

「ほんと！」

顔をそらせていたモ力が振り返り顔をぱあぁと明らめた。

『ああ！』

カイトが頷くと、

「じゃ、血を吸わせて」

満面の笑みで答える。

『げ……！』

一気に血の気が引いた……

（そうだった……！こんな事言ったら……返されるに決まってるんじやん……）

後悔先に立たず……って感じだった。

「じゃ……早速……」

ジリジリ迫ってきた。

（……！）

とっさにつくねを前に出しスケープゴートにした！

「ちよっ！…カイト！…！！！」

（これで許す！！）

「えええええ！！！」

「あれ？つくね??？」

素早い動きでつくねを前に出した為、

モカにはいきなりつくねが現れたように見えた。

『オレのおごり！どーぞ！モカ！』

「おごりって何！！！！！」

うるたえるつくね。

「カイトのが欲しかったけどなあ…！！ ああ〜 やっぱり
つくね…！！いい香り…！！」

かぶっ　ちゅっつっつっつっつっ

「いてええええええええええ！！！！！」

とまあ…こんな感じだった。

回想終わり！

「回想ながいよ!! それにつ許す!! っていったじゃん! そうい
えばさ!!」

つくねが素早く突っ込んできた。

『んん? じゃあつくね! 約1時間もの間全力で逃げ回ると献血程
度の血を吸われるの……どっちがしんどいか試してみるか??』

カイトはカウンターの如く返した。

「ううーそっそれは……」

またまたシュンとなる。

『はは! もう結構からかって面白かったしそろそろ許す!! 友達だ
しな。』

そう言つとつくねの表情が明るくなり、

「やっぱ楽しんだの?? ひどいや〜 でもよかった!! じゃあ明
日の実力テストの……」

『じゃ!! 行くわ……』

スタスタスタッ

「ええええ! 待ってよ!!」

つくねは驚きながらも笑いながらカイトを追いかけた。

第68話 カイト救出作戦？（後書き）

ありがとうございました！！

なにやらアクセス状況なるものがあることを最近知りました。
見てみると…

P V 5 4 2 , 1 3 0

ユニーク44 , 690人

でした！！

こんな駄作に付き合っていただき本当にありがとうございます！
更にお気に入り登録・評価・感想をしてくれた方々もありがとうございます！
ざいます！

欲を言えばこれでロザリオとバンパイアの漫画が売れて……
漫画に忠実なアニメがでてくれたら……
なんて考えちゃいます。

アニメと漫画だったら漫画の方が好きなので！
アニメファンの方… ごめんなさい！

でも、ロザバンが広がればうれしいですね。なんか！！
では！！

第69話 新たな出会い(前書き)

よろしくおねがいます!!

次に登場するのは・・・もちろんあの「」ですw

ヤッフー!! (笑)

ちょっと短いです…苦笑

第69話 新たな出会い

……終わった。

ん？

何がかつて？

もちろん授業が！！じゃん！！

……うん。

前の授業後見たく、襲われるの嫌だから……

自粛したつもりだったんだけど……

「まってえー」「今日こそ教えてもらうわよー！君を！」「グフツ……グフツ……」

うん……変わらないみたい。

グフツの人も変わらず参戦してるし……

ついに不気味な笑みしか言っていない……

(もっ サスガにずっと走り回るのはしんどい……)

つと考えながら、空間に凶形を書き、

『……………疾風、今ここに我に宿れ俊足なる風…』

「フェアリー・ウィング
天翔る羽」『』

ドンー！！

身体強化（脚力）の補助魔法。

「あれえ??」「さっき……………こつちに曲がったと思ったのに…」「
むう…油断…したわね。」

相手の死角へと連続して動き続けたため、容易に撒くことが出来た！

『ふう……………ここまで来たら大丈夫か、ううむ、最初ツからこうすれ
ばよかったな……………』

ここは、校舎裏。

生徒が来るような雰囲気じゃない場所だった為、とりあえず一服し
ていた。

『暫くはこうやって追っ手を巻くことにしよう……何回かすれば
サスガに諦めるでしょ。』

つとつか諦めて欲しい……………

オレの魔力だって無限じゃないし、

使いすぎはこれまた疲れる。

『まあ、補助の魔法だから問題ないっちゃ問題ないんだけどな…』
ぶつぶつ独り言を言う姿は、客観的に見てもおかしい…危ない人に
『だまらっしゃい…!』……はい。

暫くあたりをうろついてると、

「あ…ああ…」

声が聞えてきた。

『ん??.?』

(まさか…こんなに早く見つかった??)

恐る恐る声の方へ向いてみると…

「だ…誰か…助けて…手を…手を貸して下さい。急に具合が悪くな
って…」

違った…

一瞬ホツとしたが(かなり)とりあえずその女のこの方へ向かった。

『ん、大丈夫か?立てる?とりあえず保健室へ…』

(って、この「ど」か…)

第69話 新たな出会い（後書き）

ありがとうございました！！

第70話 夢魔 黒乃胡夢（前書き）

できました！くるむちゃん！

シーズン？で一気にかわいくなつたような気がするキャラですw

でもやっぱり、作者が好きなのは……

第70話 夢魔 黒乃胡夢

(…って、この「ゴビ」かで…)

見たことあるような気がして不思議に思ってたら……

「…ありがとうございます。私生まれつき体が弱くて… む…胸が…発作的に苦しくなってぎゅって…」

寄りかかってきて、その豊満なバストを押し当てるようにしてきた。

腕にやわらかい感触が…

「胸がはちきれそうになるんですっ」

『ちよっ！近い近いって！！』

(うわわわ！やわらかっ…おっきっ…！オレな…何考えて…)

はい。健全な男子なのでムリ無いと思います！

思わぬ事が起きて気が動転してしまった。

「…うふふ… 照れちゃって可愛い…」

胸を押し当てながら、上目使いで見上げてくる…

「君… 1組の御剣怪斗君ですね…？ カイト君…わたしの目を見て…」

『えー！』

言われるがままに、その子の目を見た。

「私は黒乃胡夢くろのこむむこれから仲良くしてくださいね。」

そう言いながらカイトの目を見つめた…

カイト side

これは…たしか…魅惑眼チャーム？だったか？

黒乃胡夢…

ああ！くるむちゃんね。

ヤバイ… 二次元世界にじふじに来て結構経つからか、

原作すっかり忘れてしまいそうな…

（まつ それはそれでいいか！展開が読めなくなるってのも良いかも！違和感無く溶け込めそうだし）

くるむの魅惑を受けながらそんな風に考えていた。

カイトは幻術・洗脳の類は受け付けない。

自身の自動魔法オート・エレメンタルの1つ、

「メンタル・レジスト
精神堅牢」

幻術・洗脳といった異常な気配を察知すると発動する。

但し発動の条件は術者の精神面が万全もしくはある程度の余力があるときに限る。

…便利だな…

s i d e o u t

くるむ s i d e

おかしい……

私の魅惑眼チャームは完璧のハズなのに……

くるむは困惑していた。

サキユバス
夢魔である彼女は、魅惑といった幻術を操る統べに長けた妖。

今までも何度か試し、この学園に来てからは百発百中の精度にまで向上していたのに…

この御剣怪斗という男は、なにやら考え事をしているような表情はしても、

「おもわず私に抱きつきたくなる」というふうに設定してる魅惑の術が全く発動しない。

(なぜ???)

side out

くるむからは困惑の表情が明らかに出ていた。

(ふむ、気付いたみたいだな。効いていない事に… まあこれだけ時間がかかったら当然かな?)

『くるむ…ちゃんだったかな？ さっ保健室へ行こう。』

そう言うと手を握り(まだかなり照れくさかったが…… 苦笑)と
りあえずくるむを連れて歩き出した。

「ちよっ ちよっとまって!」

慌ててくるむが歩きを止めた。

『ん?どうしたの?』

不思議そうにくるむを見つめた。

「なんで……何も言わないの??あなた、私が術を使って操ろうとしてたのわかってるんでしょ?」

魅惑眼チャームを防いでいる以上、

術を出している事は明らかに分かっているはずだ、

なのにその事に関しては、全くといって追求してこないのが不思議だった。

『ああ、そのことね。』

困惑しているくるむの方へ完全に体を向きなおした。

『まあ こんな学校だし、他人をいきなり信用できなくて魅惑眼それを使ったのかもしれないだろ??まあ 本気で操ってやろうとしたのかもしれないけど、絶対にそうも言えないからな。なら、とりあえず胸が苦しいって言っていた方を信じてみただけだよ。それに君は魅惑眼そんなの使わなかったって、十分魅力的だしな。オレはそう思うよ。』

と言つて、笑顔で話した。

「ツツ!!……//」

くるむは数多くの男子生徒を虜にしてきたが、初対面で……ましてや術にかかってない状態の男子にここまで言ってくれたのは初めてだった。

(みんな…かわいい!っとか、胸がっすごい!っとか言ってるだ

けであんまり内面を見ているような感じがしなかったけど彼は…)

別に容姿だけで寄ってきてても、悪い気はしない、

そうやって数多くの男を魅惑し『運命の人』を見つけることが彼女の最終目的だったからだ、

身も心も結ばれるのはその後でよかった。

(でっ でも！マズは赤夜萌香をやっつける事が重要！)

カイトとはその後ゆっくりと付き合ってみたい。

ひよっとしたらこの人が『運命の人』なのかもしれないから！！

「ごっつ ごめん！！何かすつきり治っちゃったみたいだからもう良いわよ！！あつ 私用事思い出したからまたね！カイト君！！」

そう言い、まさに脱兎の如く

この場から消えた。

『ありや… 何か変なこと言ったかな？…生前？もそうだけどあんまし女の子と付き合ったこと無いからよく分からんな…』

そう言いながら頭を掻き、この場を後にした。

第70話 夢魔 黒乃胡夢（後書き）

フラグたったかなあ………??

つくねとはどうなるのやら………

ハーレムを書くのは苦手………なのでどうなるか………分かりません!!

ありがとうございました!!

第71話 くるむの画策(前書き)

ちよつと短いです。。。どんどんいきますー！
頑張ります！

よろしくお願ひしますー！

第71話 くるむの画策

「おっはよー！つくなっ」

それは登校中……

つくねを見つけたモカが飛びついてきた。

「わー！びっくりした！！モっ モカさん！！」

つくねは突然のハグ・スキンシップに驚きながら叫んだ。

「あああ！！」「カイトって奴の次はあいつかよ！！」「なんだー毎日毎日！あいつといいカイトといいどういう関係なんだよ！三角関係か？？」

とか何とか、

殺気・怒気が混ざりながらまたまた大注目を受けてしまった。

（行為はスツゴいうれしいけど……この悪寒をとめてえー！皆の視線が怖い！！殺されそう……）

周りの空気は最悪だが……

(でも… やっぱりモカさんとは仲良くなりたい！だからこの学園でやっていくって決めたんだ！！そつそれに！カイトがモカさんを好きになる前に……………)

自分の今後についてを必死に考え抜いていた。

くるむ side

そんな2人を不快な視線で見っていた生徒がいた。

(ちつ……………何よ！みんなモカツモカツって！！やっぱり！まずは赤夜萌香をやっつけないと… その為にはさっきの男子生徒を…つくね…だっけ？)

今後の対策を練っていると…

「やっぱりモカさんって美人だよな」女の私から見ても凄いわ！性格もとってもいいの！この間だっけねえ…」

「そうよね！！ でもモカの彼氏ってあのコなのかな？でも、カイト君とも仲良くしてる感じだったし…」

「うわっ！そうなの？？ずっるーい！ カイト君もけっこういい男だよね？？チラッとしか見てないけど！！」

女子生徒同士の会話が…

「なっ……………」

第71話 くるむの画策（後書き）

ありがとうございました！！

第72話 接触と修羅場（前書き）

よろしくお願いします!!

第72話 接触と修羅場

暫く経って……

作戦通り！

つくねに魅惑眼チャーム掛ける事に成功した。

(やっふふふ やっぱり彼が特別なんだね！私の術！ちゃんと使えてる！)

(わぁ……綺麗な瞳だ…… あ…れ…？このコにオレ…抱きつきたく…)

はぎゅっしゅっしゅっ

「キヤーーー 何するの〜」

口ではそう言っても口元は…

(あ…れ？なにやってんだー！オレ！体の制御が…)
コントロール

モカ side

(うそ……つくね……？)

飲み物扱いしないで〜とつくねに言われ謝ろ〜とつくねを追ってきたモ力は、

つくねにとって最悪の瞬間を見てしまっていた。

「な……な……」

言葉を失っていた。

side out

「ヒビ…モテるねえ　だが…女には気をつけろよ　少年…」

「だれ!?!?!」

いつの間にやら背後を取られていたようだ。

ビクッとあわてて振り向くと…

「ヒビヒビ…ただの通りすがりさ…」

そう言い、その妖しげな人物（バスの運転手!）は、葉巻を吐き出しながら去っていった。

side out

モ力がつくねを追わず、教室の方へ戻っていった。

廊下で壁にもたれかかった。

「まるで…恋人みたいだったな… あんなにくっついて… やだ… 私なんでこんなにシヨックを…」

モカはつくねの言った、「オレは食糧じゃない!」ツと言つ言葉を思い出し…

「私…ダメだな… 何で血を吸いたくなっちゃうんだろ… もしかして… カイトも… そう思ってるのかな… 自分が分からなくなってきたよ…」

心にズキリツつと痛みを感じながら、1人必死に考えていた。

《おい… お前落ち込んでる場合か…… 狙われているぞ》

「え!?! なつ何?誰?？」

いきなり声が聞えて一瞬パニックになっていると、

「あなた… バンパイアなんですってね?一部じゃ噂ですよ?赤夜 萌香さん」

階段上から声が聞える…

「あなた!さっきつくねといた!いつの間にそこに…」

くるむは返事をせず階段下へ飛び降りた。

その姿に、

「うおお！可憐だ！」「見えたアア！」「モカさん以外にこんなコがツ！！」「胸！！でかー！！！」

ギャラリ
生徒のそれは、モカに負けずと劣らない程だった。

（ふん！男ってやっぱしそんなもんだよね！やっぱあの人が特別なだけか。）

少し不快感を感じながらもとりあえずマズはやる事をやろうと、モカの方へ近付いていった。

「私はサキユバス夢魔の黒乃胡夢 あなたをやっつけに来たの」

「え……ちょっと自分の正体を明かすのは校則違反じゃ……」

（でも…私もつくねとカイトにバラしちゃったし…でもあれは学校外で…）

自分の言葉に一瞬矛盾を感じていると… すぐさま追撃が来た。

「我慢できないのよ！あなたは私の大いなる「計画」の邪魔する最悪に目障りな女だわ！」

くるむは、びしっ！っ！とまるで 某アニメの…

『犯人はお前だ！』 ツと言わんばかりに人差し指を突きつけた！

「え???計画???」

待ったく身に覚えの無い事を唐突もなく言われたため戸惑いながら
も計画を聞いてみると……

……

……

……

…

それはなんと!!

《陽海学園ハーレム化計画》

なるものだった!!!!

皆、若干……いや、結構引いていた…

「計画は完璧だったのに…
すぐにみんな夢中になるはずだったの
に……」

わなわなと体を震わせながら、

「赤夜萌香ッ！！この学園の男達は私じゃなくあなたに夢中になっちゃったのよ！！オマケに彼氏2人っとか噂されちゃって！！（しかもカイトくんだし）（怒）許せないわっ！！私が女の魅力で負けるはず無いのに！！」

（逆恨み……）（ッ！すっげ……ある意味……）（ここまでくると
清清しいかも……）

火花を散らしながら言い争う！ ツというか一方的に言われていた。

うん… 清清しい程の逆恨みだと思いm「うるさい！！」「…はい…
（うつうつ…） ついに…カイト君以外にも…）

『作者の愚痴やコメントはいらん！』 ええええ！！カイトくん！！
どっから???

第72話 接触と修羅場（後書き）

ありがとうございました！！

かなりというかほぼ原作です・・・
うー駄作だあー もっと文才を

第73話 修羅場と逃亡(前書き)

よろしくお願いします!!

題の通り…

逃げちゃいます!… 案外カイトくんは…

第73話 修羅場と逃亡

まだまだ戦いは続いていた……

「だからあなたをやつつけて私のほうが優れている事を証明する事にしたのよ！まず！あの青野月音君をあなたから奪う事で！！その次は御剣怪斗君！！」

「ええええ！そんなつ やめて！つくねとカイトは関係ないじゃない！！！」

おろおろしながらも関係ないことを伝えると……

「さっき……近付いてみたけど……彼らってとってもいい香りがするのね…… 特につくね君のほう…… まるで人間のように……」

ギクツ！！

そんな擬音が一瞬聞えたような気がした……

「彼の「血」！おいしい？あなたは彼を「食糧」として利用してるわけだ？でっ！カイト君は？？何！！彼も何かに利用しようとするのかしらね？ひつどい女！あははは 2人を奪られた時のあなたの顔……見物だわ」

くるむは高らかに笑った。

すでに勝ちを確信してるように……

「ちがつ… そっそんな…利用だなんて… 私は…」

気にしていた事を公然とバラされた為、モカはかなり動揺してしま
った。

その時！！

『ふあああ…うっーん…うるさいなあ 何の騒ぎ？？』

教室の扉を眠そうにガラッと開けるカイトが…

その後ろからは…

「モカさーん！…！」

廊下を走りながらくるつくねが…

「…！」

そのタイミングはまさに…

(修羅場) (うん…修羅場だな…)

周りの生徒が言う通り修羅場だ…

……

……

……

…

(えええ！何この空気…！！オレこいつのはちょっと…)

カイトはジリジリと後ずさりを…

「モカさん！さっきはゴメン！急に逃げちゃって…」

つくねはモカに謝罪を…

(おお！つくねもいるじゃん！面倒事…又の名を適任事は適任者に任せよう…！)

『 眠いなー あー つくねー 授業始まったら起こしてなー 棒読み) 』

パタンッ

「え??あ?うん… わかったよ。…??(あれ… 何かいつもと…?)」

(こづいづの…マジでダメなんだ、オレって… 耐性^{けいけん}が…さすがにそんな補助魔法はもって無いし…)

そう思いながら、くわばらくわばらと自分の席へ向かった。

第73話 修羅場と逃亡（後書き）

ありがとうございました！

逃げちゃダメですよね…

でも気持ちはわかるような…

苦笑

第74話 くるむの…勝利？（前書き）

よろしくお願ひします…！

第74話 くるむの…勝利？

(よっよかった…魅惑眼チャームの効かない彼がいたら失敗してしまうかもしれなかったから…)

くるむも2人同時の登場は予想してなかった為、

動くのが遅れたが…

「あー！つくねくんだー！」

まずはつくねに自慢の胸を押し付けながら抱きついた。

「うわー！なんで！？くるむさんが？？ま 待ってー！オレはモカさんに謝りに…」

デレデレ、ニヤニヤしながら言われても…

「何よ… 人が… 心配してるのに… うれしそーな… 顔して…」

つくねは凄まじい妖気オーラがはつきりと見えた気がした…

(モツモカさん！怒ってるー！メチャ怒ってるー！)

モカ side

校庭の扉前に座りながら・・・

モカは沈んでいた・・・

「わたし・・・つくねやカイトのなんなんだろう・・・友達・・・なのに・・・
・わたしの本性はほんね血を吸いたいただけ・・・？カイトにも迫ったし・・・
私は・・・」

眼から涙が溢れていた。

《おい！未熟者、つくねは操られているだけだ。》

また突然声が聞えてきた。

「わっ！」

《「魅惑眼」チャーム所謂異性を虜にする術だな。》

声の出ている場所・・・それは、

「なっ 何これ??ロザリオから声が！」

そう・・・ロザリオから聞えてきたのだった。

《私は、もう1人のお前だ。・・・深層意識からロザリオを媒介にし、

話している。》

「え…もう1人のわたし？」

俄かには信じがたかったが…その「声」が続いた。

《サキュバスは男を惑わす妖 その口付けをうけた男は永遠に虜になってしまつと言う… 逃げ…このままでは完全につくねはくるむの下僕にされてしまつぞ。》

side out

(やぶ〜〜 見た？あのオロオロした顔！たまんないよ〜)
よほど悔しかったのか。

歓喜の涙を流しながら、擬態を解いた尻尾を左右に振っていた。

つくねは…

(なんで??なんで??オレ、モカさんにあんな事を言っちゃったんだろ…)

こちらは逆にメチャクチャ落ち込んでいた。

悲痛な涙を流しながら…

(つくねくんもよく見るとかわいいかも？ いいね このままつく

ねくんを虜にすれば私の勝ち！)

そしてくるむはつくねを抱きしめ、

「落ち込んでるんだよね？つくねくん… お詫びにくるむが慰めてあげる…」

(なんだーオレ！モカさんとケンカしたばっかなのに！！こんな
のばっかり！！)

くるむの胸で窒息しそうになっていた。

「(魅惑眼^{チャーム})じっとして…」

互いに顔を紅潮させながらベットに横たわる…

「くくるむ…さん…」

(だ…だめ…だ… やっぱり おかしい… くるむさんを見ると
…オレ… いけない… このままじゃ…)

くるむは魅惑の術最終段階の口付けを行うため、顔を近づけていっ
た。

(わ わたしまでドキドキしちゃうけど… この口付けで… これ
で赤夜萌香を見返せる！)

5 c m… 4 c m… 3 c m…

徐々に唇同士が近付いていく…

「まっ……」

つくねは…唇が触れる寸前、

ガバツ！

つくねはくるむに抱きついた。

「きゃ！（あ あれ？ さあ口付けを…）

くるむはつくねから離れようとしたが…

離れられなかった。

「………！」

第74話 くるむの…勝利？（後書き）

ありがとうございました！

第75話 くるむの暴走(前書き)

よろしくお願いします！

第75話 くるむの暴走

「ごめん！できないよ！オレ…裏切りたくない人がいるから…」

つくねは逆らえない魅惑眼チャーム（くるむに抱きつきたくなくなる）を逆に利用し、魅惑くちつけの術を防いだのだった。

ドクンッ……

くるむの心臓が高鳴る…

その行動はくるむを激しく傷つけた、

「どうして…どうして…　そこまでして…拒むの？そんなにあの人がいいの??」

くるむは魅惑眼解除チャームし、つくねを突き放した。

「え!!」

つくねはくるむの突然の激昂におどろいた。

「わたしが…　こんなに尽くしてるのに…　本当は恥ずかしい事もやってあげてるのに!!」

くるむは、翼・爪・尻尾すべて擬態を解いた。

「ええええええ!!くるむさん!!?」

魅惑眼チャームが解けた反動か、つくねは何が起こったのか理解できてなかったが…

自分の身に起こる事態は把握できた。

(いままで誰にも負けた事無かったのに… あの女が… 赤夜萌香
さえいなきゃ!!)

思いがけないつくねの行動・突然の挫折・傷つけられた負けられないプライド・そして一族の宿命…

様々な事が重なり、くるむにはもう冷静な判断が出来なくなっていた。

「もー！ー！ー！！あつたまに来た！！あの女にかかわるもの皆ぶちこわしてやる！ー！ー！ー！！！！」

くるむは爪を伸ばし、つくねに切りかかった。

「ひゃあああああ！！」

その時、

「やめて！ー！ー！ー！！」

間一髪保健室にモカが入ってきた。

「モカさーん!!!」

「何!」

つくねとくるむは共に驚きの声をあげた。

「つくねに…つくねに手を出さないでよ!」

ドンッ!!

モカは両手で思い切り突き飛ばした。

「きゃ!」

くるむはモカの突然の乱入に驚いていたがそれより驚いたのは…

「ええ…!!!」

モカの凄まじい力にだった。

突き飛ばす力が強く、一気に窓の外へ飛ばされていった。

カイト side

『ううん あいつら… どこ行ったんだ? 険悪なムードだったし…』

カイトは近くにいた生徒に事情を聞き、今の状態を把握した。

もちろん、くるむがモカの人気に嫉妬し、襲おうとしているという
のみで、カイト&つくね争奪戦！を省いた説明である。

当事者には中々話せない内容だしね…

『実際にあってみると、そんな悪いようなコには全然見えなかった
し。話せば分かり合えると… ううん…しかし…女の子って怖いか
も…』

ガッシャーーン！

探していると 窓が割れるような音がした。

『…！あつちか…！』

カイトは「フェアリー・ウイング天翔る羽」を発動し、音がした方へ向かった。

side out

モカとつくねは下に下り、くるむと対峙していたが……

「ロザリオが外れない！おかしいな、この間は簡単に外れたのに！」

封印のロザリオ十字架が外れず、

くるむの餌食になりかけていた。

「あははは！しょせん馬鹿力だけのバカ妖怪ね！つくねくんも足手まといみたいだし！2人ともおとなしく死んでー！ー！」

くるむの突進が来た。

その爪による斬撃は大木をバターののように切り裂けるほどの鋭利さを持っていて…

オマケに最初の攻撃を避ける時、つくねは足を挫いてしまっていた。

ぎゅ…

モ力は動けないつくねをぎゅっと抱きしめた。

「モカさん何を…？」

「わたし…こんな時になつてはつきり分かるよ。」

（守りたい… 友達を失いたくない… だって…生まれてはじめて出来た友達だもん！）

「つくねは大切な友達なの！血とか関係ないわ！！やるならわたしだけをやってー！」

モ力は、はつきりと自分の気持ちに気付いた。

友達… それも初めての… 孤独な自分に出来た本当にかげがえの無いものを。

しかし、

今のくるむには何も伝わらない。

「笑わせるな——！」

斬撃が襲い掛かる。

(そんな… 元々はオレが惑わされたせいなのに… オレは… 足手ま
といじゃ無い…)

「足手まといじゃないぞ——！！！」

叫びと同時にくるむの爪が2人を襲った

第75話 くるむの暴走（後書き）

ありがとうございました！！

第76話 暴走の果てに(前書き)

よろしくお願いします!!

第76話 暴走の果てに

後一寸ほどでくるむの爪が届く距離！

その刹那ッ

『やめる！くるむ！！』

ガキイイイツイー！！

突然、何か硬いものにぶつかっただかのような音がした。

「なっ！あ あんたは！」

『頭を少し冷やせくるむ。大丈夫か？つくね、モカ！』

カイトが間一髪くるむの爪を受け止めていたのだった。

「カイト！！」

モカは、叫びながらカイトの方を見た！

その時…

パキイン！

「は…外れた！」

カッ！！！！！！！！

封印されていたバンパイアの本性が凶々しい妖気と共に開放された。

妖気の開放だけでくるむは吹き飛ばされた。

「ひ…… うそっ… 何て 凶々しい妖気の渦… 栗色の髪が銀色に染まっていく…これがモカの正体！」

突然のカイトの乱入・モカの変貌、

くるむは更に混乱しそうになっていた。

「…手数を掛けたな カイト、後1秒でも遅かったら危なかった。つくねを頼む、動けないほどじゃないが、足を負傷している。」

「わかった。後なモカ「冗談じゃない！負けるわけにはいかないわ
「！…？」」

くるむは強大な妖気にたじろきつつも声を上げる。

「わたしは！わたし達サキュバスが男を誘うのは「運命の出会い」を求めているから！数少ない種を絶やさないように慎重に男達から選ばなければならぬの！それを邪魔した赤夜萌香ッ！お前だけは何があっても許さない

！！！！」

『つておい！止まねって！くるむ！！』

カイトは声を上げるが、血の昇った頭ではもう周りが見えていないのか全く耳を貸さず、

モカのほうへ突進していった。

「だから… どうした？許さないからこの私に牙をむくのか？脆弱な自己中心的女が…」

くすくすと笑いながらも眼を細め…

「身の程を知れ」

くるむの全身に悪寒が走る…

「うあああああああ！！！！」

爪を振りぬくが、

「のろい」

モカは回避しくるむの尻尾をつかみ…

「二度と飛べぬよう、羽と尻尾をむしり取ってやろうか」

尻尾を思い切り振りかぶる。

「や…やめー！ー！」

ド　　ンッ！ー！

「きゃうー！　かはあ………」

そのまま地面へ叩きつけた。

衝撃で地面に半径2メートルほどのクレーターが出来るほどだった。

「攻撃が直線的過ぎる頭を冷やせよ。そこまで私が憎いのか？」

モカは着地しくるむに近付いた。

「小悪魔ぶつてる割に純情な小娘だな…　さて…二度と私にたてつけぬ様にしてやるう…　まずはその尻尾と羽をむしってやるよ……」

モカはゆっくりとくるむに近付いていく…

「う…　うあ…」

くるむは立ち上がることが出来ず、その場で恐怖に震えていた。

モカが手を振り上げ、

振り下ろしたその瞬間…

パシッ！

『だからまってって、モカ。』

そのモカの手を受け止めた。

「え……？」

目を開けた先にはモカではなく……カイトがいた。

(なぜ…わたしを庇ってくれる…の?)

「? どけ… 何のつもりか知らんが、そいつはつくねやカイト・
・お前を騙そうとした拳句、つくねの方は殺されかけた、その上
先ほどのカイトの呼びかけには全く聞く耳を持たなかったんだぞ？」

モカはカイトに向かいといかけた。

『ん?モカ オレは別にくるむに何かされた覚えは無いぞ? (たぶ
ん)』

笑いながら答えた。

「……なぜ庇う?あの時の会話の流れを聞いていれば、そいつはお
前にも何かしたのは明白だろう。例え本当に何も無かったとしても、
お前は友を殺そうとしたその女を許せるのか？」

モカの目つきがカイトとは対照的にツ細まった。そう、睨むかのよ
うに。

『確かに……くるむにもやりすぎな面もある……そこは否定
しない。だけど……』

くるむの方を向く。

「あ…う……」

僅かにまだ震えているが、ちゃんとこちらを向いた。

『頭は大分冷えたる？モカもオレも冷やせって言ってたけどな。このコ…オレには本当に悪いコには全く見えなくてな。まあ、オレは今回、殆どといって良いほど絡んでないから…』

そついうと今度は側まで歩いてきていたつくねのほうを向いた。

『つくねはどうだ？このコに…これ以上鉄拳制裁を加えろって言うのか？』

つくねに問いかける…

するとつくねは首を左右に振り

「ううん、これで…いや もう十分だよ。くるむさんも悪気があったわけじゃないだろうし…」

(…!!! カ…カイトくんだけじゃなく…つくねくん…も…)

徐々にくるむの溜まっていた涙の種類が変化していった。

「だってさ！カイトが言うように、オレもくるむさんって根っからの悪いコには全然見えないもん！きつと仲良くなれると思うっ！」

つくねは笑顔で答える。

『だろ！ちよ〜つと過激すぎなところもあるけどな！ それに刺激も…』

カイトもまた頭を掻きながら笑った。その時、

「うああああん」「…ごめんなさああい」

くるむは本格的に泣き始めた。

カイトはくるむの側まで行き、頭を撫でた。

『ははは… うん。悪い事したら、まずはゴメンだよな！ これで俺たちは友達だ。』

「っ…！！ ああああん…！！」

カイトの言葉を聞いてくるむは更に泣き出した。

「あははは… それに…力になってくれてる今のモカさんも…ね」

「……………！！」

モカはまさか自分にふられると思ってなかった為、少し動揺した。

「ちつ 誤解するな… 私はお前の血を横取りされたくなかったからだよ…」

そう言うつくねからロザリオを取った。

『…んー？モカ照れt…』

ヒュッ！

言い終わる前に右ストレートが飛んできた。

パシッ！

『おいおい…軽いジョークじゃないか… とうか前より早くなつてないか？手を出すの。』

モカの拳を受け止めながら苦笑した。

「お前は言う前に顔にでるんだよ。いつかちゃんと戦はなしめつい合う必要があるか？」

『光栄極まりない話だが、それ漢字が違う… そつちの方は辞退するよ。モカお嬢様。』

「フン…」

そう言うつとモカはロザリオを身につけ…気を失った。

第76話 暴走の果てに（後書き）

久しぶりの大量更新終了です！
ありがとうございます！！

第77話 2人とも…（前書き）

来ましたラッキーセブンの話！！
あまり関係ありませんが… 苦笑
よろしく願います！！

第77話 2人とモ…

翌日…

登校中に3人は合流していた。

『いやー 昨日は（も）大変だったな… いろんなことがいっぱい有りすぎて…』

ため息混じりにそうつぶやくと…

「何いってんのさ！あの時、カイト逃げ出したじゃん！モカさんとくるむちゃんが廊下でいた時。」

つくねがツツコミをいれた。

『うぐ！！逃げたって言葉をつくねに言われるとは……』

つくねの絶妙な突っ込みに返す言葉が無く黙る。

『オ オレはああいう雰囲気は苦手なんだよ！！』

とりあえず、唯言われるだけにはいかなかったので、反論を！

「そんなのオレだって得意じゃないさ！！」

わーわー言い争っているよ…

「あ あのさ… ちょっと良いかな?？」

モカが不安そうな顔をして話してきた。

「昨日…実はロザリオが話しかけてきてさ…」

悩んでるかのように、伝えた。

「えー ロザリオが話しかけてきた!!」

『ふむ…』

つくねは若干驚いて、カイトはそこまで驚かず、モカのロザリオを見つめていた。

「うん… でも昨日はその声に助けられたんだけど… 変だよ… 封印が弱まってきているのかな?」

少しくらい顔をしながら続けた。

「ねえ… もし… もし封印が効かなくなっちゃったら 2人とも… それでもわたしを嫌いにならないでくれる?」

カイトはまだ黙ってロザリオを見つめていた。

つくねは、

「もちろんだよ! ちょっとくらいコワくっても血を吸っても オレ

にとつてはモカさんはモカさんだもん!」

まさに即行!自分の考えを伝えた。

「ホント!つくね...ありがとう!!! あ...あのカイトは?わたしの事...嫌いになっちゃっう?」

モカはつくねには満面の笑みで答えた。唯カイトは、まだロザリオを見つめていた。

(ちょっと!!カイトどうしちゃったのさ!いつもなら「つくね!しっかり伝えてやれ!!」って言うてるじゃん!黙っちゃって!)

いつもとまさに逆のパターン、

つくねがカイトに話すように促していた。

『ん...?ああ、すまん。ちょっとロザリオを見てたんで...』

そう2人に言い、

『封印魔具系はあんまし知らないんだけど、壊れてる感じとか全く感じないんだよな...』

じいー.....っとロザリオを見つめていた。

えー...

ロザリオはモカの胸元に位置しているから、

凝視するって事は…

(何か恥ずかしいよう…)

モカは赤面していた。

(ちょっと!!カイト!あんまりよくないんじゃないの!!じっと見てるなんて!!)

モカの様子に気がつき、慌ててつくねがカイトに呟いた。

『あああ!!悪い悪い… その… 下心とかはないんだ… ごめん…』

つくねに言われると思わなかったが、

胸元を凝視していたのは事実。

すぐに誤った。

「いつ いやそんな…」

モカはまだ赤面していた。

『あゝ えつとさっきの話だけど、オレもつくねと同じだよ。』

気まずくなったが、とりあえず場を収めようと話した。

「ホント??」

モ力は顔を明らめ話した。

『ただ封印が壊れるって考え方… オレは好きじゃないかな。』

続けて話した。 2人の顔には??が浮んでいた。

『君たちは、もうオレ達にとっても友達だからな。封印が壊れる…っていったら、どちらかが壊れる…って聞えるんだ。モ力が心配なのはわかるけど、たとえモ力の封印が効かなくなっても…ん…とな…言葉では表現しにくいけど…裏も表も無い…いや、表裏一体になる…かな?そういう風に考えてみたらどうだ?2人で1つ…みたいになさ』

そう答えた。

……… 暫くモ力は黙って聞いていたが。話し終わると同時に。

「うん!! カイト!ありがとう!!わたし…そんな考え方出来なかった!そくだよね…二重人格でも裏のわたしもわたしなんだよね!」

そう言って カイトにお礼を言った、

その瞳には僅かに涙が溜まっていた。

(…やっぱし…カイトには敵わない…かな)

つくねは若干落ち込んでいた。

カイトの言った事はとても素晴らしい考え方だった。

異論はあるはずも無い、

だが、そう答えられなかった自分に少し腹が立って言ったのだった、
そんなつくねに気がつき、

『まあ… 言うのがちょっと遅れたのが心象悪いな。その点つくねは真っ先にどっちのモカもモカだって言ったから、スッゴい想ってるんだな…』

そうカイトが言うと、

「えええ！そ、そんなオレはそんな大それた事…」

沈んでた顔が吹き飛び一気に赤くなった。

「うん！！わたし！！2人とも大好きだよ！！」

モカは満面の笑みで2人の腕をくんだ。

ドキッ

この言葉につくねもカイトも… モカ自信も赤くなった。

(まずい… 女の子にここまで面向かって言われるとさすがに照れ

る…顔に出てるよな…)

カイトは頭を掻きながら苦笑し、つくねとモカは俯いていた。

その時、

「おはよーいぞいませーす！」

ジャンツ！…ツと言う効果音をつけてみたくなる。

いきなりの事で、驚きつくねは地面にダイビング！！

カイトはビクツ！…つとなりながらふりむく。

『びつくりした！…！』

モカもまた驚いて振り向く。

「くるむちゃん！…何でまたっ…！」

そんなことにかまわず、くるむは続ける。

「つくねくん！カイトくん！クッキー焼いたんだけど一緒に食べな

い??」

笑いながら話す。

「へ…?何でオレ?」

『ん?オレ達??』

困惑しながら聞くと…

「やーー ほらっわたし…生涯1人だけの「運命の人」を探して
るっていつてたけど、ちょっと問題が発生しちゃって……」

そして、満面の笑みで顔をこちらに向け、

「わたし!!2人とも好きになっちゃったの!!」

ええええ!!!

3人それぞれ驚愕していた。

「ほら、カイトくんは身を挺してわたしを庇ってくれたし!つくね
くんは酷い事したわたしをあんなに優しくしてくれて、許してくれ
たし… 2人に惚れちゃいましたよ!!人間じゃないんだし!一夫
多妻じゃなくて一妻多夫!!で!」

『ええええ!!惚れっつて… オレも!!』

カイトはまたまた驚愕!

「一妻多夫って…」

つくねは放心……

それぞれオロオロしていると…

くるむとモカはバチバチバチツ…と火花を散らしていた。

「ちょっと！くるむちゃん 何言ってるのさ 何とかしてよー
人とも！！」

「いつそのこと今すぐ結婚してー 2人とも！！」

『ちょ…これは オレにとつたら解決不能問題なんで……』

「やっぱり前途多難だー」

校舎内逃げ回る…

周りの生徒の視線が痛かった。

第77話 2人とも…（後書き）

ありがとうございました！！

第78話 負けられない!! (前書き)

よろしくお願いします!!

第78話 負けられない!!

「ほ…本当にいいの？しくね…？」

「…じい じい」

.....

.....

.....

そこは校舎の外の墓場。

2人は顔を赤らめながら見つめ合っていた。

「あ…ああ嬉しい つくね…」

「モカさん…」

2人の距離が近付く…

「初めてだね… つくねから血を吸わせてくれるなんて」

かぷっ ちゅっちゅっちゅっ

「ぎゃああああああああ」

……

つくねは叫び墓にもたれかかり、モカは両手で頬を触り悶えていた。

「つくねの血… おいしい…」

（おかげで貧血気味… でも モカさんわかってくれないんだよなあ…）

首筋から血が吹き出していた…

（で、でも！カイトに負けられないよな… 今のところ… 人間おれが勝ってるのこれだけだし…）

貧血気味でふらふらしているつくねの行動原力… はそれだった。

大切な友達だけ… やっぱりモカさんと仲良くなりたい。

カイトはライバル！それもかなり強大…

カイト本人がどう思ってるのかが不明だったが…

(でも…やっぱり仲良くなりたいたってだけじゃダメなのかな…)

そして授業が始まるため、教室へ向かった。

『よ！長かったな、どこにいった…ってつくね！！』

つくねの顔を見るとまるで生気を抜かれてミイラみたいに！！

反対にモカは肌が艶々していた。

笑顔も綺麗だ。

(おいおい！大丈夫か??)

つくねに話しかけると…

(ん… だっ だいじょうぶ だいじょうぶ…)

フラフラの手を上げた。

(あんな… そこまでになるまで血をあげるなよな… やれやれ。)

ため息を吐いていたが、さすがにここまでになってたら心配だ。

（オレもモカに血狙われてるし… 半分ずつあげて負担を軽くしようか？人間よりは血が無くなって… まあ大丈夫だし。）

そう小声で話すと…

「ええええええええええ！！ほんと！！！！それ！！！」

突然立ち上がり、叫んだ。

モカに血をくの部分でかなり驚愕したらしい 苦笑

血まで負けてしまったら……

（ばっばか！！）

クラス中が注目する。

つくねが我に返りオロオロすると…

「はいー 青野君の言う通りですよー今日から部活をやってもらいまーす。」

そう担任の猫目先生が言った。

「あっ！！そうですか！！あ あの確認したかっただけなんです…すみません。」

何とかごまかせたつくねは謝罪した。

「はい！後々確認する時はなるべく大きな声出さないで欲しいな
ー！先生驚いちゃうから。」

「はい…注意します…」

そう言い席に着いた。

(何やってんの??いきなり…)

つくねに苦笑してると…

(カツ カイト!!良いよ!そんなの!オレからモカさんにあげた
んだし!自業自得だし!モカさん喜んでくれてるだけで嬉しいし!
!)

小言は小言なのだが…

リアクション
反応がでかい…

(わかったわかった。落ち着け、狙われてるって言っても味見程度
だっっていつてたし、吸われたとしても基本的には吸血鬼バンパイアが吸うのは
人間の血… オレは人間と違うからつくねの方が良いって絶対)

やれやれといわんばかりに、話した。

(ほっ…)

つくねはあからさまに安心していた。

(やれやれ… やっぱ嫉妬するに100円!掛けて正解だったな。

賭け相手はいないけど 苦笑)

とりあえず、その後は秘密談義も終わり、

部活動の説明を聞いていた。

第78話 負けられない!! (後書き)

ありがとうございました!!

第79話 体験入部と逃走劇？（前書き）

よろしくお願いします!!

第79話 体験入部と逃走劇？

「いいですかー 部活は全員参加です！皆さんいろんな部を見学して自分が入る部を決めてください！私が顧問の新聞部とかも見学にきてねー」 《宣伝》

って訳で、

陽海学園の部活動体験入部が始まった。

『んー部活… か しんどいのはカンベンなんだよな…』

憂鬱だ………

部活！の単語だけで 転生前の地獄を思い出しそうで…

「ほら！2人とも！！いろんな部があるよ！早くいこー！」

モカが手をつかみ駆け出した。

「う うん！！」

『わっ たた！！ちよつとまって！！』

つくねは相変わらず緊張気味。

カイトは 昔？を思い出していた為 油断していた。

暫く廊下を進んでいくと…

部室が並ぶエリアについた…

「ごちゃごちゃごちゃ

ざわざわざわ…

それは…

ありえないほどの人ばかりだった…

（何これ… 満員電車かよ… こりゃ見に行くだけで骨がおれそう…）

カイトはあまりの人の多さに、げんなりしていた。

「っすごいねー！これ全部部活の勧誘かな？」

つくねは逆に興奮しながら話した。

『まあ… 何事にも程々が一番だけどな…』

「あはは！にぎやかで良いじゃん！2人は何部に入る??」

……………

『強制だったら しんどくない部!!だったらどこでもいい!』

「「あははは…」」

2人は苦笑していた。

実は昔人間界でいた中学の部でかなりしんどい思いをしていたことをカイトから聞いていたのだった。

頑なに主張する理由もわからないことは無い。

「あ！水泳部なんてどうかな??」

「!?!?!?」

つくねの発言を聞きモカは顔を強張らせる。

「オレ… 実は小学校まで親にスイミングスクールに通わされてきた。健康のために…」とか言われて（水泳ならモカさんにいいと見せるかも…）」

つくねは苦笑しながら説明した。

それに対しモ力は…

「いや…あの…わたし…」

モ力は少し慌てていた。

『ああー あのつくね???』

話を途中から聞いていたカイトはつくねに話しかけた。

「?」

『あのな…つくね、バンp「きゃーー!」「ビクッ!…!』

カイトが驚き振り向いた先には…

「カイトくん!…どの部にはいるのー!」「きゃあ!…!」「グフフフフウウ!…!」

またまた多数の女子生徒（顔なじみの…）だった…

…人数は…大分減ってる。

超粘着質、コアなファンだろうか???

4〜5人の女子生徒だと言いなおそう。

『げげげ!…!』

振り向いた瞬間…

いや振り向く前から異様な殺気とも取れる気配を感じた為、すぐに体勢を整えられていた。

『じゃ じゃあ つくね！モカ！先にいっててくれよ！！ また後で！！』

そう言い駆け出した。

「へ？ああ！カイト！！」

「！！！！」

突然の出来事に2人とも驚いていた。

『ああ！後なモカ！！』

走って逃げる前にモカの側に来て、

『つくねはバンパイアを知らない！無理＆無茶すんじゃないぞ！！』

「え！？」

話を返す前に…

ドドドドドドドドドッ！！！！

走って行ってしまった。

つくねとモカは女子生徒たちが走り去る過程で生まれた突風に煽られていた。

どれだけ・・・？

『ちよつとー！ー！諦めたんじゃないのー！ー！』

走りながらも叫ぶ！

「簡単に・・・」「諦めて・・・」「なるもんですかー」「グフフフ・・・」

『えええええ！！こわっ！！！！』

走る走る走る！

そして……

校舎に悲鳴が木霊する……

残された2人は、呆然としていた…… 苦笑

第79話 体験入部と逃走劇？（後書き）

逃走劇?!?!とありますが・・・
実際はもっとあるでしょうね・・・苦笑

描写が三回目なんで・・・苦笑

ありがとうございました!

第80話 新聞部はどーお？（前書き）

よろしくお願いします！

第80話 新聞部はどーお？

走って走って走って・・・

身体強化魔法もつかって・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『ま・・・撒けた・・・・・・・・』

とりあえず・・・近くの教室に身を隠す事にした。

息を潜めて隠れる・・・

『ああー疲れた・・・ あの子達ひよっとしたらかなり高位の妖じや
ないんかな？ 体力といい・・・ スピードといい・・・』

腰を下ろし天井を見つめながら呟く。

彼は、^{カイト}男には、強気でも、^{じよせ}女にはかなり弱いみたいだ・・・

これが弱点にならない事を・・・祈るばかりである。

『・・・・・・・・』 今回はだんまり？ 『うるせえ！』

しばらく隠れていたら…

「あー！？貴方は」

教室の奥から誰かが出てきた。

『！！』

びっくりして顔を上げると…

「あなたは確か御剣君ねー！ひょっとして 新聞部を見に来てくれたのかなー??」

猫目先生だった。

『ああ…ここ新聞部の部室だったんですね…すみません。緊急事態だったので逃げ込みました。すぐ出て行きますよ。』

そう言い立ち上がった。

「あらあら さっきの騒ぎは、君だったのねー ふふふ 人気がある見たいねー 以前もそうだったし！」

『人気はいいんですが… ちょっと加減をしてもらいたいです…』
頭を掻きながら苦笑する。

「あははは、それはムリなんじゃないかな?? 女の子だもん。観念して捕まっただげたら??」

『それは全力で拒否します…』

捕まったりしたら…

とって食われるかもしれない…

…

暫く先生と話していたら、

教室の周りは静かになってきた。

『お！ 大分落ち着いてきたか… じゃあ先生、迷惑かけました。俺行きますね。』

「うん。またねー あー後！！新聞部なんてどうかな？人数少ないから困ってるし 大歓迎だよ??」

勧誘されてしまった、

暫く考えて… (ふり！)

『ん〜 連れを待たせているんで、相談してきますよ。OKが出たら部員が増えるかもしれませんから、ちょっと待っててもらえます?』

そう伝えると。

「おっけー！！期待して待ってるよ〜！」

そして、部室を後にした。

『さて…っと あいつら…どこにいるかな？ ……まずはプールか
…一応ムリするなって言ってるから大丈夫だと思っけどな…
…』

つくねが水泳部はどうか？という会話を思い出し、

学園プールへ向かった。

暫く歩いていると…

ダダダダダダッ！

『む？ 殺気！…！』

走る足音があからさまに聞えてきた為振り向くと…

「カーイトッ！…」

『わーーーーー！くるむ…！』

ズッダーンッ！

くるむがダイビング・フライングボディプレスをかましてきた…

おかげで廊下に倒れそうになった。

…まあ 堪えたけど。

「やふふー！ー！こんなところで会えるなんて！やっぱり、運命の人だね！！好き！！（告白！！）」

豊満な胸バストを押し付けながら告白！

しかし……

『……………息ッ 息ッ』

カイトは窒息でそれどころでなかった…

……………

……………

……………

ぽくぽくぽく

チーーン……………

第80話 新聞部はどーお？（後書き）

ありがとうございました！

中々進まないですね・・・

まだ原作で言う1巻後半・・・ ゆ〇りちゃんとか、み〇れちゃんとか、る〇さんにいつ会えるのやら・・・

作者が最も会いたいのは・・・ 筆談の彼女だったりして・・・

苦笑

第81話 水泳と吸血鬼（前書き）

よろしくお願いします！

第81話 水泳と吸血鬼

カイト・くるむ side

.....

.....

.....

ふっかー！ーっ！ー！ー！！！！

苦笑.....

『いや...マジで死ぬかと思った...』

ちよっとまだ、酸素が体に行ききってないのか、

フラフラしていた。(笑)

「ご...ごっめんね...カイトに合えたのが嬉しくってつい...」

焦りながらも謝罪をした...

(ストレートすぎー！こんなにはつきり言われたら！怒れない！怒るつもりは無いけどな...)

顔色が青から赤に…

信号かよ… 苦笑

『はははは…… もう大丈夫だよ。ちょっとまだ息苦しいけど…
ああ そうだ、くるむ つくね達を見なかった？』

「ん？つくね？？見てないけど、なんか男子達の話じゃモカが、水泳部に入るとか何とか… 言ってたよ！」

近付きながら、どさくさに紛れてキスをしようとするが…

『ええええ！！マジでか？』

急に大きな声を出した為、思わず下がり失敗した…

「（後ちよつとだったのに…）うん。そう話してたよ。でも おかしいでしょ？確かバンパイアって水が…」

残念… と言う顔を出しながら話した。

『やっぱし… そんな展開か… つくねはその事を知らないんだ。
だから 水泳部にいったんだろ… モカがムリして。』

「ええ！…でも かなり有名な話よ？バンパイアの事 圧倒的な力の持つ種族だけど 結構弱点多い妖だつて、」

つくねが知らない…の部分か腑に落ちなかったのかくるむは不思議そうに話した。

『あああ… まあ、けっこーつくねは疎いんだよね。そういうことに。じゃなけりゃ、モカにとって毒でしかない所にわざわざ連れてかないって…』

(まさか… 人間だよ！ってカミングアウトするわけにはいかんし…)

「ふーん… まあいつか… とりあえず 様子を見に行こう！(もう1人の旦那さんに会いに)」

くるむはニッコニコしながら 腕を組んだ。

『はいはい… あそこの部は… なんか嫌な感じもするし… ちょい早めに行こう。』

そう言って 足早に、学園プールへ向かった。

side out

そこは、学園プール。

水に入れないモカはプールサイドでつくねを眺めていた。

…そう 水泳部員に囲まれ いちゃいちゃ ベタベタしていると…
ろを見ていた！

(ムカムカムカ！もう…限界！！)

暫くは我慢してたが、やっぱりムリ！だよ… 苦笑

「いい加減にしてっ つくねは結局 女の人と仲良くしたくて 水泳部に入りたかったの！？ わたしもう見てらんない！もうわたし行くから！！」

プールサイドのパラソルつきテーブルに両手で一撃…

グシャアアア！

粉碎…

「わああ モッ モカさん！誤解だよ誤解！！」

叫んでも、女子部員に抱きつかれた状態じゃ説得力がない…

っーんっとしながらモカは離れていく。

「まって！モカさん！わかってよ。オレ… モカさんと一緒に泳ぎたかったんだ！オレはー」

プールサイドまで近付き必死に叫ぶが…

「何よ！わかってきてくれないのはつくねのほうだよ！」

「え…？」

モカの叫びにつくねは驚いてしまった。

「わたし… 本当は…」

モカが訳を話そうとしたその時！

パツシヤツ！

「きゃあ！…！」

先ほどまで つくねと泳いでいた 水泳部部长である一之瀬魚いちのせたまおがモカに向かって水を飛ばした。

「…見学は自由だけど ケンカは目障りね それに子供じみてるわね… わかってくれるとかくれないとか… くだらない！男と女に必要なのは奪うか奪われるかでしょ？泳ぐ気がないのならさっさと出て行ったら？」

そうはきすてた。

「きゃああ！水が…！」

モカは水を体に浴びパニックになっていた。

「モカさん…!?!？」

「まって…!?!つくね！ちょっと待って…!?!」

慌てて、プールサイドから逃げ出した。

「あら… うわさは本当だったのね…!?!」

逃げ出すモカを珠魚は悪意のある顔で微笑みながら見ていた。

そこはプールサイドの下。

「はあ… はあ…」

バチッ バチチッ

まるで放電… どこかがショートしているような音がしていた。

《この馬鹿がつ… なぜプールになど近付いた!》

「ま… またロザリオ…が…」

苦しんでいる最中…またロザリオから声が聞えた。

《水を浴びればそうなって当然だ!水と妖気が反発しあって電気が走ったように体が痺れるだろ!?!水は私達バンパイアの弱点なんだぞ!!!》

そう…バンパイアは「水」の持つ清めの力に非常に弱く水を浴びれば体がしびれ、その上妖気を出せなくなってしまふのだ。最悪の場合死にいたる事も在る。

《お前の体はもう1つの人格である私の体でもあるんだぞ!!無茶な行動は慎め!もうつくねなんか振り回されるな!!!》

「や…やだ…」

表のモカは苦しみながらも拒否した。

《何…？》

「もう嫌だよ… こんな体… どうしてわたしは皆と一緒にじゃないの 変だよ… わたしもつくねと泳ぎたいよ…」

人間界にいたころの…

他人にんげんと自分あやしは違うと言う劣等感…

モカはそのことを思い出し涙を流していた。

《……………》

そんなモカ（表）にもう何も言えなかった。

第81話 水泳と吸血鬼（後書き）

ありがとうございました！

察してあげてもいいと思うな　つくね君・・・　苦笑

第82話 水泳部の本性（前書き）

よろしくお願ひします！

第82話 水泳部の本性

一方そのころ…

水泳部員は本性をあらわし…

次々と体験入部してきた男子生徒を襲っていた。

「し… 新入部員を餌扱いする危険な部活があるってきいたけどまさか本当に!!」「わーにげろーにげろー!!」「^{マーメイド}人魚!!」

逃げ惑う男子部員達。

「皆の精気も吸わせてね〜!」「逆らっても無駄だよ?わたし達水の中じゃ無敵だから!」「だーいじょうぶ!命までは盗らないから」

水泳部員はプールに巨大な渦を作り、逃げ場所を奪っていた。

「(なんてことだっ!人魚ってこんなに怖いものなの?? 襲われる!!殺されちゃうー!!!)」

水の中でもつくねの反応は健在!^{リアクション}

左右に動きオロオロしていた。

カイトがこの場にいればまず笑っていただろう… 笑 「そつそれどころじゃなーい!」 つっこまれた…

その時、

「ふふ… あわてなくても大丈夫…」

水中から珠魚が出てきてつくねの背中に抱きついた。

「ひっ！」

いきなりだった為軽く悲鳴を上げた。

「あなたは特別よ 月音くん！実はね… 私 入学式の頃からあなたに目をつけていたの… それからはずっとあなたに夢中なの… だってホラ…」

そういうと…口がどんどん裂けて言った。

「月音くんって人間みたいなおいしそうな匂いがするから…」

そして耳まで口が裂け大きく口を開けた。

「ずっとあなたを食べたくてえ！！！」

「うあああああああ！！！」

つくねが叫び声をあげたその時、

「つくね—————！！！」

声が聞えた… その声の主は…

「モカさーん!!!」

「つくねっ!これはいつたい!!」

モカに気付いた珠魚はつくねを抱きかかえたまま振り向いた。

「何よっ!また来たの? 邪魔しないでッ 泳げもしない クズ妖
怪のくせに!!」

「!!! (泳げない……?)」

その一言につくねは驚いた。

「図星でしょ!?!有名な話だもの 水がダメなあなたは何も出来
ないのよね!?!ザマないわ!!せいぜいそこで見てな……」

その言葉^{セリフ}を聞く前に。

(バカにしないで!わたしだって!!)

モカはプールに飛び込んでいた。

「ええええええ!!!」

バツシャーシューーンッ!! バチバチバチバチッ!!!

モカが飛び込んだその場所だけ、

まるで雷が踊っているかのような風景だった。

「きゃあ！…いったい何が！！」

「モカさー…ん！」

『マジかよ！…あいつ！…！』

「ちょっと！…何でモカが水に…飛び込んでんの！？」

そこにくるむとカイトが来た。

『つくね！…早くモカを助ける！』

「カイト！…くるむさん！…いったい！」

つくねは聞こうとしたが、

『細かい話は後だ！バンパイアは水には入れない！！急がないと死ぬ！！…急げ！！…！』

その話を聞いた瞬間…

今までのモカとの話を思い出した。

一緒に泳ごう… 泳ぐのは楽しいよ…

つくねは駆け出した。

(オレ…モカさんになんて事を…)

そこに…

「ちよーつとまった！あなたは私の獲物なんですからね！！みんな！行かせちゃだめよ！」

珠魚の号令で他の部員がつくねに詰め寄ってきた。

「どいてくれー！！！」

しかし、つくねは止まらずモカの方へ向かった。

「つくね！！！」

くるむは助けようとしたが、

『くるむ！動くな！！』

カイトが引き止めた。

「なんでよ！このままじゃつくねが…っ！！！」

振り向いたその先に、青いオーラと凶形に囲まれたカイトがいた。

その瞳はいつもの黒い瞳では無く、紅く…まるでバンパイアのようになっている…

『あんまし、女の子には使いたくないんだが…そうも言っ
られないようだ。』

そして右手を上へ上げ

『疾風怒号・それは荒れ狂う天の叫び・・・』

そしてプールの方を・・・人魚達を指差し

『ハヴォック・ゲイル
荒れよ暴風の嵐!』

ギョルオオオオオオツ!!

その瞬間!つくねを取り囲むように接近していた人魚達は突然の暴風に身動きが取れなくなっていた。

「きゃああ!!」「何!!これ!!」「水の中で身動きが取れないなんて!!」

そのままプールの水は2つに割れた。

『今だ!行けっ!つくね!!』

「うん!(モカさん・・・ゴメン)」

そしてつくねは飛び込んでいった。

「何なの??これ!!」

1人取り残された部長珠魚はプールの状況に啞然としていた。

人魚達が水に束縛されているという、通常なら考えられない事だ。

その時！

ドッゴオオオオオン！！

先ほどの暴風が強大な妖気が出ると共に消えた・・・

第82話 水泳部の本性（後書き）

ありがとうございました！

一口妖怪辞典… 作者都合上w 久しぶりに！！

マーメイド

よく知られている伽話の優しいイメージと違い。

船乗りの間では有名な水難を暗示する 不吉で恐ろしい海の妖。

その美しい姿で船を引き寄せては人間を遅い、

船ごと沈めてしまうという伝説もある・・・

原作の引用ですね

美しい・・・かなあ・・・？

特に部長さんは・・・ 良かったら見てみてください！

シーズン？ 1巻です

第83話 水泳部との決着（前書き）

よろしくお願いします!!

第83話 水泳部との決着

「「「「こっ！今度は何！！」」」」

またまた起こった予想外の出来事・妖気に珠魚と他の部員が叫んだ。

カイト・くるむ side

『ふう・・・もういいだろ。』

暴風が消えたのは、術を使うのを止めたからだった。

「すっ すごい・・・」

くるむはモカの強大な妖気とカイトの力に驚き立ち尽くしていた。

「えーっと・・・カイトはもう助けてあげないの？モカたちを・・・」

秀囲気がいつもと違うため・・・

いつもの様に話しかけれなかったみたいだ・・・苦笑

『ん？ああ モカが開放されたからな・・・ もう大丈夫だ。それ

に……』

「ん？」

『オレは女の子には極力手は上げたくないだ……情けないかと思われるかもしれないけど。』

頭を掻き、苦笑しながら答えた。

「……（やっぱり カイト……ステキ……）」

そして、くるむはカイトに抱きつきにいった。

今は空気読んでー！！

side out

「うつ……うつ……これが噂に聞いていたモカの正体？この威圧感……まさかこれほどの……これがバンパイア！！」

そして モカが水の中から出てきた。

「……よくも……よくも好き放題やってくれたな……」

強大な妖気を纏ったモカが珠魚を睨んだ。

「くっ……何よ！どこまで邪魔すれば気がすむの！？月音くんは私が目エつけたんだからね！絶対あなたなんかには渡さないんだ

からー!!」

そう言うと再び部員達に号令をかけ。

「さっきの妙な風?も無くなったことだし!あんたには消えてもら
うわー!!」

動けるようになった部員達は一斉にモカの方へ向かった。

モカを威嚇するように周りで泳ぎ始める・・・

「あなたがどれだけ強いかわからないけど、水という領域テリトリーでは人魚が
上!命乞いするなら今のうちよ!!」

腕のヒレを出し構えた。

「・・・フ・・・ 食う事しか頭に無い 低妖サカナの分際で
笑わせるな」

その言葉が癪に障ったのか、

「何をー!!」「この女ー!!」「死ねー!!」

一斉にモカに襲い掛かった。

バツ!!

それをモカはジャンプで回避。

しかし、やはり水によるダメージは大きいのか、動きは良くなかつ

た。

「動きが鈍いわ!!口では強がっても ずいぶんと弱ってんのね!
!空中ではいい的よ!!」

部員全員で空中に飛び出した!

「死ねーーーー!!」

「モカサーーーーーん!!」

あまりの数につくねは思わず声を上げた。

『まあ落ち着けつくね。』

「っ!! カイト!! でも!あんなに人魚が!!」

つくねは慌てていた。

『よく考えてみる。確かに水棲生物である人魚は水の中では最大限の力を発揮するな。だけど・・・今は?』

そういうと同時に。

ゴカアアアッ!!

「!?!?!?」

「こつも簡単に釣れるとは、やはり魚サカナだな、身の程を知れ」

モカの右フックが珠魚の側頭部を捕らえそして他の部員は、

ドガガガガガガッ!!

「「「きゃあー!!」「「「

左右の脚の回転蹴りで一掃した。

バツシャアアアン!

そして皆プールへ落ちていった。

『な? 空中は人魚の領域テリトリーじゃないさ。』

「そそ!当然よねー」

.....

『そろそろ・・・オレから降りてもいいんじゃない?』

くるむはカイトの上に乗っていた 苦笑

「やふふー もうちょっと! (カイトの戦闘形態見たのわたしだけー) (バトル・バージョン)」

「くるむさん???」

つくねが苦笑しながら見ていた。

「ああ! つくね! わたしあなたの事も好きだからね!」

そう言いつくねの方へ降りた。

『やれやれ・・・』

苦笑しか出てこなかった。

第83話 水泳部との決着（後書き）

ありがとうございました！！

第84話 水泳部（人魚）戦後…（前書き）

よろしくお願ひします！

中々進まないな。もうちょっとで1巻終了ですね！

第84話 水泳部（人魚）戦後…

傍から見ればモカの圧勝なのだが……

やはり、バンパイアの弱点の1つである

「水」はモカに深いダメージを与えていた為。

モカは暫く膝をついていた。

『モカ……大丈夫か？』

カイトはモカの方へ行きプールサイドに置いてあったバスタオルを手に取り、

『水滴1つ……ついてるだけでも結構やばいんだろ？ これで拭いておいた方が良い』

手渡した。

「……あぁ すまない。」

モカは無表情のまま受け取りつくねの方へ向かった。

（……今はちょっと……フォローできんな……）

そのままモカを見送った。

「あ……あの……モカさん……」

モカはつくねの側に来ると

パンツ！

モカはつくねに平手打ちヒンタをした。

「!?!」

「ちょっと!つくねに何を……」

くるむが駆け寄った。

「あつちのモカが泣いていたぞ……」

その言葉にくるむは黙り、つくねの表情は変わった。

モカは目を瞑り話し出した。

「泳げないという……他人と違う劣等感で自分を責めてな あいつは今までそうやって人間の社会で傷ついて生きてきたんだ。」

そして 目を開きつくねを見た。

「自分の事しか考えられぬような男に私の側にいる資格は無い！
失せる・・・ 月音」

つくねは呆然としていた。

そしてくるむはつくねを慰めていた。

モカはカイトの側まで行き、

「タオルすまなかつたな。」

ロザリオを手に持ち、カイトにタオルを渡しながら話した。

『厳しいな・・・ つくねあじつは何も知らなかつただけなんだがな。』

まだ、呆然としているつくねを尻目にモカに言った。

「・・・無知は罪とまではいかないが、気付ける場面はあつただろう、そこは月音の落ち度・・・だ」

『ああ・・・ 確かにちよつと不謹慎だつたな。あの時あちゃんとおレがつくねに伝えていれば・・・そこはオレの落ち度だ。すまなかつたな。モカもそろそろ休んだ方が良い。結構なダメージだろう？』

そう言つと、

「ふん・・・ 大した事は無い。」

やはり強がった。

(やっぱり強がったな・・・まあらしいっちゃらし・・・)

「なんだ!?!」

ギロリと睨まれた。

心読めるの??

『 ははは・・・ いや なんでも無いさ・・・ おっ そうだモカ
ちよつといいか?』

モカに近付き話しかけた。

「む・・・?なんだ?」

モカの頭上に右手をを伸ばすと・・・

ヒュッ!!

前蹴りがかわりに飛んできた!

パシッ!!

『 大・真・面・目なんだ。オレの落ち度分を返す。ちよつとだけ我

慢してくれないか？」

前蹴りを受け止めながら話した。

「ちっ……何なんだ？」

モカはカイトが真剣な顔をしていた為か素直に我慢した。

『ん……そのまま……』

そして……カイトは目を瞑り……

『健やかなる活力よ……花の香りよ……此処に來りて 仲間に
快方の光を……』

右手から鮮やかな青い霧のようなものがモカに降りそそいだ。

「……これは。」

モカは驚きながら眺めていた。そしてカイトは目を開いた。

その瞳は赤い…… 真紅の色だった。

(カイトの目が……)

変化したカイトの眼に驚いていたその次の瞬間。

『リジエネ・サークル 健やかな風の囁き……』

パアアアアツ……

「ん……………（何だ……………いい匂いが……………体が……………）」
モカはなにやら体が楽になっていくのを実感していた。

『……………つよし！ これで 暫く休めばすぐに良くなるだろうさ。』
そっくり右手を元に戻した。

「いったい……………何をしたんだ……………？今……………」
体が快復したのはわかったが……………

『ああ、今のモカは大丈夫でも、もう1人の方のモカは大丈夫じゃないかもしれないだろ？だから、念を入れてやったって訳さ。おせつかいかもしれんがね。弱ってるモカもまあ 魅力的だが……………』

そついうと軽くウインクした。

ゴスツ！

顔面パンチがきた……………

片目瞑ってたため、距離感が……………掴めず……………

『ぶっ！！……………なぜえ…………… ゆだんしたあ……………』

クリーンヒットしてしまった！

「ふん！身の程を知れ！」

そういつとモカは後ろを向いた。

「まあ・・・ ありがとうな。カイト。」

後ろを向いている為、モカの表情は見えないが・・・

どんな顔をしているかは想像がついた・・・

『てててっ・・・ ははは・・・ まあ つくねにオレと同じ力があつたら 同じことをしてたと思うがな・・・ やつは 最近の人間にしては珍しい・・・ 裏表の無い本当に澄んだ心の持ち主だしな・・・ その辺は大分わかつてるんじゃないか？じゃ無けりやもう1人のモカがあそこまで慕わないだろう？』

そういつと・・・

「・・・ふん」

モカは鼻で笑いそのまま・・・ロザリオを身につけた。

「すまない・・・後は頼む・・・」

『ああ 頼まれた！』

モカは、元に戻り意識を失った。

『さて、連れて帰るか。つくね・・・は駄目みたいだな・・・やれやれ』

つくねのほづを見ると　よほどショックだったのかまだ立ち直れて
なかった。

『くるむ！』

「なにー？」

つくね達の側まで行き、

『オレはとりあえず、モカを送っていくから、つくねを頼む。今は
まだ頭が冷えんだろ・・・　とりあえず　教室へ頼む』

「うん！わかったよ！！（つくね・・・わたしが慰めてあげるから
ね　やつふふー）」

・・・???なにやら聞き分けがいいような気がしたが・・・

『サンキユ。』

特に気にせず、モカを保健室へと連れいていった。

.....

その日の授業。

保健室に連れて行ったモカはそのまま早退し・・・

つくねはまだ立ち直れていなかった。

・（一応フォローは入れたんだけどな・・・つくね織細過ぎだよ・・・苦笑）

第84話 水泳部（人魚）戦後…（後書き）

ありがとうございました！！

第85話 新聞部へ！（前書き）

よろしくお願いします！！

やっと入部しますね・・・ 苦笑

第85話 新聞部へ！

三日後・・・・・・・・

まあ 多少はつくねは立ち直ったが・・・

肝心のモカが登校してないから・・・

つくねと共に教室へ向かっている途中・・・

「あら カイトくんにつくねくん！ちょうどよかった！」

猫目先生に話しかけられた。

ヤバっ 部活動誘われてたのにそのままにしてた！！

「もー カイトくんってば 友達と相談するって行ってたのにそれつきりで！..！」

『あああ！ごめんなさい！ちょっといろいろあって・・・』

ちらっとなつくねのほうを見る。

「で？もう入る部活は決まった？あなた達とモカさんだけがまだ決まってるのよー だからね！新聞部なんてどうかな？誰も入らなくて潰れそうなのよー！ ねっ！ねっ！」

両の手をあわせ頼むように、勧誘・・・？いや、お願いをしてきた。

『んー オレは良いですけど、（楽そうだし）つくねは？』
つくねに聞いてみると・・・

「えっ！・・・その（静かで落ち着いてそうな部活だ・・・モカさんがいなけりや何部でも・・・）でも・・・オレ・・・」
なにやらまだ、立ち直れてないみたいだ。

あれから、モカが来ていない事を考えれば必然と思われるが・・・

つくねは目を瞑り、俯いた。

その時、

「良いですよ！わたしその部に入ります」

声が・・・聞えた・・・

「え・・・？あ・・・！」

『おっ』

振り向くと・・・

「おはよー！つくね！カイト！」

「『モカ!』さん!!」

つくねはモカの登校に涙を流していた。

………そこまで!!

「モカさあん!!二度と戻ってこないかと思ったよー!!」

『おいおい……泣くな泣くな……二度とつて まだ三日じやんか。でも 良かったよモカ。体の方は大丈夫か?』

「うん!でも回復のためにずっと寝ててね〜 ねぼーしちゃったよ……」

てへへ〜と頭を掻きながら苦笑する。

(やっぱりモカさんは笑顔でなくっちゃ!!!!)

『ん〜 あれ?一応モカに術をかけておいたんだけど…… 効かなかったのかな……?』

つくねはモカに見惚れ、カイトは少し困惑していた。

「んーん!そんなこと無いよ!水の影響は初日からすっかり無くなっちゃったしね!もう1人のわたしもお礼を言ってたよ!どうも、ありがとねーカイト!!」

モカは笑顔で答えた。

『そっか…… なら安心だ。どういたしまして!!』

話しているそのとき。

「じゃあ！3人とも新聞部！決定ねー！！」

猫目先生が乱入！

《ようこそ！新聞部へ！！》を掲げた。

「『わあああ！！』」

モカの登場の影響で申し訳ないが先生を忘れていた為、ちよつと驚いてしまった。

そこに・・・

「はあーい！わたしもその部に入部しますー！！」

くるむも着ていた。

「くるむちゃん！！」

『いつの間に・・・』

「だってーカイトにつくねも入るんでしょ！　だったら　わたしもって思うじゃない」

そう言いながら　カイトとつくねに抱きつく。

「ぐええー！」「うおー！」

悶絶しそうになるほどの衝撃・・・苦笑

「くるむちゃーん！わたしもいるんだからね！！」

モカがそこに入ってきた！

「べー！っだ！！モカに負けないんだからね！！」

またまた火花を散らす2人・・・

（前途多難だな・・・こりゃ、つくねが言った通り・・・）

2人に囲まれながらそんな風に考えていた。

第85話 新聞部へ！（後書き）

ありがとうございました！

第86話 新聞部部长(前書を)

よろしくお願いします！

第86話 新聞部部长

「……えーさて皆さんよくウチの部に入ってくれました！それではこれから 陽海学園新聞部の部活動を始めます！」

ワーーー パフパフパフッ！！

って感じになると思ってたけど……

し ん

僅か部員4名……

(そりゃ シーンってなるわな……)

あきれていると……

「先生……なりゆきで入部してこの部の事全然知らないんですけど…… たった4人なんですか？ 新聞ぶって……」

早速つくねが疑問を投げた。

「あら まさか……」

先生が質問に答える前に……

「すみませーん」

ガラッ

「ほら来たわよ もう1人の部員が」

部室に誰かが入ってきた。

「いや〜〜 申し訳ない 初日から遅れてもって・・・」

まず見えたのはバラの花束だ。

「はじめまして オレ新聞部部长 森丘銀影もりおかぎんえい よろしく！」

顔をキラッつとさせながら自己紹介をした。

(部長!!!?)

(ん・・・ 大体どんなキャラかは想像ついた。)

(へ? そうなの? カイト!)

(ああ、まっ すぐわかると思っぞ。)

つくねと小声で話していると・・・

「おお! 先生に聞いたつたけど 何て美しい新人部員なんや!!」
そう言うもって持ってたバラの花束をモカとくるむに差し出した。

「オレの事は「ギン」って呼んでな！ ギンちゃんでもOK
ああ・・・べっぴんはんには赤い花がよう似合う！」

キラ キラ キラッ！って感じかなあ・・・

なんとも表現しづらい感じでモカ達に話していた。

(・・・な？つくね・・・)

(う・・・ん 何かまた個性的な人だね・・・)

(男は完全スルーかよ・・・)

ため息交じりであきれていると・・・

ギン先輩はモカをじっと見つめていた。

「??？」

モカが少し引きながら不思議に思っている。

「ギン君は2年生でたった1人の部員です。 部でわからないことは銀君に聞いてね！」

「フツ 頼ってくれてええでー」

先生が軽く紹介、ギン先輩はまたもやキラキラッ・・・

(つくねー カイトーわたしちょっとこーゆー軽そーな人苦手ー)

(はははは………)

くるむにそう言われたが……苦笑しか出てこなかった。

「……えつと それじゃあ わたしはこれから職員会議で席をはずします。後の部の進行はギン君よろしくねー!」

「ああ まかせてや!」

さつさと先生は退場……

「え!?! 先生もついっちゃうの!?!」

つくねが慌てて確認すると。

「ごめんねーそれじゃあ、みんなも先輩とは仲良くね?」

あっさり退出して言った。

(早い退出だなあ……ほんとに顧問なのかなあ……?)

ふああっと 欠伸をしながらそんな風に考えていた。

第86話 新聞部部长(後書き)

ありがとうございました！

第87話 見えちゃったけど!!…あっ(前書き)

よろしく願います!

第87話 見えちゃったけど!!…あっ

「……えー」というワケで まずオレから新聞部がどないな部か説明しとくな新聞部の目的は校内新聞の発行！学園内のあらゆることを取材して新聞にするのが活動内容やな 取材のためなら危険の中へも突っ込んでいく！言うとかウチは甘い部ちゃうで 入った以上は覚悟したってや！」

一通りの説明の時 表情が真剣になった部長。

一瞬部室の空気が変わった。

「何か頼りがいのありそーな先輩だね？」

「え？うん… そうだね。」

「……しんどそうかも……」

カイトだけ若干違った意味で雰囲気が変わっていた。

（文化部ってことで嘗めてた… ううん…）

落胆…

（ちょっと！カイトどうしたの？）

くるむが聞いてきた。

(うつ…ん…)

まだ悩んでいるようだ。

(くるむちゃん、カイトは部活動に対してなにかトラウマを持って
いるらしくってね。多分ギン先輩の話で思い出してるんじゃないか
な?)

(そーなの…じゃ!)

ガバツ!

くるむはカイトに抱きついた。

『わああ!』

突然の事にビックリして声を上げてしまった。

「大丈夫だよ!カイト!一緒にがんばろうよ!」

そう言いながらカイトにしがみつく。

『ん…? あ ああ!ありがとな。くるむ。』

一瞬驚いたがすぐに理解した。

「お前らな、ウチは甘い部とちゃうって言ったばっかやろー?
ちゃんと部長の言う事は聞くもんやで!」

注意された…

『あー すみません…』

「ゴメンなさい…」

くるむとカイトは素直に謝った。

「なーんてな！ う・そ・や！ カタイ事は言わん！ 楽しくやろうや！ これ ウチの宣伝ポスターや後ろの壁に貼っというてや！」

そつ言いポスターを取り出した。

『「はい！」』

「先輩ー！ ポスター貼るのこんなに上の方で良いんですか？」

「いや もうちょい上やな！」

モカとくるむがポスターを貼りギン先輩が指示を出していた。

「変なポスターだね…」

『個性があつて…まあいいんじゃないか？』

つくねとカイトはポスターを取り出していた。

『さて…もうちょいポスターとってくるわ。』

「うん！よろしく！」

カイトは資料室へ入っていった。

（それにしても…ギン先輩って軽そーだったり まじめだったり…
いったいどんな人なんだろ？）

何気なくギン先輩の方を見てみると…

しゃがみこんでなにやら見上げていた。

（まさか…！この人…！！）

そばに行く…

バーーン！！

モカさんたちのパンツがばっちり見えてしまった！

「先輩！何やってんすか！！ やめて下さいっ まさかこんなこ
とのためにわざと高いところにポスター貼らせているんですか！！
？」

つくねがギン先輩の視界を遮るように身をのりだした。

「…は？ 何のことや？」

知らぬ存ぜぬ… 苦笑

「とぼけないでください！今2人のスカートの中覗いてたでしょ？」
追求すると…

「フツ アホな このオレがそない お寒い事するわけないやろ」
またまたキラキラ顔を輝かしながら知らぬ存ぜぬ…

「何イイーーーーーッ！！」

2人が騒いでいたため モカたちが降りてきた。

「？ どーしたんですか??」

ガチャ…

『ふう… サスガ部員数4名…（いや 1名か？オレ達入ったばっかだし） ぜーんぜん整理してないわ資料室… メチャクチャになつてんわ… 埃被ってるし… ン？ どうした?』

資料室からカイトが出てきた。

「いやーな つくね君が自分らのパンツを見てもーたんやって!」

『あららら…』

「「ええー………！！？」」

モカとくるむはビックリ仰天！

顔も赤くしていた。

「いや先輩でしょそれ………ッ！！」

つくねは必死に誤解を解こうとするが…

自分も見ちゃったけど！！…っといってしまい…

パンッ！　　パンッ！

モカとくるむに左右の頬にビンタの一撃を貰ってしまっ。

『大丈夫か？つくね！顔がおたふく風邪みたいになってるぞ……』

「はっはっはー　アホやなー自分　おかげで今日の部活はおひらき
やー」

つくねは無言で呆然としていた。

「ううー　なんでえ……」

第87話 見えちゃったけど!!…あっ(後書き)

ありがとうございました!!

第88話 ギン 行動開始！(前書き)

よろしくお願ひします！

第88話 ギン 行動開始!

怒りながら？教室を出て行ったモ力は・・・

「やだ・・・本当につくねに見られちゃったのかな？恥ずかしい・・・今日はどんなのだっけ・・・？」

そーっと 自分の下着を確認しようとしていた。

その時、

《・・・何をやっているんだ？》

「きゃああああ！」

またロザリオから声が聞えた。

「な・・・何だ・・・あなたロザリオか・・・」

《・・・何だとは何だ・・・ それより気をつけたほうがいい。》

「え？」

一瞬驚いたが、すぐに声の主が分かったため落ち着いていたが、話の内容に再び驚いた。

《あいつからは何かやばい匂いがする 強い力でも秘めている匂いだ・・・ あのギンって男には気をつけておけ・・・》

「!?!?!」

ロザリオの声の忠告で間違った事はこれまでに無い・・・

その為モカはその言葉を真摯に受け止めた。

翌日の登校中・・・

つくねはモカを見つけた。

「モカさん!」

話しかけると・・・

「わたし えっちな人ヤダ!」

顔を紅潮させながらキツパリ!

「えーまってよ!まだ怒ってるの!?!昨日のは事故なんだってばー」

「事故でもダメ!もーつくねなんて知らないもん」

つくねはまたまた呆然とした・・・擬音をつけるとしたら「ガーン」
だろう・・・

(本気じゃないけど・・・見られたお返しに暫く口聞いてあげないんだから)

モカは舌をぺろつと出して悪戯をしている顔を作った。

その顔を見るとモカはそこまで怒ってはいないようだった。

『おはよ。 2人とも。』

そこへやってきたのはカイト。

「カイト！おはよー！」

「ああ！カイト！！モカさんに言ってー！事故だってー！」

ヨヨヨヨとしがみついて来た。

『コラコラ！オレは男にしがみつかれて喜ぶ趣味は無い 離れる！』
手で頭を掴み離れた。

『大体オレあの時いなかったし・・・何にも見てないから言いよ
うが無いだろ？』

「あああ！！そーだった・・・」

またまた落ち込んだ・・・

ガーーーーーン・・・

そんな3人を見ている男がいた・・・

「なあちよつとええかな？そこの君ら」

登校中の女子生徒に話しかけていた。

「ちよつと教えてほしいんやけど」

ギン先輩だ・・・

いつもどーり

キララッつとさせ さわやかに話しかけていた。

「なんですかー？（いい男）」

「あのつくねってやつとカイトってやつ・・・モカさんといつも一緒におるけど なんなんかなあ？どつちかどつきあってるの？」

モカたちのほうを指を刺し聞いていた。

「（なんだモカさん目当てか・・・）えー！ よく知らないけど・・・ 確かにあの3人良く一緒にいるね・・・ カイト君はわかるけどつくね君はつりあわないと思うな」

そしてもう1人の女子生徒が、

「つくね君普通すぎ！モカちゃんって 女の私から見ても惚れ惚れする美しさなのに！カイト君はかっくいけどね ても・・・ホラ 噂じゃつくね君がカイト君より一歩リードしてるらしいじゃん。モカさんがつくね君の首にキスしてるの見た人もいるって！付き合ってるのかも・・・」

「!!!?」

その言葉にギンは体をブルブル震わせた・・・

「あかん！シャレにならんでエ！それはシャレにならんでエー！つくね君ツツ!!!」

頭を抱えながら叫びだした。

女子生徒はその行動に驚き逃げていった。

（こーなったらつくねをモカさんから嫌われるように仕向けなアカン！）

ギンは1年校舎へ向かった。

第88話 ギン 行動開始！(後書き)

ありがとうございました！！

第89話 毘に掛けられた月音（前書き）

よろしくお願いします！

第89話 罿に掛けられた月音

くるむが後を付け見たのは・・・

ギン先輩がつくねに覗かせて、

その瞬間をカメラに撮っていた。

おまけにつくねは、覗きの犯人として女の子達にボコボコにされて
しまい・・・

モカに何か言われて更につくねが落ち込んでしまった。

モカがつくねを嫌うのは願ったりだけど さすがにこのままじゃつ
くねがかわいそう・・・

わたしは なんとか誤解を解こうと決心するが・・・

.....

.....

なにやら廊下が騒がしい・・・

『くるむ・・・こりゃ何の騒ぎだよ・・・』

多数の女子生徒に囲まれたくるむを見て声をかけた。

くるむが男に囲まれてるなら分かるが、女に囲まれてるのはちょっと想像しにくいし・・・

「カイト!!--」

周りの女子生徒たちに真実を言っても信じてくれない。

それどころか庇ってるって言われて非難されてた時カイトが来た。

「カイト!聞いて!!--つくねが!!--!!--」

『?』

カイトにいままでのこと全て話した。

.....

時刻は夜・・・場所は校舎の屋上・・・

モ力はつくねを信じて待っていた・・・

そこへ

「何や・・・こんなところにおったんか　モ力さん　もう夜やで
ほら今夜は綺麗な満月や」

ギン先輩がやってきた。

「ギン先輩・・・」

モ力の表情は暗い・・・　夜と関係なく。

「聞いたでつくねの事　覗きで捕まった・・・そやな？　まだ監禁
中やって？　そんなやつのを待ってるんかモ力さん？」

「・・・・・・」

モ力は何も言わない、ただ顔を暗くし俯く・・・

「誰が撮ったか知らんけどこんな写真も出回ったで」

ギン先輩がそう言い　見せたのは数枚の写真・・・

「これはっ・・・!!!!」

「覗きの現場写真やな・・・　まあ　その写真はつくねくんには黙
つといたれな　あわれすぎる　それにモ力さんも　もうそないな奴
のことは忘れてしまえや」

モカの傍まで行き肩を抱く。

「今夜はオレがなぐさめたる」

）・・・くくく これですくねはアウトやな・・・ そんな次はカイ
トやな・・・ でも今日は満月・・・ 自分を抑えられへん・・・ な
）

・・・

監禁中のつくねは何とか脱出しようと葛藤していた。

「くそっ！！開かない！！！」

扉に何度も体をぶつけるが扉はビクともしない・・・

「獣だ・・・ギン先輩は女の子のためならなんでもやる・・・こ
のままじゃモカさんまで！」

・
何度も何度も・・・ぶつけるが・・・やはり扉はビクともしない・・・

絶望しかけたその時、

「・・・くね つくね」

窓から声が聞えた。

「くるむちゃん？」

「つくね！こつちよ！」

窓から手が見えた。

『世話の掛けるやつだな。やっぱ。』

そしてもう一人の声が聞えた。

「くるむちゃん！！カイト！！」

声の主に気付き歓喜の声を上げる。

『つくね！窓からちよい離れてろ！』

「・・・！！うん わかった！」

つくねは窓から離れる。

カイトは拳に意識を集中させる・・・

すると、

拳に光が集中していった。

『おらあー！』

そのまま拳を振りぬき・・・

ドカッ！！

壁に大きな穴が開いた。

『つくね 大丈夫か？』

壁を壊し中へ入った。

「つくね——！！」

カイトに続き、くるむも中へ。

「2人ともありがとう・・・ そうだ！モカさんが危ないんだ！！」

そして 3人は監禁部屋から脱出した。

第89話 罿に掛けられた月音（後書き）

ありがとうございました！

第90話 瞬速の大妖 人狼（前書き）

やっと投稿〜 いやぁ。。。・

時間がかかってすみません!!

今回はいつもよりちょっと・少し・多分長いです・・・ 苦笑

1話1話区切るのスッゴい下手糞なんで・・・ 我慢していただけ
れば・・・

改善できれば一番なんですけど・・・

はい！ 今回はギン先輩との絡みです〜 題名の通り！ よろしく

お願いします!!

第90話 瞬速の大妖 人狼

.....

「きゃああああっ 放してえ!!! 何するんですか先輩!!!」

夜の屋上でモカの声が響く。

「何って優しく抱きしめとるだけやんか？」

ギンは淡々と答えた。

「ちが.....! 今 へんなところ触ったでしょっ」

そうモカが叫んでも.....

「はは 今夜は満月やる? オレ満月の夜は力があり余ってすぐ自制心なくしてしまうっんや」

淡々としていた。

「だからじっとしとき 暴れられるとムラムラしておかしくなってるま
うやん」

そういつて唇を近づけた。

「やっ!..! いやあ やめて!..!」

モカは力いっぱい両手で突き飛ばした。

ド
ンッ！！

「わああああ！！」

ギンは突き飛ばされた衝撃で屋上の壁に衝突した。

「……つくねは つくねは覗いたのわざとじゃないって言ったもん……」

モカは渡された写真を放り投げた。

「だからわたしつくねを待ってるの！こんな写真よりわたしはつくねのことを信じたいから！！」

「……」

吹き飛ばされたギンは、無言でゆっくりとモカに近付いていく。

「ははは……マジか…… 驚いたわ…… ほんま健気やなあ…… 男2人もおるらしいのになあ……」

先ほどの突き飛ばされたダメージは全く無いようだ。

「つくね君のことはそんなに信じてるんやなあ…… 二股かける子とは思えんわ……」

「ふたま・・・何言ってるの!!」

モカは顔を赤らめながら言った。

「しってるでえ カイト君とも仲がええんやろ？ ずるいやん・・・
自分はそないなふうにしておいてオレは拒むんかい・・・でも
ますますホれてもーたわ モカさん・・・」

「!! そんなんじゃ・・・ カイトもつくねも・・・ わたしの
大切な・・・」

モカは戸惑っていた。

どちらも初めてできたかけがえの無い友達だ。

二股なんて・・・

うるたえていると、ギンの姿が徐々に変わり始めた。

「さつきも言つたとおり・・・満月の夜は自制心弱なるんやあ・・・
」

変化していた顔が・・・強大な妖気と共に変わった。

鼻・耳・キバ・・・その姿は・・・

狼だった。

「こないに・・・ 気持ちが高ぶってもうたら・・・ すぐ自分が

おさえられへんなるやないか こつなりや カづくでオレの女にな
つてもらうで！ 赤夜萌香！！」

まるで野獣……

ギンはモカに襲い掛かった。

「きゃあああ！！！」

その手がモカに触れる直前。

「ちよつと待ったアーーーー！！！」

何者かの声が聞えた。

ギンは驚き振り返ってみると、

また驚いた……

つくねだ。

でも おかしい。あいつは今監禁されているはずなのに。

「何でお前がここに……」

「つくね！ くるむちゃん！ カイト！！！」

つくねはカイトの浮遊術サイコキネシスで屋上まで運んでもらったのだ。

くるむが抱えて飛ぶと言っていたが……

力仕事？は男の役目だろう。

『放課後の屋上とはまた・・・ベタな・・・』

そのまま カイトは屋上に着地した。

「そうか・・・ お前らが・・・ よくもええとこで邪魔しよって・・・このっ！」

ギンの怒りが高まり・・・妖気も上がっていく。

「すっこんどれやあああ！！！！！」

ウオオオオオオオオオオ！！

『ウエアウルフ人狼・・・ 大妖がここにもいたよ・・・』

人狼はバンパイアに告ぐ2人目の大妖怪に分類する妖だ。

「これが・・・先輩の正体？？なかみ性格と同じで獣だ！！！！」

つくねは思った事をそのまま口に出してしまった。

『あー つくね？ 思ってたいてもなるべーく 口に出さない方がいいと思うぞ？逆上してくると思うから。』

「あ”・・・」

「んやとー コラアアアアア！！！」

忠告遅し！

興奮してる今のギン先輩には結構効いたみたいだ。

「そ・・・そんなことよりモカさんを！」

つくねはモカの方へ走り出した。

「ま！まってつくね！人狼はバンパイアと並ぶ大妖怪よ！！まとも
に言っても勝ち目は！」

くるむが叫んだが。

既にギンはつくねが走り出した瞬間に既に動き出し、

ドガアッ！

足払いをしてつくねをモカの方へ蹴り飛ばした。

「調子にノンな！ポケが！！！」

「つくねー！」

つくねとモカが絡まりながら倒れた。

「きゃああ」

「死にたくなけりゃあな・・・モカさんから手えー引けや つくね
君・・・」

ゆっくりとした足取りでつくねの方へ近付く。

そして。

「さっさと去ねやア！！！」

その声と同時に走り出した。

……がつ

ツルツッ！

「な……！！なんや？？ 床が滑る！！！！ ギャン！」

ズガアアア！

ギンそのまま滑って行き屋上のフェンスへ激突した。

ギンの移動速度のそれはかなりの速さだ。

その速さのままぶつかったのだから……

『痛いわな……そりゃ……』

床に手をつけたカイトが皮肉じゃなく実際に感じながら言った。

転倒けさすだけの筈だったのだが……

サスガは人狼と言ったところだろう。

あの速度のせいでそのままフェンスの方まで滑って行ったようだ。

慣性の法則？だっけ？？ちがうか・・・

「てめえ・・・か？　カイト・・・　何したんや！！　・・・これ
れは」

床を良く見てみると・・・　氷が張っていた。

『セリシウス・ドメイン
氷結領域・・・　ツルツつと滑ってもらおうかと思っ
てな。　頭に血が上りすぎだから回りが全然見えてないんだよ？ギン先輩。　ち
よつと頭冷えただろ？』

これは皮肉をたっぷりと込めた。

「なめよってからに・・・」

ギンは鋭い目で睨みつける。

「カイトかつこいい」

「がばーーッ！！」

『わあー！！！！』

むにむにむにっ！

くるむは胸を押し付けながらカイトに抱きついた。

『つつつ！！（息ッ！息ッ！！またこれ！！）』

さっきの緊迫していた空気はどこに行ったのだろうか？

その光景を目の当たりにしたギンは、

「う……う……」

ワナワナと体を震わせていた。

それに気付いたカイトはくるむを引き剥がした。

『つつ！！ぶはああ！！くるむ！！頼むから今はちょっと空気読
んで！！危ないから！！』

くるむの肩をつかみながら言った。

もちろん顔は目の色と同じで真っ赤……

「じゅめん／＼／」

くるむは真っ赤なカイトにキュンっとしながらもカイトを離し離れ
た。

その時！！

「じらやましいやないか……」

……

『「はい?」?』

コケにされて怒ってたんじゃないんだ・・・

ええつと・・・

この空気に困っていると・・・ 苦笑

カアアア!!ギユウアアア!!

ギンの背後から強大な妖気が迸った。

第90話 瞬速の大妖 人狼（後書き）

ありがとうございました!!

もうちょっとで1巻終了了・・・ まだかあ・・・ 作者的には早く4姉妹の皆さんや、中国などに行きたいんですが・・・ 苦笑

がんばりますので よろしくお願いします!!

第91話 女たらしの末路・・・(前書き)

よろしく願いします！

モカさんガンバツテます！

カイトくんもがんばってえーー 苦笑

第91話 女たらしの末路・・・

つくねがカイトが戦ってる隙にモカの十字架を外して封印を解いたのだ。

「・・・赤い瞳・・・まさかこれはっ！ バンパイア！」

モカはその赤い瞳でギンを睨みながらその場に降臨した。

並みの妖ならばその行為だけで萎縮するものなのだが。

「・・・フツ フ・・・フフ これがモカさんの正体なんか・・・
ハハハハハ！！美しいでッ！ 最高やッ！ 変心後の姿も美し
ぎや赤夜萌香ッ！！！」

どどーんって感じの擬音を付けたい・・・

さっきのカイトとの小競り合いはすっかり忘れてしまったみたいだ。

あんなに青筋立てて睨んでいたのに・・・

『・・・たいしたもんだな あの先輩・・・ここまで来る
っ』

「ははは・・・」

完全に忘れ去られた2人は苦笑しかでなかった。

「バンパイアでもかまわへん！ブツ倒してでも必ず俺の女にしたるッ！」

そう言い放ちモカに飛び掛った。

「……！！ふざけるな このっ！」

モカはカウンターの手刀による突きをするが……

ヒュンッ！！

「どこ狙とるんや？ こっちやで」

目の前にいたはずのギンが屋上への階段のある建物のほうまで移動していた。

「きつ……消えたッ！」

「疾いッ 物凄い素早さだわッ！」

つくねとくるむはモカの攻撃をあっさり回避したギンに驚愕していた。

『残像だけは追えた……厄介だな。あの速さは』

相手の速度の差はどうしようもない事だが、

戦いに時間が経つに連れて目は慣れてくるものだ。

だが、慣れるのかどうか分からない程のスピードだった。

よしんば見切ることが可能だったとして。

そこまでの時間を与えてくれるとは思えない。

「そうだわ！カイト！！さっきやったみたいにもう一度滑らせちゃえば！」

くるむがそう提案するが。

『同じ手が2度通用すると思ったら痛い目をみる。それにあのスピードは地面の一点を蹴って即座にその場所へ移動しているみたいだ。地面との設置時間が短すぎるからさっきのようにはうまくいかんのだ。』

「じゃ じゃあ・・・どうすれば！」

つくねが声を出そうとした時、

ギンの瞬速が再び発動した。

「バンパイアが「力」なら人狼は「速」の大妖！そしてこのスピードは月の光が強いほど速さを増すんや！今夜は月が最も輝く満月！
！！」

そう言いながら屋上を縦横無尽に駆け巡る。

それはまるで閃光だ。
ライトニング

「満月の夜の人狼は無敵やでッ!!!」

残像を残しつつ移動している為まるで影分身をしているようだ。

「なっ……!!(見えない……!これが人狼……)」

モカに動揺が走る……

これほどの速度はお目にかかったことが無いからだ。

(こんなモカ初めてみるな……ちょっとラッキーかも……よし!手は考えた。)

カイトは周囲に呪文形式の陣形を描く。

ゴウッ!!

今は無風の夜の筈なのに不自然な風が生まれた為 2人は驚いていると。

『ちよい 2人ともオレから離れてて、飛ばされるかもしれないから。』

挙動不審にしている2人に言う。

振り向いた2人はその不自然な風はカイトから生まれていた事に気付いた。

「何を!？」

『大丈夫。モカを助ける為さ。まあ あくまでフォローだけだな。
(戦う相手取つたら モカにボコられそうだし・・・)』

そう言い軽くウインクしながら 2人を見つめた。

いつも信頼している人の顔だ。

言葉は少ないが信頼するに値する。

2人は互いに頷きカイトと少し距離を測った。

『よし! 天海に住まわれる数多なる精霊達よ・・・
エレメント 我が声に耳を傾け、地上に慈悲なる涙を・・・』

カイトの周囲が再び風の様な物に包まれる。

そして空に手を掲げた。

『雨奇晴好・ラナリオン』

空に向かってカイトが集めた風?が解き放たれた。

「な・・・なにをしたの?今の??」

くるむもつくねも顔に????を作りながら話しかけた。

『すぐに分かるもーちよい待って』

そう言うとモカの方を見た。

モカはまだ一太刀も浴びてはいない様子だったが、明らかに押されていた。

「くそ・・・ やはり厄介な速さだ。」

「くくく・・・やるなあ モカさん！このワイの速度でここまで足掻くんか！大したもんやでえ・・・ でもな・・・」

そう言うとモカの方へ一気に距離を詰めた。

「満月が出てる限り勝つのはオレやー！ーッ！ー！」

ドガアアアア！！

ギンの一撃がモカに・・・

「ああッ！！モカさー！ーん！！」

つくねは驚きながらモカの方へと駆け出そうとする。

『大丈夫・・・だ つくねよく見てみる。』

横で見ていたカイトは顔をニヤッとさせながらつくねにいった。

「え……?」

カイトに言われ冷静さを少し取り戻したつくねはモカの方を改めて
みってみると。

モカはギンの腕をがっちり掴んでいた。

「ば……ばかな…… 止めよった!なんでや?」

さつきまで殆ど対処出来てなかった攻撃よりさらに速度を上げた一
撃をあっさり掴んだモカにギンは驚愕していた。

その時、

ポタツ……

つくねの頬に冷たい感触がした。

「雨!? しまった!!月が雲に隠れとるやんけ!! 月がでてへ
んとオレ力でーへんねやー……ッ!!」

うるたえだすギンを見てつくねは思わずズッコけた……

「しかし何でや!今日は天気晴れのはずやで!! 満月で晴れや
からオレ行動したのにー」

1人でうるたえてるのはギン。

モカは、なぜ雨が降り出したか分かっていた。

カイトと目が合いウインクしてきたからだ。

(ちっ……余計な事を……)

プイツと背を向けギンを掴む手の力を上げた。

メキメキメキツ……

その増した力と殺気に気がついたギンは、

「フツ……待てあせるんじゃない 月がのーなっても人狼をナメたらあかんで 大妖怪の底力見せたるわ!!」

ギンも手に力を込め。振り上げた。

「おとなしくオレの女になれや モカアーーーーー!!!」

襲い掛かるが。

ゴキヤツツ!!!

モカの蹴りがギンの眉間にカウンター気味にヒットした。

これほどのゼロ距離接近戦では「速」よりも「力」の方が圧倒的に有利だ。

ましてや腕は「力」の大妖に握りあげられている・・・

あわれギンはそのまま屋上のフェンスへ・・・

「ギャン!!」

ガツシヤアアン!!

激突した。

だが不運はまだ終わってなかった。

メキメキメキツ・・・

モカのけりの威力とギンの体重でフェンスが悲鳴を上げ・・・

ガツシヤアアン・・・

「あつ・・・・・・・・・・・・・・・・ キヤイイイイイイン!!!!」

グチャツ・・・

そのまま屋上から姿を消した。

「軟弱者が・・・お前に私の相手が務まるか・・・ 身の程を知れ。」

『ははは・・・さすがにここまでになるとは思わなかった・・・
天罰ってやつかな?』

「ぞくぞくって感じた・・・ 死んだ??」

「だ・・・だよ・・・ね・・・?」

苦笑しながら3人はモカに近付いていった。

「私に言い寄るならまず自分を鍛えなおす事だな・・・」

「えっ・・・?」

つくねは驚きながら自分自身を指差した。

『はははー! モカにそう言われちゃあ 頑張るしかないよな? つくね。』

笑いながらつくねの首に腕を回す。

「ぐええ カイトっ!! 苦しいって!!」

「ああ! わたしも!!」

くるむもつくねに引っ付いた。

「くるむちゃん!」

つくねは照れながらジタバタしていた。

その時カイトとモカの目が合った。

「何をいつてるんだお前もだぞ・・・？カイト。」

『ん？なにが？？』

カイトはつくねを開放し（まだくるむがいたけど・・・）不思議そうに聞き返した。

モカは顔を背けながら。

「言い寄ると言うのなら、鍛え直せ！っといっただろう・・・以前私に一撃入れられていたしな・・・」

照れてい「ギロリッ！」・・・

なんでもありません！！

『ああ・・・ははは そういうことね。まあ善処はする。・・・しかし今日は結構得したかも・・・モカの動揺した顔も見れたし・・・』

最後の方はボソツツと言ったのだがぼつちり聞えていたみたいだ。

ビュン！！

鋭い回転から、回し蹴りが飛んできた。

ドッバシンッ！！

『・・・心なしか・・・?? この会話する度 パターン 技が強力になって
いつているような・・・』

受け止めながらモカに聞いた。

ううん・・・ 防いだ腕が痺れるな・・・ 苦笑

「カイト 分かっているやってるだろうが！ 最初はそんなキャラ
だったかお前？ 減らず口を叩けるんなら私自ら鍛えるのを手伝っ
てやるぞ？ 私はまだ暴れたりないのだが？」

物騒なことを言ってきた。

『結構これはこれで反射神経を養う事が出来てるな・・・それに・・・』

そういうとカイトは少し顔を赤らめた。

「む・・・？なんだ？」

いつもの表情じゃないカイトを不審に思ったモカは聞き返した。

『ああ・・・ なんだ・・・ その・・・』

顔を背けた。

「？」

『鍛えなおしてくれるのは魅力的だが・・・ なるべく蹴りは控え

て欲しいかな・・・ 目のやり場が困る・・・』

モカの蹴りは殆どが見事なハイキックだ。

無論着ている服は陽海学園学生服「スカート」だ。

今回の事件の原因でもあるスカートの中の絶景が蹴りを受け止めた事によって見えてしまったのだ。

中の絶景が・・・

オマケに鋭い回転からの回し蹴り・・・

そりゃめくれるわな／＼

「つつつ！！！！」

言われている事の意味に気付いたモカは、

モカは受け止められた足とは反対の方の足でカイトの側頭部を蹴り上げた。

ドガアア！

『ぐえっ！！！』

完全にそっぽ向いていたためまともに食らってしまった。

『痛いって・・・モカ・・・』

尻餅をつき、座り込んで受けた場所を擦りながら答えた。

「ふん！身の程を知れ！馬鹿者が！！」

モカは顔を真っ赤にさせていた。

『はは・・・ ははは・・・』

「フツ・・・」

最後は互いに笑いあっていた。

モカ（裏）とこんなに笑いあったのははじめてかもな・・・

そのころつくねは・・・

「やっふうー！ー！つーくねー」

「むぐぐぐ！！（くるむちゃん・・・！！息ツ・・・死！！）」

くるむのハグハグ攻撃？に襲われていて呼吸困難になっていたのは
2人は知らなかった・・・

翌日の新聞部初仕事の最中。

4人は新聞を配布していた。

「号外ー号外ー！ 新聞部の号外です！」

朝の登校の時間を利用し新聞を配っていた。

『お！ あそこに掲示板あるじゃん！あそこも利用しない？』

「あつ！ほんとだ！うん丁度よさそうだね。わたしが張ってくるよ。カイト新聞一枚頂戴！全部渡しちゃったから。」

『ほいほい、おっけー！』

カイトはモカに号外の一枚を渡した。

「うん！」

モカは掲示板まで行き、踏み台を使い新聞を掲示していた。

「まさかこんなのがオレ達新聞部の初仕事になるとは思わなかったね」

つくねが掲示板の側まできた。

「ほんとだよねー！」

モカも笑いながら答えた。

「・・・あ ねえ？モカさん・・・ あ・・・」

振り向いた先には丁度モカのスカートの中が見えていた・・・

いやー 懲りないなーつくね君。

「きゃあ！今上見ちゃダメ！！」

モカの後ろ蹴りがつくねの顔面に炸裂！！

「ぐへー！！」

つくねは後ろに仰向けに倒れた。

「つくねー！！」

『懲りないな・・・もうフォローせんぞ？つくね。』

カイトは笑いながら、くるむはあわてながらつくねを見下ろした。

その上でモカは・・・

「もうえっちなのは懲り懲りだよ・・・」

っと顔を赤くさせながら呟いた。

〈号外内容〉

青野月音は無実！！

のぞき騒動の真犯人は2年1組 森丘銀影でした・・・！

にこやかスマイル写真付き！もちろんカメラ持ってる 笑

そのころのギン先輩は・・・

体中に包帯を巻いていたのだが、

真相を知った女子生徒たちはそれでも許さず追いかけていた。

まあ 当然だろう。

女の子達は何で怪我してるかしらないし〜

知りたくも無いみたいだしー

「このー！ー！！」「コロすー！ー！！」「まてえー！ー！ー！！！！」

しかしギン先輩は・・・

「フツ・・・どないしたらあの赤夜萌香をおとせるんやらなー」

追われながらも考えている事は変わらず・・・

ある意味 男らしいのかな？

覗き・盗撮は犯罪だよ

よいつの昏（読者）は真似しないでね

第91話 女たらしの末路・・・（後書き）

ありがとうございました！！！！

やっとー！！

原作1巻分の話終了ですね！

次回の話で例の子が初登場します！トンガリ帽子が似合う子がわかる方にはわかりますね

よろしくです！！

一口妖怪辞典： 作者都合上w

瞬速の大妖 ウェアウルフ

凶暴で野生的な獣の妖。

普段は人間の姿をしているが、月夜の晩に狼に変身する。

16世紀以降は月との関係が知られ、月の光が強いほどその力は増すと云う・・・

はい！そのまま原作紹介です！！

この先輩は強いんだーって思いますが・・・

まあ・・・ 主人公達には勝てませんね！補正的な意味でも

カイトくん！！戦ってエ！！

第92話 試験結果と魔女っ子（前書き）

よろしくお願いします〜!!

じつは!! 作者はこんなに試験結果がよかった事なんか一度もありません!!!

.....

いいじゃん・・・小説で現実逃避しても・・・ぐすん

まあ・・・冗談は置いときまして・・・遅くなりましたが、駄文ですが見てやってください。

第92話 試験結果と魔女っ子

さてさて・・・

先週？はいろいろありましたが・・・

忘れちゃならないことがひとつ！！

妖怪が通う学園なのだが、

学生の本分は学業！！

『そう！その通り！！間違っても部活で軍隊みたいなしごきを受けるだけの為に、がっこーにきてるんじゃないー！！！！』

ぐっと拳を握り上に上げた。

「・・・・・・・・カイト？誰に言ってるのさ？」

後ろで不審者を見るような視線はつくね。

『・・・・・・・・あ いやあ・・・ すまんすまん・・・ いろいろあったんだよ・・・・・・・・』

ず～～んってな感じで肩を落としながら答えた。

「あははー！まあ　しつかりしてよ。カイト！！　ほら！試験結果発表今日だよね？皆で見にいこー！」

側にいたモカが早速行こうと提案。

『そうだな。（過去？に捕らわれてちやダメ！文字通り生まれ変わったんだし・・・）よし！2人とも試験はばっちりだった？』

気を取り直し2人を見ながら聞いてみた。

「うん！それなりにね！」「・・・ううん・・・」

おんやあ・・・

対照的なお2人だこと・・・

『つくね大丈夫か？まさか・・・欠点とかは・・・』

心配そうに聞くと。

「あああ！それは大丈夫大丈夫！カイトだって教えてくれたし・・・欠点取ったらあわせる顔ないさ・・・でも・・・張り出される事なんて無かったから・・・」

ああ　なるほど。

成績があらわになるしな。

『ま、いいじゃないか。受け入れろ。これがこの学園の方針なんだし、競争心を煽る良い事だとも取れるし。とりあえず、行こう。』

「うん・・・」「うん！」

台詞だけでどっちがつかねかわかるなあ・・・

まあ 元気出してください！ 苦笑

ここは妖怪たちが通う秘密の学校

《私立陽海学園》

ここではたくさん妖怪たちが人間社会に適應するための勉強をしている。

妖怪ならではの授業もあるが教育の課程は人間カリキュラムの学校が基本ベースだ！

まあ 所謂基本的普通科の授業「5教科」+家庭科などの実習。課外学習などがある。

んで もちろん5教科は試験があり、人間の学校と同じ中間テスト、期末テストなどがあるのだ。

つまり ここにいる妖怪たちはいずれは人間の社会の大学や企業へと旅立っていくものもいるのだ。

陽海学園には大学はありません。高校以上は人間社会で学びます。

ざわざわざわ……

ここは 学校玄関の側。

試験結果が張り出されている掲示板前である。

「うわあああ！！テスト結果がはりだされてるう！！！！」「みつ
みたくねー！！！！」「はいつてなーい……」

様々な声上がる……

1年生・256人中100番までの成績が張り出されている。

あかしやモカ
赤夜萌香……13ばん！！

「すげえー！！モカさん13番だって！！」「学園一の美しさを誇
りながら頭も良いなんて！！」「性格も良いし！！！！」

モカの周りに男子生徒が集まる。

「……完璧だ！！理想の女性NO.1だー！！！！」

一斉にハモツた……笑

「きゃ……」

対するモカはびっくりしていた。

『はは……すげー 人気だなモカ。』

その男子生徒の間を縫うようにモカに近付いていったのは御剣怪斗。

みつるき かいと
御剣怪斗・・・15ばん!!

「きゃー!!」「カイト君だ!!」「やっぱりカイトくん頭良い!!」「今度勉強一緒にしよーよー!!」

カイトの周りにはモカとは逆に女子生徒が集まる・・・

また襲われるかと思ったが、

ササガに、広場には人数が多いからリアル鬼ごっこするには狭すぎるようだ。

歓声だけだった・・・

『ほっ・・・』

あからさまにほっとしていた。

「あははは。カイトも人の事言えないじゃん」

『・・・ははは・・・追いかけれないだけモカよりマシだよ・・・』

やれやれっと思っっていると。

「モカさーん!カイトー!」

声が聞えた。

この声は……

あおの つくね
青野月音……128ばん

見事にど真ん中。

よく言えば平均レベル。

悪く言えば平凡……

「……」

ああ 黙っちゃった 「うるさーい!!」

「ええつと……すごいなー やっぱり2人とも…… オレも
見習わなくちゃ」

『まあ 勉強が全てじゃないからな つくね。まあ 教えていた身
から言えば 赤点とらなくて良かったよ。』

カイトはつくねの結果に対しある程度好評。モ力は、

「そんなこと無いヨ!」

と照れていた。

「(よし! もう勉強得意じゃないのばれてるから……) 今度モ
カさんも教えてよ! 3人で勉強しよ!!」

(おいおい・・・ここは2人でって言うだろ?)

小声で肘を突きながら言う。

(いやいや・・・まずはホラッ! 3人でさ・・・)

つくねも返す。

はあ・・・つとため息をしていると。

「じゃあ!! そのかわり血を吸わせてね　つくね!!」

つくねはズッコケた!

『ははは・・・さすがモカ。』

笑っていると・・・

「カイトもだよ!　前に吸わせてくれるって言ったじゃん」

『げっ!!』

モカのターゲットはつくねだけじゃなかったんだね・・・

その後は、ワイワイ騒いでいた。

もちろんオレは血は死守!!

そんな3人を見ている者がいた。

せんどうゆかり
仙童紫・・・1ばん

「・・・・・・・・」

ドキドキツつと僅かに緊張しながら3人を見ていた。

その生徒は周りの生徒に比べ一回り小さい子である。

高校生には見えないほどに、なぜなら・・・

「おめでとう・・・紫さん　また一番だったようですね」

その背後から声を掛ける者がいた・・・

説明の邪魔された!!!

「さすが天才少女・・・　まだ11歳なのにとび級で入学したのは
ダテじゃなさそうだ・・・　でもいいですか調子に乗らないでくだ
さい　私から見れば君なんて乳くさいだけの青二才なんですよ」

生徒2名を引連れゆかりに近付いていった。

「・・・委員長」

ゆかりはオロオロしていた。

しかし　続けざまにはき捨てた。

「だいたい何ですか この格好は！完全に校則違反でしょう 私は
はみ出し物が大嫌いです！」

そう言っつてゆかりを突き飛ばした。

「きゃっ や・・・やめて下さいです〜」

その騒ぎに周囲の生徒が注目する・・・

ざわざわざわ・・・

「なんだなんだ・・・？」「ホラ 例の天才少女の・・・」「また
自分のとこの学級委員長にいじめられているよ・・・」

皆口々に呟くが誰も止めたりしないようだ・・・

その理由は彼女の正体のせいでもあるだろう・・・

「君の存在は学級委員長として 頭が痛いですねえ・・・」

周りの声が聞えたせいか・・・

少しイライラしながら顔を近づけた。

「どうせ正体は魔女まじなんでしょう？汚らわしい！君と同じ学級つて
だけでヘドがでますよ」

その一言はゆかりも怒った。

目をキッと睨ませながら。

持っていたステッキで落ちていた石を操ったのだ。

そして、

ヒュッ！ ゴッソーン！

「でっ！！！」

男の後頭部に直撃した。

間抜けな顔をしながら・・・苦笑

「プッ あはははー！ ザマミロですー」

ケタケタケタと笑っていると・・・

「何だコラアツ！！今何をしたんですか！君はアーーーーーッ！！！！」

頭の一撃と笑われた屈辱・・・周囲の視線・・・男は逆上し、

両手を振り上げ襲おうとした。

「やめてっ！！！」

2人の間に割ってはいる生徒がいた。

第92話 試験結果と魔女っ子（後書き）

あの委員長・・・・・・・・なんかキライだあー！
笑

ありがとうございましたー！

第93話 宣戦布告！（前書き）

よろしくお願いします！！

第93話 宣戦布告！

止めに入ったのは・・・

モカだ。

「・・・ごめんなさい 通りすがりなんだけどほっとけなくて・・・
女の子に暴力はやめて下さい・・・」

モカが両手を広げ、ゆかりを護るように立ちはだかった。

「何言ってるんだ！委員長に石ぶつけて暴力振ったのはそっちの・・・」

ガシッ！！

委員長の側近にいた男は最後まで発言できなかった。

首に異常な力を感じたからだ。

『おいおい・・・こんな小さい子1人にお前ら何人がかりだよ。』

ミシリッ

首筋に痛みが走る・・・

「いだだだだ！！！！だっ誰だ！！！」

カイトは首を握り上げそのまま委員長の側まで放り投げた。

何とか、委員長は仲間を受け止める事に成功していたが、

まあ、いきなりやられた為、当然のように声を荒げた。

「つく！何ですか！！あなた達はあ！！！」

大声で叫ぶ。

『・・・委員長ってやつは クラスの代表・・・ 模範にならなくちゃーな・・・ いじめなんてしちゃーな。』

こちらも負けず、結構大声で言う・・・ギャラリーも集まってきた。

「おい・・・ モカさんとカイトがいじめを止めに入ったぞ。」「カイトくん・・・素敵・・・」「そうよねー 大人気ない感じ」

ざわざわざわ・・・

あまりに回りの注目を集めた為・・・

「くそつ・・・ (ギャラリーが多すぎますね・・・) いい
ですか！紫覚えておきなさい！行きますよお前達！」

バツが悪そうに逃げる様にその場を後にした。

「あつ ありがとうございますっ 助かったですっ わたしは仙童
紫っていいいます」

そこは、校庭のベンチ。

ゆかりは助けてもらった2人にお礼を言っていた。

「いいのよ！ねえ カイト！つくね！！」

『ま、あーゆー嫌味なやつは好かんから、大した事じゃないさ』

「そうだね・・・ (オレ何もしてないけど・・・)」

それぞれがかまわないと言った。

「あつ！そーだ！聞いてたよ。同級生なのに11歳なんだってね！
しかもテスト1番？頭良いんだねー ゆかりちゃんて！その服も素
敵だし。」

(11歳って小学生???)

『へえ・・・ そりゃ凄い テスト1番も大したものだな！』

2人で褒めまくり！

ゆかりはテレながら慌てていた。

「……やつ そのっ 素敵だなんて…… そんなことないです
っ…… 私なんてっ!!」

おろおろ あたふたしていた。

ううむ 初々しい。 笑

「ステキなのはキレイで優しいモカさんの方です〜 だって実はわ
たし ……」

ゆかりは がばーっ とモカに抱きついた。

「わたし モカさんが好きなんです〜」

「きゃあ!」

「『えええー!』」

突然のハグシーンに驚く2人。

「隣のクラスのモカさんを見かけるうちにだんだん好きになっちゃ
ったんです…… 助けてもらった今心が決まりました! 付き
合ってください…… 嫌ですか?こんなわたしじゃ……」

うるうるしながらモカを見つめた。

「え……あの友達なら……」

勢いが凄い・・・断れないわな・・・

「わーい うれしいです〜」

ぐりぐり〜 ハグハグ〜

「きゃあー」

『ははは・・・ 元気いっぱいだなこの子・・・』

「カイトさんもありがとうです！ モカさんほどじゃないですけど
！あなたの事も好きですー（ライバルですけど・・・）」

モカに抱きつきながらこっちを見て言った。

『はは・・・ 光栄だよ。』

ゆかりはそのまま抱きつきながら、一緒について来た。

「わあ モカさんて見た目より胸おつきいですー」

胸をモミモミしながらモカに抱きつきながら歩いていた。

「ひゃあ・・・」

更に・・・エスカレートし・・・

「やわらかーい！こんな夢見たいです〜」

モ力を押し倒していた・・・

「やめ・・・ 何だか力が抜けちゃう」

なんとも・・・百合的な・・・

『まあまあ・・・ 元気良い事・・・ 仲が良い事・・・ は良い事
だよな・・・？つくね』

「いやいやいや！！止めなよ！ 待ったー！ー女の子同士で何やってんの！ー！」

つくねが止めに入るとあからさまにゆかりは不機嫌な顔をした。

「ジャマしないでくださいです！ わたしあなたの事もよく知ってるんですよ！」

青野月音

成績 …… 中の中

運動能力：人間並

趣味特技：なし！

まさに絵に描いたような平凡男！！」

ががー！ーん・・・

（まあ・・・子供は素直だからな・・・これは大ダメージだな・・・）
つくねは頭にきている様子だった。だけど相手は子供だから・・・
更にゆかりは、

「モカさんとはまさに月とスッポン！カイトさんならともかく！！
あまりにもレベルが違いすぎです〜！」

つくねはカイトさんならこの部分で更にダメージを食らっていた・・・
結構・・・かなり気にしていた部分なんだって・・・苦笑

「わたしはモカさんが好きだから・・・あなたみたいな人に美しいモカさんを汚されたくないです！」

「・・・・・・・・・・」

つくねは何にもいえなくなった。

（おい！あんまし気にすんなよ・・・子供が言ってる事だ。つくね・・・）

（うっうっ・・・でも・・・）

やれやれ・・・

「だから宣戦布告ですー！ー！マジカルステッキ！」

ジャーーンと取り出したのは可愛らしいステッキ。

『おっ 魔法具だ。』

「そうですー これを使って二度とモカさんに近づけなくしてあげるです〜」

ステッキを掃除道具入れに向ける・・・

すると・・・ 箒・ちりとり・バケツ・・・掃除用具が次々飛び出し・・・

「なああああああ!!」

ドカア ズガア バキヤアン めしゃ・・・

つくねを蹂躪した・・・

「つくねー!!」 『おいおい大丈夫か?』

「な・・・何コレ・・・?」

ポロポロになってますね・・・

つくね君。

「コレは魔法です〜 カイトさんが言った通りこの魔法具マゲで魔法を発動して操ったんですー!」

そういうと嬉しそうにポーズをとりながら、

「わたし魔女なんですー これからはモカさんに近付く男はわたしの魔法で撃退しちゃいますー」

バアーーン!!

4人目正体カミングアウト!!

「正体明かすの校則違反じゃ・・・」

「うるさいですー モカさんに近付かないでくださいですー!」

そのまま掃除用具を操り、

ドカア ズカア ペシペシ! ぐちゃ・・・

「ぎゃああ!!」

再びリンチ!

『まつ・・・まーまーそこまでしなくても・・・な?』

カイトはゆかりを説得していた。

「むう・・・カイトさんがそういうのなら・・・今の所はカンベンしてあげますー! でもカイトさん・・・?」

『ん?』

カイトのほうを向く。

「わたし達はライバルです。モカさんはカイとさんにも渡さないです！カイトさんに負けないです！！」

ビシツつとステッキを向けられた・・・

『ははは・・・まあ 仲良くやろうな？』

そのままステッキを手で下げ、頭を撫でてあげた。

「きゃっ！何するですー！ライバルだって・・・ふああ・・・」

『ライバルよりは友達の方がオレは嬉しいさ。出来ればつくねもな。』

苦笑しながら撫でていた手を離した。

（誰かに撫でられたの・・・パパさんママさん以外で初めてでした・・・ ううん！カイトさんは強力なライバルです！！）

「もう！子ども扱いしないでください！」

顔を赤らめながらモカの方へ向かって飛びついていった。

「うううう・・・」

哀れつくねは・・・

ポロポロになっていた。

その日の部活・・・

「え？ 仙童紫？」

部室にいたのはくるむとつくね。

モカとカイトはクラスの用事で遅れていた。

カイトがモカにくつついてもつくねの様に　そこまで攻撃的じゃないみたいだ。

「うん・・・すっかり困っててさ・・・」

つくねは度重なる掃除用具リンチでボロボロになっていた。

「新聞部の活動もあるのにゆかりちゃんのおかげでモカさんに話しかけることも出来ない・・・だからほんとはオレとモカさんがあたっていたクラスの用事なんだけど、無理言っただけでカイトに変わってもらったんだ・・・」

シュンっとしながらくるむに相談していた。

（やふ〜　おかげでわたしはつくねと2人つきり　カイトがいなのは残念だけど！　とりあえずナイスよ！仙童紫！！）

くるむはガッツポーズをして喜んでいた。

「わたしもその子の噂知ってるよ！天才少女って言ってもまだわがままの子供らしくて、悪戯ばかりして二組の人たちに嫌われてるんだって」

顔を近付かせながらつくねと話した。

「えっ・・・ そうなの??」

つくねは若干引きながら話を聞いていた。

つくね達が話している時・・・

その部室の外では・・・

「モカさんにぞっこんなつくねさんは念入りに潰しとくです！マジカルアイテム！わらわらくん!!」

ゆかりはどこからか わら人形を取り出した。

そして、髪の毛のようなものを入れ・・・

「えい！」

わら人形を操り人形の手で人形の頭部を強打した。

すると・・・

めしい・・・

つくねが自分で自分の顔面を殴っていた。

目の前で見ていたくるむはワケが分からなかった。

「ちょ……つくね……!!」

ぶはっ……!!と鼻血をながす……

「わぁ……!!体が勝手に動く!!」

暫く1人格闘が続いた。

「ちょっと遅くなっちゃったね。」

『まあ 仕方ないさ。まあ、まず間違いないのは、ゼーったいオレ達のせいじゃない!!』

理科担当の先生に頼まれ資料を運んでいたのだが……

理科の実験で使う魚がいなくなった!と言うことを、言われて探しに戻っていた。

『サカナ!ツていう時点で嫌な予感はしてたけど……授業で使うものに手を出すなんて……』

「あははは・・・おかげで大変だったね・・・」

そう・・・資料のサカナがいなくなってしまった為、2人でもう授業が終わった上級生の理科担当の教師のところまで借りに言ったのだ。

もちろん猫目先生（犯人）にはきつく言って！

そして 部室前まで来た。

「ん？何か部室が騒がしいよ。カイト。」

『ほんとだ・・・ なーんか嫌な予感が・・・まあ とりあえず入ろう。遅れてるし。』

「そうだね！」

モカは遅れてごめん！ツといいながら部室に入った。カイトもそれに続いて入ってみると・・・

むにゅむにゅ・・・

なんと・・・つくねがくるむの大きな胸を揉んでいたのだ・・・

「ななななな！！！！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

恥ずかしながらカイトくんはフリーズ、モカは取り乱していた。

まさか・・・つくねがあんなことするとは・・・

「あああ！！！モカさん！！こっ　これは違うんだー！ー！体が勝手に！！！！」

「きゃああん！」

胸を揉まれているくるむもさすがに恥ずかしいのか顔を赤くしていた。

「ちよっと！くるむちゃん！！また魅惑チャームの術使ったんでしょー！」

モカは顔を背けながら、くるむに言った。

「なっ！違うわよ！！そんなことしてないわ！！」

くるむがガバツッと立ち上がったその時！

つくねの手がくるむのスカートの・・・くるむのパンツを掴みそのままずっこけた・・・！！！！

つまり・・・

「やああああん！！」

×××××××！！！！

.....

第93話 宣戦布告！（後書き）

ありがとうございました！

第94話 ゆかりの中の闇(前書き)

よろしくお願ひします！

第94話 ゆかりの中の闇

衝撃的な光景を見てしまって……

暫くフリーズ……どころか シャットダウンしそうになったよ……

『……やれやれ 外にいるのゆかりちゃんだろ？ 出ておいで……』

窓の外に声を掛ける。

初めはあまりの光景に気付いてなかったけど、

冷静に観察……してみると、

若干の魔力を感じたのだ。

ゆかりはビクツツと体を震わせてしまったため、

彼女のトンガリ帽子が窓から見えてしまった。

「あああ！ゆかりちゃん！！」

『やっぱり・・・』

観念したのかゆかりは部屋まで入ってきた。

「なんで分かったですか？」

『魔力が若干感じたからかな？それに・・・つくねを攻撃するのは今のところ君だけ。・・・だろ？』

腕を組みため息をつきながら答えた。

その時！つくねはもう我慢できなくなったのか。

「そのコをなんとかしてくれー！ー！ー！　もー！完全にあつたまきたー！ー！ー！」

だああああー！ー！と大声を出し訴えた。

しかし・・・ゆかりは謝るところかモカの後ろに隠れ。

「ベー！ー！ー！」

なんとも可愛らしくあつかんベー！ー！ー！

ぐっ！ー！ー！

つくねは拳を握りこんだ。

頭に四つ角をたつくさんつくって・・・

そのつくねをみてモカは・・・

「つく・・・つくね・・・まあまあ・・・」

宥めようとした。

とりあえず今まではこれで収まっていたのだが、さすがに今回はそうはいかなかった。

「モカさんも甘やかしすぎだよッ！！！」

『つくね・・・！とりあえず落ち着け、そんなに怒鳴るな。うるさいし。』

カイトもモカに続いてつくねを宥める。

「カイト！しっかり言ってあげなきゃ、悪戯はダメだって！！！」

『まあ・・・そうだよな・・・さすがに・・・』

こればかりはつくねが言ってるのは正論・・・

多分・・・ といつかつくねは魔女のことを全く知らないはずだ。

彼女がどういふ風に周りから見られていたのかは想像できる。

それを考えるとそんなに責められない。周囲の環境が最悪なのだ・
・
だけど・・・

『ゆかりちゃん・・・とりあえずな。謝ろう 一言でも良いからさ
それで仲良くなっていくもんだからさ。』

しかし ゆかりは何も言わずプイッとソッポ向いた。

(こりゃ時間がかかりそうだな・・・)

ゆっくりと落ち着いて話そうと思ったが・・・

つくねはそうはいかなかった。

「モカさんも！迷惑だたって言ってあげなきゃゆかりちゃんの為にも
ならないじゃないか」

「それは・・・そうなんだけど・・・」

慕ってくれるのは迷惑じゃないが過度なスキンシップはちょっと・
・と言った意味のことだったが、

ゆかりにはこの言葉がかなり効いた。

(・・・!! 迷惑・・・!?モカさんまで・・・)

その表情を見たつくねは声を少し落とし、

「ゆかりちゃんも・・・こんなことばかりやってたらいつか友達いなくなつて一人ぼっちになつちゃうよ!？」

ゆかりは体を震わせた。

「へ・・・平気です〜 わたし天才ですから! レベル低い友達なんてこつちから願い下げですー!」

笑いながら答えた。

(・・・かなりムリした笑いだな・・・)

カイトはその笑顔に何もいえなかった。

表情は笑っているのだが・・・

目は・・・

でもつくねは、

「ゆかりちゃん!!!」

声をあげ叱つた。

「それに・・・」

ゆかりはその声には臆することなく答えた。

「それにわたし・・・もともと一人ぼっちだし・・・」

寂しそうな笑顔・・・

でもオレには これも本当の顔じゃない。

そんな風に見えた。

でも みんな静かになり、つくねは悪そうに声を下ろし、

「ゆかりちゃん・・・」

近付いていったがその時！

クルクルーー！！

ステッキをゆかりが回すと・・・

金盃がつくねの頭上から降ってきた。

ガンー！！

「ぶっ！ー！！」

うん。ドリフのコントだな・・・苦笑

「~~~~~ッ！！」

体をプルプル震わせていると。

「あはははー ひっかかったですー」

手をくるくる回しゆかりは笑っていた。

「じのー……」

つくねは怒って追いかけてようとすると、

ゆかりは逃げて行き、モカがつくねを抑えた。

「待つて！本気で怒るなんてひどいよ！つくねっ！」

顔を近づけ、つくねを止めた。

「ええ！何で俺が怒られるんだ！！モカさんこそあの口の事はもう放つときなよ！！」

つくねは やはり納得がいかないのか、

モカに詰め寄っていた。

（時間がかかる……よな……いや、友情は付き合いの長い・短いじゃない……何とかできる……いや しなきゃな。でも まずはおつかねか……）

ゆかり side

「……」

ゆかりは下をむきながら、ひたすら走っていた。

悲痛な表情を浮かべながら・・・

そして・・・

《11歳だってあのコ・・・》

今までの・・・ことが・・・

《生意気だよなー 何であんな子供と一緒にクラスなわけ??》

頭をよぎっていった・・・

《汚らしい魔女の格好して》

これまでの差別の記憶が・・・

《魔女って妖怪じゃないだろ!? 人間に近いよな!この学園にいる資格ないよ お前・・・ やめてくれよ・・・》

頭の中をいつまでも巡っている・・・

だからつい強がってしまふ。

「1人ぼっち・・・ 平気だもん」

と・・・

全然平気じゃない・・・

本当は………

頭の中が……真っ白にとまでは行かないが……

何も考えられなくなっていた……

だから、

目の前に立ちはだかっている男に気付かなかった。

ドンッ！

「きゃっ！ いったあ〜〜バカっ 何処見て歩いてるんですか〜
くっ〜！」

涙を拭いながら叫ぶ。

痛みで涙が出ていると誤魔化しながら……

しかし、ぶつかった相手は………

「ぶつかってきたのはそっちでしょ。紫さん…… 礼儀も知らん
学園の恥さらしめ」

委員長だ。

悪意の有る表情を見せながら数名の仲間を従えていた。

仲間の数は……先ほどより多かった。

「! ! 委員長!」

表情が強張る . . .

「この前 君に公衆の面前で恥をかかされましたよねえ . . . 私
は . . . ゆるしていませんよ」

そう言うと委員長は . . . 擬態をゆつくりと . . . 顔の半分ほど解
き舌なめずりをしながら、

「きみが1人になるのを待ってたんですよオ」

そう言いゆかりの腕を掴み強引に学園の外へ出て行った。

第94話 ゆかりの中間(後書き)

ありがとうございました！

第95話 悲しき魔女の実態（前書き）

よろしくお願ひします!!

第95話 悲しき魔女の実態

部室ではまだつくねは怒っていた。

「だからもうゆかりちゃんの事は放つときなつて!!」

つくねは、カイトやモカがゆかりを庇うのに納得がいつてなかった。

「でも……」

モカは必死につくねを説得しようとする。

『つくね！相手は同級生といつてもまだ11歳だぞ？それに魔女つて言つのは……』「だからー!!」……』

最後まで言つ前につくねが割り込んできた。

「11歳でも！ダメな事はダメだつて、しっかりと教えないといけないじゃないか！ こつちは本当に痛い目に合わされてるんだよ！ カイトも！モカさんも！なんでゆかりちゃんの肩ばかり持つんだよ！」

つくねが2人に訴える……それを聞いたモカは、

「そんなんじゃないよつ!! つくねこそ何でわかつてあげないの

「ゆかりちゃんのこと！かわいそうじゃない！！」

ついに大きな声をあげ、飛び出していった。

「あ……モカさん！！もう、何で！？俺が悪いって言うの??？」

つくねはワケがわからなくなった。

『つくね！ とりあえず最後まで話を聞け！』

少し怒気を込めつくねに話す。

「え……?」

つくねは、カイトのほうを向きなおした。

『あのな…… 魔女って言う種族は…… 遙か昔から差別の対象になっている種族なんだ…… 人からはもちろん…… 妖からも疎まれ、嫌われている種族なんだ。』

カイトが少し表情を暗めながら話した。

「え……嫌われてる?」

つくねが驚いていると、くるむが。

「つくね知らないの？ ほら「魔女」って「妖怪」か「人間」かよくわからない存在でしょ。だから、大昔は「境界の者」……つまり妖と人を結ぶって考えられていて今じゃ半端者！つか言われて差別される種族なんだよ。おまけに人間達にも嫌われてて、昔は

魔女狩りとか魔女裁判！つかあってさ」

くるむが一通りつくねに説明する。

『そう・・・くるむ、サンキュ説明追加してくれて。』

「いーよ！でもほんとにつくねって結構知らないんだね・・・妖の事さ」

つくねはドキツツと体を振るわせた。

『まあ・・・知らない方が良いつてこともあるだろう？先入観でその者を判断して・・・歪ませて・・・思考を狂わせて・・・真に内面を見なくなる・・・そんなの悲しいじゃないか、皆同じ・・・「生きている」のにさ。』

つくねはその言葉を聞き、この学校を去ろうとした時のカイトが言ってくれた言葉を思い出した。

《人間であろうと妖怪であろうと同じ命だ。流れる血は違っててもな。大切なのは中身なんじゃないか？・・・》

オレは・・・知らなかったとはいえ・・・ゆかりちゃんに酷い事を・・・

「そうだね・・・あのコ・・・本当に今までずっと一人ぼっちだったのかもしれないね・・・」

くるむも少し表情を崩す・・・

一人ぼっち・・・

この言葉がつくねの頭に引っかかる・・・

そして理解した。

モ力さんがなぜ・・・あんなにゆかりちゃんを庇っているのかを・・・

・

ゆかり side

ここは学園の外・・・

乱暴に連れてこられたゆかりは、そのまま乱暴に木に押し当てられた。

「きゃあ!!!」

「汚らわしい 汚らわしい・・・ 魔女とは何て汚らわしい存在でしょう!」

メキメキメキ・・・ ミキヤ・・・

委員長とその仲間達は擬態を完全に解いた。

「いいですか・・・? 君みたいなコはウチのクラスには要らないんです・・・ この学園から消えてもらいましょうか!」

リザードマン。

それが正体だった。

「きゃああ!! こっ この!!」

ステッキを振りかざすが。

バクンツ!! むしゃむしゃ・・・

ステッキを食べられてしまった。

「こいつ・・・どうしてやりましょうか・・・」 「食べちゃおう
!霧も深いし誰にもバレないって・・・」

仲間達も近付いてきた・・・

「ああ・・・ステッキが・・・ (わたし・・・ステッキがな
いと魔法使えないのに・・・)」

これで攻撃手段が無くなってしまった・・・

その次の瞬間、委員長が大きな口を開け迫ってきた。

「そうですねー!! 食べてしまうのも良いですねえ!!!!!!」

「きゃあああああ！」

ゆかりは叫び声を上げた……

誰も来てくれる筈なのに……

「やめて!!!!」

後ろから誰かの声が聞えた。

この声は……

(モカさん！)

「やめて……ゆかりちゃんから手を放して!!!!」

委員長はモカを見ると忌々しそうに舌打ちをした。

「またあなたですか……赤夜萌香さん、面倒な所を見られましたね……」

そして指を鳴らし、仲間達を向かわせた。

それを見たゆかりは慌てて、叫んだ。

「逃げてっ！モカさん逃げてくださいっ!!!!食べられちゃっっ!!わたしなんて放って逃げてエ!!!!」

しかしモカは止まらずゆかりを見つめた。

「大丈夫だよ……わたしが身代わりになるから……ゆかりちゃん　強がっちゃダメだよ　一人でダメな時は助けを求めて良いんだよ……もっと素直になつてよ。わたしの事好きって言っけど本当は甘える相手が欲しかったんだよね？　イタズラも……誰かにかまって欲しいから……でしょう？」

モカは少し泣き笑いのような表情で……ゆかりに話した。

「えっ……モカさん……何を言ってるですか！早くどツか行つてくださいです！」

凶星だと自身でわかつてはいるのだが……どうしても……やっぱり意地を張ってしまう。

そんなゆかりにモカが続けて言う。

「わたし……わかつてえたんだ……ゆかりちゃんずっと淋しかったんでしょ　一人ぼっち……辛かったんだよね？　わたしもそう……ずっと辛かった……だから力になりたいの。わたし絶対ゆかりちゃんの事　放つとかないからね……」

ゆかりが目を見開いてモカを見る……

その時、

「何言ってるんです！！？　私達をシカトするとはナメてるんですか！！！！」

忘れ去られていた委員長が激怒し仲間にモカを襲わせた。

「やめてエー!!!!」

ゆかりは委員長の腕を思いつきり噛み付いた。

「いてえ!!何するんです!!このクソガキアア!!!!」

「きゃああ!!」

鋭い爪でゆかりを襲った。

「危ない!!!!」

ガバツ!!

その間に入ってくる者がいた。

それは、つくねだった。

ゆかりを助けようとして・・・

ザシュツ!!

背中に傷を負ってしまった。

「つくねーっ!!」

モ力は驚き、つくねの方へ駆け寄った。

ゆかりは・・・

背中を・・・自分を守ったが為傷ついた背中を見て驚いていた。

なぜ、自分なんか・・・ずっと酷い事してきた自分なんかを助けてくれるのかと・・・

「つくねさんっ!! なっ・・・なんで・・・どうして わたしなんかを・・・」

つくねはさっきまでの怒っていた顔じゃなく・・・

とても優しい笑顔だった。

「さっきは・・・ごめんね・・・オレにも少しわかったから・・・ゆかりちゃんの事・・・オレにも力にならせてよ・・・だからもう自分を一人ぼっちだなんて思わないで。」

ゆかりはまた・・・驚いた・・・

今まで・・・自分に構ってくれる・・・守ってくれる友達みたいなひといなかったのに・・・

「おいおいおいおいおい！どいつもコイツもツ！私をコケにするなカスどもがア！！ミンチにしてやるッ！！」

大口を開けながら・・・迫ってきた！！

その時！

ガキイイイン！！

何か・・・硬い壁のような物にぶつかっただ様な鈍い音があたりを響いた。

第95話 悲しき魔女の実態（後書き）

ありがとうございました！！

第96話 闇から救えた心 (前書き)

よろしくお願ひします!!

第96話 闇から救えた心

突然現れた半透明の物体に頭から正面衝突したようだ。

「ぎゃあああ！！顔が！！」

壁に顔面強打だ。

まあ 痛いだろう・・・ それに何本か歯も折れたのかも。

ぞお〜

『だから・・・いつてんだろうが・・・ 女相手にお前らいたい
何人がかりだよ・・・』

その壁の向こうに現れた男は・・・

カイトだ。

「カ・・・カイトさん・・・ まで・・・」

ゆかりは・・・もう目に・・・涙を溜めていた。

(とりあえず・・・無事でよかったよ・・・)

『後でゆっくり話そうな。新聞部のみんななら・・・みんななら絶対大丈夫だからさ!』

ゆかりに笑いかける。

「つつっ!」

ゆかりは涙が出そうになるのを必死に堪えていた。

カイトは泣いたって良いんだ・・・と思っていたが、

まず とりあえずは!

『まあ まずはこのクズどもを片付けるか・・・』

そう言いリザードマン達の方を向いた。

「クズだとお!!クズはお前らだア!!何度もコケにしやがッ・・・
ツッ!」

ガシィ!!

一瞬の内に懐に入り、顔面を掴み、持ち上げた。

「ぐっ!!!!があ!!!!」

ジタバタしている・・・

『どつした？ミンチにすんだろっ？自慢のデックカイロでやってみるよ』

ギロリッ！

至近距離で睨みつける。

委員長はたじろぎながらも、

口を開けようとしたが、全く動けない。

ただの・・・唯の握力で・・・口が・・・全く開かない！

まるで万力で締め付けられているようだ。

「グッ ガア！！（バカな・・・全く動けません！！ あ・・・赤い瞳・・・まさかコイツ・・・バンパイア・・・？）」

ミシミシミシッ！

委員長の顔面の骨が悲鳴を上げた。

「お前エ！！」「死ねエ！！」

仲間の内の2人が飛び掛る！

が、

ビュオオオオオオ!!

「う……うああああ!!」「なんだ!!!なあああ!!!」

突然現れた、まるで竜巻のような風に吹き飛ばされ上空高くに舞い上がり……

「「ぎゃあああ!」「ドガツ!!グシャツ!!」

地面に激突した。痛そう……ってレベルじゃないか……

『貴様らは二度目だ……オレの友達に手を出そうとしたのはな……一度……多少なら目は瞑ってやるが、よほどの事でなければな。だが……二度目は無い!』

ミシィ!!バキバキバキツ!!

「ギヤアアアア!!」

委員長の牙が全て折れていった……

痛そう……だ……

「……カイトさん凄い……

友達……

」

ゆかりはカイトの戦う姿は見た事無い……

その強さと……不思議な力に驚いていた。

そしてカイトの発言ごほうごにも……

「ゆかりちゃん……大丈夫？」

つくねがを支えていたモカがつくねと共にゆかりに近付いた。

「モカさん……」

まだ……ゆかりは俯いたままだった。

「モカさん……まだあいつらはまだ何人が……いる……
今はカイトの手助けに行かないと……！」

そう言うと、つくねは背中の痛みを堪えてモカのロザリオに手を伸ばした。

「ダメだ……」「こいつ……つええ……」

残ったのは2人……

少し離れた位置にいたため、竜巻【ハヴォック・ゲイル荒れよ暴風の嵐】を受けずにすんでいたのだ。

「こっとなつたら・・・」「ああ！」

2人は頷きあい、カイトと反対方向へ走り出した。即ち・・・他の新聞部のみんなの方へ。

『!?!』

目の前の奴（委員長！）をボコツていてすっかり他の連中を見ていなかった。

「!?!?こっちに来る!?!」

つくねの声だ。

「貴様らを入質にすりゃー 形勢逆転だ!?!」 「ぶっ殺してやる!?!」

殺しちゃあ人質になんないだろう。

つと一瞬突っ込みかけたが・・・

『ちっ!?!』

ポイツ!!

ドツガラツ ガツシヤアアアン!?!!

墓場やら、木やらを体で砕きながら吹き飛ばす!

「ギヤアアアアアア!?!?!」

二度目の絶叫。

二回手を出した・・・その報いと言う事だ・・・

あわれ・・・吹き飛び動かなくなった・・・

まあ死んではいないだろうがな。

さすがに逝ってしまうと後味悪い・・・

一歩手前ということだ

右手にいた委員長を放り投げた後、2人の方を見ると・・・

モカが・・・覚醒していた。

『とりあえずは一安心だな・・・』

キィィィイン！！

「なんだあああ！！」「この・・・強大な妖気は！！！」

モカが静かに目を開き・・・鋭く睨みつける。

「弱い者にしか手を出せぬ・・・ 群れないと何も出来ない・・・
そんなクズどもが何のつもりだ？」

牙を・・・爪を構えながら向かってくるリザードマン達を睨みながら言う。

「こっ・・・このやるおおおおお!!」「しっ・・・死ぬエエエ
エ!!!」

2人は一瞬たじろいでいたが、

後ろにはカイトがいる。

もはや逃げ場は無い為そのままモカに襲い掛かった。

そして勢いに任せて 爪を振るうが・・・

ヒュンッ!

モカが視界からいなくなった。

「なっ!!! どこ・・・ 《ドガアア!!!》ギヤアアアアアア!
」!

モカの蹴りが腹部に突き刺さる・・・

「くそお!!!!」

モカの方にもう1人が爪を振るう・・・しかし やはり姿が消え。

メキヨッツ!!

「グガアアアア!!」

もう1人は顔面に直撃した。

それぞれ先ほどのメンバーの様に高く吹っ飛び・・・

湖に・・・

バツシャアアアン!!!

墜落した・・・

「弱い者にしか力をふるえんそんなクズが・・・この私に向かってくるとはな。身の程を知れ。」

モカは服に付いた埃を払いながら吹き飛んだ相手を睨みつけた。

そして・・・

「みんなっ!! 大丈夫!?・・・あれ」

くるむが少し送れて現場に駆けつけるが、

もう全て片付いていた。

(あ〜ん・・・カイトが戦うシーン見れなかったあ・・・)

『?????』

何やらオレの方を見て少し落ち込んでるような...

(なんだろ???)

カイトは困惑していた。苦笑

「どうして・・・」

そんな時ゆかりが、静かに口を開いた。

「わたし・・・皆にひどい事したのに・・・どうして・・・どうしてわたし的事なんか・・・」

体を・・・震わせながらゆかりは言った。

つくねの返答は、

「・・・これから仲良くしようね。ゆかりちゃんもう一人じゃないんだからさ!」

友達を助けるのに理由は要らない。

そういうことなのだろう。

「う……えぐ……」

ゆかりは今にも泣いてしまいそうだった……

『泣いたって……いいさ。この皆、受け止めてくれる。もちろんオレもな。』

側までカイトが来て、ゆかりに笑いかけた。

ゆかりは……もう限界だった。

「うわあああん！」

泣き出した……

こんな暖かい感じ……

この学園に来て初めてだった……

まるで……降り積もり……そして凍った自分の心（悲しみ）を優しく……暖かく……

そっと……とかしてくれてる……ようだった……

「わああああん！！わあああああ~~~~」

ゆかりは暫く泣き続けた。

そこにいた者皆は、その叫び声は、なぜか……とても心地よく感じていた。

『ははは……いい友達が出てきたな……また学園で……』

泣いているゆかりを見ながら、呟いた。

その横顔をモカ（裏）は見つめていた。

「……（カイトも……ひよつとして、表のモカのよ
うな経験があるのか……？）」

無言だが……

暫くぼーつと見ていたため、

その視線に気付かれた。

「ああ！モカ！！言っとくけど、カイトとつくねはわたしのだから
ね！！」

見つめてるモカを見てくるむはモカがカイトを狙っているんだと思
ったのだ。

「なっ！！ 違っわ馬鹿め！！身の程を知れ！！」

顔を赤らめながら、蹴り一閃！

ドカン！

「うひゃあああ！..！」

くるむは飛んでいった・・・ もちろん比喻ではない。

地面に・・・「んきゃあ！」落ちた・・・

のびてるな・・・うん。

でも まあ 大丈夫そうな感じはした。

だって ギャグっぽい飛び方・落ち方だったから。

『んで、なんだったんだ？モカ？』

モカに話しかけると・・・

「なっ・・・ 何でもない！ た・・・ただ そうだ！私の獲物が
あまりにも手ごたえ無くてな、カイトを一発ぶっ飛ばそうとだな・・・

「
・・・
へ？

『あー 左様で・・・ 全力で拒否するがいかかな？』

若干引きながら話す・・・

バトルマニア
戦闘狂じゃないし。

モカの一撃は防御しても痛い・・・

それなりに手加減はしてくれてると思うけど？（多分）

さすがは「力」の大妖・・・

自身の身体能力だけじゃ・・・ まあ良くて粉碎骨折・・・かなあ・・・？

「ちっ・・・ 手ごたえのある奴がないから、お・・・お前とやろうと思っただがなッ！」

モカは暫く動揺しっぱなしだった。

純粹にオレの事を好意で見ていたのなら・・・

悪気はしないけど・・・そー言ったらまた蹴られそうだ。

ガードしても痛いし・・・

モカ（裏）は攻めるのは得意でも攻められるのは苦手みたいだ・・・

いや・・・蹴って終わらすから苦手って程でもないのかな・・・？

苦笑

『ははは……』

とりあえず笑って終わらした。

……
……

その次の日の部活の時間。

くるむとモカは資料を部室に運ぶため、廊下を歩きながら話をして
いた。

「ゆかりちゃん おとなしくなっただってねー イタズラばかりし
てたのを クラスの皆の前で謝っただって 皆もちよっと反省ム
ードになったみたいで 少しずつうちとけてるらしいよ。」

モカはクスッと微笑んだ。

「よかった…… 大人になったんだね…… ゆかりちゃん。」

そして 部室に入ると……

「つくねさーん！カイトさーん！！ラブラブですー」

つくねとカイトの2人に抱きついていた。

「えええー！！ゆかりちゃん！！」 『おととと！ え！オレも？』

モカは驚き目を見開いて・・・

くるむは持ってた資料をずっこけながら落としてしまった。

「あっ！こんにちは」 わたし 今日から新聞部に編入させてもらったんです どうぞよろしくですー！！」

新入部員！！

みんな驚いていた。

（オレは入ったと同時に抱きつかれたの方がびっくりしたけど・・・）

カイトは苦笑していた。

「だって・・・わたし・・・モカさんのことも大好きだし・・・そのうえつくねさん・・・それにライバルだと思ってたカイトさんまで好きになっちゃったですー！！」

どどーん！！

つくねは顔を赤面！

カイトも若干赤面！！

モカは少しフリーズ・・・

くるむは頭に四っ角たくさん！ 所謂ムカつきマーク

「とうわけでー ラブラブするです」

ゆかりが2人に抱きつく。

丁度2人の顔で自分の顔が挟まるよーに。

「ちよつと！！何言ってるのよ！！！！ 2人はわたしの物よ！！！」

くるむが割り込んできた。

「違いますー わたしとモカさんのですー！！！！」

ゆかりも負けていない。

「わあー！ちよつとー ゆかりちゃんくるむちゃん待ってって！
タチ悪くなってるよー！！」

『オレを私物化するのはダメー！どっちの物でもなあーいーいー
！というか！男2人になって！！んなことあるかー！！』

くるむといいゆかりといい・・・ 苦笑

つくねとカイトが何か言っているが聞えない。

すると・・・ さっきまでフリーズしていたモカが復活し、

「ダメよ・・・ ゆかりちゃん・・・ 血はわたしのーっ」

がばーっ

『ええええ！！モカも！！ってか血ふたじって！！！！あげた覚えなし
！！』

その日の部活は、

もみくちやにされた・・・

つくねは血を吸われたけど・・・ オレは何とか阻止！ぎりぎりね
・・・

そろそろ本気で吸われるかも・・・ モカって力・・・強いから・・・
・ 表も・・・

それにしても ギン先輩がいなくて良かったな・・・

あの人いたら更に荒れそうだ・・・

それに「何でオレ抜きやねん！！！」ツとかいいそうだ。

まあ・・・とにかく・・・

『「疲れた・・・」』

カイトとつくねはその一言で締めくくった。

第96話 闇から救えた心 (後書き)

ありがとうございましたー

第97話 つくねの誕生日(前書き)

よろしくお願ひします!!

遅くなりました!!

ごめんなさい!

第97話 つくねの誕生日

そろそろこの学園に入学して2ヶ月になります！

んで・・・今つくね君が何やらそわそわしてます。

いつもの事だと思ったんだけど・・・

何やら今度は鼻血を出しながら・・・ チューツと口を尖がらせていた・・・

さすがに・・・

『キモイわ！！！！！』 「お前1人で何しとんねん!？」

スパーーーン!!

示し合わせた様に、

オレとギン先輩でのダブルツツコミが炸裂!!

「いたー！ ギン先輩にカイト!!」

頭を抑えながら2人を見た。

「部活の時間やで!」 『たくましい想像力してんなーつくね・・・』

」

ギン先輩はそのまま部室の前まで行き、カイトは呆けているつくねにツツコミを入れた。

「いつ・・・いや・・・その・・・」

あらら・・・顔赤くしてまあ・・・

んで、ギン先輩はギン先輩で、

「フツ モカさんは今日もべっぴんやなー 愛しとるでほんまー
ー!つき合ってくれへんか モカさん!」

サラッと告白!

(うわー！ー！ 告白してる!!)

(あんな事(第90)91話 参照w)あつたつていうのに・・・
大したもんだな・・・いろんな意味でさあ 図太い・・・)

おまけにギン先輩・・・ 正体出しながらモカを追いかけてるし・・・

モ力は逃げてる・・・

ぼーっと見ていたら・・・

「やつほー！ー！2人とも！今日も部活だねー！ー！だーい好きだよー！ー！」

はぐー！ー！と抱きついてきた・・・

勿論くるむだ。

「わあ！ー！くるむちゃんっ」「うわっ！びっくりした！ー！くるむ・・・」

突然のはぐ攻撃にびっくりしていると・・・

次は掃除用具じいさうぐいやら机が飛んできた。

ちりとりはくるむを・・・机はギンをそれぞれを襲った・・・

ぺしっ！

「きゃっ！」

ドコンッ！ー！

「きゃっ！ー！？」

うん・・・明らかに机の方が痛そうだな・・・頭から流血してるよ・・・

「つくねさん カイトさん そしてモカさんに手を出す人は許しません！ 私が魔法で撃退するです〜〜！ だって私！3人が大好きですから〜！」

はい・・・ゆかりちゃん登場！

『すっごいな・・・ なーんで皆あんなにはつきり好き！つとか言えるのかね・・・』

「だよね・・・」

『まあでも つくねは見習ったほうがいいんじゃないか？』

「うっ・・・」

『・・・ありゃりゃ』

どよーん・・・

つくね・・・落ち込みモードに・・・

「そんな事より・・・誰？魔女？」

頭に血を流しながらギンはモカに聞いていた。

「進入部員のゆかりちゃん。天才少女だよ・・・」

ちよつと引きながらモカは教えていた。

今日も部活は絶好調！・・・なのかなあ・・・

『そついえばさ、つくねももう少しで誕生日だったんじゃないかな？』

帰り際・・・モカがまだいない時に聞いてみた。

「う・・・うん！ オレ・・・その時モカさんに・・・」

顔を赤くさせながら何やら決意を固めていた。

『ほほーう・・・成長したじゃんつくね！ まあガンバレよ！・・・でも簡単にはいかないと思うけど・・・なんたって・・・新聞部だし。』

「だよね・・・」

つくねは肩を落とす・・・

「あ・・・そつだ・・・」

つくねはカイトに聞きたい事があった。

『ん？何だ？？』

カイトはつくねが何やら思いつめてそつだったのでキョトンとしながら聞く。

「あつ・・・あの・・・カイトはモカさんのk「おーい！」ッ！」
乱入してきたのはモカだ。

「つくね！カイト！ちよつと話があるんだけど！」

何やら美術の本を見せながらモカが来た。

「ん？ どうした？ あー後つくね 聞きたい事って？」

「いッ いやっ何でもないよ！カイト！ それよりモカさんどうしたの？」

つくねは話題をそらしモカの方を向いた。

「????? まあいつか、」

カイトも深く考えず、モカの方を見直した

「あのね2人とも、私美術の先生から絵のモデルを頼まれちゃって、これから1週間くらい一緒に帰れないんだ」

「モデルかぁ・・・ まあモカは美人だし選ばれてもあんまり驚かないけどな。」

「えええ！そつ そんな事ないよう・・・」

モカはメチャ照れていた。 何か可愛かったな・・・

つくねは、

「えええええ!!」

逆に驚きまくってた。 苦笑

『うお!!つくね そんなに驚くか?』

「だっ だつて・・・」

(じゃあオレの6日後の誕生日はどうなっちゃうんだー!!)

『「?」?』

「あつ 心配しないでよ!部活は頑張るから!」

モカははっとして、つくねに言った。

つくねは、そう心配しているんだろうと思いきやモカが言った。

「いやっ!!そーじゃなくって・・・ モ・・・モカさん もうすぐ・・・何の日か・・・しってる?」

つくねは焦りながらモカに聞いた。

(なーるほど・・・ そゆこと・・・)

カイトは何故つくねが動揺していたのかすぐに分かった。

まあ つくね本人から聞いていたしな。 苦笑

だが モカは・・・

「え？何の日？・・・？」

ただつくねに微笑を向けているだけだった。

（うーん・・・あのモカの表情は・・・どうなんだろう・・・？
まあいつか・・・何か考えてるのかもしれない・・・茶化さ
ない茶化さない！）

でも、ほのぼのとしてて良いなー

つくねはなぜか泣いてるけど・・・ 苦笑

（まあ ガンバレよ！つくね。ちゃんと オレも祝ってやるからさ。
もちろんモカの後にでも）

肩をたたきながらモカに聞えないように話す。

こう言うのは自分から言わないと格好がつかないから

ちよつと空気読んでみた！

自信は全く無かったけどね。空気読むって言う言葉はよく知ってる
けど・・・ 苦笑

（あ・・・ うん・・・ 何とかガンバル）

なんとも歯切れが悪い・・・

まあ つくねだし。

カイトはそう考えていた。

(でも・・・ さっきは聞きそびれたけど・・・ カイトってモカさんの事・・・ 何とも思っていないのかな・・・？ 俺のこと応援してくれてるのは嬉しいけど・・・ 何か・・・ 複雑だ・・・)

カイトがモカの事を好きと想っていたら・・・

容姿やら学力やら能力やら・・・ e t c

120パー負ける・・・

カイトのこれまでのモカとのやり取りを見ても、特別に好き！って感じは見えないけど・・・

うーん・・・

(でも、特別に好きって いう感じ・・・ じゃなくて・・・ 何か・・・ ころ暖かい感じ・・・？ 恋愛感情じゃなくて・・・ ああもう！わかんないけど 何かそんな感じがするんだよねー カイトって・・・)

『つくね・・・ オレは男にしがみつかれて喜ぶ趣味は無いつて前 (第88話参照！) 言ったと思うが、見つめられて喜ぶ趣味も無いからな・・・』

考えていたつくね君はカイトの方をガン見していたのだった。

「わああ！ゴメンゴメン・・・ ちょっと考え事をしてて・・・」

カイトを見ていた自分に気がついたのか、慌てて謝る。

「あははは！ 2人とも仲がいいね やっぱりさっ！」

モカが笑いながら見ていた。

『仲がいいのは賛成だが、過剰すぎるのは如何かと・・・ オレはアブノーマルな気は無いぞ？つくね・・・』

「そっ！そんなのオレだってないから！誤解だってモカさん！！安心してよ！！」

慌ててつくねは拒否！

完全にからかわれているな・・・

「ははは あそーだ！！血・・・ 吸わせて??？」

いきなり話が変わったし！！

「えええ！そんな会話の流れだったっけ??？」

つくねが驚きながら言った。

『はい！モカ！つくねので良かったらどーぞ！』

羽交い絞めにしながら笑顔でモカに差し出す。

「えええ！カイトちよつとー！ー！！」

（最近オレのも吸われそうで困ってるんだ！ それにつくね前（第78話参照！）にオレは手助けするって言ったけど、拒否したよな〜？ 男は一度言ったら取り消さないよな〜？）

笑顔？でつくねに呟いた。

「う・・・ そっそれは・・・（確かに・・・言ったけど・・・あれは 負けたくないから・・・）」

しよぼんとしていたその時！

「すきあり」

「いただきます！」

かぶつ ちゅっっっっっっっっっっ

「ぎゃああああ〜」

.....

そんな3人を遠くで見ているものがいた・・・

何か言葉を発するわけでも無く、

唯・・・笑みを零し、

学園の中へと消えていった。

.....

.....

.....

第97話 つくねの誕生日（後書き）

ありがとうございました！

第98話 女子連続失踪事件 勃発（前書き）

よろしくお願いします!!

更新まだ続きますよ！ ちょっとですが・・・ 苦笑

第98話 女子連続失踪事件 勃発

「カイトは何時になつたら 血を吸わせてくれるのかな？」

モカがつくねの血を味わいながら吸い終わり・・・カイトのほうを向いた。

『なははは・・・ やっぱりほら！血は大切に・・・ しないと・・・ な？ 多分つくねの方が断然おいしいって！！ 古来より、バンパ
イアの好物は人の血なんだからさ！！』

標的にされそうになつたので・・・

苦笑しながら やんわりと拒否の姿勢を貫いた。

ドストレートに断つたらさすがにかわいそうだからね・・・ 苦笑

モカは不満がっていたが・・・

まあ つくねの血を堪能したばかりもあって、思ったより早く諦めてくれた。

・・・裏モカにせめられたら、多分吸われるな・・・

あー後 つくね君はと言っと・・・

背後に死神が見えるかのような・・・

不穏なオーラを纏っていた・・・ それに・・・若干魂が抜けてい
るような錯覚が・・・

「じゃあね 2人とも！また明日学校で！」

そんな事とは露知らず！

モカはベストスマイルで、手を大きく振りながら帰りの挨拶

『ああ！またなモカ！！』

オレもとりあえずは苦笑しながら返事をし・・・

つくねは

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉は発してないが・・・手を上げて振っていた。

貧血ってレベルじゃないような・・・笑

まあ、とりあえず・・・

『寮にはちゃんとつれてってやるよ。』

つくねに肩を貸しながら、下校した。

その次の日の部活！

いきなり事件は起きた！

つと言っか 起きてたかな？

「みんな事件やで！《女子連続失踪事件》や！」

ギン先輩が黒板に書き、説明した。

部室内は驚きで包まれる・・・

「「失踪事件って・・・」

「こわいです・・・」

ゆかりはちよつと表情を暗くしながら、呟き、モカとつくねは驚いていた。

くるむも無言だったが、額に汗を浮かべながら資料に目を配っていた。

『まあ・・・この学園ならありそう・・・って思うのはオレだけかな？』

ギン先輩にそう言ってみるが・・・

「あほう！カイト！資料を見てみい　ひと月で7名や、確かに学園^{ウチ}では行方不明は珍しくないけど、そのペースが異常やる？」

確かに・・・

『7人・・・は多いな・・・大体クラスの5分の1・・・か・・・』

尋常じゃないな・・・　それに唯の失踪なら女子だけつても・・・

「よし！理解したところで話し進めるで！　行方不明者に関する素早い情報収集頼むでみんな、　事件の真実を新聞部で暴くんやつ！」

教卓をたたきながらギンは宣言した。

(ごく・・・ギン先輩ってマジな顔になれるんだ・・・)

つくねが唾を飲み込みながら、そう思っていると・・・

(つくね・・・　オレは裏があるような気がするぞ？　部活は何度もあったけど、こんなにやる気を見せたのといえは・・・)

((女性がらみ！))

そゆこと　苦笑

案の定・・・ギン先輩は、

「その写真・・・　見ての通り消えたコはみんなかなりのべっぴん

や・・・もし・・・何者かに拉致されとるんやったら何とか救ってやりたい！ ええとこ見して仲良うなるチャンスやしな！！！」

どどーん！！

やっほり・・・

『あのーそーいうことは、声に出さない方がいいんじゃない？』

さっきまでの全部台無しだ・・・

「わいは正直な己がモットーやねん！」

清々しい程に・・・高らかに宣言した。

『「・・・」』

苦笑・・・

でも・・・他の部員はずっと神妙な顔をしていた。

やはり、失踪していたのが全て女子だからだろう。

でも・・・ギン先輩は相変わらずだなあ・・・

そしてつくねは相変わらず貧血っぽそう・・・

あれじゃ 部活やるっ！的な気分になれないわな・・・

『ゆかりちゃん。』

とりあえず、フラフラしてるつくねをイスに座らせた後、

表情を暗くしているゆかりの所へ。

「あつ カイトさん・・・」

やっぱり 気分が優れないからなのだろう・・・

いつもの元気一杯！！が見られなかった。

・・・まあ 過剰にこられても困るけど・・・

『大丈夫だよ。前にも言ったけど ここにいる皆・・・仲間なんだからさ、不安もあると思うけど・・・ 1人で抱えないで皆を頼ってくれ。なっ？』

頭を撫でながら・・・ ゆかりに話した。

《帽子は、脱いでたみたいです》

ゆかりは驚いた顔をしていたが、すぐに笑顔になり・・・

「あ・・・ありがとうございます・・・ カイトさん・・・ そつですよ
ね！みんな仲間なんですから・・・」

少し・・・目を潤わせた。

がっ・・・その次の瞬間！

「やっぱりカイトさん好きですー！ー！改めて感じたですー！ー！

」

ドスーーン！

『ぐええええっ！！！！』

ゆかりの身長のせいか・・・

鳩尾にもろハグと言う頭突きをもらってしまった・・・

「コラー！ー！！わたしのカイトになんてことすんの！！！！」

くるむが乱入・・・

なぜかつくねを連れて・・・

『ぐええええ！！ ちよっ！！みんなオレの上に乗らないで！！！！』

ゆかりのヘッド・バッドで仰向けで倒れていたところ・・・

ゆかり＋くるむ＋つくねが乗っかってきた……

これは・・・重い！！！！

「カイトさんはわたしのですー！ー！」

「つくねとカイトは渡さないわよ！ー！ー！」

「ううー！ー！今貧血気味なのに……！」

ワイワイしていると……

モカまでやってきて……

更にいやーんな展開に……

カイトとつくねにとっ たら災難だが

「何で！オレ抜きやねんー！ー！ー！」

ギン先輩が叫んでいたのは気のせいだろう…… 苦笑

やっぱりこの台詞セリフだったね

第98話 女子連続失踪事件 勃発（後書き）

ありがとうございましたー！！

第99話 美術教師とモカ（前書き）

よろしくお願ひします！！

第99話 美術教師とモカ

つくねとカイトの2人は・・・

若干ふらふらしながら歩いていた・・・

『うっむ・・・ 酷い目にあつた・・・』

「は・・・はは そうだね。」

部活帰り・・・

何とか解放？されたつくねとカイトはとりあえず帰って休みたいので・・・

寮に向かっていった。

帰宅途中・・・

「あつ！ 先生お待たせしましたー！」
声が聞えてきた。

「この声って・・・ちよつとカイト来て！」

先に気付いたのはつくねだ。

『ん？』

言われるがまま、声がるほうに行く。

「やあ・・・ 本当に来てくれたんだね。ありがとう」

あれは・・・

『確か・・・美術の・・・』

「石神先生だね・・・それにモカさんも・・・」

2人は木の陰に隠れて見ていた。

何で？って思ったけど。

まあ、この方が楽だ・・・

今日はほんとに疲れたし、

「うれしいよ モカさん！ 私は君のように美しい存在ひつを見ると
芸術アートとして手許に置いときたくなるんだ。」

紹介するこの教師は 美術教師

石神いしがみ 瞳ひとみ。

男っぽい感じから、男子よりは女子の方に人気がかなりある教師だ。

「君の美しさは既に最高のアートだねえ！」

モカの事を芸術と呼び褒めていた。

「先生っ　これから一週間よろしくお願いします！」

モカは頭を下げていた・・・

『ん？なるほど・・・モデルってこのことか・・・　まあ納得・・・』

していたのはカイト1人！

つくねは　さらに　どよ〜ん！！としてしまった・・・

『っておい・・・　どうしたんだよ・・・』

珍しくも無いが、ちょっとどよ〜んとするタイミングがよくわからなかった・・・

「オレの誕生日・・・　6日後・・・なのにー」

??独り言

でも　声が出ていた為なんで落ち込んだかは分かった。

『はあ・・・つくね？ オレはモ力が覚えているかとか、何考え
てるかとか わかんないけど、クヨクヨするくらいなら、モ力に直
接聞いた方がいいと思うぞ？』

さすがにずーっと 暗くなられていると・・・

かえって うつとう・・・じゃなくて、可哀想だ！

「・・・今 鬱陶しい！！って言わなかった??？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・言っていない言っていない。』

コイツはエスパーか!?

裏モ力みたいな事を！

つくねも成長したな・・・ フツ

「今の間は何!!? もう・・・ まあ いいよ。ありがと カイ
ト！オレ、モ力さんに直接聞いて見る。」

そう言うと、まあ・・・ある程度元気にはなっただかな？多分。

『ん・・・ ガンバレよ！とりあえずは元気があることが一番・・・
だ。こんな学園でやっていくにもな。 明日からガンバレ！つくね。』

つくねの腹部に軽く拳を当てる。

「うん！ ああ・・・そうだ。・・・カイト」

つくねが・・・なにやらまた表情を暗めながら聞いてきた・・・でも・・・さっきの表情とは種類が違う感じがするな。

『ん？何だ？』

「カイト・・・は モカさんのこと・・・ その・・・ どう想っているの？」

つくねはちよっと・・・ 複雑そうな表情をしながら・・・

声を搾り出すように聞いてきた、

『・・・この学園で出会った。かけがえの無いもの・・・
かな・・・ もちろんつくねやくるむ・・・ゆかり・・・新聞部・・・
早い話この学園で出会ったもの全てと言っても大袈裟じゃない・・・な。』

カイトの表情はかなり深い・・・

唯単純に友達が出来て嬉しいとかそんな次元じゃない事はすぐに理解できた。

そんな表情をされたら・・・つくねはこれ以上言えなかった。

「そっか・・・ ありがとう、カイト。オレにとってもカイトは大切な友達だからね。きつとみんなもさ。」

つくねは初めは恋愛感情についてはつきり聞こうとしていたが・・・
やっぱり言えなかったみたいだ・・・

カイトは・・・生前（転生前の）・・・の僅かな記憶を思い出していた。

失意の中・・・事故で命が失われた。

未練は無かったが・・・死ぬ勇気が無かった・・・

ほんとうは唯単純に・・・人間関係の悪化で死にたかったわけじゃない・・・

・・・

あちらの世界で出来なかった事が こちらでは出来ているのだ・・・
今の自分には護れる強さを持っている。

過信してはいけなが・・・少なくとも抗える力は持っている。

もう二度と大切なものを失ってはならない・・・

カイトは・・・
御剣陽一は 闇・・・を持っていた。

転生しても・・・引きずっている。

大切なものが失うのが何より怖い・・・

そう・・・自分が傷つくより遙かに・・・

また失うくらいなら、自分が・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『嫌な事・・・思い出しそうになった・・・な。』

カイトは少し苦笑をしながら呟いた。

「ん・・・？　どうしたの？」

『いや、なんでもないさ！　ありがとなつくね。』

そう言い2人は寮のほうへと向かった。

第99話 美術教師とモカ（後書き）

ちなみに〜闇〜の設定はジャックさんのころよりまだ以前の（。。）

）
転生前の設定のつもりです（。。）

知らないよね。。。第0話で 描写してないし。。。 苦笑

いつか女神さんが言っていた何で自己犠牲精神を出しまくってくるのかな〜っていう訳につながっているつもりです〜

しんじやいたい〜って思った最大のりゆうは。。。

また考えます。。。 女のコに手を上げたくない！っていうところから考えて見ます〜

第100話 美術教師 石神瞳（前書き）

100話もきてしまった……1話1話短いからかな？？ちよっ
とは伸ばそうとしますが……苦笑

よろしくお願いします!!

第100話 美術教師 石神瞳

次の日の授業・・・

科目は美術だ。

「え　・・・　今日の美術なんだが、先週に続いて自分の「大切なもの」をテーマに絵を描いてもらおう。　大切なものこそ、それぞれ心の中にある芸術^{アート}なんだ。　皆　自由に描くといいよ」

大切なもの・・・

つくねはそのテーマを聞いてモカの方を見ていた。

（あの様子じゃ・・・　まだ言えてないな・・・）

つくねの行動は後ろから見たら丸分かりだ・・・

まあ・・・面白いけど。

すると、クラスの女子生徒たちが、石神先生のほうへ集まりだした。

中には他のクラスから授業をサボってきている生徒もいた。

『やっぱり大人気だな。　石神先生。』

教師と生徒が仲がいいことは、何か微笑ましいな

3年B組じゃないけど・・・ 笑

んで・・・ 皆席を移動しているみたいだから、

オレもモチーフを考えながら移動していると・・・

何やらつくねは美術の教本を凝視していた。

何やら体を震わせて。

『あれ？つくねって そんなに美術好きだったっけ？』

側まで来ると・・・

「うひゃあ!」

驚きながら教本を閉じた。

「いつ いや!なんでもないよ!」

なんでもないように見えないけど・・・

『まあいつか・・・ とりあえず、絵描きに戻るわ。』

手をひらひらさせ、モチーフ探しを再開した。

大切なもの・・・ねえ・・・

多すぎだな・・・ 苦笑

授業が終わり、

つくねは何か、きっかけがあったのかモカと話そうとしたが・・・

ある時は、くるむに・・・

またある時は、ゆかりに・・・

更には、ギン先輩に・・・

妨害してるわけじゃないのに・・・

なぜか悉く失敗を繰り返していた。

その失敗シーン・・・

全てじゃないけどある程度は見ている。

もちろん、成功している感じはしない。

んで、思った！

(・・・これじゃあ 漫画だよ・・・ ああ 小説か！

苦笑)

そして・・・早くもつくねの誕生日前日になってしまった。

つくねは単身モカがモデルをやっているらしい美術室の前に来ていた。

「こうなったら美術室に乗り込むぞッ！明日をオレの為にくれて直談判だッ！」

拳を握りこみ威勢良く美術室へ！！

ガラッ！！

「すっ・・・すみませーん！モカさんに話がッ！！！」

力いっぱい叫んだ・・・が・・・

「・・・って誰もいないのか・・・まあいいや・・・中でモカさんを待とう・・・」

ちょっと拍子抜けしてしまっただが、すぐに切り替え美術室の奥へ行くとしたその時・・・

《シクシク シクシク シクシク・・・》

すすり泣き声が・・・

ロッカーの中から聞えてきた。

「何だ・・・？ ロッカーの中から・・・まさかモ力さん！？」

あわてて ロッカーを開けると・・・

そこにはモ力はいなかったが・・・

「せつ・・・石像が！！！！ うわああああ！石像が泣いているっ！！ 何で？？こんなものが・・・それに・・・このコ・・・何処かで・・・」

驚き後ずさりをしていると、

「・・・・・・・・おい 私のアートに何をしているんだ？」

石神先生がいつの間にかそこに立っていたのだ。

「わあ！ いつ・・・石神先生！！ すみません・・・っ！
勝手に入っちゃって！！」

石神は・・・まるで 害虫を見るような嫌悪の表情をしていたが、
すぐにつくねと分かると表情を戻した。

「ん……？なんだ3組のつくね君じゃないか。」

笑いながら話す……

がつ……つくねは安心できなかった。

先ほどの表情を見ているからだ。

(今……先生の顔死ぬほど怖かったような……)

石神は、開けられたロッカーを閉じ、笑いながら……

「フフ……つくね君モカさんを連れ戻しに来たのかい？モデルにかまけて全然かまってくれないから」

「ええええ!!! どう どうしてそれを!!!？」

つくねは凶星をつかれたせいか さっきのことを忘れうるたえだした。

見てりゃ分かると思っただけだね……苦笑

石神も同様に。

「どろろろろ……」

やれやれと言った感じで話そうとしたその時。

「あれ……つくねが……何で美術室（11）に？」

遅れたモカが美術室に入ってきた。

「モカさん！！ いやっ・・・ その・・・これは！」

モカは顔を俯かせた。

「きっ・・・聞いてくれ！オレ・・・」だっ・・・駄目よ」「

つくねが最後まで言い終える前に、モカが慌てて話した。

そして、つくねを美術室から追い出すように、背中を押した。

「恥ずかしいから来ちゃダメーっ！ 帰ってー!!」

・・・恥ずかしい？

「まっ・・・まさか本当にヌードモデルを??」

つくねは 授業で見た教本から連想させたのだろう・・・

そうモカに聞いてみる・・・ 違うと信じて。

しかし返答は・・・

「わたしが何をしたってつくねには関係ないでしょ!!? とにか
く帰って ー!!!」

自分には関係ない・・・

その言葉がつくねの脳裏に響いた・・・

「……………そうだったんだ……その程度だったのかよ……」

「え？」

「よくわかったよ　モカさんはオレのことなんてどーでも良かったんだっ！！！！」

つくねは……モカに言われた言葉がよほど衝撃シヨックだったのか……

返答を聞く前に美術室から飛び出した……

残ったのは……

「つくね　　っ！！」

モカの叫び声だけだった……

「そつ……そんな！違うの！つくねっ……！！」

モカも美術室を飛び出そうとしたその時、

ガシッ！

石神に腕を掴まれた。

「え？……いつ　石神先生……？」

石神の表情は再び邪悪なものへと変わっていた・・・

「ごめんね・・・君を帰すわけにはいかなかったみたいだ・・・」

・・・

・・・

第100話 美術教師 石神瞳（後書き）

ありがとうございました！！

第101話 失踪事件の真相（前書き）

久々連続投稿終了ーしますー！

また出来上がれば投稿するかもですが・・・ 苦笑

駄文ですがご覧くださいー！

第101話 失踪事件の真相

場所は少し変わり・・・

【新聞部部屋】

「変です〜 モカさんとつくねさんに悪〜い「気」がまとわりついています・・・」

ゆかりは水晶玉を使った占いをしていた。

『ん・・・？ 何してるの？』

近くにいたカイトがゆかりのそばまで来た。

「あっ カイトさん・・・ あのですね・・・ ちょっと気になる事があったので・・・ ちょっと占いをしてみたんです！ そうしたら・・・ なぜかモカさんとつくねさんに危険が迫ってる結果が出たんです・・・」

ゆかりは不安そうに話した。

「え？・・・ 占いなんて当たるのー？？」

くるむはうさんくさそーに聞いていた。

「わたしの占いを馬鹿にしないでくださいですー！ 当たるんですよー！」

ゆかりは先ほどの顔が何処かに吹っ飛んだのか。

プンスカ〜ツとくるむに向かっていき・・・

楽しそうに揉めていた・・・ 苦笑

『馬鹿に出来ないよ、くるむ』

カイトははしゃいでいる2人に向かった。

『自然界の気を自らの能力とする魔女の占いは、事細かに的中させるのは無理でも簡単な占い程度ならほぼ100%の的中率と言っても過言じゃないんだ。』

魔女と呼ばれた偉人も歴史上にかなりいる・・・

それらの「力」を恐れた人間達が魔女狩りといった強硬手段をとっていたのだ。

それほど・・・その「力」は巨大だったのだろう・・・

少なくとも人の世を変えるほどに・・・

「へえ・・・それは知らなかったよ わたしも！さっすがカイト」

まだはしゃいでいたけど・・・

まあ スキンシップだな・・・？

「カイトさんの言うとおりです！！だから・・・つくねさん達が心配です〜！今一体どこに・・・」

ゆかりがそういうとほぼ同時に、

ガラッ・・・

つくねが入ってきた。

「はあああああ・・・ ちゃーっす・・・」

いや・・・ちゃーっすって・・・

『つくね・・・どこの運動部だよ・・・んで、どつだった？』

「・・・」

まあ表情を見たら・・・

・・・ わかりやすいなあ・・・苦笑

「よかったですー！」

「つくね」

くるむとゆかりもつくねの方へ駆けつけた。

「遅いで……」

ギン先輩は遅刻してきたつくねに少し不満があったようだ……

自分だって初日に遅れたのにね……

「昨日…… 新たに8人目の行方不明者がでたんや ビシツとせえ！」

そう言うと一緒に紙切れを出した。

『あれ……？ 行方不明者が出たのは知ってたけど……顔写真あつたんだ』

「ん？ああ…… モカさんは参加出来へんみたいやから それ以外の部員全員が集まったら話そー思とつたんや」

ギン先輩と話していると……

「ああー……っ！っ！ このコは……っ！」

・つくねがその紙を握り締めながら何やら大声を出した。

「何や？いきなり？」

『?????』

突然騒ぐのは珍しくないからね・・・

でも・・・

つくねは数秒考え込むとすぐに血相を変え、部室を飛び出していった。

どうしたんだろ？

トイレか？

「あーん・・・つくねさーん 無事だったのに・・・ またどっか
いっちゃった・・・」

ゆかりは残念そうに呟く・・・

『まーまー つくねにもいろいろあるんだろ？でも 今回はちょっと不自然だな？』

カイトがそう言うと、

「ほら・・・ つくねこれを見てたよ？ ひょっとして顔見知りの
コだったのかなあ・・・？」

くるむがつくねが落としていった紙を拾いみんなに向けた。

『ん？ 顔み・・・し・・・り・・・？っッ！！ この写真

の「・・・」』

記憶を張り巡らす・・・

と言っでもつい最近の事だ。

そしてすぐに思い出した。

（確か・・・あの美術の授業の時・・・体育を抜け出したって
言っただ・・・コ・・・？美術室！？！！！！）

つくねの行動・・・行方不明のコ・・・最後に見た場所が美術
室・・・全部繋がる！

『そういうことが・・・ちっ・・・ヤバイな・・・原作 完全
に忘れてるよ・・・』

そう呟くと・・・とつくねに続きカイトも飛び出した。《原作と
か言っなよ！見もふたも無い・・・苦笑》

「あれ？？どこに行くの？」

「カイトさーんー！」

「ってか 部活せーや・・・どいつもこいつも」

みんなに答えるまもなく・・・

部室を後にした。

【美術室】

「きゃあああああ！」

もう放課後で誰もいない・・・

故にモカの叫びも誰にも届かない・・・

「きつ・・・急にどうしたんですか 石神先生っ！！？かつ・・・
髪が蛇みたいに・・・」

石神は邪悪な笑みと妖気オーラを・・・出しながら・・・

「実は・・・さっきつくね君に少しままずいものを見られてしまって
ね・・・おかげで君との楽しい時間ももう終わりにしなくちゃい
けなくなっただ・・・」

そう言つと・・・

目をカッと開かせ、それと同時に髪が・・・

その全てが・・・例外なく泣いている・・・

「な・・・何これっ・・・石像が生きているみたいに泣いてる！
!？」

しかし・・・それよりも衝撃があったのは。

「うづっ!!」

左手に鈍い痛みを感じ その手を見つみると・・・

「な・・・ うそっ 左手が石みたいにつ・・・」

そう先ほどかまれた左手からどんどん石化していつているのだ。

「それはメデューサの「石化能力」・・・私の蛇のような髪に咬まれた生物は皆石になるのさ・・・ やがて・・・君もそのコ達と同じように全身が石になるんだよ・・・」

髪を妖しく靡かせながら・・・

ゆっくりとした足取りでモカに近付いていった。

「そのコ達・・・？な！ ま・・・まさかっ・・・この部屋の石像達はっ・・・」

石神の言葉でモカは全て理解した・・・

一連の事件の犯人は石神なのだという事を・・・

第101話 失踪事件の真相（後書き）

一口妖怪辞典・・・作者都合上W

メデューサ

古くギリシャ神話より知られる髪が蛇と言う
恐ろしい姿をした妖。

生物を石化させる能力を持ち、更に強い者になると

己自身の姿を見せるだけで相手を石化させることも出来ると言う。

原作引用です)

この敵は事あるごとにアートアートってバカの一つ覚えみたいに言
つてて・・・

ちよっとも面白いから！って思ったりしましたね 苦笑

第102話 マッド・アーティスト(前書き)

よろしくお願ひします

第102話 マッド・アーティスト

石神は……

邪悪な笑みを浮かべながら話した……

「そう学園（うちは）の可愛い生徒達さ 皆 私が石にしてあげたんだ……
どうだ？アートだろ？ 君にも石に加わって私の芸術（アート）にしてあげ
るよ 赤夜萌香……」

ギュルン！！ ビシイイイ！！！！

その時 無数の髪の毛がモカに巻きついていった。

「！！！！ ひ…… あ…… ああ……」

モカは身動きが取れなくなった。

そこに石神が近付く……

「ふふ……美しいねえ その美しさをさらに私が高めてあげるんだ 君も光栄だろう？」

「先生……生徒が何人も行方不明になる事件……先生が犯人
だったんですね……」

モカが静かに問いただした。

それには石神は答えずただ……笑みを零した。

「見なよ……このコ達を……泣いている……つまり石にな
つても生きているんだ。そして感情もある……悲しみ……
絶望……動く事が出来ない、死ねない 泣く事しか出来ない……
」

そう言うと石神は寒気がするような微笑の表情を浮かべながら石像
を触る……

「ああ……！何て美しいんだろう……これぞ 真の芸^ア
術^トじゃないか……」

モカは震えた……

その表情に……

そして……その狂気に……

「さて……そろそろ……」

石神は再び髪の蛇を操った。

「君の仕上げに入るとするか」

「いやああああ!!!」

モ力が咬まれる寸前!

「まてえー!?!?!」

つくねが蛇に掴みかかった。

モ力を救おうと・・・

「つくね!?!?!?!?!」

「ふざけるな!!!モ力さんを石にされてたまるかアあ!!!」

引き剥がそうとするが・・・

つくねの登場で明らかに不快感を露にした石神が更に力を強めた。

「チツ・・・邪魔する・・・な!?!?!?!」

ビュオオオオツ!?!?!

髪は蛇でつくねを攻撃しようとしたその時、突然の突風が石神を襲う!

「な!!!何だ!?!?!うわああ!?!」

ドガアアア!!

教員室の外にまで吹っ飛ばされる・・・

が・・・

『ちっ・・・ご自慢の髪はまだ巻きついてるのか・・・ たいそうな髪の毛だ。』

つくねより少し遅れて入ってきたのはカイトだ。

「カイト!!」

『全く・・・つくね・・・一人で突っ走るなよ・・・』

ため息を吐きながら言う・・・

「じゅめ・・・ん・・・」

『まあいいさ、つくねが後先かまわず飛び込んでくれたおかげで、不意打ちできたし・・・ オレは・・・ やっぱし女は極力手を上げたくないもんでな・・・』

頭を掻きながら苦笑をする。

『まあ とりあえず先にその悪趣味な髪を引っぺがそう。』

「おねがい!!カイト!!」「うん!!」

そう言い2人に近付こうとしたその時、

ガブツ!!!ガブガブツ!!!

突然髪が動き出し、つくねに咬みついた。

『つくね!!!』

「がつ……」

つくねは……咬まれたショックからか床に倒れた。

「女には……手を出したくないか……随分優しいんだな……
カイト君　でも　その甘さが命取りだったね……」

フツ飛ばしたはずの石神が出てきた。

『ち……!のびてなかったのか?　オレの主義を曲げるのは嫌なんだが……　それも言ってもらえないようだな……』

そう言つと……

ギョオオオオッ……

カイトの周囲が……凶形とオーラで包まれていった……

臨戦態勢だ。

(「……………これは……………なんだ????この威圧感は……………」)

石神は圧倒的な……それも理解できない妖気^{オーラ}?に驚いていた。

『お前を気絶でもさせりゃ妖気が消えて解けるだろ?この呪縛は、
そういうものだからな……固有の能力は。』

右手と左手に魔力を集中させながら近付いていく……

「くくくくく……………素晴らしい……………これ程の力を持ったも
のがいたとはな……………アートだよ……………」

カイトを見ながら笑みを浮かべる……

『オレはアンタの芸術に加わる気は無いが?』

そう言つと……………ゆっくり間合いを詰める……………

すると次の瞬間 笑っていた、石神は突然動き出した。

それほどのスピードでは無い、

だが・・・

攻めてくると思いきや、距離を取ったのだ。

『逃げるのか！？ 逃げるなら石化を解いていけよ・・・ なら手荒な真似はしない。』

「フフフ・・・ やっぱり君はあまいよ・・・ 私が逃げたって？ なら・・・ モカさん巻きついてる髪は何故健在なのかな？」

そついうと石神はモカの方を指差した。

『なに・・・！』

伸びている髪が再びモカに襲いかかろうとしていた。

（くそつ！ 早くアイツを片付けないと！）

急いで石神の方へ向かおうとするが、

「動くな！ ちょっとでも動いたら・・・ 石化している部分を砕く・・・ 場所によつたら死にはしないかもしれないが 保障はできないぞ？」

そついうと・・・モカの石化している足と手に髪が巻きついていった。

『下劣な・・・』

カイトは怒りをあらわにしていた……

「君が私が距離を取ったのを黙って見過ごしたのが敗因だよ……
これだけ距離をとれば私の髪の方がケリを付けるのが速いぞ。
少しでも妙な動きを……???. ツツ!!! グガアアア!!!」

『ん??』

言う前に、頭上にでかいのを一発ぶつけようとしたカイトだったが、
アイシクル・ベイン
【氷神の鉄槌】（第64話参照）

突然苦しみだした石神に驚いて。術を止めた。

それと同時に……後ろから強大な妖気が……

ゴアアアアッ!!!

モ力が……覚醒していた。

第102話 マッド・アーティスト（後書き）

ありがとうございました！！

第103話 失踪事件 終息（前書き）

よろしくお願ひします!!!

第103話 失踪事件 終息

石神の悲鳴は止まらない・・・

「ぎゃああああ！髪があ！！いきなりなんだコレはー！！けっ
っ 桁違いのパワー！！！！一体っ・・・髪がッ たっ・・・耐え切
れないいいいい！！！！」

モカのパワーを髪で抑えるには少々きつい・・・

いや、無理だろ！！ぜっっったい！

モカのバカぢく「ギロリッ！！」・・・いえいえ「力」の大妖と呼
ばれるほどの力は何度も受けてる・・・

防御してるのに・・・痺れるんだよな・・・苦笑

とりあえず 石神は苦痛で唸ってるから その間にカイトは倒れて
いるつくねのもとへ向かった。

『モカ！つくね！』

つくねの手にはロザリオが握られている・・・

つくねは、完全に石化する前に、

モカから口ザリオを外していたのだった・・・

「ひとり・・・で・・・きちちゃ・・・ったけど・・・さ・・・
や・・・っぱり役に・・・立ちたかった・・・から」

そう言うと・・・つくねは顔面まで石化してしまい・・・動けなくな

『つくね・・・ ありがとな。 オレ助けにきといて・・・助けられたよ。』

倒れているつくねを起こした。

「ひiiiiiiiiい！ 痛いつ！ーちぎれるウウウウウウウウ！！！！
「！」

そのころ、

覚醒したモカは石神の髪の毛の束を一本・・・また一本と力に任せながらちぎり・・・

ズバアアアアア！！！！

最終的には纏わり巻きついていた髪 全てを千切った。

「ぎゃあああああ！髪があアあ …… 私の髪が！！！！！」

石神は頭から血を流し……

完全にキレた。

「おのれっ…… おのれえええ！！ 芸術アートも理解できないクズが
あ！！！！とつとと 石になれえええ！！！」

白目を向けながら怒りの形相でモ力に飛び掛った！！

『インドウんなもん理解なんぞ出来るか！！ したくも無いわ！
インドウ風壁』 バインドウ戒めの

石神の周囲に風が現れ……

それらが石神の動きを風の楓壁により束縛。

「ぐがあ！！ く……そ！！ なんだこれは！！！！！！おのれ
！！オノレ！！！！！！！」

ヒュン！！

その次に石神が見たのは……

ズギヤアアツ！！

モカが踵落としをする寸前の光景だった・・・

「が・・・ は・・・」

「どうだ？ 自分が石にした蹴りの重みは？」

モカが半分ほど石化している右足を叩きながら言った。

石神は頭から血を噴出しながら倒れた。

まるで鯨の潮吹きだ・・・

『ああ、痛そうだ、メチャクチャ・・・』

後ろにいたカイトが苦笑しながら言った。

束縛する必要なかったかな？

モカなら・・・ 苦笑

「カイト・・・つくね・・・」

カイトはつくねを背負いモカのそばまで来ていた。

『つくねに助けられたな。全く助けに来といて助けられてたら世話無いな・・・』

石になったつくねに笑いかける。

「ああ・・・つくねは蛇の群れに手を入れて私の十字架ロザリオを外した・・・並みの度胸じゃ出来ない事だ。」

モカはつくねのそばまで来た。

「礼をいうぞ・・・お前も成長してるようだな・・・」

『そのセリフ・・・起きている時に言ってやれよモカ。これ以上無い誉れだと思うぞ？お前に言われるんだからさ。』

そう笑いかける・・・

そしたら・・・やっぱりモカは顔を赤面させた・・・。

「ふ・・・ふん！」

(・・・) 「ここであーた照れてるって言ったらきつと蹴ら」(

ビュン！！

水面蹴りが炸裂！！

足が石なだけに攻撃力さらにUPだ！

『うおっ！』

咄嗟にジャンプでかわす！！これは受け止めたくない！！！！

とりあえず粉碎骨折程度で済みそうだが・・・

いやだー！ぜーったい！！

・・・・・・・・・・・・・・・・

『モカ・・・ お前やっぱ読心術でも使えるんじゃないか？』

苦笑しながら言う。

「前に言わなかったか？お前は言う前に既に顔に出るんだよ！今回は特になー！そして大体想像がつく！ちっ・・・満足に動けたなら今日こそは戦い合おうと思ったのだがな・・・」

モカは石化している足を忌々しそうに睨んでいた。

『だーから・・・ 漢字違っつて・・・ それに、オレは・・・』

「・・・女には手を出せないんだろ？」

つつー！！先を読まれた・・・

「さつきも見てたが・・・ やはりお前は石神に直接ダメージがいくような攻撃は殆どしてなかった、全て間接的な攻撃。様々な攻撃手段を持つお前がな・・・ 吹き飛ばしも妖にとつたら 大した

ダメージにはならない。その主義・・・戦いの場には不要だぞ。」

モカがきつぱりと！言ってくれた・・・

「これからカイト・・・お前の最大の弱点に成るかもしれないぞ？今のうちに克服しておいた方がいいんじゃないか？」

そう言うとモカは腕をぐるん！と回し・・・指をパキッパキッと鳴らし始めた。

何・・・？準備体操・・・？

ええ！今から！？・・・苦笑

『ははは・・・確かに・・・な・・・オレは極力・・・女には手は出したくない・・・傷つけない・・・自分で手を出したくないと言うことだから、卑怯と思われるかもしれない・・・石神のことなんざどうでもいいんだが・・・自分が傷つけなければいいんだから・・・』

少し・・・表情が曇った・・・

あの時の横顔に酷似していた・・・

「何か・・・あつたんだな？」

モカは臨戦態勢をとりつつあつたが・・・

(ってマジだったの??)

カイトの表情を見て、それが消えうせたようだ・・・

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

カイトは何も言わない・・・

ただ顔を曇らせるだけだ・・・いつもなら絶対にしないような顔に・・・

「フ・・・話したくない・・・つか それぞれに事情はあるものだしな・・・」

モカが悟るように言う・・・

表のモカにも・・・裏のモカにも・・・

そういうことはあるものだ・・・

不思議じゃない。

『いつか・・・整理がつけれたら話すさ、その時・・・克服できるのかもな・・・でもやり過ぎないように・・・だけだな。』

「フン・・・そのときが来たら戦いはなてあつ合うとするか？」

最終的にはそうなるのか・・・

モカはカイトとよっぽど戦いたいらしい・・・

『ははは・・・分かった、その時は付き合っよ。組み手みたいなもんだ・・・』

苦笑しながら言う。

「それは、楽しみだな・・・」

モカも笑う。

そして苦笑していたカイトは顔を戻し真っ直ぐモカを見つめた。

『モカ・・・ありがとな・・・話・・・聞こうとしてくれたんだろ？今まで話せるような相手はいなかった・・・モカになら話せそうな気がしたが・・・やっぱりまだ迷ってるみたいなんだ。こんな話。最初にしたのがモカで良かったよ。』

そう言っつてモカに笑いかけた。

「つつ！！・・・／／／」

（何て表情かおをするんだ・・・／／）

カイトの「ありがとう」の所の顔に・・・モカは一気に顔が赤面していくのが分かった。

『ん???』

モカの様子が・・・

「フ……フン 私はもう眠る……またな。」

詮索しようとしたら早々にロザリオをつけようとした。

『ん……ああ。おやすみモカ。』

モカは顔が赤いのが悟られぬよう顔を背け、自身とつくねを頼み誤魔化しながら 笑

十字架を身につけ眠った。
ロザリオ

『さて……石化はつくねはまだだけどモカは解けてる……な、猫目先生にでも頼むか……』

そう言い、さすがにモカ+つくね、石神、女生徒8人を運ぶのはきついで、猫目先生に連絡した。

そして……失踪事件も幕を閉じたのだった……

第103話 失踪事件 終息（後書き）

裏モカさんの踵落とし!!!

地面にめり込んでしまえますよね・・・

ぞおーって感じですよ・・・

ありがとうございました!!

第104話 ささやかな誕生日会（前書き）

よろしくお願ひします！！

第104話 ささやかな誕生日会

.....

翌日.....

「.....!! はっ!!」

つくねが目覚めたのは保健室のベッドの上.....

「あっ.....あれ?ここは?」

いまいち状況が掴めてないみたいだ.....

その時

「つくねー!! よかった!!! 目が覚めたんだ!!!」

モカの声が聞えた。

横を見ると.....モカがいて抱きついてきた。

よほど嬉しかったのだろう。

「わあ!モカさん!?? これは.....!!? オレ.....石に.....
・ あれ?カイトは無事?」

戸惑いながらモカに聞いた。

「えつとね、石神先生が倒れて皆に掛かった妖術が解けてもとの姿に戻れたんだ。でも、つくねだけ丸一日 目を覚まさないから心配してたんだよ!」

(丸一日!!! ええ・・・寝てたってことは・・・もう誕生日じやん・・・ 結局・・・モカさんに言えなかった・・・)

ガーン・・・ショックが大きい・・・

カイトの安否のこと・・・帰ってきてない事はいいのかよ!??
って突っ込んでみたい!

「えつとね・・・あとカイトだけど さっきまでは一緒にいたんだけど。ちよつと先生に呼ばれちゃって、今出てるんだ」

「へー そーなんだ・・・」

反応薄ッ!!

「つくね・・・見て!!」

落ち込んでいるつくねにモカはある人物画を見せた。

「じゃーん!!・・・なーんてね。」

つくねの絵だ・・・

「大切なもの」ってテーマでがんばってつくねを描いたの!へたっぴだけどね!」

モ力はテレながら話した・・・

「?????」

つくねはまだ状況を理解できてないみたいだ・・・だが、

「プレゼントだよ!」

このモ力の一言で理解した。

「隠しててごめんね 心配させたけど これを描く為に石神先生に
絵を習いに行つてたんだ! モデルをする代わりにね。 お誕生日お
めでとうつくね!! わたしは つくねが大好きだよ!」

モ力は顔をパアツつと明らかに照れくさそうに言った。

殆ど告白だね

つくねは・・・

覚えてくれた事に感慨極まったのか・・・

目に涙を浮かべていた。

.....
.....
.....

【保健室前】

『・・・・・・・・・・フフ 良かったな・・・つくね。』

保健室の扉にもたれかかっているのはカイト。

数分前に到着し、つくねが目を覚ました事に気付いたのだが・・・

今は入らない方が良くと思い、そのまま暫く待っていた。

無理に入るのは野暮ってもんだ！

そして右手には簡単なキーホルダーのアクセサリを手に持ってる。
・
・

ささやかだがプレゼントだ。

『購買部にはこんなしかなかったけど・・・ まあいつか・・・』

そのアクセサリを袋に入れた。

その時、

「「あ！！ カイト！！」さん！！」

突然！声（大声！）が聞えた！

『へ??.?』

ふと前を見ると・・・

「心配したんだよー!! もーこの間!!」「本当ですー!!!」

ドーン!

2人そろってタツクル〜

『うげ! ああ ダメだって!今は!!!』

言ってももう遅かった・・・

3人の重量に耐え切れなかった扉が壊れ、そのまま3人+不満顔のギン先輩が、保健室へ入ってしまった・・・

「!!!!!!」

仕方ないから、つくね達の方を見てみると・・・

うん・・・ずっとこけていたね。残念なタイミングだったらしい・・・
苦笑

やれやれ・・・

2人を抱えたまま、

『つくね……目を覚ましたんだな。良かったよ。』

何事も無いように振舞いながら話しかけた。

「あーほんとだ！ よかったあ つくね！！目を覚ましたんだね！！！！」

「よかったですー！！！！」

「なーいんで こいつらだけ……こんな……」

くるむ、ゆかりがそれぞれ続いた。

ギン先輩は………

まだ、ぶつぶつ言ってたな

苦笑

「モカから聞いたよ！今日 誕生日だってね！ はい プレゼント
クッキー1年分！！」

「私は わら人形のわらわら君を！！」

んで、ギン先輩はバラの花束を持っていた……

それぞれまあ……个性化的なプレゼントをしていた。

『クッキー1年分！！……食べるの大変そうだ…… んで1
年したらまた追加で無限ループするの？』

そつと袋を渡した。

「あ……カイト。」

『ほらよ！おめでとさん。』

つくね以外には聞えないほどの声でつくねに言い、

軽くウインクをした。

「あつ……カイトもありがとう！」

つくねは若干落ち込んでいたが……

(……まあ いつかあ また……いつか……)

直ぐに立ち直っていた

……

さーてー！！

「ハッピーバースデー つくね！」

保健室にクラッカーの音と祝い声が響いて……

つくねの誕生会が盛大に始まった。

く号外 内容く

女生徒拉致の美術教師

無期限の停職へ！！

拉致されていた女生徒は無事保護！

容疑者 石神 瞳 先生

《美術教師》

第104話 ささやかな誕生日会（後書き）

ありがとうございました！

第105話 締切前と脅迫状（前書き）

よろしくお願いします！

今回は原作の中でもトップクラスに嫌なやつが……
作者の意見ですがね

でわ どーぞ！

第105話 締切前と脅迫状

つくねの誕生日から1日過ぎ・・・

我々新聞部は「修羅場」を迎えていた！！

締切前という修羅場を！！！！

「そついえば・・・季節感無いよね？いつまで冬服なんだろう？」

つくねは窓の外を見ながら・・・

（今更だけど・・・マジで人間界とは遮断されてんだなあ・・・
学園（こくえん）って・・・）

ほけーっとしていた・・・

『現実逃避するのは結構だが 手は動かせ！！ つくね！』

ビクッ！！

つくねは はっとして、カイトのほうを向いた。

「あ……ははは…… ばれちゃってた？現実逃避入ってたの？」
苦笑しながら話す……

『まあ……気持ちはわかるが……』

「あはは……わたしも 分かるよ 昨日つくねの誕生日だったのに いきなり締切前でハードだもんね……」

モカも同様の様だ……

実を言うと今先日 of 美術教師の事件を新聞にしているところなのだ。

そして新聞はスピードが命！！

誕生日のわいわいムードから一転！全力回転せねばならない新聞部なのであった……

大変そうだ……

暫くは無言でやってたのだが……

『……ふ……フフ……フフ……フフ……フフ……
フフ…… いつまでも 部活トラウマになってるオレじゃないぞ
ー！！！！ オラァー！！！！どんどんかかって来いやァー！！！！』

突然！！

カイトスイッチがONになったようだ！！

オラオラオラーツ！！と！！ カリカリ・・・と・・・書いて
いる・・・

「！！？・・・ははは 良かったね？カイト・・・克服でき
たじゃん・・・」

「そうだね・・・」

モカとつくねはいきなりでびっくりしていたが・・・ と言うか全
員苦笑していた。

「カイトがすごいやる気なのは素敵だと思うけど さすがに折
角の土日に部活でカンズメなんてね」

いつもなら 素敵ーっと飛びついてくる くるむなのだが・・・

さすがに疲れているのか、グーーっと背筋を伸ばしたため息をして
いた。

「本当ですー これじゃ まるで締切に追われる漫画家ですう・・・
おまけにノーギャラ？」

ゆかりは・・・何やらリアルな事を言っていた・・・ その時、

「甘ったれんなー！！ 新聞も漫画と同じで締切厳守やッ！！！！」

編集・・・じゃなくギン部長から檄が飛ぶ・・・

「一面を飾る美術教師の事件がおとといの木曜！つまり来週の頭にはそいつが記事にならへんと？新聞？とは呼んで　ぜーいんカイトを見習えや！　それに泣き言は締切守ってから聞いたるわ」

新聞を読みながら珈琲を片手に・・・

まるで優雅な朝のよう・・・って！！

「ギン先輩もコーヒーでくつろいでないで手伝ってくださいッ！！先輩こそカイトを見習ってよ！！」

モカがもーっとな声を出す。

『オラオラオラ・・・』

一心不乱にカイトはひたすら書いていた。

回り全然見えてないな・・・

「あは！カイトさん凄いですー　それに比べ　ギン先輩はえらそーな編集者みたいですよー！」

ゆかりはケタケタケタツ笑っていた・・・

「いや・・・　何で漫画に結びつけてんの！！？・・・別に問題ないけど・・・」

つくねがゆかりにそういつてたが・・・

そうです、別に問題ないよね〜

にじ小説だもん

「まあ わたしは つくねとカイトが一緒なら何やったっていいもん
ん」

そう言うにつくねにまずは抱きつく・・・

カイトは今トランス状態だもん・・・ ジャマしちゃ悪いしね

「ちよつと！くるむちゃん！！」

モカがくるむに詰め寄り 火花を散らす・・・ バチバチツつと
ね

「また泥沼の争いが始まったですー！！」

ゆかりは楽しんで、つくねは呆然としていた。

「モカ！つくねの誕生日に抜け駆けするつもりだったみたいだけど
！そうはさせないよっ！ つくねもカイトも絶対渡さないもん！！」

「くるむちゃーん！！」

.....

.....

楽しそうに騒いでいる新聞部を・・・

遠くから覗いている者がいた。

「.....うふふ いたいた..... ぼくの愛しいひと.....
かわいいなあ やっぱり こうやって見ているだけじゃ我慢なん
てできないよ..... まっててね..... すぐに君のこと..... 抱
きしめてあげるから..... フフフ.....」

そう呟くと..... 盗撮をし、そして 校舎へと消えていった。

.....

.....

さーて.....

部活動もスパートをかけてマス！

ギン先輩もやっとな仕事してくれてるし、

そこへ・・・

「みんなやつてるー？ 差し入れ持ってきたヨ！」

入ってきたのは新聞部顧問 猫目先生だった。

「いや・・・カットは多いし ページは多いし 大変です・・・」

『オ・・・ら・・・お・・・ラ・・・』

カイトくん・・・が・・・

「カイトも・・・ そろそろやばいかも・・・」

と言った感じだ・・・

時間に追われるプレッシャー・・・ そして仕事量・・・

想像以上だったようだ・・・

「まあまあ 差し入れ食べて元気出して！」

そう言っつて先生は袋を差し出した。

中身は・・・

「先生！？ コレ 生魚ですけど・・・？」

はい・・・しかもまだ生きてます。

「おいしいわよー！リフレッシュできるし！」

人差し指をピン！っと上げ言い切った・・・

「「生で！！？」「」

寿司かよ・・・

ワイルドな食べ方をしなきゃならないのか・・・

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ついに言葉が無くなったが・・・まだ書き続けていた。

「カイト」先生が差し入れもって来てくれたし（生魚だけど・・・

）ちよつと休憩しよ？息抜きもいるよ！」

・・・・・・・・

『グフツ・・・・・・・・』

バタン！！

ちよー！！！！

「ええええ！！カイトしっかり〜！！」

机に突っ伏してしまった・・・

『……………い……………息継ぎ……………わ……………すれて……………
た……………』

一心不乱だったせいか、

チアノーゼ
酸素欠乏チアノーゼになってしまったみたいだ……………苦笑

とりあえず、風通しの良い所へ……………

ちよっと加減しようよ……………苦笑

「あつ！そーだ！くるむちゃん！」

猫目先生が何やら思い出したらしく、

カイトを介抱していた（追い討ち？）くるむに声を掛けた。

「教室の前にこんな封筒落ちてたわよ！」

「封筒？」

先生から受け取ってみると……………

《愛するくるむちゃん　　ながれ》

と書かれていた。

（ラブレター？　誰？こんなときに……………カイトがつくねだった

ら良かったのに・・・ いや！2人からほしいわね（

くるむは若干赤くなりながら、中身を確認していた。

中身は・・・

【くるむちゃんH写真集！！】

そして・・・

ばらまかれなくなかったら校庭まで1人で来い・・・って感じの短い文だった・・・

ここから事件が始まった・・・

第105話 締切前と脅迫状（後書き）

ありがとうございました！！

第106話 グラビア撮影レジーナ(前書き)

よろしくお願いします！！

第106話 グラビア撮影(1)

(きゃああ！何コレー！わたしのお写真じゃないッ
てゆつか脅迫状!!?)

中身を確認すると その内容に思わず 無意識に隠そうとして、用
具箱に突っ込んでしまった。

「どうしたの？くるむちゃん?」

つくねはカイトがとりあえず復活した為、再び仕事を再開しようと
机に向かったところ・・・

くるむが何やら慌てていた為、話しかけた。

『ふう・・・ごめんみんな。世話かけちゃって、くるむもありが
とう。』

そこにカイトもやってきた。

くるむは いてもたってもいられなくなり・・・

「あはははは・・・どういたしましてーカイトー・・・ちょっと
用事を思い出しちゃった！わたし抜けるねー」

足取りがおぼつかない様子で立ち上がる・・・

「くるむちゃん！ちょ・・・締切はッ・・・」

モカが慌てて止めようとするが・・・

「後はよろしくー!」

そう言いつと・・・

くるむは部屋から出て行った。

「どうしたんだろう・・・」

つくねも困った感じで呟く。

「くるむちゃん・・・」

モカも・・・複雑な表情を作り・・・黙りこむ。

「とりあえず作業再開や！時間があらへん！」

さすがにギン先輩もこのままでは間に合わないと感じたのか、

驚くことに一番先に仕事を再開した！

「ええー 部長が真っ先に仕事してるですー これは驚き！槍でもふるですかー？」

ゆかりは驚きながらも笑いながら話す。

「あほな事言ーな！間に合わんやろ！」

ギヤイギヤイ言い争いが・・・苦笑

『・・・・・・・・・・・・・・・・何か 違和感があるな・・・ あのくるむの表情・・・ まあ とりあえず作業再開しよう、つくね、モカ！せつかくギン先輩もやる気みたいだし』

「うん」「そうだね・・・」

2人は頷くと・・・ 机に戻り作業再開した。

何時間たつてもくるむが帰ってくる様子はなかった・・・

「・・・帰ってこないね くるむちゃん・・・」

つくねがそう呟いたのがきっかけだった。

「この程度で逃げ出す人は用なしです〜」

容赦の無いゆかりの一言ー！

（言う事きつついよなあ・・・ ゆかりちゃん・・・ 11歳にして・・・）

つくねは若干引き気味・・・

『逃げ出すくるむじゃないと思っけどな〜オレは。』

カイトはゆかりと反対の意見だった。

「そっだよー ゆかりちゃん！」

「でも 戻ってこないですー」

.....

更に暫くすると・・・今度はモカが口を開いた・・・

「・・・ねえ くるむちゃんって 新聞部のことどう思ってるのかな・・・」

暗い顔をしながら呟いた・・・

「『『『え？』』』」

皆がモカの方を向く・・・

「くるむちゃんが新聞部にいるのって カイトとつくねが好きだから・・・だよ？ わたしなんて最初はとっても嫌われてたし・・・」

モカは更に表情を曇らせながら続けた・・・

「本当は わたし達のこと 友達と違っててくれてないのかも・・・だって皆がこんなに大変な時に1人でどこかへ言っちゃうなんて・・・絶対に変だよ！」

この言葉に・・・皆が沈黙した・・・

ギン先輩まで顔に手をつき、黙る。

それを遠目で見ていた猫目先生は、

(・・・あらまあ 団結力の強いメンバーかと思ったら・・・ 意外と脆そうねえ・・・)

困った表情をしていた・・・

「なっ 何言つてんだよ！いつも仲良くやってるじゃんか〜きつとホラ・・・ くるむちゃん 今日は大変な用事があったんだよ・・・ そうに決まってるって！ ね？」

つくねが必死に笑い顔をつくり、場を和ませようとしていた・・・

『そうだな、くるむはモカが思ってるような子じゃないと思うぞ？ 良くも悪くも真っ直ぐだから・・・』

最後の方は若干苦笑気味・・・

「・・・・・・・・」

モカは黙っていた・・・

くるむに自分は嫌われてるんだ・・・

そう思っていた為・・・

簡単に信じられないみたいだった。

一方その頃・・・

くるむは、ラブレター脅迫文の送り主である、かのう叶 ながれ流行と会っており・・・

「グラビア撮影ごっこ」

なるものを強要されていた・・・

・・・

暫くは必死に我慢してたくるむだったが・・・

もうー!!

「こんな話が違つて〜!!いい加減に!!」

キ っと怒ろうとしたが・・・

「おっと・・・良いのかい・・・?そんな口きいちゃって・・・」

じめじめした顔を近づけられながら・・・くるむに言う・・・

「う・・・?」

その気持ち悪さにくるむはたじろいだ。

「このぼくには女の口のヒミツがわかつちゃう特殊能力があるんだ
よ〜 くるむちゃんのことも いろいろと知ってるんだよお!!」
そう言うところくるむに耳打ちした・・・

「○ × 凹凸!!!!!!!!!!!! へっ へんたいーーー
!!!!!!!!!!」

一体何だったのか・・・それは想像にお任せします・・・苦笑
そして 叶は、不気味な笑みを零しながら・・・

「そーゆーの ぜ〜んぶ つくね君やカイト君に教えちゃおっかな
〜?」

鼻歌交じりに・・・

わざと聞えるように呟いた。

「!!!!!!? な・・・何で2人の事・・・ やめて!それだけは
!!!」

くるむは動揺していた・・・

「ふーん・・・二股かけてるのに〜結構純情なんだね〜 くるむ
ちゃんってさあ・・・」

またまた気持ち悪いほどの笑みでジト〜とくるむを見つめた・・・

「ふ!二股じゃない!! わたしは2人の事がほんとに好きになっ

たのー！間違ってるかもしれないけど 自分に嘘をついていく自信
なんか無いわ！」

二股……

その言葉にくるむは真っ向から反論した。

叶はちょっと驚いていたが再び笑みを出し。

「そっ…… なら話しは早いや！ じゃあ バラされたくなかつ
たら このコスプレやってもらおうかッ！！」

取り出したのはメイド服……

くるむはかなり引いていた……

(やばい…… このひと調子に乗ってくる…… いつその事
魅惑眼チャームで……)

くるむはそう考えたがすぐに首を振った……

そして、カイトとつくねの言葉を思い出した……

《君は魅惑眼そんなの使わなかったって、十分魅力的だしな。オレはそう思う
よ……》

《くるむさんって根っからの悪いコには全然見えないもん！きつと
仲良くなれると思う……》

2人がくれた・・・とても優しい言葉だ・・・

そのときくるむは誓った事を思い出した。

（わたしは・・・そーゆーひどいことするのやめたんだから！）

そして・・・くるむは嫌々ながら・・・着替えて叶のところへ戻っていった。

第106話 グラビア撮影しっしっ(後書き)

この敵？キャラは嫌なキャラです〜!! 苦笑

ありがとうございました!!

第107話 誰もいない部屋・・・(前書き)

ちよつと短いですー！

第107話 誰もいない部室・・・

無理矢理付き合わされたグラビア撮影・・・

暫く・・・というかすっかり日も落ちた頃・・・

くるむは解放された。

「や・・・やっと・・・解放してもらえた・・・12回も衣装チェンジして・・・」

足取りおぼつかなかったが 急いで部室の方へ向かった・・・

(・・・みんな まだがんばってるのかな・・・)

部室をそ〜つと開けると・・・

部員全員負のオーラに包まれていた!!!

周辺から妙な風が吹き巻いている・・・

その表情はまるで阿修羅!!!

・・・にくるむは見えた。

(ひいひいひい!!! 怒ってるッ みんなめっちゃ怒ってる〜〜)

ッ 怒鳴られるっ)

くるむは顔を青くして震えた。

「ああ…… お帰りくるむちゃん 遅かったね…… でも
ちょうど今日の作業切り上げたところなの…… 残りはまだ
明日がんばろうって……」

モカが弱弱しい声で言った……

他の皆さんもっヨロヨロだ……

カイトくんは……

『……………ゲフッ』

吐血!!!

と言つのは嘘!だが、 苦笑 さすがに疲れきっていた。

「えー!」

くるむは何かを言つ前に……

みんなおぼつかない足で部室の外へ……

「だからもっくるむちゃんも帰っていいよ……」

そう呟き出て行った。

1人取り残されたくるむは呆然としていた・・・

(遅かった・・・)

そして後悔していた・・・ 以前までの自分に・・・

そう・・・叶に目を付けられたのは元々自分のせいだった・・・

くるむは無言で作業机の前にきて・・・そして座った。

(サキュバスの能力で・・・男の人を虜にしている気になってた昔・・・ そうやってチャホヤされても・・・心からの友達は1人も出来なかつたけど・・・それでも良いっておもってた・・・)

くるむはめに涙を溜めていった・・・

(ああ・・・あんなバカみたいなことをしてたからきつと今になつてバチが当たつたんだ！)

「謝らなきゃ・・・ みんなに・・・」

そう言つと・・・ 後ろから声が聞えてきた。

「つぶつぶつぶ・・・何だい？どうしたのくるむちゃん・・・」

くるむが驚き振り向く。

叶だ・・・

「いやああ・・・ 本当に今日は楽しかったねえ 明日もまた遊ぼうね・・・くるむちゃん・・・」

悪夢のような事を言ってくる・・・

「なっ ながれ君！ どうしてここにっ 明日はやだよっ デートの約束は今日だけのはず・・・」

そう言つと叶は、

「そんなつれない事言つと・・・ 今日取った写真見せちゃうよだれに・・・とは言わないけどさあ・・・」

写真を構えながらジリジリと近付く・・・

「ええ！！？やめてっ 誰にも見せないって言ったのにっ・・・」
驚きながら言つと・・・

叶はこれでもかって程の気持ち悪い笑みをあらわにし・・・

「じゃあ 明日も遊ぶだろッ！！？ もう離さないからなッ！！」
「ダメ・・・ 明日だけは・・・ もうわたしに付きまとわないで！！！！」

くるむは我慢できなくなり部室を飛び出した。

第107話 誰もいない部屋・・・（後書き）

ありがとうございました！！

第108話 盗まれた原稿とくるむの真相（前書き）

よろしくお願いします！

その次に・・・ゆかりから悲鳴が！

「やああああっ！わたしのデータも消されていますっっ バックアップのMOは無くなってるし・・・ おまけに日記まで読まれてますう！」

何故に日記まで！！

「しかも キーボードはナメクジ這ったみたいにべとべとしてるう
）・・・」

そう言うところむが過剰に反応した。

「！！！！！！」

（あいつだ・・・ 何よりあいつ 昨日の夜 この教室に入ってきたし・・・ じゃあ これは・・・ 原稿を人質に取ったから言う事聞けっていう・・・ 脅迫状だ！）

くるむは顔を青くしていた・・・

つくねだけが・・・その表情に気付いた。

「くるむ・・・ちゃん？」

だが、ギン先輩から指示が飛ぶ。

「・・・くっ しゃあない！今から犯人を探しとるヒマあらへん！もっぺん最初ツから作るでツ！！ 減ページでええ！何とか

するんや!! つくね、モカさん、くるむちゃんは作業場所をきれいにしといてや! そんなべとべとじゃ、出来へん! ゆかりちゃん
は、PC作業を最初から頼むわ! カイトは、新しい原稿用紙の準備!
オレは猫目先生に現状を伝えたらすぐ他の作業に取り掛かる!
なんとしても間に合わすんや!」

そうギン先輩が言うとみんな頷きあい、作業を再開した・・・

1名を除いて・・・

『不味いな・・・ まだ用紙あったか? 少なかったような気がする・・・』

カイトは資料室へと直行! ギン先輩は携帯で連絡、残ったのは4人・・・

くるむは・・・ 震えながら・・・ 口を開いた・・・

「み・・・ みんな・・・ こ・・・ こんな時に 悪いけど・・・
わたし 今日部活休むね・・・」

すると・・・ モカが・・・

「な・・・ 何で? どうしちゃったのよくるむちゃん・・・」

モカもかなり驚いたのか、足をふらつかせながらくるむに近づく・・・

「みんなが・・・ 大変なときに自分だけ・・・ くるむちゃんは何とも思わないの??」

くるむは表情を曇らせた・・・

そして言おうとしたが・・・

皆の原稿が人質である以上迂闊な事はいえない・・・

『どうした！騒いで！！』

騒動に気がついたのか、カイトが戻ってきた。

「カイトからも言っただけ！くるむちゃん・・・こんな時に休むって言うの！！」

モカが・・・怒気を籠めた声をあげた・・・

『え・・・？』

モカの声に驚きながらくるむを見る・・・

「カイト・・・わたし・・・」

くるむは目に涙を溜め・・・何か言おうとしたが・・・唇を噛み飲み込んだ。

「ごめん・・・行くね・・・」

そう言つと皆に背を向ける・・・

モカはもう・・・我慢できなくなった。

「見損なつたよ！くるむちゃん 結局わたし達のこと 友達とも何とも思つてないんだねっ！ それなら新聞部なんか出て行つてよ！」

叫んだ・・・が・・・

くるむが振り返る事は無かつた・・・

重苦しい空気の中・・・

作業が再スタートした。

そんな時・・・

カイトが、

『オレ・・・くるむを探してくる』

口を開いた、

「オレも・・・行くよ」

続いてつくねも立ち上がった。

モカが慌てて2人を止めようとした。

「だっ……ダメ！2人まで今いなくなったら本当に間に合わなくなちゃう！！ お願い 今はこっちに集中して！2人とも……」

モカは説得をしようとするが……

つくねは、聞かずそのままモカを横切った……

モカはショックだったのだろう……啞然とした表情をした。

『……いつものモカなら 気付いていたと思う』

カイトが口を開く、

『くるむの顔……「助けてっ」……って叫んでるような顔をしていた…… オレはそんなくるむをほっとく事は出来ない。』

続けてつくねも……

「オレもそんな感じがしたんだ…… さっきのくるむちゃん……」

つくねも感じたようだ。

カイトに同意していた。

「……お前らが抜ければ 皆で作ろう言っ多新聞がめっちゃくちゃになる……どうなってもええんか？」

静かに聴いていたギン先輩も口を開いた。

2人の事も分かるが・・・今はやはり新聞を優先させたいみたいだ・
・

(・・・みんなあつという間にバラバラね)

応援に駆けつけた猫目先生も残念そうな表情をした・・・

だが、次のつくねの言葉で場の空気が変わった。

「どうなってもいいわけじゃありませんよ。ギン先輩・・・皆で作ろうって決めた新聞ものだから　くるむちゃんが一緒じゃなきゃ完成しないと思ってたんです。」

!!

『そう・・・だよな・・・　新聞は皆がひとつになつての共同作業・
・　誰一人かけちゃあいけないよな・・・』

つくねの言葉に感動してしまった・・・

モカもギンも目を見開いている・・・

その時、

別室で作業をしていたゆかりが叫んだ。

「みなさん！大変ですう！！
箱からこんな物がっ……」
原稿の手がかりを探していたら道具

皆がゆかりに近付き……

事の発端に気がついた。

第108話 盗まれた原稿とくるむの真相（後書き）

ありがとうございます！

第109話 わたしの大切なもの・・・(前書き)

よろしく願いします!!

ナメクジなんてきらいだー！ 苦笑

第109話 わたしの大切なもの・・・

皆が脅迫状を見ていたその頃・・・

叶と決着けりを付けるためにくるむは対峙していたのだが、

・・・体に入らなくなってしまっていた。

「きゃああああ！」

その隙に、叶はくるむの胸を腕を伸ばし驚つかみにする

ぐにゅん！

「やめっ！...！」

くるむは手で掃うが・・・

やはり力が入らない・・・

「やわらかいね うふふ・・・どろしたのかあ？ ちつき井での
威勢は まるでお人形のようにおとなしくなっちゃって・・・」

くるむはわけがわからなかった。

が・・・

叶を見てみると・・・

何かを噴出しているのが見えた。

（これは・・・毒ガス！！　こいつ・・・体から毒ガスを？
いけないっ・・・このせいだ・・・このままじゃ・・・）

くるむは咄嗟に背後にある体育倉庫へ逃げた。

「うふふ・・・気付いたみたいだね・・・僕的能力・・・でも逃げられないよぉ〜」

そう言うとジリジリと倉庫に近付いていった。

体育倉庫の扉に鍵をかけ・・・

くるむは爪を伸ばし臨戦態勢に入った。

（あんなヤツに・・・負けられない・・・絶対に！　何とか時間を稼いで反撃のチャンスを・・・）

策を考えていると・・・

「かつわいいな・・・こんな狭い倉庫に逃げ込んだじゃって・・・もしかして僕をさそってるのかな？」

足元から・・・

声が・・・

「なっ！！！！」

叶は扉の下の僅かな隙間から体を伸ばし侵入してきたのだ・・・

「何なの・・・あなたの体・・・」

全身に悪寒が走る・・・

ねばねばとした粘液を出しながら・・・近付いてきた。

「うひひ・・・いいだろうこの体・・・！知ってる？ナメクジの体ってどんな狭い隙間もぬけられるんだよ　さつきして見せたみたいにさあ・・・僕はナメクジの妖なのさ　おかげで女の口の部屋に忍び込んで秘密や弱みを掴んだりだって出来る。」

目をギョロギョロ動かしながらくるむをニタア・・・と見つめる・・・

「あなた・・・今まで何人の女の口にこうやって酷い事を・・・
くるむは啞然としていた・・・

「そんなのは覚えてないねえ〜　でも君は今ままで最高のエモノ
だよ・・・くるむちゃん・・・さあて・・・今日はえっちな写真
をいーっぱい撮ろうねえ・・・」

大きなナメクジの体をくねらせながらくるむに徐々に迫っていく・

(ダメ・・・力が入らない・・・ いやだ!! やっつけなきゃ!!
みんなの原稿・・・取り戻すんだ!!)

「やああああ!!」

すると・・・その次の瞬間・・・

倉庫の扉をたたく音と、外から声が聞えてきた。

「くるむちゃん!? この中にいるの?? 部活の道具箱からくる
むちゃんの写真と脅迫状が出てきたの・・・ 事情は分かったよ!」

モカの声だ・・・

(モカが・・・なんで・・・)

くるむは驚いていたが・・・

モカが続けた。

「そうともしらず・・・ゴメンね・・・本当に・・・わたし・・・
くるむちゃんわたしの事今でも嫌ってるんだって決め付けてて・・・
全然くるむちゃんのこと見て無かったよ・・・ くるむちゃん
にとって・・・わたしは邪魔者でしょ?」

(モカ・・・)

「でも・・・わたし達はくるむちゃんがいなくてただけであつという間にバラバラなの・・・今助けるから・・・わたしにはやっぱりくるむちゃんも皆同じくらい大切だよ！」

モカは涙を流しながら謝罪していた・・・

その時、扉が開いた。

出てきたのは・・・

メチャクチャでかいナメクジ!!!

『なっ!!!』『ええ!!!!!』

これは誰でも驚く・・・

フリーズしたとしても責められないだろう・・・

それほどに気持ち悪いんだ・・・

詳しくは・・・原作で・・・ぞぞおー！ー！ー！

「ついでるッ！ついでるなあ！！今日はッ 次の標的にしようとしていたモカさんを同時にゲットできるなんてえ」

そう言うと毒ガスを一気に噴出してきた・・・

『ぐっ・・・』『なっ・・・』『きゃあああ！ー！』

モロに吸い込んでしまった・・・

(くそ！この程度すぐ解毒できる！！！)

すぐに・・・解毒をしようとしたが・・・

ナメクジのほうが進むのが早かった。

ナメクジの癖に・・・

「いっただつきまーーす」

モカに飛び掛った・・・

「きゃあああああ！！！」

「モカあああああ！！！」

その時・・・突然

ズズズズン！！！！

地鳴りが起きた・・・

「なっ・・・何だ？この地鳴りはっ！！！」

叶は振り向くと・・・

「や・・・やめて・・・わたしの・・・大切な友達に手を出さないでー!!」

コアアアアア!!

くるむが目を見開くと・・・

あたりの地面が割れ、裂け目から木の根が飛び出してきた。

「わあああああ!! な!なんだあ!!これっ・・・木の・・・木の根っこが!!なんで!!」

自分の周囲で起きている事が理解できない・・・

「許さない!!!友達に手を出したら許さないんだからあああ!!!」

ポコポコッバリッ!!

そのくるむの声に同調し・・・

今度は巨大なお化けツリーが出現!!

それらが、一斉に葉をにらみつけた・・・

「こんなの・・・うつ・・・嘘だ！ 夢・・・夢か！コレー！」
おびえてしまい足が動かない・・・

『・・・コレは凄いな・・・』

メンタル・レジスト
精神堅牢の能力があるカイトだが・・・

くるむが放つ幻術はしつかりと見えている。

くるむの潜在能力を・・・垣間見た瞬間だった。

が・・・

「この・・・くっ 体が・・・」

幻術で叶を縛り付けてはいるが・・・

体が動かない・・・

「あんただけは・・・ぜったいに・・・ゆるさない！！
犠牲になつた女のコ達の分も・・・」

必死に体を動かそうとする・・・

目に涙を浮かべながら・・・

・・・パアアアアッ！

「あ……あれ!!?」

次の瞬間 急に体が軽くなった!

『リジエネ・サークル 健やかな風の囁き』

カイトがくるむに離れた位置から治癒の精霊術を施す……

接近した方が効果が上がるのだが、この程度の毒ならば問題ない。

本来なら、自分であるナメクジ野郎をぶっ飛ばした方が明らかに早いのだが……

くるむが頑張ってるからね

……ってのは彼の言い訳!

本当は……

ナメクジがだいき「うるさい!! シャラー〜アップ! だまれー!!」

……はいごめんなさい…… 3回言っなんて……
ぐすん

「動く！よし！！ このおおおおお！！！！」

くるむは空に飛び上がり一気に急降下！！

「くっ くるなー！！！！ うああああアアア！！！！」

叶も縛られて動けないが必死に腕を伸ばし反撃体勢！

が……くるむのほづが素早かった。

ザシユツ！！！！！！

そのまま急降下の勢いで一気に切り裂いた！

「ぎゃふああああ！！！！！！」

あわれ……叶 流行は血を噴出しながら動かなくなった。

「あれ……木の枝や根が消えていく……」

モカとつくねは毒のせいでまだ若干からだが動きにくそうにしていた。

《……幻だ……》

そこに口ザリオから声が聞えてきた。

《今のは全てくるむが「幻術」で作った幻だよ 上位のサキユバスは幻術のみで相手を殺傷すら出来ると聞く・・・まさか くるむがこれほど大きな能力を秘めていたとはな・・・》

珍しい事もあるものだ・・・

裏のモカがくるむを褒めていた!!

《・・・・・・・・・・・・・・・・》

・・・あ・・・あれ？ 殺気が・・・ひいひい!!・・・
めんなさいごめんなさい!!

蹴らないデー!!!!!!

グエエエエエ!!!!

死・・・・・・・・

・・・・・・・・ええつと・・・簡単に死んでられないし・・・
話しの都合上直ぐ復活しました・・・苦笑

精根尽き果てたと言った感じだろうか？

苦笑

(これは・・・できているのかしら?)

不安に思いながらみんなの側まで行ってみると・・・

陽海新聞 7月号！

が出来上がっていた！

(ちゃんと出来上がってる・・・)

念のため中身を確認してみるが、全く問題ない。

猫目先生は微笑みながら・・・

「(新聞部の絆は脆くなんてなさそうね!) お疲れ様!後は先生に任せてゆっくり休みなさい・・・」

そう言つと・・・ 起こさぬように・・・

新聞を投稿する為 部室を後にした・・・

【くくるむの夢の中】

くるむは夢を見ていた……

「モカ……わたし……新聞部に戻ってもいいの？」

くるむは謝りながらモカに聞く。

「や……やだ！何言ってるのくるむちゃん！急がなきゃ新聞の締切に合わないよ！いろいろあるけどこれからも頑張ろうね！」

モカは照れくさそうに頭を掻きながら笑っていた……

もう蟠りなんて無さそうだ……

『そーそー！皆仲良し！これが一番だ。くるむ、お疲れ様。』

カイトは、くるむの頭をそつと撫でた。

「カイト………ありがとう!!」

いつものはぐーは無かった。

でも、いつもより……幸せそうな感じがしていた。

「皆……わたしの……大切な……」

くるむの夢 side out

くるむは・・・寝ていたのだが・・・

その表情はとても穏やかで・・・目にはつつすらと涙が浮んでいた。

第109話 わたしの大切なもの・・・(後書き)

ありがとうございました！

第110話 これからもずっと・・・(前書き)

ちょっと遅れちゃいましたー！

リアルに仕事が忙しく・・・

パソコン開けてない！

まあ・・・言い訳です・・・

では、よろしく願います！！

第110話 これからもずっと・・・

【学園寮】

今は夕方・・・

ロビーで人間界と繋ぐ事の出来る電話を使用している者がいた。

「あ・・・母さん うん・・・オレ 今学園の寮のロビーから・・・」

つくねだ。

つくねは家族と連絡を取っていた。

「お金ちゃんと振り込まれてた・・・ うん いつもありがとう
こっちは元気にやってるよ。」

話し相手はつくねの母 青野かすみ、

《そう・・・？まあ 元気なら何でもいいんだけど・・・
まあ とにかく体だけは気をつけなさいね つくね》

料理を作りながら・・・笑顔でつくねと話をしていた。

りさ 明日それを校門の前で配るんだ！ そっちにいた時より楽しくやってるよ。・・・うん はい・・・じゃあまた・・・連絡するね・・・じゃあ！」

ガシャン・・・

受話器を元の位置に戻し、一息つくと・・・

『「わっ！！」』

背後から突然声が！！

「わひゃあああ！！？」

モカとカイトだ。

「あはは びっくりした？ つくね」

「そりゃ！！ モカさん！！何でここにっ？ それにカイトも！！」

顔を赤くさせながら・・・驚きながらつくねは話した。

『だってそろそろ食事の時間だし・・・ 何より あんなでかい声で電話してりゃな・・・』

カイトは半分あきれて言う・・・

モカとカイトはほぼ同時に食堂へと降りてきたようだ。

そして 電話に熱中しているつくねを発見すると・・・

示し合わせて驚かしたのだ

最初は、カイトは乗り気じゃなかったけど（空腹だもん・・・）。

マンザラでもないみたいだ

「あはは！結構響いていたからね」

モカもくすくすと笑う・・・

つくねは・・・

モカの部屋着姿に見惚れていた・・・

（かつ 可愛い・・・ 部屋着姿のモカさんも 何て可愛いんだ
ッ！！）

ポーツとしていた 苦笑

（相変わらず・・・だな・・・）

そんなつくねを微笑ましそうに眺めるカイト・・・

こんな楽しい時間がずっと続けばいいと思いつながら・・・

「さっきのはつくねのお母さん？」

モカがつくねに尋ねた。

「うん まあ・・・」

モカは・・・

「いいなあ・・・お母さんかあ 　いつかわたしもつくねの言えに遊びに行ってみたいな」

　　と言った瞬間・・・

　　ブハアッ！！

　　つくねが噴出した！！

『うわわっ！！！！汚いな！コラアあ！つくね！！』

　　パシッつと頭を叩く。

　　でも・・・まだトリップしているみたいだ・・・

『あははは・・・モカはつくねの両親に挨拶に行きたいのかな？

？』

　　ニヤニヤしながら言う・・・

「ええ！！いやっ・・・あの・・・」

「なななな！！！！何言ってるの！！！！カイト！！！！」

2人して顔真つ赤ッ！

からかいがある

『ははは まあテレなさんなって！とりあえず食堂に付いたし席に座ろう。』

ケラケラツつと笑いながら一足先に食堂へと入っていった・・・

まだ 2人は顔を真つ赤にしていた・・・苦笑

やあつと2人・・・トリップから 帰ってきた！！ 笑

暫く一緒に食事を取っていると・・・

「・・・何かさ・・・ オレいろいろうまく行き過ぎて怖いくらいだよ・・・」

つくねが話しました。

『ん？ 怖い？』

「うん だって初めはどうなることかと思ったもん こんな妖怪だらけの学校に入っちゃってさ・・・」

ああ・・・なるほど。

入った時のつくね・・・ やばかったもんな・・・

主に反応が！！
リアクション

「でも・・・ モカさんやカイト・・・ 新聞部の皆と仲良くなれて・・・ それにくるむちゃん達もすごく優しくって おれ この学校入ってよかったよ！ きつと大丈夫だよ！これからもずっと仲良く楽しくやっていけるよね？」

モカは顔を更に明るくした。

「うん！きつと大丈夫・・・ いや絶対大丈夫だよ！」

優しく微笑む・・・

『でも・・・油断はするなよ？つくね、お前は結構危なっかしいんだから・・・ 幸せ感でいっぱいでも・・・な 下手な事しないでくれよ。』

カイトも苦笑しながら話す。

「大丈夫！きつとその時はカイトが助けしてくれるから」

「あははは・・・」

モカは笑いながら・・・

つくねはちよつと複雑だが苦笑していた。

護ってらればかりじゃ・・・やっぱ格好はつかないな・・・

『・・・つくねが この学校でやっていけるといのは・・・共存を目指す課程で一番大切なことなのかもな・・・』

カイトはそう呟いた。

最終的なこの学園の目的はそこなのだ・・・

【人間との共存】

それなのに学園で・・・人間が入っているのがばれたら即抹殺ちよつとなあ・・・

人にも良い人もいれば悪い人もいる。それは妖だって同じなのに・・・

確かに・・・本性をむき出しで 人と妖が対面すれば・・・

それは 小競り合いではなく全面戦争になってしまうだろう・・・

人が妖を狩り・・・ 妖が人を喰らう・・・

大袈裟な表現じゃない・・・

カイトが暫く考え込んでいると・・・

「どうしたのさ？」

つくねとモカが聞いてきた。

『ん・・・？ああ、すまん オレ達みたいに、みーんな仲良くなれたらいいのってふと考えていたんだ。』

苦笑しながら答える。

(最終的には本音で・・・語り合えるほどに・・・な・・・)

みんなは笑っていた・・・

この時の笑顔を・・・忘れないようにしよう・・・

「・・・そうだ！」

モカは何かを思い出したようだ。

「明日は頑張つて新聞配らないとね！ 皆が一生懸命作った新聞だもん！ たくさんの人が読んでくれるといいね！」

『オレ・・・死ぬほど気合いいれてたしなア・・・ (実際死に掛けたような・・・ 苦笑)』

苦笑していたが、つくねは、

「そうだけど・・・モカさん？食事残してるよ。元気付けとかな
いと 大変だよ 明日は！」

たくさん残した夕食を見てつくねは心配していた。

「いん・・・何だか食欲無くて・・・体調が悪いのかな？」

モカがちよつと表情を落とす・・・

「ええ・・・大丈夫なの？」

『そりゃ大変だな・・・明日、保健室に連絡しておくか？』

それぞれが心配していると・・・

モカがはっ！っとして。

「あ！そーだ ここ何日かつくねの血を吸ってないからかも・・・
いや！それだっ」

顔を一気に・・・輝かして身を乗り出す・・・

つくねはガクツツとテーブルに顔面強打！

カイトはずっこけていた・・・

「つくねー！血を吸わせて」

「ダメー！ツ」

追いかけてここがスタート！！

珍しく今回はつくねだけを標的にしてたみたいだ。

（難易度が軽いからかな・・・？つくねの方が）

っと安心していると・・・

「グフフフフ・・・カイトくん！！」

すぐ後ろに・・・

『うわぁ！！！！』

生徒が立っていた。

この生徒の名は、

なるかみ さつき
鳴神五月・・・

カイトくん親衛隊の四天王の一角！！

カイトくんが勝手に決めてます！ なんと行ってもしつこいのは
大体4人ほどらしいので四天王だそうで・・・苦笑

逃げながら叫ぶ！

「グフフツツ！カイトくんを捕まえる為に！頑張ったのよ！！愛
があれば何とかなる！なったのよおー！！！！」

『げげげげ！マジで！』

またまたスピードが上昇・・・

んなアホな！！

単純な身体能力で互角かそれ以上？？

『ツツ！（はええよおー！）フェアリー・ウィング天翔る羽！！』

とっさに・・・反射的に使用！

「あー！またそれ！！それはズルイ！！」

何やら騒いでるけど・・・

フェアリー・ウィング天翔る羽の特性と使用していることを理解しているみたいだ・・・

（ばれないように使ってるつもりなんだけど・・・）

恐ろしい観察力！！

お前は黒○めだ○か！！

つてかもし・・・そんな奴に追いかけえられたら・・・

オレは死ぬ・・・

・・・

・・・

追いかけてこは深夜まで・・・続いた・・・

強化魔法使ってるのに・・・

・・・

・・・

部屋まで押しかけてこないのが幸い・・・だなあ・・・

・・・押しかけてきたらどうしようか・・・

結界はっておくか？

しかし・・・疲れた・・・

『ぐへえ・・・明日に疲れが残りそうだ・・・』

そう言っつてベッドに倒れこみ・・・

そのまま夢の中へ・・・

一方つくねの方はと言っつと・・・

もちろん

最終的には かぶつ ちゅーー

っと 吸われてました

第110話 これからもずっと……（後書き）

出しちゃいました。四天王 鳴神 五月！
名前もゼーんぶテキストです！

身体能力が以前と比べるとかなり上昇しているらしいです……
怖い怖い…… 苦笑

さてさて……やっと前半の山場…… 公安にこれました……
オリジナルキャラ・展開もとりあえずはちょこっとは出そうつか……
・
って思ってます。
うまくいくか心配ですが…… 苦笑
ガンバリマス！

ありがとうございました！！

第111話 新聞部を取り巻く影（前書き）

よろしくお願いします!!

2つ連続投稿です

駄文ですが・・・苦笑

どうぞ!!

第111話 新聞部を取り巻く影

翌日・・・

簡単な新聞配布スペースを学園の入り口に設置し、

配布開始！！

「新聞部です！ わたし達の作った校内新聞をよろしく願いしまーす」

「先日の女生徒失踪事件や・・・その他 いろんな学園での出来事・情報が載ってまーす」

「「「よろしく願いしまーす！！」「」」

女性陣が一斉に呼び込みを開始すると・・・

ズキヤーーーーン！！！！

一斉に男子生徒が・・・・・・反応ッ！！！！

.....

うおおおおオオオ!!?!

何だア 今朝の 校門前の輝きは!!!

天使だ・・・天使が舞い降りたようだ!!!

ここだけファンタジイな空間が出現してるウウ!

.....

キュピピーン!!!

1人・・・

「モカさんだ モカさんが新聞配ってる!!!」

また1人・・・

「うわぁい くるむちゃんもだー」

またまた1人・・・

『・・・・・・・・・・はあ』

今日は逃げるのよそう・・・

お客さんだし・・・

覚悟を決めて営業スマイル！

もちろん普段より数10倍は疲れると思う・・・

つくねとそれに気付いたモカは苦笑していた。

暫くすると・・・

ある程度・・・というか新聞は大好評でどんどん無くなっていった！

「うれしーッ！！大好評だね　つくね！！好きっ！！」

つくねにハグーっ！

もちろんくるむだ・・・

「わあ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

つくね君ただいまくるむのハグ攻撃にて窒息中・・・・・・・・笑

「ああーっ　くるむちゃん　つくねにだきつかなくてもーっ
！」

モ力が慌てて出てきた。

「いーじゃない！カイトは・・・メチャ忙しそうだから後でするし
！2人ともわたしのだもーん　」

2人はまたバチバチっつと火花が散る・・・

（ケンカしないって　仲直りしたばかりなのに・・・　仲いいの
かな？これは・・・）

つくね・・・　笑いながら2人を見ていた。

『コラーー　サボるな！！お前ら！！手伝ってくれー！！』

「カイトさん」　「こっちにもちよーだい」　「きゃああ

あ 「ゲフフフフッ！！！！」

.....

止まる事なき連撃のようだ.....

「ははは.....」

モカとつくねは苦笑.....

《ちっ.....カイトめ.....何をデレデレと.....》

「ん??」

ふと声が聞えたような.....

モカがきよろきよろとする.....

《！！！！.....》

しかし 聞えなかった.....

「気のせいかつ.....」

そして.....再びカイトのほづを見ると.....

くるむが何やら「カイトは私のよー」と言って.....女子生徒達と
もめていた.....

カイトは助かったーって感じの表情だね

ゆかりちゃんは・・・

男子生徒に追いかけてた・・・

「ひゃああああ 怖いッ ロリコン怖いですぅ〜」

「ゆかりちゃーん」「かわいいー!」「魔女ツコだ〜あ

」

まあ何にしても・・・

(でも・・・よかった 新聞は本当に好評みたいだし 本当に良かった・・・)

『物思いにふけてないで手伝えつくね !そして助けろー!』

カイトくんの悲痛な叫びが木霊した・・・

くるむやら女子やらに・・・捕らわれて・・・いる・・・さつきまで くるむ VS 多数の女子生徒だったはずが・・・

『うう・・・こんなに疲れるものなのかなあ・・・新聞配布って・・・』

ため息しか出てこない・・・

疲れたあゝ

.....

??? side

そこには・・・人影が・・・3人・・・

女が陽海新聞を男に差し出していた・・・

「.....何・・・新聞部が.....?」

渡された新聞を眺めながら聞く・・・

「はい..... 今校門前にて新聞を配布している模様です。当然、我々(.....)には無許可ですが.....」

男は歯軋りをして新聞を睨む・・・

「新聞部..... また奴らか.....!我々をさしおいて正義きどりとは..... 糞が」

そう言うと新聞をての上で燃やしつくした・・・

「相も変わらず頭固てーな．．．九曜よう．．．」

イスに足を組んで座っていた、もう1人の男が静かに口を開いた．．

「なんだ．．．？文句でもあるのか？」

男に言う．．．

「はっ．．．文句なんざねえさ．．．だがよ．．．あの部．．
・何人か新入部員いるらしいが．．．それは1年坊．．．もう新
聞部には森丘銀影しかいねえし．．．んなつまらん仕事なんざ
してても面白くねえからな．．．」

めんどくさそうに呟く．．．

「ふん．．．貴様はそう言って今までも殆ど活動をしてないだろう
が．．．」

呆れていたようだ．．．

そして他のメンバーも呼ばれたのか集まってきた．．．

「楓^{ふうが}牙様が．．．」「いらしていたのか．．．」「．．．．．」「
くッ」

それぞれのメンバーが驚いていた．．．

感じ的にいえば．．．この2人がこの組織のトップなのか．．．？

「集まったか・・・では取り締まりに行こう・・・活動を検閲した覚えがないからな・・・後、楓牙・・・貴様はしたくなければ何もしなくてよい！いつも通りにしておけ」

そう言うとメンバーを引き連れ・・・この場所を後にした・・・

「ふうん・・・やつぱ行くのか・・・そんなに前の事根に思っ
てんのかい？ まあいい、オレも様子見と行くか・・・そして・・・
面白いもんでもあったらあ・・・参加するかあ。」

そう言うと、ゆっくり立ち上がり、

ビュオオオオ・・・

突然現れた風が吹くと同時に・・・

姿形が無くなっていた・・・

side out

第111話 新聞部を取り巻く影（後書き）

ありがとうございました

完全オリジナルキャラ楓牙くんです！

さて。正体は？

なんでしょうね……………苦笑

ガンバリマス！

第112話 学園守護 公安委員会（前書き）

とりあえず・・・

九曜と接触です！

ガンバレーみんな！！

特にカイトくん！！

オリ敵キャラもちよつとですが・・・出てきます！

よろしく願いします！！

第112話 学園守護 公安委員会

【校門前】

新聞は大好評！

全体の半分ほどが配布出来た頃。

「どないやー？ 新聞ちゃんどさばけとるかア」

ギン部長がやってきた・・・

「あ！ギン先輩！」

モカも気付いた。

「おお！中々好評やないか！こりゃ次号から金とらんな」

今頃か！！

『もうちよっと・・・早めに来てくれよな・・・』

カイトはげんなりしていた。

ちよつと休憩中のようだ。

「あはははー カイトがんばってたもんね　もう半分もなくなつたし！　嬉しいですね」

モカもいい笑顔だ・・・

モカだけじゃない・・・くるむも　ゆかりも　つくねも・・・

皆が一丸となって作ったこの新聞を配るのに多少疲れてはいるものの・・・

いい笑顔だった・・・

「てゆうか　先輩も手伝ってくださいよー　新聞配るの」

つくねがモカの笑顔に癒されながらそう言つと・・・

「フツ　あほか　そないめんどうな事は下っ端の仕事やろ　やってられるかア」

いつもとおんなじのりでスルー

って……!

「えー……ッ!! うちの部長やる気ねえ!!」

つくねが叫ぶ。

『はあ……全くだ……』

もう何か言つのも面倒だ……

しかし……そんな時ゆかりが改心の一言!

「部長がやる気出すのは えっちな事だけですもんね 発情期のノラ犬みたいですよ〜」

うん……子供は素直が一番だ…… よな?

さすがにピクッときたのかギン先輩がゆかりに近付いていく。

「オイイ ゆかりちゃんはおっぱいぺちゃんこなくせして 悪口だけは達者やなア! ああ?」

ゆかりも自身の体(主に胸!)を言われすかさず反論!

「なアア!ぺちゃんこがわたしのステイタスですよ!!」

むかつ!!って感じた。

「じゃあそれもみまくってでっかくしてやるで」「リアァァ」
すると怒ったゆかりはステッキを取り出し……

「もお このセクハラァァ！」

金盞をギンの頭にヒットさせていた……

ガキか……この部長は……

半分呆れていると……

「わあああ!!！」

急に広場が騒がしくなってきた!

広場を見つみると……

黒い制服の連中が広場にいた。

「どけっ! ジャマだてめエら 道を開ける!」

そう言うのと、新聞をもらいに来ていた生徒を突き飛ばし強引に入ってきた。

『なんだ? あれ……』

さすがに強引過ぎる為、体を起こした。

「わっ・・・何だ何だ!？」

つくねも驚き、そちらを見る・・・

「.....!」

ギン先輩は先ほどと違って厳しい表情をして黙り込んだ。

「うわっ やべェ この黒い制服ッ!」「なんで あいつらがここに・・・」

その黒い制服の団体の名は・・・

【陽海学園守護 公安委員会】

するとそのうちの1人が近付いてきた・・・

「どうも・・・ 私は公安委員会の幹部・・・ 九曜という者だ。以後お見知りおきを・・・」

優雅に挨拶をしてきた・・・

「（公安委員会？）公安っていうと・・・学園の治安を守るとかいっ・・・あの・・・？何の用事でしょうか？」

モ力が驚きながらも聞きに行こうとすると・・・

ギン先輩がそれを止めた。

「ギン先輩？」

すると九曜は新聞を一枚抜き取ると・・・

「・・・フフ 新聞部か いや・・・活動をするのは大いに結構！
！ だが！君たちは誰に許しをもらってこんな内容の新聞を配っているんだ？ 我々は事前に
検閲した覚えはないぞ！」

目を鋭くさせると・・・

新聞の置いてある長机を蹴り飛ばす。

ドガア！！

「困るんだよなあ！ 君達のように学園の規律を乱し好き勝手やる輩がいるとツ！！！！」

それが合図だったかの様に他の公安の連中も一斉に場を荒し始めた！
いきなりの事で訳が分からない！

「きゃあああ」

「なっ！」

『!?!?』

モカとつくねは驚いていた・・・

九曜は続けざまに・・・

「いいか!? この学園の治安を守っているのは我々公安委員だッ!
! 学園内で何か活動をするなら必ず我々の許可を取れッ! 無許可の場合こうして厳しく取り締まりをさせてもらっッ!」

そう言うと新聞を撒き散らし踏み潰していった・・・

皆で作った新聞が・・・

それを見たくるむが慌てて、

「なっ!!! やめてええ! わたし達はただ新聞を配ってただけなのになっ!!!」

止めに行こうとすると・・・

「!!!無駄やっ 奴らインネンつけてきよるだけやッ」

ギン先輩がそれを止めた。

その時、

公安の女が口から輪状の糸をくるむに飛ばした。

ビシヤ！

「きゃあ！何これ・・・！ネバネバした糸みたいなのが・・・」

そして・・・

女が近付いてくる・・・

「相変わらず新聞部はガラが悪いのね・・・ 下品で頭悪そうだな」
・・・去年から何にも変わってないのね新聞部って」

くすくすと笑いながらくるむを見据えた。

「下品！・・・このっ！！」

くるむは再び掴みかかろうとしたが・・・

ゴ
ウッ
!!!

「ツツツ!!」

突然威圧感？
プレッシャー
圧力に襲われくるむは足が動かなかった・・・

（（（な・・・に・・・？これ・・・？）））

他の部員も同じだった・・・

その発生源は・・・

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

カイトだ。

九曜は虫けらを見るかのような表情でカイトに近付いていった。

「何かな・・・？ 我々は今取り締まりをしている・・・ ジャ
マしないでもらおうか！」

ヒュン！

九曜は蹴りを入れたが・・・

パシッ！！

カイトは蹴りそれを受け止めた。

「む・・・？」

受け止めたカイトを睨む・・・

『・・・・・・・・拾え』

カイトは静かに言った・・・

「あ？」

九曜は何を言ってるか分からない！と言った反応だ。

『もう一度言う・・・ 分かりやすくな。 貴様らが撒き散らした
もの
新聞を・・・ 拾え!!!』

受け止めた足を叩きつけるように投げ返し、睨む。

「貴様ーっ!!!」 「九曜様に何のつもりだア!!!」

何人がか抑えかかるうとするが・・・

ギ
ンッ!!!

静かに・・・それでいて力強く・・・睨み付けた・・・

「!!!!!!?」「っッ!!!!!!」

それだけで・・・

足が動かなくなる・・・

(何だ！コイツツ・・・) (足が・・・動かない・・・声も・・・)

・ 公安のメンバー(取り押さえようとした2人)はただ震えていた・

楓牙 side

それを生徒達ギャラリにまぎれてみている者がいた。

公安委員、楓牙だ・・・

「へえー 九曜相手に上等かますような奴がいたんだなあ・・・
こりゃあ 面白くなりそうだ・・・ククク・・・その顔お・・・覚
えたぜえ・・・」

楓牙は・・・カイトの姿を覚えると・・・

ビュオオオオオオオッ！！

再び風と共に消えた・・・

s i d e o u t

第112話 学園守護 公安委員会（後書き）

ありがとうございました！

第113話 監視者と忠告（前書き）

よろしくお願いします！

第113話 監視者と忠告

場所は学園校門前・・・

カイトと九曜の睨みあいはまだ続いている・・・

まさに一触即発だ・・・

カイトと九曜の睨み合い場の空気が一気に固まる・・・

それは仲間の新聞部も例外ではない・・・

そして九曜もカイトに何かを感じているのか、動かずじつと見ていた・・・

（目を見ればわかる それにこの殺気、こいつ・・・只者じゃなさそうだ・・・この私でも少々梃子摺りそうだな、さてどうするか・・・）

策を考えているその時、

「カイト！止めるんやー！」

ギン先輩がカイトの肩を掴んだ。

『なぜ止……！！ギン……先輩？』

なぜ止めるのかと振り払おうとしたが……

ギンのいつもの表情じゃない……顔を見て……いや目を見て
そう感じた……

そして、殺気を消し……新聞部の仲間の方へと歩いていった。

「ふん……」

九曜も拍子抜けといわんばかりの表情でその場所を去る……

メンバーの1人 螢糸という女が公安わいわれに逆らったらこんなものじゃ
済まさない！と残り九曜の後に続いた。

公安 side

暫くは黙っていた九曜だが……ある程度離れた所で……

「螢糸」

「は……」

女に指示を出す。

「新聞部ヤシロがどう出るか・・・ お前が監視しておけ・・・ ただしあの男には絶対に気付かれんようにな・・・ お前には荷が重い」

そう言つと、

螢系も分かっていたらしい・・・

すぐに理解し、監視に行こうとしたその時。

ひゅっっっっっっっっっっ

辺りに風が舞う・・・

「やめときなあ・・・」

それと同時に声が聞えてきた。

楓牙だ。

「楓牙か・・・」

確認すると九曜は若干ため息をついた・・・

この男は私でも扱いにくいが故にだ。

力は申し分ないのだがその性格がな・・・

「楓牙様・・・止めておけというのは？」

螢系も気になり聞く、

「お前さんは気性が荒いだろお　そしてさあ直ぐに動こうとするだろお？　そんでもって、あの男にそれがバレたときにや　即殺されるぞ？」

苦笑しながら言う・・・

螢系　s i d e

楓牙様がそこまで言うとは・・・

新聞部前部長の時以来だ・・・

螢系は若干怖気づいたが・・・

「それ以外は大した事ありません・・・　私で十分です。」

そう言い放つ・・・

仮に新聞部が大人しく従わないというならば、捕らえて1人ずつ始末すればいい・・・

私の能力ならば簡単だ・・・

あの男がいない時を見計らって。

あの男は未知数だが、九曜様・・・そして楓牙様の公安トップ2が相手ならばひとたまりもないだろう。

螢糸はそう考えていた

s i d e o u t

「まあ いいさあ・・・ おれあ忠告しただけだ・・・ ま・・・
あの男が公安くわんあんに手エだせば大義名分が立てるってもんだ・・・ 九曜よう・・・ そうなったら あの男・・・ 俺に殺らせてくれや」

男は・・・ 楓牙は・・・ 味方も寒気がするような笑顔で九曜に
そう言った・・・

その時、九曜を除く全員がこう思った、

【この男が敵じゃなくてよかった・・・】っと・・・

それほどまでに・・・凶悪な・・・邪悪な笑みだった。

「ふん・・・意外だな・・・貴様ならば面白いと思った時点での男のところへ行くと思っただが？」

そんな邪悪な笑みも軽く受け流したのは九曜・・・ 彼も又・・・
やはり只者ではないのだ。

「くくく・・・ おれあ・・・気まぐれな面もあるんだが・・・
規則には従うんだぜえ・・・ 仕事はたまにさぼるがなあ・・・
殺るときは・・・ ちゃんとして規則に従って殺るんだよ・・・」

そう言うと再び笑い出す・・・

「ふん・・・ 好きにしる・・・ だが 奴らが明確な敵意をださ
んと手は出すなよ・・・？ わいわれ 公安と言えど理由もなく潰すのはできん
のだからな。」

九曜はそう言う・・・

すると、

「さっきも言っただろうが・・・ おれあ 規則には従ってんだ
よ・・・」

ため息交じりで首を左右に振る・・・

そして次の瞬間！

ヒュオオオオオオ!

突然の突風・・・

そして 楓牙は姿を消した・・・

「ふん・・・ あの気まぐれ男め・・・ 猫のようだ・・・ 最も
そんな愛嬌は無いがな・・・」

何がたまにさぼるだ・・・

殆どサボってんだろぅが・・・

九曜もため息をつく。

「螢系・・・ 妙な邪魔が入ったが、あいつが警告するのは珍しい
気を抜くな」

そう言うと螢系は頷き素早く移動していった・・・

「ふふふ・・・ まあ元々新聞部には勝機などはないが・・・ こ
れで万が一の可能性も無くなった・・・ な・・・ あの男も動いた
ことだし、そして この私もいる・・・ 精々我々に逆らわんよう
にするんだな・・・」

そう笑みを零しながら呟くと・・・

本部へと去っていった。

s
i
d
e

o
u
t

第113話 監視者と忠告（後書き）

ありがとうございました！！

自信満々の九曜！そして楓牙！

さてさて・・・

どうなる事やら・・・

2人とも確実に強いですから〜きつとW 笑

コロツと倒せたりはないかとW 苦笑

ガンバリマスー！

第114話 新聞部と公安委員の過去（前書き）

よろしくお願いします！

第114話 新聞部と公安委員の過去

【校門前】

皆むちゃくちゃにされた新聞を前に立ち尽くしていた・・・

「・・・くるむちゃん大丈夫？ さっきの・・・」

モカが口を開く。

「・・・うん 何か糸みたいなのがからまって取れなくて・・・」

そう言うと 少しずつ手首に絡まった糸のようなものを外していった。

「ひどいです・・・ 何なんですか！？あいつらいきなり・・・」

ゆかりは潰された新聞を見ながら泣いていた・・・

カイトはゆかりの頭に手を置いた。

「うつうつ・・・ カイトさぁん・・・」

そう言うと・・・カイトに抱きつき・・・再び涙を流す・・・

普段ならくるむは怒って抱きついてきそうなのだが・・・今はそれどころではなかった。苦笑

そんな時・・・

「・・・奴らは公安委員会 一言で言ったら風紀委員をもっと暴力的にしたような奴らや・・・」

ギン先輩が説明しだした・・・

「この学園を守る為 力で「悪」を取り締まる為に結成された武闘派集団 それが【学園守護 公安委員会】生徒によって組織された【学園警察】とも言えるな」

その警察と言う単語につくねが反応した・・・

やっている事と単語が合わないからだ。

「学園警察！？あんな奴らが！！？だいたいオレ公安あいつに会ったの初めてですよ」

そうつくねが言うと、

ギン先輩は頭を掻き・・・

「そりゃそつや・・・ 奴らめったに活動なんぞしてへんからな」

！！！！！？

皆 驚いた・・・

警察といえば・・・

「24時!」

じゃなく・・・

苦笑

もっと活動しなければならぬ組織の1つなのに・・・

「腐つちまつたんや 今の公安は暴力にものを言わせて金や貢ぎモンを集めるヤクザ同様の集団や・・・新聞配るんやッたら許可取れって言つとつたやろ? あれはつまり自分らに金を貢げっちゅう事なんや・・・」

・・・
・・・
・・・

皆言葉を失う・・・

(なるほどな・・・ 武闘派揃いなら陽海学園とは言っても力でねじ伏せるのは簡単だろうな・・・ 何にしても胸糞悪い・・・)

カイトはゆかりを慰めると・・・その後暫く目を瞑り腕を組んでギンの説明を聞いていた・・・

怒りを露にしながら・・・

いつもと明らかに違うカイトの雰囲気にも・・・ ちよつと 部員
は不安に思っていた。

カイトも分かっているのだ・・・自分の今の雰囲気が皆の不安を煽
っている事くらい・・・

だが・・・やはり分かっけていても怒りが湧く・・・

心の底から・・・

自分たちの誇りといつても過言じゃない・・・

それ程の新聞ものだった・・・

皆で協力し合い・・・そして絆を深めた・・・

それをいきなり全て踏みにじられた・・・

怒りを覚えない者はいないだろう・・・

そんな行為が許されるのは・・・ 奴らが力にものを言わせ抑えて
いるからだ・・・

ならば・・・オレも・・・ 力にものを言わせようか・・・

ギン先輩はそんなカイトをじっと見ていた・・・

そして、

「しゃーないわ　今回は諦めへんと　新聞は焼き捨てて公安には逆らわんちゆうことアピールせなあかん・・・」

！！！！！！？

再び皆が驚愕！

「えええええ！！！！焼くつて・・・　この新聞を??　まだ配れるやつたくさんありますよ！！！」

そう言うが・・・

ギン先輩は譲らず、

「ええから全部焼いとけや　あんな奴らとやりおつても何もならん　長いモンには巻かれてりやええんじや」

そう言った・・・

「「「「えええええ！！！！　そんなあ！！！！ギン先輩！！！！?」」」」

皆の叫びが木霊する・・・

その時、

「あー 後カイト・・・話しがある。付き合えや。」

『・・・』

カイトは無言で頷き・・・

ギンはカイトを呼び2人で去っていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

この時・・・

木の陰から新聞部を見ている者がいた。

くくくく・・・あの男も森丘銀影も消えた・・・好都合ね・・・

）

そう笑みを零すと・・・引き上げていった残りの新聞部部員の後をつけた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

カイト・ギン side

・・・・・・・・・・・・・・・・

2人は暫く無言だった・・・

黙って付いてきて、ある程度離れたところで・・・

『・・・話って 何ですか？ギン先輩・・・』

カイトから口を開く・・・

普通なら男らしくないギンの発言に・・・それも部長の発言に、どういうことかと問い詰めるのだが・・・

カイトはあの時・・・九曜と絡んだときのギンの目を見ている・・・

やりきれない悔しさの滲み出るかのような目を・・・

「カイト・・・お前は強いわ・・・確かにな・・・しよーじきな話し、公安やっばとやりあえることも、とりあえずは問題無いやろ・・・」

ギンは静かに口を開く・・・

「でもな・・・一人で強くてなんてなんにもならへんのや。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

『どついつ意味です・・・?』

「・・・・・・・・昔やりあったわ・・・わいら新聞部で 公安とな・・・・・・・・」

『!?!?』

・ 驚愕した・・・もう・・・カイトは原作など殆ど覚えていない・・・

それ程にこの「世界」にのめりこんでいるからだ。

ギンは続ける・・・

「前部長の後 続いて 部長になってなあ・・・前の部長は争いごとが何よりも嫌いで・・・平和が何より好きでやさしいひとやったんや・・・ だからこそ 今の腐ってもうた公安のことを一番否定しとつた。 そんな人を見とつたからか・・・ わいも嫌いになつたんやろつな・・・ 公安の事」

懐かしむ感じじゃない・・・

悔しそうな・・・表情だった。

「今新聞部・・・2年のわいしかおらんやろ?ほんまはもつとおつたんや・・・ けどな、奴らの正義という暴力に皆やられ、残ったのはわいだけやったわ。」

『・・・・・・・・』

カイトは自分だけ強くたって何にもならないと言った意味が・・・分かった。

自分1人だけ無事だったが・・・仲間は皆やられてしまったんだろ
う・・・

「あんな奴らとやりおつても何にも残らん、お前だけならええかも
しれんがウチにはまだおるやろ・・・ お前にとつても大切な部員なかま
がな・・・ その辺を考えてくれや・・・」

再び頭を掻いた。

黙って聞いていたカイトも口を開く・・・

『ギン先輩が言った事・・・よく分かりました。』

そう言う・・・

ギンも本音は奴らをぶちのめしたいはずだ・・・

だが・・・それ以上に再び失うのがどうしても嫌なのだろう・・・

オレと同じだ。

『でも・・・あいつらは絶対止まりませんよ。特にくるむは・・・
この新聞で皆との絆を深めたんですから・・・』

そう言うとギンは苦笑した。

「あいつらが・・・余計なことせんかったらええっちゅこと・・・
やな？ 少なくともこっちから喧嘩は・・・」

『ふっかけません。 だけど・・・』

カイトは視線を鋭くする・・・

『皆に手を出そうとするのなら・・・ オレも黙っていません。 例
え部長命令でも・・・』

そう言つとギンは何も言わず後ろを向き手を上げ・・・

皆のところへ戻れと言い、帰っていった。

何にも起こらんように・・・っと思ひながら・・・

カイトもその場を後にした。

s i d e o u t

第114話 新聞部と公安委員の過去（後書き）

過去のお話は原作ではここまで描写されてませんね。ギン先輩の口からは言われてませんw

ちょっとギン先輩キライになった理由とかは作者の妄想です！

しつれいしましたー！

第115話 全面対決の序章（前書き）

よろしくお願いします！

この話には……

カイトくん出ません……

名前のみです……

主人公……！ 苦笑

あ！楓牙くんはちよろっとは出ます

では……！

第115話 全面対決の序章

それは、ギン先輩がカイトを連れて行っていたときの事・・・

【校舎の裏】

くるむが皆で作り、絆を深めた大切な宝物しんぶつを燃やしてしまうことに
どうしても納得がいかなかったのか、ギン先輩を無視し新聞を配る
うとしていた。

彼女をつくねは止めようとしたが・・・

泣きながら思いを言ってくるむに何もいえなかった。

その時。

大人しく公安に従う気は無いと判断した公安委員 螢糸はつくね達
を攻撃した。

「バカな新聞部・・・ やはり今のうちに潰しておきましょう!」
くるむ達が配ろうと持っていた新聞を奪い・・・

うすら笑みを浮かべていた。

「ちよ！・・・返してッ 私たちの新聞ッ！」

くるむが取り返そうと螢系に掴みかかろうとしたが、

つくねが割つてはいる・・・

「ま 待つてください！何でオレ達を目の敵にするんですか？ オレ達は何も・・・」

「何も知らないの？ いまさら何言ってるのよ・・・」

螢系がつくねが話し終わる前に何も知らないのかという・・・

「新聞部なんて去年からとつくに目をつけられているのよ 私達公安に牙をむいたクズ集団としてね。去年の新聞部はね・・・自分たちでこの学園を変えようとか妄想するバカな集団だった！そしてあろう事か新聞の記事を使って公安の存在を批判したの！だから部員たちを粛清して廃部寸前に追いやってやったわけ！」

螢系は憤怒の表情でこれまでの公安と新聞部の経緯を話す。

つくねは・・・驚きながら・・・そしてギン先輩の

《長いもんにはまかれてりやええんや》

という言葉を思い出した。

「！！？先輩たちにそんな過去がつ！？ じゃあ 何故あんな事・・・」

まだ理解していないつくねに螢糸は怒りを露にし、

「妖のごった煮みたいなの紺の学園はねっ！ 公安が支配しているから平穩でいられるの！それも理解できずに逆らう新聞部など潰れて然るべきよッ！」

叫んだ。

しかし、

つくねは・・・どうしても理解できない。

「待つて・・・ 待つてください！ オレ達争うつもりなんて全然無いのにつ！ そつちが一方的に突っかかってきているだけじゃないですか！オレ達は ただ普通に活動できればいいんです！ お願いだから新聞部オレたちの事はほっといってください！」

つくねの方が正論だ。

間違いない・・・

だが・・・

公安とは初めは唯暴れまわる妖の生徒たちを力で抑えることによつて平穩をもたらしてきた。

しかし、長い年月を重ねる事で、その力を間違つた方に使用しているのだ・・・

そして 間違いを正義と信じて疑わない連中だ・・・余計に性質タチが悪
い。

つくねの言葉せいろんは・・・

「・・・放つとけ・・・ですって・・・？口を慎めッ！ 誰に向か
つて口きいてんだ このガキヤアア！！！」

全く届かない。

螢系はつくね達の新聞を焼却炉へ叩き入れた。

ゴオオオオオオ・・・ パキッパチッ・・・

あっという間に燃え上がる。

その新聞を薄ら笑いしながら眺める・・・

そして、

「わたし達の新聞がアア ツ！！！」

くるむの叫び声が・・・木霊する・・・

つくねも啞然としていた。

その隙に螢系は

フッ!!

口から先ほど同様に糸のようなものを吐きつくね達を捕まえる。

「うわっ！これは!!」

くるむとつくねの腕に纏わりつく・・・

「これは私の能力で紡いだ「糸」よ！ベツタリ絡み付いて離れないでしょう やっぱり今 あなたたちを潰す事にしたわ！厄介なのがないうちにね!!」

糸で繋いだつくね達を無造作に振り回し、

ドガアアアア!!

「きゃあああ!!」「うわあああ!!」

地面・樹木・校舎・・・

いたるところに叩きつけ蹂躪した。

「あんたはそこで大人しく見てなさい！まずはあなたよ・・・ 美味しそうな匂いの・・・」

そう言つと・・・徐々につくねに迫っていく。

「さあ！体液をジュルジュルす吸ってやるわ！公安に逆らった見せしめよ！覚悟しなさい！！！」

蜘蛛のような手足でつくねに纏わりつくど一気に距離を詰め襲い掛かった。

「うわぁああああぁぁぁ！」

「やめてー！！！！！！！」

ドンッ！！

「！！！？ うわぁ！！！？」

つくねが襲われかけた瞬間まさに間一髪！

モカが助けに入った。

「モカさーんッ！！！」

「つくねっ 嫌な予感がして来たのっ…… でもこれは一体……」

助けに入ったモカだが状況がまいちの見込めていなかったようだ。

その隙に・・・

「何だ！キサマはア！！！」

ブハア！！！！

先ほどのように糸を今度はモカに向けて放つ！

「きゃあ！！！」

糸はモカの腕に絡み付いてしまった。

「ああッ！モカさんーッ！！！」

「クズめ・・・ 公安とは学園の秩序であり正義だぞ！その私に手を上げるとはッ！ 死刑だ！死んで反省なさい！このアバズレがアア！！！！」

まるで刃物のような腕を一気にモカへ・・・

「きゃあああああ！！！」

ズバアアア！！！！

次の瞬間・・・

鮮血が舞い散る。

しかしその血はモカのものではなかった。

その血は・・・

「つくねええええー！！！！！！」

モカの叫びが木霊する・・・

そう つくねがモカの身代わりとなり、

背中に重症を負った・・・

「モ・・・モカさん・・・ 何で・・・こうなっちゃうのかな・・・
？ オレはただ皆と楽しくやりたいだけなのに・・・」

そう言つと・・・ つくねは崩れ落ちた・・・

最期力でモカのロザリオを外して・・・

「このガキヤーーーーッ！！どこまでも私にたてつく気だアアア！！」

螢糸は牙をむき出しにしつくねに喰らい付こうとしたその時！

カツ！！！！！！　ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！

「なッ！！　何イイ　これは……………！！？」

強大な妖気…………　モカが覚醒した…………

モカの覚醒の時の反動の妖気で吹き飛ばされた。

「つくね……………」

モカは暫くつくねを見つめていた…………

傷で苦しんでいるつくねを…………

「うつ…………何だ！！この女！！（これが　この女の正体なのか！
！？　何て…………強大な妖気…………　あの男以外にこんな…………）」

螢糸は啞然としていたがすぐに冷静になり、

(いや・・・だがついてるぞ 奴の腕に私の「糸」が絡まったまま
だ・・・ 今ならこいつが何者であれ勝てるッ！ さあ 来いッ！
切り刻んで体液をすすってやるウウ)

一気に螢糸はモカに繋がった糸を引っ張るが・・・

ビイン！！

糸が伸びきったところでビクともしない！

(うつ・・・ 動かない！？ バカなッ！ あいつ・・・全く動
いてないのに！ビクともしないッ！！！)

パニックになっていると・・・

「・・・おい」

静かにモカがしゃべりだす・・・

そして、螢糸を鋭くにらみつけながら、

「よくもつくねをやってくれたな・・・！」

モカの・・・威圧感が籠った声が聞えてきた・・・

ゾクッ!!

螢糸の全身に悪寒が走る・・・

あの時のように・・・

「まつ 待つて・・・!わ・・・私が悪かったわ こっ これ以上
公安に手を上げるとあなただってただじゃすまないのよ!？」
「こ
までに・・・」

勝てないとつさに判断し止めようと言つが・・・

ぐいっ!

モ力は軽く糸を引つ張つた・・・

すると!

「え・・・!!!?」

凄いい勢いで螢糸の体が・・・まるで吸い寄せられるかのようにモ力
の方へ飛んでいく・・・

そして・・・向かってくるところを！

ゴツキヤッツ！！！！！！

蹴りで顔面を打ち返した！

「ふがアああアアア！！！！！！」

螢糸は血を噴出しながら吹き飛び・・・体を痙攣させ動かなくなつた・・・

「逆だろ・・・？ 私に手を出せばお前らがだだじゃすまないんだ身の程を知れ」

そう言い放つと・・・

つくねの元へ行き・・・

「モ・・・モカさん・・・」

無言でつくねに肩を貸し……

くるむと共にその場を後にした。

楓牙 side

楓牙はため息をついていた……

「だから……言わんこつちや無い…… おれあ 忠告したんだ
ぜ？ 蜘蛛讓ちゃんよあ……」

楓牙は意味もなく学園内をうろろろしていると……

強大な妖気を感じ、妖気を辿っていくと 倒れている螢糸を見つけた。

「ただ……これで……いけるだろう。 クククッ……そう
いった意味ではグッジョブだぜえ……」

薄気味悪い笑顔で気絶している螢糸を見る・・・

「ふむう・・・でもなあ・・・一応九曜に言っとくかあ・・・
これで存分に殺れる・・・ってこの確認と一緒になあ・・・」

そう言つと・・・螢糸を担ぎ、本部へと帰っていった。

s i d e o u t

第115話 全面対決の序章（後書き）

ありがとうございます！！

一応仲間はちゃんと連れて帰ってくれるんですね・・・

自分で書いてて意外！って思っちゃいましたよ楓牙くん 笑

次は・・・ ある秘密が・・・ ばれちゃいます！

もう すぐに投稿しちゃいます！ 出来てますので

第116話 知られた秘密(前書き)

よろしく願いします!!

原作を知っている方なら・・・

一発で分かっちゃいますね

では!!

第116話 知られた秘密

【公安本部】

「楓牙様！！それは・・・！」

1人の公安委員が楓牙の帰還に気付き・・・

背負っている螢糸を見て驚きながら話した。

「ほらよお！」

ドサツ・・・

螢糸を九曜の前に運ぶ・・・

「螢糸がやられただと・・・？あの男か？」

九曜がいきり立つ・・・

「いや・・・ちげえな・・・ あいつじゃあない・・・ あの殺気は覚えてる・・・おれあこいつがぶっ倒れていた側にいたんだ・・・ アイツだったら 気付くさ。 また別のでけえ妖気の持ち主だ・・・ 誰がやったかまでは知らんがな・・・」

そう言うつくすくと笑う・・・まるでおもちゃが増えた子供のよ
うに・・・

「あいつら・・・去年どうなったか忘れたのか？」「バカなやつら
だ・・・」

本部にいた実力者だろう・・・

それぞれが呟いた。

「いいだろう・・・そこまでバカなら今すぐに潰してやる！この
私自らの手でメチャクチャになー！！」

歯軋りをしながら・・・怒りをあらわにする・・・

ここまで明確に我々に敵意を向けられたのだ。

もう策など必要ない。誰であろうと真つ向から叩き潰すのみだ。

「おいおい・・・九曜よう・・・オレとの約束・・・忘れてね
えか・・・オレもウズウズしてンだよおー！！」

楓牙も妖気を出しながら笑う・・・

その時・・・

「ふふふ……怖いな……公安のトップ2が揃うところも怖いとはな……」

入り口から誰かの笑い声が聞えてきた……

「誰だ!!」

公安委員の2人が反応した……

その後九曜と楓牙も誰かを確認した。

「お前は……!」「これはこれは……指名手配犯じゃねえかよ……」

確認し……楓牙の方はまた……笑みを零す。

面白い物を見たかのように……

「フフ……いくら公安とはいえ理由も明確じゃない今……部

活を1つ取り潰しにはできんだろう・・・ だけど私ならすぐにも奴らを学園から消すことができる・・・ と言っても今はちよいと不自由な身だ。 変わりに教えようか 新聞部破滅の手を・・・ 奴らの弱点を・・・」

そう言つと薄ら笑みを浮べ・・・

「新聞部の弱点は1人の部員の「正体」・・・」

「青野月音 あの男には「人間」の可能性があるんだ」

その声の主はそう宣言した・・・

「ヒューー」

楓牙はこれ以上に無いほどの笑みを浮かべ口笛を吹く・・・

九曜は逆に冷静にその「者」の顔を見ていた。

「妖しか入ることの出来ぬこの学園に人間が紛れ込んでいる・・・と?」

再び目を見て確認する。

すると助言者は笑い。

「ふふふ・・・それがもし本当だったら・・・どうする？」

「掟に従い・・・新聞部の仲間もろとも・・・」

そう言うと・・・次の瞬間には九曜・楓牙の表情が変わる・・・

「殺してかまわんだろう？」 「ククッ 皆殺しだなあ・・・こり
やあ・・・」

ここで不気味な笑みが木霊していた。

その笑みの発生源は・・・

「クククツ・・・こいつぁ おもしれえな・・・傑作だぁ・・・
まさか学園「ココに人間クズが紛れてるなんてなあ・・・」

楓牙だ・・・

だが、初めこそは殺気立っていた九曜だったが今は冷静に考えている・・・

まあ 隣の男ふうがが強烈過ぎるからだろうな・・・

「・・・フン ご機嫌の所を水さすが そう簡単に人間など入ってこれるわけ無いだろう・・・ 何より私は正義を成し治安を守る公安の九曜 お前・・・のような者の戯言を簡単に信じるわけにはいかないな」

そう言い・・・背を向ける。

「おいおい・・・ 九曜よ・・・確かめもしねえで 決め付けても

いいのか？ 疑わしきは罰せよ……ってなあ！ 間違ってたらず
まねえでいいじゃねえかよ。」

去ろうとする九曜を呼び止める。

九曜は足を止めた。

そこへ

「公安にたてつく新聞部の奴らを潰したくないのか？ 新聞部1年

青野月音……こいつが本物の「人間」ならどうする……

？」

すかさず助言者が九曜に向かって言う……

そして薄ら笑いをし……

「掟では殺してかまわないんだろ？ 新聞部の仲間もろとも……
な……」

暫く九曜は考えていた……

「ふん……」

確かに……私が調べるといったらそれは正義の為の行為だ……
目的をも含めて……

「確かめてみるか…… 貴様の言う事を……」

そう呟くと、

部下を数人引き連れ本部を後にした。

「クククツ……固い頭の持ち主だが……行動はすぐにする奴
だなあ……それよりも先生よお……いや 元先生？」

九曜の方を見ていた楓牙は……その助言者の方を向いた……

「……なんだ？」

「あなたが……そんなに執拗以上に喰ってかかんのは……あの新聞内容お……ひよつとして新聞部の連中がやったことなのかい？」

笑いながら話す……

その表情と笑いに苛立ちを覚えたのだが……

ここは我慢をする時と判断し押し殺す……

溜飲は新聞部の連中を始末する時だ……

「だっ たら何だ??」

その反応だけで十分だった……

「いやあ……あなたを笑うつもりはねえよ……こいつはあ好奇心旺盛な時にでるんでなあ……カンベンしてくれや……」

手で顔を覆いながら三日月の様な口元を元に戻す。

「あんたに聞きたいのはあ……あの男の事と蜘蛛嬢ちゃんをやった奴の心当たりを……だ……」

「！」

.....

.....

s i d e o u t

第116話 知られた秘密（後書き）

ありがとうございました！！

つくねくん…… 間違いなくピンチです！

さあどうなるようになる?? 苦笑

読んでいただきありがとうございました！！

第117話 動き出した公安 (前書き)

よろしくお願ひします!!

第117話 動き出した公安

【新聞部部室】

ギン先輩が遅れて部室に入る・・・

今ここにはカイト以外の全員がいた・・・

「なんや？カイトはサボりなんか？」

つくねに聞くと・・・

「いやいや・・・クラスの用事で遅れてるだけですよ！サボるわけ無いじゃないですか・・・（こんな大変な時に・・・）」

苦笑しながら答える・・・

時折傷の痛み顔に顔を歪めながら・・・

「ん？どーしたんや？？傷ンレ？」

ギン先輩が不安感いーっぱいといった様子で聞いた・・・

「え……つと……実は……」

そこにいた全員が言葉を詰まらせながら……

さっきの出来事を告白した……

全部聞いた途端!!!

「こんのアホンダラアアア……ッ!! 公安の奴らとケンカした拳匂ぶちのめしてもうたやと!!」

皆「ずー……ん」といった感じで直立不動でたっていた……

説教タイムだな……珍しく。

「言つたやないかッ!! 奴らにや絶対手エ出したらアカンて 公安は「日本妖怪」を中心に組織されとる凶暴な学園警察で、トップ2

人が腐つとるから組織丸ごと夕チわるいんやと！！（折角カイトの奴を説得したってゆーのにつー！！）」

黒板にもう言つた事まんまを書き叩く！！

まるでダメ教師だな・・・教科書丸写しして怒鳴るだけの・・・

苦笑 「やかましいわ！それどころでないねん！！！」

・・・すみません・・・（ギン先輩・・・顔がマジだ・・・汗）

「あんな奴らとケンカしてオレの大好きなモカさんがけがでもしたらどうすんねん！！今のお前みたいにー！」

モカを抱き寄せながら怒る・・・

そっち目当てか・・・？

「いやいや・・・公安ぶちのめしたのモカだし・・・秒殺で」

くるむが突つ込む・・・

つくねは・・・

やはり傷が痛むのか時折顔を歪ませる・・・

「結構酷いんか・・・？」

ギン先輩もさすがに心配なのかつくねに容態を聞いていた。

それを変わりにゆかりが答える。

「わたしの調合した魔法薬で傷は塞ぎましたけど・・・ 本当ならなん針も縫うほどの大ケガだったですう・・・ カイトさんがいてくれたら・・・ もっと早く良くなると思うですが・・・」

ゆかりはそう呟く・・・

公安との小競り合いの際のカイトの激情を目の当たりにし・・・ 皆ちよつと話し掛づらかったみたいだ・・・

気持ちは皆カイトと同じなのにな・・・

「それより・・・ トップ2人？ あの・・・ 九曜って奴以外に・・・ 誰かいるんですか？」

つくねがそう聞くと・・・

ギン先輩は頭を掻き出した・・・

「ああ・・・ 厄介なんがおるわ、名前は楓牙、九曜に並ぶ公安屈指の実力者や・・・ ただ・・・ 気まぐれな奴で、滅多に活動せん公安にさらに輪に掛けてサボる男や・・・ 好戦的なんは好戦的なんやが・・・ 九曜に比べて活動回数が少ないからまだマシな存在や」

ギン先輩はそういう・・・

しかし・・・不安は消せなかった・・・

仮に・・・あの場にはいなかったが、

奴が動いたとすれば？

かなりやばい事態となる・・・

「そんなのが・・・痛ッ・・・」

つくねは傷を抑える・・・

モカはそんなつくねを見て、庇ってくれた時の事を思い出した・・・

「ごめんね・・・わたしを庇ってこんな大ケガを・・・」

モカが心配そうに・・・申し訳なさそうに言う・・・

だがつくねは必死に堪えてかまわないと笑っていた・・・

（つくねは「人間」だからわたし達妖よりずっともろいはずなのに・・・）

涙ながらつくねを見つめる・・・

「ありがとうつくね・・・わたし・・・」

「モカさん・・・」

ドキドキッ！　な空間が・・・

しかしそんなのはくるむちゃんが許しません!! 苦笑

「……………じい……………」

つと無言で睨みつける……

2人もはつと気付く!!

「全く油断もスキもない!」

ドン!

「あつっ」

モ力を押しのけつくねに抱きつく

「つくね……大丈夫……?」

「くるむちゃん!」

今度はくるむだ…… 苦笑

「つくねはわたしが付きつきりで看病してあげるから安心してノノ」

ぎゅっつと抱きつく!!

しかし 今のつくねにとつたらハグは拷問だ……

「ぎゃああああ！待って待ってッ！」「ぎゅー」「はやめてッ
たいイイイ！！」

またまた羨ましい空間が・・・

しかしそんなのはギン先輩が許しません！！ 苦笑

ダーーーー！！つと2人を放り投げる。

「なんでやねん ツ！カイトといいお前といい！なんでお前
がオレよりモテるんや？納得いかへんわアア！」

ぐあつとつくねに顔を近付け、その次はつくねの耳を掴む。

「おまえなんぞ 公安のエサにしたる！今回の罪 お前1人がぶつ
て死んでまえッ！」

「えええええエエエ！！！」

そのままつくねを今度はヘッドロックをかましながら部室の外へ出
ようとした。

そこへゆかりがまたしても改心の一言をこつそり・・・

「男の嫉妬は醜いですっ」

・・・ですよねえ・・・ 相変わらず毒舌

「オラオラオラァ！ギブか??？」

首を絞めながら言う！

「ギブギブ!!」

つくねもあっさりとタップ・・・

そんな平和もつかの間・・・

「・・・愚か者め・・・今更騒いでももう遅い・・・」

廊下から絶望の音が響いてきた・・・

・・・

第117話 動き出した公安 (後書き)

ありがとうございました！

ほっとんど原作のままですね・・・苦笑
カイトくんー急いでエ！

ガンバリマス！！

第118話 気まぐれな男(前書き)

よろしくお願いします！

第118話 気まぐれな男

カイト side

【学園廊下】

クラスの用事を終わらし、

カイトは部室へと向かっていた、

考え事をしながら・・・

『ギン先輩の言った事も分かる・・・だが・・・あの傍若無人な振る舞い・・・オレ達が大人しくしていても・・・公安が黙つてるとは思えないな・・・』

そう・・・

それが心配だった。

いかに皆を説得したとしても、

奴らと因縁がある以上 向こうから来てもおかしくはない。

武力で制圧しているグループのトップと言う者は・・・

簡単に想像がつく。

異常にプライドが高そうだということ。

そんなヤツがこのまま新聞部を放置するだろうか？

『否…… 必ず何か仕掛けてくる…… な、早めに部室へ行く』
『う』

部室へ行くことと移動速度を上げたその時、

ビュオオオオオオ!!!!

突然目の前に、突風が吹き荒れた。

『くっ……!!!? なんだ?』

手で顔を覆い……

発生源を凝視してみると……

男が立っていた……

「お初にお目にかかるなあ・・・ 御剣怪斗くん・・・」

不気味に笑いながら・・・ 1人の男が出てきた・・・

「おい・・・！あれって・・・」「公安の・・・まさか・・・ 楓
牙・・・？」 「なんでここに・・・」

周りの空気が一気に緊迫した・・・ 生徒の殆どに悪寒が走ったよ
うだ・・・ 畏怖の念を持って・・・

『公安委員か・・・何の様だ？』

そんな周囲の緊迫感などお構い無しに話しかける・・・

楓牙はその様子を見ると再び笑い出す・・・

『なんだ・・・？ 用が無いのなら行くぞ・・・ 部活があるんで
な。』

そう言い立ち去ろうとすると・・・

「クフフ…… おめでたいねえ…… 部活…… かあ」

意味深に笑う……

先ほどの時とは違う……

今度はカイトの背中に悪寒が走った！

『おい！ 皆に何かしたのか！』

振り向くと、

楓牙はそこにはおらず、天井に立っていた……

「何にもしらねえのかい…… おめでたい仲間だねえ…… ク
ツクツク…… この間の君の殺気のせいで絡みづらくなってるの
かい……？ 君達……？」

再び笑う…… 口元を抑えながら……

『……質問に答えろよ……』

ゴ　　ウツツ!!!

カイトも・・・　抑えていた殺気を出す・・・

（こいつだぁ・・・　こんの感じ・・・　ハンパねえなぁ・・・
近くで味わうとまた一段と格別だぜエ・・・）

そんな殺気も笑いながら見据えている・・・

「ククク・・・　怖い怖い・・・　オレが震えるなんざ・・・　ひ
つさしぶりだぜえ・・・」

口ではそう言うものの・・・　明らかに顔は笑っていた・・・

『・・・・・・・・・・3つ数える・・・　言え!』

カイトは・・・

殺気を出しつつ・・・　精霊術を発動する際の・・・オーラを体に
纏わした・・・

「へえ・・・こりゃあすげーな・・・　まだ隠し玉あんの力?お前・
・・・　まあいいわ・・・　教えてやるさぁ・・・」

決して怖気づいたとかそういった類ではない・・・

なんなんだ？この笑みの真意は？

「今・・・九曜から連絡が入った・・・どうやら・・・おたくの部員さんは・・・うちに手エあげたらしいな・・・」

『なに！』

続けて言う・・・

「今頃・・・新聞部のほうへ向かってんじゃねえの？奴らに肅清する為になあ・・・」

笑う・・・

その発言に焦りを覚えたが・・・カイトはその笑いの方が気になっていた・・・

『貴様・・・それを何故オレに言う・・・？』

静かに睨みつける・・・

（へえ・・・驚いたなア・・・血相かいて飛んでいくって思ったんだがなあ・・・）

意外な言葉に少し驚いたが・・・すぐに調子を取り戻す・・・

「おれあ・・・公安内でも気まぐれなンでな・・・やることすることぜんぶその時の気分しだいなのさあ・・・今回はお前だけが仲間はずれなのは可愛そうって思ってなあ・・・逝く時は1人より誰かと一緒にいいだろう？」

笑い出す・・・

顔を抑え高らかに・・・

『後悔するぞ・・・今言った事を・・・』

そう言う・・・今はこいつにかまってる暇はない・・・

真偽を確かめる為にも一刻も早く部屋へ行く必要がある・・・

カイトは空間に素早く図形を書く・・・

「フェアリー・ウイング天翔る羽」が発動した・・・

「おっ！」

楓牙は驚き見入っていると・・・

瞬く間にカイトはいなくなった・・・

「ククク・・・ほんとに驚いてばっかだなあ・・・こんな奴が
1年坊にいるなんてよあ・・・指名手配犯に聞いたところ、あの
モカって小娘も「カ」の大妖みだいなあ・・・まあさすが
にその2人そのまんま相手にするには・・・骨が折れそうだからな
あ・・・仕方ねえは・・・元々のオレの獲物はあの男1人・・・
だしなあ　人間クズと女は九曜に譲ってやるよ・・・」

そう眩くと・・・

楓牙も姿を消す・・・

彼がこの場でケリをつけようとしなかったのは・・・

1つ目に 極限のカイトやりたいからだ・・・ 怒れば怒るほど・・・ 隠していた？力が露になる・・・ 戦闘狂というやつだろう・・・

そして2つ目 場所が気に喰わない・・・ 生徒がギャフラーうぜーし・・・ 場所も狭え・・・ 至極単純な理由。

そして最後・・・ これはさっき言った通り・・・ 逝く時は1人より一緒が良いだろう・・・？これだ・・・ 彼成りの・・・

歪で歪んだ悪意の塊の様な・・・ 優しさだ。

そして・・・ 彼は気まぐれが故に・・・ 嘘もついていた・・・

九曜から連絡が入ったというのは本当だが・・・

それは・・・ 奴らを捕らえたと言う連絡だ・・・

故に・・・ 今新聞部に行ったとしても・・・

間に合うはずがない・・・

もう捕らえられそこにはいないのだから………もしか
すれば……

もう………

「くくくく…… たんのしみだなあ…… さあて…… オ
レもイクとするかあ……」

………

【新聞部部室】

『皆!!!!』

カイトは部室の扉を開く……

そこにはまだ部員はいた……

そうつくねとモカ以外は………

「カイト……」

「カイトさん……」

くるむとゆかりがこちらを向く……

『……つくねと……モカは？』

声を……怒りを必死に押さえながら聞く……

「……人間やとボケエ……オレはこないな面倒関わるのはごめんや……」

『ツツ!!!』

カイトは驚いていた……

公安に手を上げたというのは知ったのだが……

そこまでは知らなかった……

意図的に教えなかったのか？

オレを焦らせる為に？一体焦らせてどうすると言っただ？

「カイトの表情もそつと言っつゝゆるわ……クソがッ……」

ギン先輩が齒軋りしながら言っつと……

くるむが・・・真っ向から反対した！

「なっ 何よーっ 信じてんの！？つくねが人間のわけないじやない！！部長のハゲエエ！！！」

グアーっ と顔面を押し付けながら言う。

ギンも負けてなかった。

「誰がハゲやこの巨乳娘エエエ ホンマやったらどないすんねや！人間と妖は共存してても敵同士やと 相場アきまっとなやでエ！！！」

力強く言う！だが・・・

「知らないもんっ！ヘアバンドつけっぱだとハゲんのよバーカ！！！」

この言葉に！！

「ええ！うそっ！！マジなん！？」

・・・頭を抱えだした・・・苦笑

「待つてください・・・でも 言われてみれば確かに・・・つくねさんて人間ぽいですう・・・ さっきのお薬を塗った背中 of 傷も人間みたいに治りが遅かったし・・・カイトさん・・・？」

ゆかりが冷静に・・・そして最後はカイトに問うように言った・・・

カイトは黙り込んでいる・・・

「・・・・・・・・！！もしホンマに・・・つくねが人間やったら確実に処刑されてまうで・・・そして・・・たぶんオレらも・・・人間をかくまっていた罪に問われて同罪や・・・」

そうギンがいうと・・・すっとカイトが立ち上がる・・・

そして・・・部室を出ようと歩き出した・・・

「さてや！カイト！落ち着け・・・相手は九曜・・・楓牙はおらんかったが それでもあの九曜なんや・・・間違った自分の考えを絶対正義と疑わへん男・・・そして自分に逆らう奴はみんな悪モンで 正義しぎんのためだったら何やつてもええ思ってたんや そないなやつまともに相手してもこっちがヤバイ・・・ッ！！」

ギンは最後まで言い切る前に・・・カイトの目を見た・・・

揺るぎない信念が宿ってるのかのような目を・・・

『ギン先輩が言うのも分かる・・・だが オレはあの時・・・言っただけ・・・皆に手を出そうとするのなら・・・ オレも黙ってないといと！』

そう言うつと入り口の方へ・・・

『オレは2人を助けに行く・・・つくねとモ力はかけがえのない仲間だ・・・ たとえつくねが人間だとしても・・・な』

そう言つと扉を開ける・・・

その時、

「まっつて!!わたしも行く!!」「わたしもですう!!!!」

くるむとゆかりが来た・・・

ゆかりは怯えてはいるが・・・

決心しているようだ・・・

『そつか・・・ありがとな。』

カイトがそう言つと・・・

「何言つてんの?カイト!2人はわたしにとつても大切な仲間なんだから!」

「です!です!!」

そう言い笑っていた・・・

そして ギン先輩だけが部室にいた・・・

拳を握りこんでいた・・・

『ギン先輩・・・ オレは・・・ ツツ!!!!!!!!!!』

そう言うその瞬間！！

後ろから邪悪な気配・・・そして殺気が・・・

それは・・・その殺気はオレではなく・・・

くるむとゆかりを狙っていた。

第118話 気まぐれな男（後書き）

動き出しちゃいました・・・

襲ってきたのは・・・

ダレでしょう 笑

まあ大体分かるかと!!

ありがとうございます!!

駄文失礼します・・・ 苦笑

第119話 公安幹部の片鱗？

背後から・・・邪悪な殺気がくるむ達を襲った。

『いかん！！　くるむ！！ゆかり！！伏せろー！！』

咄嗟にカイトは飛び出した。

そして勢いに任せくるむ達の方に飛び押し倒す。

その瞬間・・・くるむの首があつた部分の壁が・・・

スパアアッ！！！！

まるで鋭利な刃物で切ったかのように・・・切れた！！

「一体なんや!!」

ギン先輩も部室の外を見た・・・

「ククク・・・ここも・・・狭えが・・・うざいのがいねえし・・・
最高のシチュエーションじゃねえか・・・カイト君よあ・・・
オレを・・・たおさねえと・・・お友達を助けには行けねえぜえ
?」

男が・・・風と共に現れた・・・

「なつ・・・楓牙!!?」

ギンも驚く!

まさか・・・動いていたとは・・・と。

「よあ・・・森丘銀影・・・ひっさしぶりだな・・・今はお
めえに興味はねえけど・・・逃すと厄介だなあ・・・」

そう言うと・・・両手両足・・・いや 体から風が発生してるかの
ように風を纏わせた。

「不意打ち、すまねえなあ・・・ 全員切り裂いてやんよおお!!
!」

ビュオオオオオオ！！！！　ズバアアアアアアアツツ！！！！

風が・・・　周囲の物を刻みながら・・・近付いてくる。

「ひゃっはー！！！！いくらテメエの瞬速でもあ・・・ここは狭えからよお！にげらんねえぜえ！　全滅だなあ！！　精々苦しめやああああ！！！！」

高らかな笑いと轟音が響く。

触れる物皆刻んでいく風を纏う刃。

広範囲の刃の風が迫ってくる・・・

「何なのよ・・・これ！？」

「ひっ！！！！」

「ちい！！！！」

くるむとゆかりも身を硬くしてしまった・・・

ギンは攻撃に備えくるむたちの前に身構える。

そして部員達に届くか届かないかの刹那！！

バツシュウウウウウ！！！！！！

風が・・・何かに掻き消された・・・

「・・・何イ・・・！」

さすがに楓牙も驚いていた・・・

それなりには力を入れて放ったはずなのに・・・

消した先には・・・

両の手に傷をつけているカイトだった・・・

ポタツ・・・ポタツ・・・ポタツ・・・

カイトの手から血が滴り落ちる・・・

「やあっぱてめえか・・・ククク・・・こりゃ楽しくなりそう
だ・・・」

楓牙も本格的に臨戦態勢に・・・

『くるむ！ゆかり！！先に行け！！ここは任せろ！！』

後ろにいたくるむ達に激を飛ばす！

「で・・・でも！相手って 公安のトップの一角なんでしょ・・・

「1人じゃ……」「カイトさん1人じゃ危ないです!!」

そう言う……カイトは!

『……オレよりも もっと危ないのはつくね達だ!! 早くあいつらの所へ!!頼む!!』

冷静に……そして大声で叫ぶ……

「でも……でも……」

くるむはまだ迷ってるようだ……

今は一刻を争う。

もう一度言おうとした、その時!

「いいから!行くんや!!」

ギン先輩が2人を抱えた!

「ちょっと!何を!!」

「ツツ!!」

くるむとゆかりは暴れている……

「あほう！黙ってじっとしとれや……！舌を噛むで……！」

そう言つとカイトのほうを向いた。

『礼を言うよ、ギン先輩。』

「ちい……」

ギンも複雑そうな顔をしながらも窓から飛び出した！

バリインツ……！！

「っは……逃がすかよ……！そう簡単になあ……！」

ギンの方に手を向ける……！！

が、

ドーン……！！

『皆には手出しはさせない!』

「くうっ……!!」

一瞬で間合いを詰め、

カイトの蹴りが……楓牙の腕に炸裂。

少し遅ければ脇腹を直撃していた筈が気付き腕を下げたのだ……

ミシミシミシッ……

防御した楓牙の腕が軋む……

その次の瞬間!

ドガアアアア!!!

楓牙が吹き飛ばすように部室の壁に激突した。

(こいつ・・・足から感触が無くなっていった・・・衝撃を・・・?)

吹き飛んだ方をみると・・・

楓牙が服を払いながら出てきた。

「ひゅう〜・・・あんなバカみてーな蹴り・・・ずっと堪えてらんねえわ・・・壁の方がまだいいってもんだ。」

衝撃受け止めずそのまま後ろに受け流したのだ・・・

『強いな・・・お前。少なくとも今までの奴らに比べると格段に・・・』

正直な感想だ・・・

「クツクツ・・・光栄だがあ・・・一体誰と比べてんだコラ・・・オレをよ・・・」

そう言つと・・・

再び風が楓牙の周囲に舞う・・・

『ちっ！教室の中じゃ不便だ！』

カイトはそう言つと！ギンのように窓から飛び出した！

地面に着地し、楓牙の方を見る・・・

風を従えているかのようにゆっくりと・・・降りてきた。

「ククク・・・広い方が殺りやすいんだがなあ・・・」

不気味に笑う。

『殺つてみるよ・・・』

カイトもまた・・・軽く笑みを浮べ・・・にらみつけた。

「死ねやアアア！」

ギユルオオオオ！！！！

楓牙は今度は直線状に刃の風をカイトに向かって放つ！

無駄な破壊はしなく一直線・・・それでいて攻撃力はさっきの以上だろつ。

受け止めれば・・・かなりのダメージになる！

『ぬっっっっ！』

カイトは両の手を翳し・・・

ガキイイイイ！！ ドツ！！ ズガアアアアアア！

受け止めたと同時に上空へと受け流した。

力の方向を上方へと変えたのだ。

それを見た楓牙は再び笑い出す・・・

「クククク・・・ お前やっばつええな・・・ あの蹴りも然り・・・
そしてオレの真空の刃を二度も止めた・・・ でもさあ・・・
まだだろお？」

笑いながら・・・言う。

『何が言いたい？』

「……出し惜しみは良くねえって事だよ……全力でやろう
ぜえ？ 互いになあ……」

そう言つと……

再び薄気味悪く笑つた……

その時、

楓^{やっ}牙の妖気が上昇していくのを感じた……

ここからが本番のようだ。

第119話 公安幹部の片鱗？（後書き）

ありがとうございました！！

当然ながら・・・1話では決着つかなかったですね・・・

さて・・・どれくらい掛かるか・・・

まあ直ぐだと思います・・・ 作者に腕がないので・・・ 苦笑

戦闘描写も難しいです・・・

ガンバリマス！！ これからもよろしくです！

第120話 風斬の大妖（前書き）

楓牙さんの正体です！！

はい・・・オリジナルです・・・

オリジナルの大妖はセドナに続き2人目ですが・・・

はあ・・・どうですかね？ 苦笑

もっとセンスあればなあ

とりあえず！よろしくです！！

第120話 風斬の大妖

不敵に笑う・・・

そしてこちらを睨みつける。

楓牙の妖気が上昇していく・・・

そして楓牙は・・・

まるでピントが合っていないようにブレた。

『なんだ!?!? 目の・・・錯覚・・・か?あいつ!?!』

次に楓牙が増えた。

そして・・・姿が人の形から変わる・・・

その正体は・・・・・・・・

『おまえ・・・その姿・・・』

3つに増えた楓牙に言う。

「そうさあ・・・ オレあカマイタチ・・・風を統べる・・・
してえ 人間クズを見つけてはあ ぶつ倒し・・・ 切り裂いて 生き
血を吸う・・・ 人間界の惨殺魔だよお！！ さあ・・・早いとこ
オレを殺らねえと 助けられねえぜえ？ 大切なお友達をよお！」

カマイタチの攻撃・・・ 3つの体全てが楓牙らしい・・・

それぞれが、役割を持っている・・・

一人目が足に纏わり獲物の動きを封じ、二人目が切り裂き、三人目
が、切り裂いたところから生き血を吸う・・・

風が当たる限りそれは延々と続くらしい・・・

風を我が身のように使用するのが最も厄介なところ。

精霊の力を借りるカイトと風に関しては同系統の力だ、

厄介だ・・・

風斬の大妖「カマイタチ」

公安のトップというのも頷けるな・・・

この分じゃ・・・九曜の方も・・・高位の妖怪である事は間違いない・・・

あいつら・・・無事・・・なのか・・・？

「・・・考え事してる暇あんのかい??」

『ツツ!!!』

風を纏った楓牙の移動速度はまさに疾風の如く・・・

一瞬でカイトとの間合いを詰め。蹴りを一閃!!

ドゴッ！！！！

「さっきの借りだあ 受け取れや！！！」

ザシュ！ ザシュ！！ バシユウウウ……………

蹴りの次は……………他の楓牙の斬撃……………そして生き血、すなわち妖気を吸う……………

三位一体……………それは舞のような……………まさにその連撃……………本人の風貌からは連想が出来ないほどの美しい舞……………

まさに「舞闘」と呼べるだろう……………

カイトは堪えきれず吹き飛んだ……………

ドガアアアッ！！

『ぐあッ!』

受身を取ることが出来たが・・・

幾らか傷を負ってしまった・・・

「・・・ククク お前・・・その程度じゃア無いだろう？ もっと
楽しませてくれや・・・オレをよお!」

side out

くるむ・・・ side

暫く担がれていたくるむだが・・・

「ちよつと! いい加減おろしてよ!」

くるむが暴れた!!

当然だろうな・・・

工口部長に担がれてるんだから！

「あばれんなや！！ まあ・・・ここならええか ほらあ！」

くるむとゆかりを下ろした。

「ギン先輩！！なんでカイトを残してきたんですか！！」「そうですよう！！！」

くるむが詰め寄る！

「アイツは・・・ あの楓牙ちゅうやつ危険な奴なんやあの場におつたら、先にお前らが切り刻まれてんで！！場所も最悪なんや！」

風を操る能力ちからを持つあの男には多人数で攻めてもあまり関係が無い、

全方位どの角度からでも風による斬撃攻撃ができる凶暴的な能力だ。
・
・

そんな奴相手に、おまけに至近距離なら何時攻撃されてもおかしくない。

「お前らがあそこにおればお前らをあいつは庇おつとする！絶対にな！そういう奴や！！ おまえらがようわかつとるやるうが！そしてたらあいつはいらん傷をおつことになつたんやでえ！」

ギンも激を飛ばした・・・

本心では残りたかったのであろう・・・拳を握りこんでいた。

「・・・・・・・・」

そんなギン先輩に何も言えなかった・・・

「と・・・とにかく！今はカイトも心配だけど・・・つくねよ。カイトに頼まれたんだから！」

そう言うときゆかりを連れて公安の本部へ行こうとする・・・

「待て！ 落ち着けや！」

ギン先輩が叫ぶ。

「計画も立てんで殴りこみや 事がでかくなるだけやんか！」

そう続ける・・・

言ってる事は分かる・・・

だが、

「ギン先輩！ 助けてもらってなんだけど！ 仲間をおいてきたんだよ！ 自分達は安全なとこにいて・・・そして連れて行かれたほうの仲間は！？ 助けに行かないで・・・逃げ出して・・・そんなのわたしは嫌だ！！ カイトに・・・カイトにつくね達を頼むって

いわれたもん！！ ジャマするならどっか行つて！！もう絶対先輩
の力・・・もう借りないからッ！！」

ギンも・・・黙る・・・

「・・・感情的になりよつてッ 何が仲間や！ なら頼まれ
たつくねがホンマの人間でも助けに行けるんかッ？」

くるむは・・・

ほんの一瞬だけ目を瞑り・・・考えた・・・

そして直ぐに、

「頼まれたからとか言わないでよ・・・ 頼まれなくたって助けに
行くわよ・・・ そんなの当たり前じゃないバカ・・・ 人間とか
妖とか・・・ そんなの関係ないよ・・・」

言い切った。

目に涙を浮べ・・・

ゆかりもギンも・・・ 目を見開いてくるむを見ていた・・・

そしてもつくるむはそれ以上何も言わず・・・

ゆかりと共に公安本部へと向かった。

「くっ・・・」

ギンは・・・頭を抱えている・・・過去のトラウマと戦っているのだ・・・

第120話 風斬の大妖（後書き）

ありがとうございました！！

カイトくんー！

負けるなあー！！！！ ガンバレ！ 苦笑

第121話 猛り立つ怒り（前書き）

よろしく願いします!!

1時間経過・・・

つてそんなに暴れたら・・・ 校舎壊れる・・・ とか つくねたち
が・・・とか・・・あると思います。

書いてて思っちゃいました・・・

軽くスルーしてください・・・ 他に表現と言葉が・・・ 苦笑

さあ！カイトー！反撃だーい！

第121話 猛り立つ怒り

【校舎裏】

戦闘時間は1時間ほど経過していた・・・

2人の戦闘はまだ続いていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふん・・・・・・・・そんなもんなのかい？カイトくんよお・・・」

カイトは・・・暫く応戦していたが・・・

スピードにおいて風を使う楓牙の方に分がある・・・

カイトが天翔る羽フェアリー・ウィングを使ったとしてもだ。

そして、

打撃、斬撃、吸収・・・おまけに使役する風の力。
全く乱れぬ舞闘術・・・

技の錬度も実に凄まじい。

カイトは防戦一方だった・・・

少なくともこの段階は、

(もうちょっと・・・だな・・・)

・・・

カイトの周りにオーラが湧き出る・・・

その輝きは・・・

鮮やかなエメラルド・グリーンだ・・・

「ちっ・・・そいつはさつきから見てるぜえ・・・　つまりはあ・・・
・虚仮脅しかよ・・・　チッ　つまんねえな・・・」

正直防戦一方のカイトに嫌気が差してきた。

さつきの蹴りはそれはそれでかなりの威力だったのになあ。

オレが正体を現したとたん防御中心に戦ってるみたいだ。

(んな もんでオレをお 倒せるって思ってたのかねえ・・・
イツァ・・・！！ いやまてよ・・・)

楓牙はあることを思い出していた・・・

この男は、怒れば怒るほどに力を増していく・・・

ならば・・・ 怒らせればいい・・・

この男の芯に噛み付いちまえば簡単だ・・・

即ち・・・

「おまえ・・・もう良いよ・・・」

楓牙は携帯を取り出し、そして・・・どこかにかけて。

『！！！』

カイトは驚き楓牙の方を見た！

「九曜・・・こっちは・・・ 終わりそうだ・・・ ははっ・・・
たーいしたことなかったさあ・・・ ンだよ・・・ つくねって奴
は?? ああン?まだなの力よ・・・ ン? オレを待っていてくれ
ンの・・・? へえ・・・ いいよ・・・ 殺っちゃってくれても
さあ・・・ まあ 大した事無くても、そこそこは楽しめたからさ

あ……」

そう言うとカイトの方を見る……

「最後につくね君の声え……聞いとくかあ？ 待っててくれるつてよ…… 九曜にしちゃあ 粹な事してくれてンよなあ……」

ニヤニヤしながらカイトを見る……

そう…… この男は自分よりも他人を傷つけられる事に何よりも激しく激昂する……

前に既に見たことだった。

カイトは……それが挑発だったかどうかは…… もう分からな
い……

ただ…… 仲間の危機に…… 激しく反応した！

『きつ貴様あああああ……!!!!』

「なっ！！！！！！！」

それは一瞬の出来事だ・・・

睨まれただけで・・・

異常な気配を感じ、

楓牙はいつもの立ち間合いの倍以上後ろへ下がってしまった！

おまけに・・・足が・・・

「なっ・・・なん・・・だよ？ コレ・・・オレの・・・足が・・・

」

（震えてる？このオレが？睨まれただけで？）

すぐさま楓牙は頭の中でそれを否定・・・

「ぶざけんじゃねえええ！！ いいぜえいいぜえ・・・！ マジで付き合っつてやんよおおおお！！！！！！」

楓牙は・・・カマイタチの分身全てが同じ構えを取った。
フォーム

「・・・こいやア！ 惨劇の風エ・・・ 答えろオ！ 殺戮の風エ・・・ 命あるものを全て切り刻めエエ 風を纏う死神イイ！！！！！！」

3人に纏っていた風が集まり・・・周囲が・・・まるで台風の目のように・・・

「グリフォネル・マード殺戮せし暴風アアアアアアアア！！！！！！切り刻めエエエエエ！！！！！！」

ギユルオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

周囲が・・・全てバラバラになっていく・・・

カイトは・・・

左腕を伸ばし止めるような構えをする・・・

「ひやはははははは！！！！！！バカが！！！！コレをとめるだあ？腕一本でえ

?? なめてんじゃねえぞ!!」

楓牙が叫んだとほぼ同時・・・

カイトに直撃する!!

ギョルオオオオオ・・・・・・ズガアアアアアアアアアア!!
!!!

「バカが・・・マジで、まともに受けやがった・・・ はっはー!
くたばちまいヤンの!!!!はぁーっはっはっはっはっは!!!!」

楓牙は高らかに笑う。

そう・・・自身の勝ちだと確信して。

第121話 猛り立つ怒り（後書き）

ありがとうございました！

はい！ごめんなさい・・・本格的な反撃は次話になっちゃいました・
・

ガンバリマス！！

第122話 決着・使役する者の格の差(前書き)

よろしくお願いします!!
はい、やっと決着です!!

第122話 決着・使役する者の格の差

「ハアーツハツハツハツハアーツ！」

楓牙は高らかに笑っていた。

そう自分の勝ちを信じて疑わなかったからだ、

だが・・・

彼は信じられないものを見た・・・

「・・・・・・・・・・な・・・・・・に????」

自信の最強の技が直撃し・・・跡形もなく切り裂かれているはずの男が・・・

衣服すら破れていない様子で立っていたのだ・・・

「ば・・・・・・・・ば・・・・か・・・・なあ・・・・オレの・・・・マジの全力だ

ったぜ・・・今の？何で無傷・・・？何で服すら破れていねえ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・全然とし立ち尽くしていた・・・

『この戦い・・・お前が一方的にしゃべって・・・攻撃して・・・
そればかりだったよな・・・振り返るとな・・・』

怒りでどうにかなりそうだったカイトだが・・・

こんなに相手が呆然として・・・そして震えてたら・・・さすがに
逆に冷静になってくる・・・

しかし許すつもりは毛頭無いようだ。

楓牙は口を開く・・・

「こ・・・答えになってねえ！！　なんでだ！！おまえ・・・いつ
たい・・・」

楓牙は戦慄した・・・震えも止まらない・・・

こんな感覚・・・・・・・・あの前部長以来・・・い・・・いやそれ以上の・・・

『お前、風を統べるって言ってたけどよ・・・本物の風の力・・・
・見せてやるよ!』

ドンッ! ! ! ! !

楓牙と同じ様に・・・

風を体に纏う・・・

「! ! ! ! ! なっ! ! ! ! !」

驚いたときにはもう遅い・・・

一瞬で間合いを詰められ、鳩尾に、

ドボオッ! ! !

拳の一撃を入れられた・・・

そして追撃の風の斬撃が襲う・・・

ズバアアアアア！

「グツガアアアア！！ なっ・・・か・・・かぜを・・・！」

吹き飛びながらも・・・

楓牙は・・・動揺していた。

風を使った攻撃を受け・・・このオレがここまでのダメージを？

・・・？
風斬の大妖である自分が・・・まさか同じ属性の攻撃でここまで・・・

それは・・・

雪女を氷漬けに・・・ 人魚を水に沈め・・・ 炎龍を焼き尽くす・・・

・・・それと同じだ・・・

つまりは・・・

(こんなん・・・ありえん)

楓牙は上空高く飛ばされた・・・が！

パシッ！！

カイトは既に楓牙が飛んだ位置まで先に来ており、

左手でその胸倉を掴む。

「なにイ！！！」

再び驚愕した・・・

その異常なスピードに。

『簡単に続べるとか言うんじゃないよ。お前の攻撃がオレに効かなかったのは・・・風は・・・お前には従わず、オレに従ったからなんだよ!』

「な・・・なに・・・?」

そう言う・・・カイトは空いたほうの手を握りこむ・・・

『風神一天ふうじんいつてん・・・』

その手に風が集中していく・・・

楓牙の様な風じゃない。

無駄に暴れて周囲を壊すのではなく・・・

唯手に集中していく・・・

極限まで圧縮された風・・・いや暴風。それは一切回りに漏れていない。

拳に圧縮した暴れ狂う風を閉じ込めているかのような!!

体の震えが止まらない・・・

「!!!!!! まっ・・・!!」

『斬光霸せんこうは!!!!!!』

キュルルルルル!!!!!! ドゴオオオオオ!!!!!!

風を・・・ いや暴風を纏った拳が楓牙の鳩尾を貫いた!

第122話 決着・使役する者の格の差（後書き）

ありがとうございました！！

まだ 九曜君が要るのに全力全開でやっちゃっていいんですかね・

・ 苦笑

とりあえずがんばれーカイト！！

では！

第123話 強大な力の代償（前書き）

よろしく願いします!!

ちょっと・・・短くなってるのはごめんなさい・・・

上手い事話と話の間・・・きるの難しい・・・

ガンバリマス!

第123話 強大な力の代償

上空高くにいたカイトは動かない楓牙を見ると、

地面へと降りていった。

『……ふう 力……使いすぎたな……
だがまだ終わってない……皆のところへ行かないと……』

にじみ出る汗を拭き……

直ぐに頭を切り替え…… 公安本部へ行こうとしたその時、

「ぐっ……があ……
ふう……ま……まで……よ
お……」

声が聞えた・・・

『・・・マジで意識あるのか？頑丈だな・・・ 3日間目は目が覚めなと思ったけどな・・・ あきれたな・・・』

そう言う。

実際にこいつのタフネスには驚嘆に値していた。

「けっ・・・ オレも・・・びっ・・・くりだ・・・よぉ・・・
そう構えんなよ・・・ 無理・・・だ・・・指の一本・・・動かせ
ねえんだ・・・」

大の字で倒れたまま楓牙は話した。

『何のようだ？今度は・・・？』

確かに・・・

妖気も何も感じない。

さっきの一撃で全て使ったようだ。

「へ……へへ…… 1つだけでいいんだあ……教えて……
くれよ…… おまえ……なに……者なんだ……？ この……
オレを…… こんなにまで…… すんなんて…… よ……」

明らかにボロボロなのだが…… 男は笑いながら……言う。

この男……精神力が凄まじい……

『……』

黙っていたのだが…… ここまでの状態になれば……何も危険
はないだろう。

バラした所で問題があるわけじゃないしな。 (まあ……校則違

反だけどね)

『オレは^{エレメンタル・マスター}精霊魔導師、自然界の精霊を統べる妖……だ。』

一言そう言つと……

返事を聞かずその場を去った。

「へ……へへ…… エレメン……ト・マス……ターってい
やあ……マジか……根源の……妖……じゃねえか……

クソッ…… かなわ…… ねえ わけだな…… 自然の……
ちからあ…… つかう…… おれじゃ……」

そう言っていると、完全に気を失ったのか、楓牙は動かなくなった……

公安本部へと向かう途中……

足が縛れ…… 視界が…… ぼやける……

『ぐう…… さすがに…… きついな……』

膝を付き…… 頭を右手で支える。

無理もないだろう……

先ほどの楓牙との一戦…… 傍から見れば圧勝のようだったが……

・実はそうでもない。

風斬の大妖と呼ばれる妖「カマイタチ」。

大妖に分類される妖の力は・・・侮れない。

それは楓牙も例外ではない。

それが証拠に彼が使役するその風を簡単に支配できるはずもないほどの・・・ものだった。

カイトは・・・

体中の力を奪われたような感覚に襲われていた。

楓牙との前半戦・・・

防戦一方だった時、

手を出さなかったのではなく出せなかったのだ。

それほど彼が使役している風の力は凄まじい。

その上仲間たちも危険にさらされている。

《時間的》にも敵の《力量的》にも最悪だった。

その為、カイトは時をかけ術式を完成させていった。

強大な力・・・彼の風を上回る風を使う為に、

精霊魔導師の力・・・

それは字の如く自然界に存在する精霊たちの力を使う。

それは自身の魔力を削って使うのだ。

簡単に言えば自分の魔力・・・即ち精神力を餌として使用する・・・

時間を掛け行った術式は自身の魔力を何倍にも増幅する術式。

【てんくうまほうじじん天空魔法陣】

ただし・・・リスクはある。

日に一度だけしか使えない上 魔力が上がるのは魔法陣の下にいる間だけだ。

日に一度しか使えない・・・ってのはカイトが付けた制約・・・というか限界点。

使おうと思えば使えるが 複数回使用したならばどうなるかわかったもんじゃない・・・

最悪死ぬ危険性もある・・・

今でもかなりやばいのに・・・

そして 魔方阵の外に出れば使った力に見合うだけ 肉体的にも精神的にもボロボロになる・・・

それほどまでしなければならぬほどの相手だった。

それに、ああ言う性格の男に完全に負けを認めさせるのは、自分と同じ属性で・・・同じ土俵に上がってその上で核の違いを見せ付けるのが一番効果的だ。

早く戦いを終わらせる為に・・・

そしてこの代償がこれ

『確か・・・女神さん・・・「んでまあその辺のRPGみたくレベルが必要！っとかは無いから安心してね！」っていったけど・・・オレの基礎体力・精神力を上げないと・・・術使っただけで、逝ってしまいそうだ・・・』

頭を抑えながらも苦笑する・・・

『でも・・・こんなところで、何時までも時間食ってる場合じゃない。つくね・・・みんな・・・急いで・・・行かないと。』

自分の体を奮いあげ・・・公安の本部へと急いだ。

第123話 強大な力の代償（後書き）

そりゃーね・・・

ジャックさんならともかく（苦笑）

大妖！って分類してる（オリジナルですけど！）妖怪をあっさり倒しちゃって・・・

代償みたいなのが合ったみたいですが・・・

さて・・・残りはあの狐だけですね・・・

どうなるか・・・

お楽しみに！！

ではありがとうございました！！

第124話 人間であると言ふ事(前書き)

よろしくお願いします!!

この話はほぼ原作引用ですー!!

オリジナリテイないですね・・・ごめんなさい・・・ 苦笑

カイトくんの名前だけは出てきますが・・・

今必死に向かっているとします・・・ 苦笑

では!

第124話 人間であると言ふ事

【公安本部】

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

九曜はつくねに「正体」を晒せ！

と詰め寄るが。

つくねは正真正銘「人間」。

妖としての正体なんか出せるはずも無い。

九曜は薄ら笑いをし・・・

「おまえ・・・まさか本当に人間なのか・・・？」

気味が悪いほどの笑顔だ・・・

「止めてください！つくねはっ・・・つくねはっ！」

モカが必死に止めようとするが、

ドスッ

九曜の拳がモカの腹部へ一撃・・・

モカは倒れ・・・

「うわあああ！！モカさんっ！！！」

つくねは叫ぶ。

そしてつくねへの制裁が始まった・・・

九曜は薄ら笑みを浮かべながら・・・つくねを蹂躪する。

無抵抗のまま・・・抵抗する事すら出来ない速さでの攻撃で・・・

やば・・・い・・・殺・・・される・・・モカさん・・・

カイト・・・みんな・・・

つくねは痛みが強すぎて視界が薄れかかった。

目の前には狂気の表情の九曜が見える・・・

ああ・・・こんな妖怪の学園で最後は1人ぼっち・・・こ
こでは人間ってだけでこんなにも危険と隣りあわせだったのか・・・

もう・・・立つ事どころか身動きすら取れない。

そんな時・・・

見に覚えのある声がかすかに聞えてきた。

「・・・おいおい 待てよ九曜 約束が違うぞ・・・ 本当に死ん
だらどうするつもりなんだ？」

（知ってる・・・覚えているぞ・・・ じ・・・この声は・・・
）

・ そう・・・つくねの正体が人間であることを公安にばらしたのは・・・

元・美術教師：メデューサ 石神 瞳だった。

「こいつらを殺すのはこの私だぞ？やりすぎは困る 私は新聞部に地位も名誉も奪われたんだ。髪をちぎられた拳句に新聞でさらし者にされた。」

そんな石神をつすら笑みを出しながら九曜は見ていた。

「こいつらを殺す権利があるのはこの私だッ！全員皮を剥ぎバラバラにしてからその首を石にしてやらねば気がすまないッ！」

完全に自業自得だ………

石神は復讐心の塊と化していた。

(……大変だ……こいつらの狙いは……はじめから新聞部全員の命……だったんだ……みんな……逃げッ……)

つくねは叫びたかったが体が全く動かない。

そこへ石神がつくねをムリヤリ起こし……

「やっぱり人間だったんだねえ……つくね君……これで堂々と君達を皆殺しにして復讐を果たせるよ……モ力を解放できる君はこのザマ……そして もう1人……」

石神はニヤツつと笑った。

「あの男……御剣怪斗……あの男は公安の楓牙がもう殺してしまってる所だろう……もう君には手が無いさあ……」

クククツと笑う。

(そ・・・そんな、カイトまで……………)

つくねは更に絶望する・・・

「冥土の土産に教えてやろう。なぜ君の正体が気付いたのかわない。覚えているか？私の髪で君の体中を噛み付いたことを・・・あの時君の正体に気付いたのさ君から紛れも無い「人間の味」がしたからね・・・フツそれにしてもよくもやってくれたよ人間の方で……………」

石神の蛇の髪がゆっくりつくねに迫っていくその時、

「・・・おい どいてろ石神」

ゴウアアアアツ

九曜が・・・

炎を纏い直ぐ後ろで構えていた。

「つくねが「人間」であるとは分かった以上 新聞部を潰す理由は十分 用無しのそいつは掟に従い今すぐ殺さねばならないそれは公安である私の役目だ。」

手に炎を集中させる・・・

「チツ・・・ だがつくねこいつ以外のメンバーを殺すのはこの私だぞ」

石神は睨みながらいうが・・・

「知らないな」

初めから約束など守るつもりは無かったようだ。

無造作に集めた炎をつくねが倒れている場所へ放った。

カッ ゴアアアアア!!!

つくねがいた場所は一瞬にして炎に包まれた・・・

「キサマツ・・・」

石神は怒っていたが・・・それ以上に九曜の熱気に戦慄していた・・・

（くっ・・・何て熱だ！これほどの炎を操るとは九曜とは何者だ！
？人間がこれを喰らえば骨すら残るまい・・・）

そう思っていたが、

「……………チツ　女め……………」

九曜が忌々しそうに攻撃した場所を睨んでいた。

石神もそちらを見ると…………

モカがつくねを間髪助けていた。

「赤夜萌香！！（目を覚まして助けていたか…………　ククク…………
これは思わぬ見せ物だな）」

そう言うと同時に石神は身を隠し完全に傍観者の位置に立った。

残酷で悲惨な最高のショーを見るために…………

「モっ…………モカ…………さん」

つくねは必死にモカの方を見る。

「つくね…………わたしの十字架ロザリオを外して　大丈夫…………人間だつて
ばれても…………私がつくねを守るから…………絶対に。」

涙を流しながら…………つくねを見つめる…………

「……………！ (モ…………モカ…………さ…………ん)」

必死に手を伸ばし外そうとすが…………視界がぼやける…………モカが3人に分かれて見える…………

なんとかロザリオに触れるが外れない。

(ひどい…………どうしてこんなになるまで…………つくね…………)

「つくねえ…………」

モカはつくねを抱きしめた。

「バカな女だ…………自分のやっていることがわかっていてるのか？ その男は人間なんだろ？それを承知で助けるとは…………」

九曜がゆつくりと近付き…………そして表情を変えた。

「この妖の裏切り者め！ おまえがやっていることは学園に対する重大な反逆行為ッ！十分に極刑に値するッ 邪悪なクズどもめ我が炎で骨の髄まで浄化してくれるわッ！」

再び九曜は炎を手に集中させる。

モカは…………つくねを抱きしめる力を強めた…………

身を挺してでも…………

そして…………

「死ね」

無情にも九曜はそう言い放ち 手に炎を・・・

つくねに・・・

第124話 人間であると言う事(後書き)

ありがとうございました!!

第125話 人間の・・・

月音の味方（前書き）

久しぶりの連続投稿ですー！
よろしくお願ひしますー！！

第125話 人間の・・・ 月音の味方

無情にも九曜は炎を放とうした。

その時！

「危ない！！！」

誰かの声と同時に植物のような物で九曜の手を拘束。

炎の攻撃の初動を防いだ。

「何よ・・・モカだけじゃ全然頼りにならないんだから やっぱり私がいないとダメね！」

「くるむちゃん！」

くるむだった。

幻術を使い九曜を拘束したのだ。

(助けに来てくれたんだ……くるむちゃん……)

そしてもう1人。

「つくねさん酷いケガですう 早くお薬を塗らないと！」

「ゆかりちゃんまで！」

ゆかりはすぐにつくねの元へ駆けつけた。

2人とも何とか間に合ったようだ。

九曜は突然の乱入・そして裏切り行為に心底怒りに震えていた。

そして手に絡まったものを燃やそうとするが……

(・・・何だ？これは 植物のつたか・・・？いや・・・それにし
ては実在感がない・・・炎で燃やせない・・・！ つまりは・・・
なるほどな・・・幻術まやかしの類か！)

そして九曜は更に妖気を解放した。

ヴオオオオオオ！！！！

「笑止ツ・・・こんな子供だましの術で私の動きを封じると
は・・・」

九曜を中心に妖気が吹き荒れる・・・

「う・・・わっ！幻術が・・・」

くるむは必死に抑えようとするが、

妖気のレベルが違う！

幻術が完全に返されてしまった。

「全員まとめて塵にしてくれるわッ！」

そう言い炎を放とうとしたその時、

ゾクッ……

九曜に寒気が走る……

「おいおい何やー ホンマえらいことになっとな……」

入り口から……誰かが入ってきた……

「え！……あ」

「キサマ……」

入ってきたのは。

「『ギン先輩！』『』」

新聞部・現部長 森丘銀影だ。

突然の登場にくるむは驚く……

「どうして……？だつてさっき……」

ギンは来た理由を言わず。

「話しは後や こないなつてもうたらしやあない……とつとと力
タあつけるで」

頭を掻きながら九曜の前にまでくる。

「……く 何なんだ一体……お前らそろいもそろつてこの
私に牙をむきやがつて 私はこの学園の「正義」だぞッ 全員どっ
かおかしいんじゃないかねえのかッ！」

おかしいのはお前だ！つと突つ込みたいが、ギン先輩の方が早かつ
た。

変身を解き駆け出す。

（確かに正気やあらへんかもな……けどオレかて仲間失うのはも
うゴメンや……）

決意は固い！

「……つたく お前らまとめにやららんオレの身にもなれっちゆ
うんや ボケエー！！ 問題ばっか起こしおつて お前らホンマ ア
ホばっかりやー！！」

ドン！！！！

打撃が・・・遅れて九曜の全身を襲った。

「があああああアアアア！！！！」

そして九曜は地面に倒れた。

(速い・・・この男・・・すれ違う一瞬で無数の打撃を・・・
コイツ・・・瞬速の大妖ウエアウルフか・・・！)

石神は驚きながら見る・・・

「正義がなんぼのもんや　ただウチの部員に手エ出した奴ア散らす
！よう覚えときやアホー」

ギンは倒れた九曜を見ると、そう吐き捨てた。

「ギン先輩！！」

くるむとゆかりが歡喜の笑みを浮かべながら近付くと・・・

むにゅ！

ギン先輩が・・・

くるむの胸を鷲づかみ！！！！

「はっは たすけてやったほうびやー やわあ〜」

むにむにむに・・・しっほをふりふりふり 胸をむにむにむに

・
・

くるむはわなわなと震え・・・

ゆかりは顔を赤らめながら・・・

興味津々！！って感じにずーっと見ていた。 笑

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・バチーーーーー！！！！

「ぎゃあー！」

ピンター閃！！

モカは笑っていた。

（・・・・よかったねつくね。みんなつくねの事 人間だって聞い
たはずなのに・・・それでも助けてくれたよ・・・）

つくねもモカと同じように感じていたのか、目に涙を浮かべていた。
みんな・・・つくねの方へ歩み寄る。

「みんなありがとう・・・」

モカがうまくしゃべれないつくねの代わりに・・・

礼を言う。

「わ・・・わたしはつくねの為だもん！」

くるむは恥ずかしそうに言う・・・

「あはは！くるむさんテレてるですー！」

ゆかりも笑う。

「ちょっと！ゆかりちゃん！！」

みんな笑った・・・

「あつ！そうだ・・・カイトは・・・？」

モカは顔を暗めながら言う・・・

つくねもモカの話聞き・・・顔を暗める・・・

「大丈夫！カイトわたし達の為に戦ってくれてるんだ！つくね達を助ける為にね！さあ！今度はわたし達が助けるバンだよ！」

くるむは明るくそう答える・・・

本当は心底心配だった・・・

でも・・・今2人に心配かけるわけには行かないと感じ（主につくね）

そう答えたのだ。

みんなカイトの事は不安だったが・・・

とりあえずつくね達が無事だった事を喜び、カイトのところへ行こう！と言って此処を離れようとしたその時！

コアアアアアアア・・・

「！！！！？ッ」

真っ先に気付いたのはギン先輩だ！

背後から・・・

凄まじいまでの妖気が迸ってきた。

第125話 人間の・・・

月音の味方（後書き）

ありがとうございました!!

第126話 公安幹部の片鱗？（前書き）

よろしくお願いします！！

第126話 公安幹部の片鱗？

後ろから凄まじい妖気の入り・・・九曜だ！

「危な・・・みんな下がれーッ」

全員を九曜から遠ざける。

石神 s i d e

後ろで傍観している石神が笑う・・・

（フフ大したもんだよ・・・新聞部のクズども・・・だが・・・
今回は相手が悪かったようだな・・・）

辺り一体焼きつく程の妖気が支配する・・・

（お前らはよくやった・・・公安のトップ2の一角・・・九曜を本
気にさせるなんて・・・だがここまでのようだ。さあすがにこい

つあお前らには手には負えまい・・・)

「なんとという美しい姿・・・これが九曜の「正体」か・・・ふふ・・・芸術アートだねえ　これで見物にまわった甲斐があったよ　それじゃあ新聞部のクズ共・・・この私から全てを奪った罰だ。せいぜい苦しむがいい・・・!」

最後の方は・・・新聞部の敗北を確信し・・・声に出して笑い・・・興奮したように見っていた。

全身から発する熱気・・・そしてこの姿・・・

side out

ゴアアアアアアアアアアアア!

「「「きやあああああああ!」」」

思わず叫ぶ・・・

「よ・・・妖狐！高位の者になると神として祀られることもある日本の大妖怪や・・・！これが九曜の正体かアー！！！」

ギンも叫ぶ・・・

その叫んだ内容を聞いたとたん・・・

皆戦慄した・・・

「焼けつくみたい・・・この場にいるだけで！！こんな奴どうやって倒すのよ！！！」

くるむも叫ぶ・・・

ゆかりは・・・その圧倒的妖気に・・・ただ震えていた。

「ニンゲ・・・ン 青野月音 お前・・・本当に人間なんだろう？この妖だけの学園の存在を知った人間は・・・必ず殺さなくてはならない！それが学園の掟だ！学園の存在を外部に漏らしてしまうかもしれないからなっ！その危険な人間を・・・なぜ妖であるお前たちがかばうのだ新聞部！どこまで私にたてつけば気がすむ・・・」

次の瞬間！

九曜は目を見開いた！！

「お前達全員ッ 学園の正義を司るこの九曜がここで葬ってくれるわア！！！」

雄たけびを上げ！

完全な臨戦態勢に入る・・・

人間・・・！そうだ・・・そのせいで今こんな大変な事になってるんだった・・・ オレが人間だから・・・ 人間なのに妖怪の学園に入ってしまったから・・・そしてそれが公安委員の九曜にバレってしまったから！

つくねは・・・自身のせいだと・・・ 自分を責める・・・

(全部・・・オレのせい・・・ オレのせいでみんなが殺されるかもしれないなんて・・・)

そう・・・自分のせいで友達が殺される・・・

「つくね・・・そんな顔しないで・・・大丈夫だよわたし達が一緒だから それにカイトだって・・・ つくねの為に・・・今戦ってくれてる・・・ そして、きっと来てくれる。」

(モカさん……)

つくねの表情からモカが答えた。

続けて……

「そうよ！つくねはケガしてるんだから……じっとしてて！」カイトとの約束……必ず守って見せるんだから！」

「後で わたしが治療してあげますう！」

くるむとゆかりがつくねの前に立ちはだかる！

(くるむちゃん……ゆかりちゃんまで！)

くるむとゆかりも……つくねの味方だ！

どんな事があっても……

そう例え人間だったとしても！

「んなことよりつくね……」

そこへギン先輩が・・・爆弾発言を！！

「ホンマんとこ自分の正体ってなんや？ ホンマに人間やったりして」

ドキッ！ ギクッ！！！！ ドキンッ！ ドキーン！

・・・・・・みんな面白いように反応する！
苦笑

「あ・・・その 実はオレ・・・」

つくねが・・・告白しようとする・・・

そんなつくねに・・・

石を拾い投げつける。

コンッ！ 「たっ・・・」

「アホ・・・冗談や 言わんでええ この学園じゃ他人に自分の正体明かしたらあかんのや！・・・まあみんなバレバレやけどなー
(笑)」

「ギン先輩」

ギン先輩はつくねのほうを向くと……

「それに お前の正体なんか
らへんわ！」

だーれも知りとーなんかあ

……

みんな……つくねの味方だ。

そしてこの場にまだいないカイトもきつと……

「キサマらア…… その男が人間だと分かっててもあくまでシラ
を切る気だな……？この……救いようの無いクズどもめツ……
・ フンそれにあの男はこの場にはこれんな、既に楓牙に殺られて
いる。奴から連絡もきていた。直ぐに同じところへ送ってやる！」

九曜は妖気を高めていく……

「そんなことウソよ！カイトがあんな奴に負けるわけ無い！！」

「そうですね！ それにカイトさんは絶対約束を破ったりしないで
す！」

「うん！ー！」

「……あいつばかり……くそう……」

九曜の言う事を皆否定。

皆カイトを信じている。

ギン先輩は微妙な発言だったが……苦笑

「ふん……現実を見れないクスどもが……殺す!!」

九曜は4つある尾を合わせた……

ガゴアッ!!

(!!何や……これ…… 奴の尾の先に妖気が集中して……
やばいッ 何か仕掛けてくるッ!!)

ギンが驚愕していたその時!

「朧・火炎車！！！！ 我が力を思い知るがいい！！！」

ゴガアアアアアアアアア！！

1つの炎を中心に3つの炎が回りながら迫る。

（あかんッ！この位置は・・・オレがかわしてもうたら後ろのアホどもが・・・！！）

ドガゴオオオオオオオオオオツ

朧・火炎車が命中した瞬間！燃え上がる！！

第126話 公安幹部の片鱗？（後書き）

ありがとうございました！！

第127話 全開 戦闘形態（前書き）

九曜の最終形態は・・・原作を見ると分かりますが・・・
人型ではありません 笑

尻尾があるし、二足歩行だけどなーんか足がヘンだし 耳はエルフ
みたいだし・・・

詳しくは原作で

カイト君！

間に合えー！！ 苦笑

では！よろしくお願いします！！

第127話 全開 戦闘形態

カイト side

体中が悲鳴を上げながらも・・・

カイトは歯を食いしばり、公安本部へと向かっていた。

『もう少し・・・後もう少し・・・だ。』

苦痛の表情を隠せない・・・

隠そうとしているが・・・

やはり魔法陣下で力の使用しすぎが祟ったのか、

見ているこちらが・・・逆に苦痛に感じるほど・・・だ・・・
常人ならば・・・いや妖怪であつてもそれは明らかだ。

だが・・・それでもカイトが止まる事は無い、

倒れる事は無い。

仲間^{みんな}が・・・危険に晒されているのだ。

自分の大切なものが・・・

その思い一点がカイトの瀕死とも言える体を突き動かしていた。

以前・・・カイトはギン先輩にハッキリと言っている。

『皆に手を出そうとするのなら・・・オレも黙っていません。例
え部長命令でも・・・』・・・と、

今正に手を出されている・・・ オレの大切な友達に・・・

『倒れてられない・・・止まってなんかいられない・・・
でも絶対に必ず皆助ける・・・』
死ん

そう言ったその瞬間！

ドガゴオオオオオオオオオツ！！

凄まじい轟音が聞えてきた。

場所は直ぐ側・・・

それが連想させるのは・・・

皆の・・・

『みんな!!!』

カイトの全身に纏わりつく疲労感・痛み・・・全て吹き飛ばす。

どこに彼にそんな余力があったのか・・・

カイトは、移動スピードを更に上げた!!

公安の本部はもう目と鼻の先だった。

s i d e o u t

新聞部 s i d e

熱気が体中を襲っていたが・・・

モ力達に怪我はなかった。

あれ程の大爆発だったのに……

その真相は直ぐに皆分かった。

爆煙がはれ……視界が戻った時。

見たもの……皆が驚愕……

ギンが………

仲間の前で仁王立ちしていたのだ………

「先輩!!!!」「ギン先輩イイ!!!!」

皆叫ぶ……

誰よりも素早い先輩が……

「ポケ・・・オレのポケエエ・・・」

そう呟きギンは力尽き・・・倒れた。

皆が駆けつける・・・

「な・・・何で 避けないの・・・？誰より素早い先輩がッ・・・
まさか・・・わたし達を庇って・・・」

倒れたギン先輩にみんな動揺する。

そう・・・部長として・・・そして・・・仲間の為に、身を挺して庇ったのだ。

「オ・・・オレのせいだ・・・」

つくねが・・・

「え？」

モ力がつくねの方を見る。

「オレのせいでギン先輩がこんな目にッ……………」

side out

つくねが……………再び自分を責める。

その時！

「フハハハハハッ 何が瞬速の大妖ウエアウルフだッ 所詮私の相
手ではなかったようだな！」

九曜が高らかに……………言った。

皆九曜を睨みつける。

しかし……………ギン先輩が戦闘不能……………

ゆかりは・・・震えている・・・圧倒的な力を目の前に・・・

「さあ・・・次は誰が死にたい？」

九曜が・・・笑いながら言う・・・

戦意喪失・・・とまでは言わないが。

皆・・・震えていた・・・

その圧倒的な妖気に・・・

第127話 全開 戦闘形態（後書き）

ありがとうございました！！

第128話 死ぬのはお前だ・・・ 九曜 vs 怪斗(前書き)

よろしく願いします！

昨日に続いて連続投稿です！

投稿できる時にしとこうかなっと思ひまして・・・

ようやく 決戦です！！

がんばってえー！！！！

では！

第128話 死ぬのはお前だ・・・ 九曜 VS 怪斗

九曜の。

「次に誰が死にたい？」

その言葉に皆が恐怖していた・・・

その時！

トンッ・・・・・・・・

九曜の肩に手を触れたものがいた・・・

「？」

九曜が振り向いた。

『次に死ぬのは・・・お前だア！！！！』

ドガアアアア！！

九曜が振り向いたその瞬間、

隙だらけの眉間に、魔力を込めた拳を叩き込んだ！

「ガハアッ！！」

ベキベキ・・・バキヤアアアン！！

九曜は奥の部屋の扉を突き破り、奥まで吹き飛んでいった。

皆……一瞬何が起こったのか……分からなかった。

『皆……無事……じゃないな。……ギン先輩……』

倒れているギン先輩の方に行き。

『リジエネ・サークル健やかな風の囁き……』

ギン先輩に治癒の精霊術を施す。

すぐに完全に快復などは出来はしないが、応急処置にはなる。

「「「カイト!!」「さん!」

ようやく事態が把握できたようだ。

カイトが来てくれた……

「よかった……無事だったんだ……よかったよお!!……!」

くるむが泣きつく。

「ほんとですう……あの時……わたし達……おいていっち
ゃって……うっ……うっ……」

くるむに続き……ゆかりも泣き抱きついてきた。

「カイト……ほらやっぱり来てくれた！来てくれたよつくね……
……！」

モカも涙を浮べてた。つくねを支えていた為、

他の2人のように飛びついてきたりはしなかったが……

つくねがいなかったら……飛びついてきそうだな 苦笑

（カイト……）

つくねも目に涙を溜め……

それは一筋の雫となり……

流れ落ちた。

『こつちのセリフだ。無事でよかった皆……つくねも……良かった。』

カイトもつつすらと涙を浮かべていた……

だが……安心して入られない。

まだ、終わってないのだ。

『このまま……再開を喜び合っている場合じゃない……皆はここを離れてくれ。アイツが戻ってくる。』

そう言い九曜を吹き飛ばした方を見る。

確かに……そちらから……妖気圧力が……徐々に……確実に強くなっている。

「ダメ!!又……1人になんて!それに……カイト凄いケガじゃない!!」

くるむは拒否する。

他の皆も……同様のようだった……

カイトは……それでも……

『いいから!!--早くこの場から離れる!!--』

声を荒げる。

それはもはや怒鳴り声だった。

「「「!!--!!--!!--」」」

皆・・・突然のカイトの形相に驚いていた・・・

『悪い・・・興奮した。頼む・・・!少なくともギン先輩を早く病院へ連れて行ってくれ!つくねも・・・だ。』

カイトの表情は硬くなる・・・

『言い方を変えよう・・・つくねを・・・守ってくれ。』

カイトは言い方を変えた。

『今のつくねじゃ直ぐには快復しない。つくねを守って・・・そしてモ力を覚醒させてくれ。こんなとこにいちゃそんなの絶対無理だろ？ 気も休まらないってもんだ。』

カイトは苦笑した。

しかし表情は硬いままだ。

「でも・・・」

モカもやはり賛同できないみたいだ・・・

カイトの状態が悪いのは見て明らかだ。

医者じゃなくたって分かる。

もはや ドクターストップの領域であろう。

『この怪我はオレの固有のものだ、どうって事無いさ。だから頼む』

カイトはそう言っていたが・・・

皆安心できない・・・

特にくるむ達はこのままだと二度目の逃げ出しだ・・・

今度は・・・カイトが殺されるかもしれない・・・

その言葉だけが皆の頭の中を過ぎて行った・・・

その時！

「よくも・・・やってくれたな・・・この私に!!」

激しい炎と共に・・・九曜が姿を現した。

『ち・・・』

復活が早い・・・

隙だらけの眉間に叩き込んだ魔力強化の打撃なのだが・・・

自分が思ったよりも遥かにパワーダウンしているようだ。

「やはり・・・キサマか・・・楓牙はどうしたのだ・・・？」

睨みながら聞く……

『奴なら……今頃校庭で昼寝してるだろ。気持ちよさそうにな。
妖ひととお通りの悪いところだ……寝るのには最適だ。誰にもジャマさ
れんだろう。』

そう言うとカイトは九曜に指をさす。

『後はお前だけだ……この狐野郎が……』

ピクッ!!

九曜はカイトの言い方『狐野郎』に頭にきたのか青筋を立てていた。

「おのれ……キサマ！我が炎で骨の髄まで焼き尽くしてくれ
わ!!」

九曜は手に炎を集中させる……

その一瞬の間に！

カイトは再び間合いを詰めた。

『どいつもこいつも、おしゃべりがすぎる。お前ら公安の連中はよお！！まあ今回はオレもしゃべってたがなあ！！』

「ちい！！」

九曜は避けようとするが。

ドン！！！！

カイトの蹴りが炸裂。

「ぐう！！」

避けられないと思った九曜は防御の姿勢をとった。

『仲間達を傷つけてくれた礼だ！たっぷり返させてもらおう！！』

そう言つと・・・

拳と蹴りを多用した止む事の無い連撃！

九曜の腹部に凍てつく冷気の掌底破をぶち当てる・・・

ドガアアアア！

九曜は再び吹き飛んだ！

「さすが！カイトお！！」

くるむが歓声を上げる・・・

しかし・・・その次の瞬間とんでもない物を見た。

ドスンッ・・・

カイトの肩に炎の槍が突き刺さっていたのだ。

『が………は……あっ!!』

その槍は瞬く間にカイトを炎で包む……

そして カイトが吹き飛ばした方を見ると。

「くくく……威勢がよかった割には大した事無いな……まっ
たく効かんぞ……？ 本当にキサマ楓牙を倒せたと言っのか？……
・だとしたら相当腕が落ちたんだな アイツは……」

九曜が笑いながら カイトを見ていた。

「カイト!!」「さん!!」

皆が悲鳴に似た叫び声を上げる……

そしてカイトの方へ駆け出した!

すると・・・

炎の中から手が出てきた！

『くるなあ！大丈夫・・・だ！ 早く行け・・・』

膝をつき・・・肩を抑えながらも九曜の炎を払いのけ、カイトは九曜の方を見据えている。

(くそ・・・ こんなにオレは消耗しているのか・・・？ このま
まじゃ・・・ くそ！こんなもんじゃないだろッ・・・ オレは
・・・)

カイトは消耗しきった自分自身に怒りさえ覚えた・・・

このままじゃ・・・ また・・・

「ほう・・・驚いた。この私の炎を・・・ 攻撃は大した事は無かったがそのキサマの防御の力だけは評価するに値するな。だが・・・この私を侮辱した事は断じて許してはおけんな・・・」

先ほどと違い……

完全に余裕の笑みを持っている……

九曜は楓牙を退けたカイトをかなり警戒していた。

だが……カイトの攻撃を数発受け、その警戒は杞憂と判断したのだ。

確かにそこそこの力はある、が完全な戦闘形態と化した今の九曜には大したダメージにはなっていない。

九曜は今度は両の手に炎を集中！

そして徐々に開いていく……

「我が炎で断罪してくれるわア！……死ね。

臃・紅蓮劍ぐれんけん！」

両の手を開ききつた途端！

巨大な炎の剣が現れ……

一閃のもとに断罪した。

ズガアアアアアアツ！！！！！！

カイトがいた所を炎の斬撃により、
跡形もなく破壊した・・・

第128話 死ぬのはお前だ・・・ 九曜 VS 怪斗（後書き）

・・・
九曜つええ・・・

原作じゃ・・・あっさりだったような・・・
っと詳しくは原作参照してくださいね

カイト君！負けるなー！！

ありがとうございました！！

第129話 人柱・・・（前書き）

よろしくお願いします!!

何か・・・戦いの雲行きが怪しくなっています・・・

カイト・・・

がんばれー！ 苦笑

第129話 人柱・・・

石神 side

影でじっと見ていた石神は再び笑う

(フフ・・・ やはりこの学園は・・・おもしろいね・・・ これほどの化け物・・・強者がごろついているんだから・・・)

跡形も無くなったカイトがいた場所を見て更に不気味に笑う・・・

(カイト君の登場には少々驚いたが、あの九曜相手じゃもはや意味は無かったってことだ。 くくく・・・精々絶望の中・・・死んで行くがいいさ・・・新聞部!)

side out

「そ．．．そんな．．．」

つくねは．．．

膝を落とし信じられないような目で見ていた．．．．．

「カ．．．イト．．．．？」

モカも同様に．．．そしてくるむもゆかりも．．．．

「くくくく．．．」仲間「とは素晴らしいなあ 助けに来てくれて本当によかったろ？ 新聞部諸君。」

パキツパキツ．．．

指を鳴らしながらつくね達のほうを見る。

カイトが．．．やられた．．．．

皆がそう思った。

その時．．．

『なんつう．．．顔してんだよ．．． 皆．．． 誰が．．．やら

れた・・・つて・・・?』

カイトが・・・九曜の後ろ側に立っていた。

「」「」「!!!!」「」「」

皆驚き「石神を含む」と喜びが混ざったような顔をし、喜んだが・

カイトの状態は満身創痍なのは明らかだ・・・

それは九曜も気付いている。

「ふん・・・死にぞこ無いが・・・」

そう言い再びフラフラのカイトに止めと言わんばかりに攻撃をしよ
うとしたその時。

「ま・・・まってーッ!! オレ達の負けですッ! 謝りますか
らッ!! 正式に罰をうけますから!!!!」

つくねが、もう見ていられなくなり叫んだ。

『ば．．．ばか．．．野朗．．．つくね．．．何を!』

止めようとするがつくねは止まらなかった。

「だから．．．もう許してください．．．どうか．．．皆だけでも．．．見逃してください．．．!友達なんです 妖でも人間でも．．．皆大切な．．．仲間なんです だから．．．どうか．．．皆を助けてくれるのなら．．．オレは．．．」

つくねが跪き懇願をした．．．

他の部員はつくねに続くようにつくねの前に立ち

「ダメ．．．つくねを．．．やるんだったら私を!」

「ダ．．．ダメ．．．です．．．わた．．．しの初めてのお友達なんです．．．! お．．．お願いします．．．」

「ツツ! そう．．．よ! 大切な友達なの!お願い．．． お願いします!」

くるむ・・・ゆかり・・・そして モカも、皆同じ事を言い前に立つ・・・

それを九曜は黙って聞いていた。

そして 九曜の表情から笑みが消えていた・・・

「・・・フフ人間の癖に見上げた奴だ。それに他の連中も私のこの圧倒的な力を前にまだこんなにも勇気があるとはな・・・ 貴様らの勇気に私も少し心を打たれたぞ・・・ いいだろう・・・ お前たちの勇気に免じ 今回は助けてやってもいい・・・」

九曜の予想外の言葉に皆驚いていた。

特につくねは・・・

だが・・・

1人だけ九曜を信じていない者がいた。

それは カイトだ。

力を振り絞り・・・つくね達の前へと行く。

『てめ・・・えがそんなタマじゃねえ事くらい・・・分かってんだ・・・猿芝居は・・・やめろ！いや・・・狐』芝居か・・・？この三流役者が・・・』

つくねたちを庇う様にして前に立つ！

「カイト！ダメだ！！」

つくねがカイトに叫ぶ！！

九曜の情けを信じて・・・

しかし・・・

それは無情にも打ち碎かれる・・・

ドゴオオオオオ！

「……おいおいおい……面白くないな お前が真つ先に炭になってどうする……」

九曜の攻撃を……受けたのは……

カイトを庇ったのは……

そう……人間であるつくねだった……

第129話 人柱・・・（後書き）

原作でのつくねがモカを庇う勇氣はすげー！って思っちゃいました
炎の固まりに・・・つつこんでいくなんて・・・
出来ませんよね？ 苦笑

彼は今回も庇って飛び込んでしまいました。

・・・どうなってしまうのでしょうか・・・

では次話にて！！

ありがとうございました！！

第130話 深層意識の・・・闇（前書き）

よろしく願います！

大変な所を見てしまったカイト君・・・

さて・・・彼はどうなってしまふのか・・・

駄文ですが暖かい目をお願いします

カイト君の女の口に手を上げれないってお話の訳も含まれてます。
では！

第130話 深層意識の・・・闇

????カイト side

【パキッ!!!】

なんだよ・・・・・・・・なんなんだよ・・・・・・・・コレ・・・・・・・・

カイトはその瞬間・・・・・・・・

世界が壊れていくような感覚に陥っていた・・・

時間はまるで止まっているようだ・・・

そして・・・

深い深い闇へと落ちていく感覚に襲われる。

もう何も見えないし聞えない・・・

底の無い闇に落ちて・・・落ちて・・・

そこで見たものは・・・

それは・・・半壊した城の映像・・・

声が聞えてきた・・・

《アカーシャ！！ 来るな！ 行けッ！》

???

だれだ・・・ この男は・・・ それになんだこの化け物・・・

どこかで・・・見たことが・・・ある？

《さようなら・・・ モカ・・・そしてジャック・・・ 負けな
いで・・・2人とも・・・ 私は愛していたわ・・・ モカもジャ
ックも・・・ それにジャック・・・ もうちょっと早くに・・・
貴方に会っていれば・・・きつと・・・貴方に・・・》

そう言つと・・・ ゆっくり・・・ その女性は化け物に取り込まれ、
最後には食われてしまった。

男性ジャックの方は・・・

・ その女性モカ？が言う時にはもう既に化け物に喰われてしまっていた・

ジャック・・・？ 誰だ・・・？それ・・・

それに・・・これは・・・？？？モカ・・・か？・・・モカ・・・
2人いる・・・？小さい裏モカと・・・大きい表のモカ・・・？

い・・・や・・・ ニテルガ・・・ ナニカガ チガウ・・・

ダレ・・・？

ナンナンドコレハ・・・？

シラナイ・・・セカイ・・・？パラレル平行・・・ワールド世界ツテヤツカナ・・・

?

アア・・・マタシカイガ・・・クラク・・・ナル・・・イ
シキガ・・・

再び・・・

暗い暗い闇の中へ落ちていく・・・

そして・・・

そこで目にしたものは・・・

背後には美しい夕焼け・・・

それをバツクに腕を組んで歩いている2人組がいた・・・

「いい！陽ー！！ 女に手を出す男なんてサイテーなんだからね！
！ 正当防衛もみとめませんー！！いい！！！」

「おいおい・・・そりゃ横暴じゃね？」

「ダメなの！ぜっーたい！ 私と約束して！！ね！！！！！」

男の方は苦笑して・・・

女の方は更にヒートアップしていた。

2人の・・・ 男女の風景・・・

コレハ・・・

これは・・・しってる・・・だが・・・

思い出したクナイ・・・・・・・・

ヤメテクレ！

意思とは裏腹に・・・

その映像は続いていく。

「はぁ・・・分かったよ。約束する！ てゆうか、お前・・・
昨日のニューズ絶対見ただろ？ それで感情的になってんじゃない
か？」

つつこむ男・・・とてもいい笑顔。

「う・・・そーなんだけどさ！絶対に許せないじゃない！あんな
のさー！」

凶星だつたみたいだ・・・

「あははは・・・まあお前らしいわ・・・しゃーない！約束だ。
絶対そんなことはしないよ。お前に言われなくてもな。オレはそ
んなことしないぞ。」

顔を赤らめながら俯く女・・・ 2人は恋人だろうか・・・

仲良く・・・ 腕を組みながら帰っていく・・・

すると・・・まるでノイズが走ったような風景になったと思えば・・・
・場面が変わった・・・

病院のベッドのようだ・・・

「おい・・・おい！！ た・・・たのむ・・・ オレを・・・おい
ていくな・・・」

男は・・・涙を流している・・・

その後ろには・・・家族だろうか・・・

立ち尽くし・・・涙を流している・・・

ヤメて・・・

「・・・ははっ ゴメン・・・ね？ 陽一・・・ずっと・・・」
緒だって・・・言ったのに・・・

女は優しく微笑む・・・ 痛々しい姿だ・・・ 恐らくは交通事故・・・

ヤメテクレ・・・！！

「ゆき・・・な・・・」

手を強く強くにぎる・・・

「わら・・・ってよー 陽一・・・ そ・・・だ、もう・・・

【バキツ・・・】

マタ・・・ オレハ・・・

オレハ ナニモマモレナイノカ・・・？

オレハ・・・

「何か異常な・・・ 気配を感じたから、また来て見れば・・・
これが・・・ 私にも読めなかった君の心の奥の更に奥・・・ 深
層域の闇なんだ・・・ 君の自己犠牲精神は・・・ ここから・・・
来ていたのか・・・ 私・・・ なんてコを・・・ 誤って死なせ
ちゃったんだろう・・・？」

誰かが呟く・・・

ダレ・・・？

「謝ったって許しちゃくれない・・・ よね・・・ 貴方はそんなのいらん！ って言いそうだけど・・・ 私が今の貴方にしてあげられる事・・・ うん。 貴方に力を少しだけ返す。 この「世界」での大切な人たちを守るように・・・ 何より・・・ この世界で私が出来る事はそれしか出来ないし・・・」

ダレナンド・・・？

「君から奪った「力」の一部を・・・ もう一度だけ君に渡すよ・・・ でも・・・ 「力」に飲み込まれないでね・・・ 以前とは状況が違いすぎるし 何より 少しとはいえ・・・ 貴方の前の力は・・・ それほどまでに強力で強大だったんだから・・・ 下手をしたら世界を壊してしまう程に・・・ そんな力に飲み込まれたら・・・ 君に・・・ 御剣怪斗に・・・ 戻れなくなるよ・・・ 心を強く持って・・・」

声が聞えるが・・・

ウウウウウ・・・ ダレナンド！！！！

「でも・・・今の彼には酷な話しよ・・・ね。　トラウマの深部に
まで触れちゃったから・・・　でも何でだろう？今の君の仲間なら
きつと・・・君を助けてくれる・・・そんな気がする。　少な
くとも今の状況よりは・・・悪くはならない・・・　気をつけて・・・
」

この声の主の不安は当たる。

【ピキッツ　バキツ・・・　バリイン！】

何かが・・・音をたてて・・・壊れていく・・・

彼に力を・・・宿し　そして・・・彼が壊れていく・・・

しかし、力に飲み込まれたわけじゃないだろう・・・

唯・・・彼の心が限界だったみたいだ・・・

最終的に声の主の不安通り・・・

その時、

カイトは・・・

現実に・・・戻った時には御剣怪斗じゃなくなってしまっていた。

s i d e
o u t

第130話 深層意識の・・・闇（後書き）

ありがとうございました！

なーんか無茶なお話になったような気がします・・・ 苦笑

力・・・全部は返してくれないんですね 笑

さて・・・

次話は戦いのシーンに戻ります！

ありがとうございました！

第131話 無言・・・そして迫る極大焔（前書き）

よろしくお願いします!!

さあて・・・どうなるんだろう・・・？苦笑

ガンバッター!!

では！

駄文よろしくです！

ドゴオオオオ!!!!!!!!!!

「モ・・・モカっ・・・モカああ！ どうなっちゃったの？ つくねは!!!!!!!!!! カイトは!!!!!!!!!!」

くるむも現実を受け入れられず・・・叫ぶ。

石神 side

石神は頭を抑えながら・・・

モ力を見ていた。

(赤い瞳・・・凶々しい妖気・・・この美しい私に深い傷をつけた女・・・吸血鬼・・・力の大妖 バンパイア)

石神の額から血がドロツつと流れてくる・・・

まるであの時のように・・・

(口ザリオを外すと覚醒するモカの本性……)

石神はその血を舐めとる……

モカを睨みつけながら……

side out

「モカあああ!!つくね!!息してない!! ああ!つかイトおお
お!!どうしちゃったの!!!!!!」

くるむも半狂乱になったかのように叫んだ。

モカは抱きかかえたつくねを……見る……

傷は……全身を満遍なく焼き尽くしている……

明らかに人間であるつくねにとっては確実に致命傷…… もはや
手遅れのレベルだ。

治す方法はある……が……

そう 簡単にはいかなかった。

「つぎは……キサマか…… 赤夜萌香……なるほど バンパ
イア…… 「ノスフェラトゥ不死者」と呼ばれている「力」では並ぶ者はいない
大妖怪か…… だが私にかかれればカス同然! さあ!!死ねえ!
! その男と一緒!!」

カイトとモカを同時に狙うかのように・・・九曜はすぐさま炎を放ったのだ・・・

「ちい!!」

バツ!!

なんとかモカは九曜の攻撃を回避。

カイトとつくね・・・両方を助ける事は出来た・・・

だが・・・つくねを助ける隙が無い・・・

このままでは本当につくねの命が・・・

その時!!

ヴオオオオオオオオオン!!!!!!

カイトの周辺の空間が妖しく光る・・・

そして・・・

全く動いてなく・・・まるで死んでいたかのような・・・カイトが・・・再び動き出した。

「!!!カイト!!!良かった・・・無事だったか!!!これで・・・つくねを助けられる!」

モカがそう言つと、

ガブツ・・・

モカがつくねの首筋に噛み付いた！

丁度血を吸うかの様に・・・

それを見たくるむは驚いた！

「モカああ！！？ 何でこんな時まで！！つくねの血を吸ったりしたらますます助からなくなっちゃうよオオ！！」

くるむが叫ぶが・・・

構わずモカはつくねに噛み突き放さない。

暫くして・・・モカはつくねから離れた。

そしてモカは膝をつきながら・・・

「くるむッ つくねを頼む・・・」

くるむにつくねを託した。

「心配するな・・・血を吸ったのではない。バンパイア私の血をつくねに注ぎ込んだんだ。助ける為にな。」

！！！！

くるむが驚く。

ゆかりはモカが言ったことを直ぐに理解した。

妖の・・・

それも不死の異名をとるバンパイアの血ならつくねを助けられるかもしれないと・・・

くるむは喜びをあらわにするが・・・

「残念だが・・・問題が何点がある。そして助かる確率は低い・・・
そして 助かったとしても・・・ 妖の血を混入したつくねの体に何が起るかわからない。・・・だが 今はこの方法のほか無い・・・
カイトの所へ行ってくる。つくねをまかせたぞ・・・」

そついいモカがカイトに近付く・・・

が・・・

カイトは何も反応しない・・・

唯・・・九曜の方へ歩き出す・・・

非常に緩やかな移動速度で・・・

「くくく・・・ 死にぞこないがなんだ？ キサマ・・・ ショック死でもしたのかと思っていたのだが？ 変な奴だな・・・ まあ、もう良いさ。余興は終わりだ！ 貴様らもろとも跡形もなく消してやる・・・ この私最大最強の浄化の炎でな！！」

そう言うと九曜は自信を中心とし、半径5mほどの炎の円サークルを出現させた・・・

「！！！！ ツ！！（あれはマズイ！！）」

裏モ力でさえかなり警戒するほどの威力を秘めているほどの炎。

「カイト！！！！ 下がれ今のお前じゃそれは！！」

モ力が叫ぶ。

だが・・・カイトは聞く耳を持っていない。

いや・・・聞えていない・・・のか？

唯無表情なまま・・・

九曜に近付いていつていた。

「カイト！！ダメえええ！！」

「カイトさー！ーん！ー！ー！もどつてえー！」

つくねを抱えたままくるむは叫ぶ・・・

ゆかりも涙を流しながら叫ぶ・・・

が・・・やはりカイトは答えないし反応しない・・・

唯・・・九曜に向かって歩いていくだけだ。

炎の円はサークルやがて九曜の下へ小さくなり・・・集まり九曜の手に集う。

それは球状の・・・

その炎は触れるまでも無く・・・

唯近付いただけで周囲を焼き尽くしていく・・・

そしてゆっくりとカイトの元へ近付いていった・・・

「カイトオ!!!」「さん!!!」

皆手で顔を覆いながら・・・

必死に叫んだ。

第131話 無言・・・そして迫る極大焔（後書き）

ありがとうございます！！

ええっと・・・九曜くんの技は・・・オンピースの〇ース君の技を
思い浮かべて書きました 苦笑

時話あたりで・・・

どうなるんだろう・・・?? 笑

改めて読んでいただき、ありがとうございます！

第132話 大地に降り注ぐ破滅の力（前書き）

よろしく願いします!!

仕事リアルの方が・・・ヤバス・・・

大変になってきました・・・

ひよっとしたら、更新が前触れも無く遅れるかもです・・・

いやいや！ガンバリマス！

遅れたら・・・ごめんなさい・・・

では！駄文ですがどうぞ！

九曜は……

当然驚く……

自身の最強奥義といってもいい技を……

いとも簡単に……

「そんな……!! ばかなあああ!!!!!!」

ズガアアアアアアアアアアア!!!!

驚きながらも必死で跳ね返ってきた自分自身の技を抑える!

いくら自分自身の最強の奥義であっても自分の技で死ぬような事は無い!

が…… 九曜の精神的なダメージは計り知れなかった。

「ぐべぐべぐべ!!!!!! さま……私の炎を…… っ

たい・・・ さつきまでとは・・・別人だ・・・！ なんなのだ
！！！！」

そう叫びながら改めてカイトを見る

すると・・・

九曜はカイトの変化に・・・気付いた・・・

モカもだ・・・

「これは・・・カイトの髪の色・・・いつもの黒い・・・髪じ
やない・・・」

これは・・・

赤みが掛かった茶髪？？

明るい・・・鮮やかな・・・

『Crystalize . . . the origin . . .
power . . .』
《結晶せし根源たる力よ・・・》

カイトが初めて・・・声を出す・・・

『Gather to self.』

《我が前に集え》

いつもと違う・・・

いつもの彼の詠唱じゃない。

英語で詠唱を行っている。

『And...it can pour into the earth...』

《大地に降り注ぐは・・・》

そして・・・仕草の全てがいつもと・・・違う。

『Power of "beginning". Ultimate destruction which understand
s all...』

《始まりにして究極の破滅の力・・・》

一言一言発するたびに・・・異常な妖気が周囲にあふれかえってい

だした！

『・・・・・・・・死ね。』

カイトは・・・・まるで生気の無い目で・・・・九曜を睨みつける。

そのカイトの仕草全てに九曜は戦慄した・・・・

そして彼の頭に思い浮かんだのはたった1つの文字・・・・

？死？

これが・・・・・・・・死への恐怖・・・・・・・・？

「この・・・・私が・・・・恐怖を・・・・？ 死を・・・・？ バカなッ
！！あ・・・・ありえないッ！ この・・・・私が・・・・・・・・ッ！！」

九曜は動こうとするが・・・・

まるで地面に縫い付けられたように足が動かない。

足だけではない。

体が動かない……

まるで金縛りに合ったかのように……

体は全く動かせないのだが…… 意思とは関係なく。

唯…… 体が震えているだけだった。

赤みがかかった茶髪を靡かせながら……

カイトは赤い瞳をゆっくりと開く……

そして……

『 Mince the time of beginning..

? METEORITE STRIKE!?'

《始まりの時を刻め…… メテオ・ストライク 惑星直撃》

カイトがそう呟いた瞬間！

着弾した途端。

本部は大爆発により・・・一瞬のうちに瓦礫の山となった。

衝撃は上方に向かって爆散していき 空の彼方へと消えていく・・・

破壊力を・・・全て一点に凝縮し・・・まるで本部のみを標的にしたかのような一撃だった。

あれ程の隕石？が衝突したというのに・・・

学園には何も影響していない。

本部に近づく一般人は殆どいない為か、

騒ぎにすらなっていないかった。

もしかしたら・・・大地が揺れているように感じは公安本部のみだったのかもしれない・・・

それに、元々公安本部へ近づく者など委員以外にはいない事も幸いしただろう。

そう、公安本部だけが・・・

コナゴナに破壊されていた。

一見ただけでも想像がつく・・・

この公安本部なかで生きていられるかどうかなんて・・・

「カ・・・カイト・・・？」

皆・・・啞然としていた・・・

特にくるむ達はつくねの方に集中していたため・・・

何が起きたのか理解不能だったようだ。

唯・・・そこにあつた建物が・・・見るも無残な形へと変貌して
いる・・・

ぺたん・・・と膝をつき 泣いていた。

「そん・・・な・・・カ・・・カイト・・・が・・・」

認めたくない気持ちでいっぱいであったが・・・

あの大爆発を目の当たりにした以上は・・・

「うっ・・・うっ・・・」

ゆかりも・・・涙を流していた。

カイトが・・・彼が来てくれないければ・・・自分たちが死んで
いただろう・・・

もしかすれば・・・楓牙の一件もある・・・

公安本部こへいにすら・・・来ていなかったかもしれない・・・

皆が絶望に彩られていた中、

モ力は信じていなかった・・・

「・・・・・・・・あいつが・・・そう簡単にくたばるものか!」

モ力がそう叫び!

瓦礫と化した本部へ行こうとした時。

ガラ・・・・・・・・

突然瓦礫の中央付近が崩れ始めた。

第132話 大地に降り注ぐ破滅の力（後書き）

ありがとうございました！

久しぶりに英語の詠唱ですね・・・

やっぱり考えててちよつと恥ずかしい・・・ 苦笑

女神さんが返した力って・・・

これ見たいですね・・・ 根源の力？ 元素？ まあ・・・以前の

ヤツに比べたら格段に威力は落ちると思います・・・ 多分

つつこみどころ満載ですが・・・

軽くスルーしてください！ 苦笑

誤字等あれば指摘してくれたら嬉しいです！！

第133話 絶望の先に見えたもの(前書き)

よろしくお願いします!!

これで・・・ストックしてたのが切れてしまいました・・・

マタチヨコチヨコ書いて更新していきます〜

はあ・・・仕事やだなあ・・・(愚痴)

では!!よろしくです!!

第133話 絶望の先に見えたもの

中央付近の瓦礫が崩れ始める。

「「「!!!!!!」」」

皆が驚き、動いた場所に注目する・・・

ガラガラガラ・・・

瓦礫から出てきたのは・・・

「「カイト!!」」

くるむとゆかりは歓喜の声を上げる。そして涙を拭きながらカイトの方へと行こうとしていた。

「!!!!!!まで! くるむ ゆかり!」

モカが止めた。

「様子が……」

カイトの様子がおかしい……

何やら……足元を凝視し…… 瓦礫の中へ手を突っ込んでいた。

そして、引っ張り上げるように瓦礫から出したのは。

「ガ……カ……フ……ツ……」

「く…… 九曜!!?」

ボロボロになった九曜を引っ張り上げたのだ。

「「「「!!!!?」」」」

皆…… 驚いていた。

ボロボロになった九曜のことだけじゃない……

明らかに……

いつもと違うカイトにも……だ。

『まだ……息はある……な……』

小さな声で……それでいて殺気が込められている声で……

呟いた。

「カイ……ト？」

くるむは信じられなかった……

いつも……やさしい……あのカイトが……あんな目をするなんて……

「え……えっ……!!」

ゆかりも震えていた……

あんなの……カイトさんじゃ……

『トドメを……サしてやるよ……』

そう言うと カイトは手に光を集中させた。

「よせッ！…カイトおおお！…！」

モカはもう見ていられなくなり…呼び声同時に駆け出した！

ガシイ！…！！

拳で九曜を貫こうとしたその時モカが間一髪拳を受け止める事に成功した。

「ぐぐぐぐう！…！」

受け止めるのに見事成功したモカだが…

（な……なんて……力だ…… 本当に カイトなの……か？）

モカは今もてる全ての力を集中し受け止めていたのだが…

徐々に押される…

『ど……ドケ……！……キサマ……！』

カイトは……モカのことから分からないのか？

モカを見る目も九曜を見るその目と同じだ……

「カイト……！ 目を……目を覚ませ……！」

押し返そうとするが……

力が……でない！

(つくねに…… 血を与えすぎたか…… くそっ……！)

『コイツハ…… オレノ タイセツナモノヲ…… ウバツタン
ダ…… オレノ…… タイセツナ……』

カイトの目から涙があふれる……

完全に自我を失っていたが行動理念は変わっていない……

変わったのは……そう目だ……

狂気が宿った……

深い悲しみの目だ。

その悲鳴のような声に比例して・・・

カイトの拳に入る力は増してくる。

「ぐううう・・・ お・・・おちつけえ！！ カイトおお！」

必死に抑えるモカ・・・

だが・・・

（くそっ・・・！！）

力負けしていく・・・

そしてモカもろとも九曜を貫こうとしたその時。

「ダメエエエエ！！」

叫び声が聞えてきた。

「カイトさん！しっかりするですうううう！！！！！！！！！！」

くるむと・・・ゆかりだ・・・

彼女達もモカ同様。

今のカイトを見ていられなくなり、

震える体を抑え飛び出してきたのだ。

「しつかりしてえええ!!! こんなの・・・こんなの!わたしの好きなカイトじゃない!!! お願い!戻ってきて!!!」

くるむは泣きながら・・・カイトの体を抑える。

『ぐ・・・ガ・・・』

僅かだが・・・

カイトの力が弱まった・・・

「だめですう!カイトさん!いつものカイトさんならあ!こんな事絶対しないです!!戻ってきてください!!!」

ゆかりも・・・カイトにしがみ付く。

『グ・・・グ・・・ モウ オソインダ・・・』

カイトもまた・・・涙を流している・・・

『オレハ・・・ マタ・・・ マモレナカッタ・・・ タイセツナモノを・・・ モ・・・モウ・・・』

そしてカイトは目を瞑る・・・

「!!!カイト! まだだ!!!」

モカが何かに気がついたのか、カイトに大声で叫ぶ、

「お前はまだ失ってなどいない！」

『な・・・ナニ？』

モカが見た視線の先には・・・

ガアオオン！！！！

「つくね！！！！」「さん！！！！」

つくねが立っていた・・・

禍々しい妖気を放ち・・・

瞳が赤く・・・それはまるでバンパイアのようだった・・・

『うグ……ウグアアアア！！』

カイトは……

つくねが助かった事にまだ気付いていないようだ。

唯力任せに、モカたちを振り払おうと暴れている。

「くそっ……こつなつたら一か八か！」

モカはつくねの方を向いた！

「つくね！！来い！！力をかせええ！！」

つくねに向かって叫ぶ！

その声に反応したのか？

つくねは目を鋭くさせ、動き出した！

「くるむ！ゆかり！今だ！カイトから離れるお！！」

モカが言うと同時にくるむとゆかりを突き飛ばす！

「きゃっ！……」「あつう！！」

『グウウウウツ！ガアア！！』

カイトは・・・まだ・・・狂っている・・・

そこへつくねが疾風の如きスピードで・・・

接近し・・・カイトを押し倒した！

ドガアアア！！

『ガあ！！』

つくねが馬乗り状態になり・・・モカがカイトの両手を抑えた。

「よく見る！！カイト！！つくねは無事だ！お前は守れたんだ！！失ってなどいない！」

モカがカイトに顔を近づけながら・・・

叫ぶ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

つくねは・・・妖の血の影響なのか、しゃべる事はせず、ただカイトを見下ろしていた。

喋る事はないが・・・真っ直ぐにカイトを見つめていた。

そう・・・つくねもまたカイトに戻ってこいと言わんばかりに・・・

暫くして・・・

カイトを覆っていた禍々しい狂気に似たオーラが消え失せていった・・・

『う・・・うう・・・　つ・・・　くね・・・？』

そしてカイトの狂気に満ちた瞳が・・・徐々に変わっていく・・・

『つ・・・くね・・・　あ・・・あれ・・・？　それにモカ・・・も？　無事だったのか・・・？』

カイトの髪の色も・・・　赤みが掛かった茶髪から・・・　いつもの黒へ・・・戻っていった。

「ああ！ 皆無事だ！ つくねもこの通りな！！」

モカが再び叫ぶ。

「……そう……か……よ……よか……った……」

カイトは微笑みながら……

そのまま意識を失った。

「カイト！」

「……」

モカは……驚きながらカイトの状態を確かめる……

「カイト！！ モカ！カイトは大丈夫なの！！？」

くるむもカイトの側にまで来た。

ゆかりも同様だ。

「大丈夫……だ……気を失っているだけのようだ……
よ……かつたな……」

モカも安堵の表情を浮かべる。

「……………よ……………かつ……………」

つくねは……………

何かをしゃべろうとしたが……………

最後まで言えず……………

カイト同様気を失った。

「つくね!!」さん!!」

今度はつくねが倒れてしまった為、

くるむとゆかりは 又叫んだ。

「大丈夫だ。 私の妖力が切れたのだろう。 つくねも暫くすれば目が覚める。」

モカがそういうと……………

くるむ2人を抱きしめながら……………

「本当に……………良かった…………… 無事で…………… ほんとによかつ

たよおお!!」

泣いた……

もう二度と…… 離れないと言わんばかりに……

くるむは2人を抱きしめ続けた。

そしてゆかりも……

そんな2人を安堵の表情で暫く眺めていたモ力だったが、

何かを思い出したのか、倒れている九曜のほうを向き。

「どうだ……? 人間ならば助かるはずもない状態なのにつくねは生きている。これでもうこの学園の生徒であることに文句はないだろ?」

動かない九曜にそう言い……

つくねをくるむが、

カイトをモ力が、運ぶ。

「ったく……お前らほんま大したもんやで……」

ギン先輩も気がつき、ゆかりに肩を借りながら・・・瓦礫の山と化した公安本部を後にした。

暫くすると・・・

公安本部から悲鳴が聞える・・・

「うわアアアア！ こっ　これは！！　一体！ほっ　本部がっ・・・
崩壊・・・している！！　誰かッ！来てくれええ！！」
「九曜様が・・・九曜様がああ！！」
「どうやったら・・・こんなになるんだ？　ここが・・・　楓牙様はっ！！」

九曜が倒れている事、そして原型をとどめていない公安本部・・・

無理も無いだろう・・・

そして・・・傍観者に徹していた石神は・・・

公安本部を後にしていく新聞部を見下ろしながら・・・

「御剣・・・怪斗・・・そして　赤夜萌香　フフ・・・今回は負けを認めるよ・・・」

不気味な笑みをうかべ・・・

「またいつか・・・遊んでくれよ？新聞部・・・」

そう言い・・・夜の闇に紛れ姿を消した。

第133話 絶望の先に見えたもの（後書き）

やっと決着がつかしました・・・

何か長かったような気がします・・・ 苦笑

とりあえず 原作で言う前半の山場まででした！駄文付き合ってくれてありがとうございますー！

第134話 私立陽海学園付属病院（前書き）

結構早く投稿で来ちゃいました・・・今回はトラブル無く帰れたからかな？？苦笑

毎日が平穩であって欲しい・・・！

ではでは！よろしく願います！！

第134話 私立陽海学園付属病院

??? side

「ふふ．．．やっぱり．．．大丈夫みたいだったね．．．」

上空で．．．見下ろしているのは女神・シエリアだ。

先ほどのカイトの心に響いてきた声も。

彼女のだった。

「内心ハラハラ半ばオロオロだったけど．．．ほんとに良かったよ．．．私貴方以外とはあまり干渉できないしね．．．第一に見えないし．．．苦笑 あっ そうだ。その根源の力．．．もう他の人にも見られちゃったし、そのままにしておくね。まさか私も貴方をこんなに追い詰める敵がいたなんて思わなかったから．．．」

シエリアは新聞部を見下ろし微笑みながら言う。

「でも．．．貴方はもう1人じゃない．．．大切な仲間がいる。何があっても大丈夫だよ！カイト．．．ジャック．．．いや
陽一君 いろんな名前があるなあ．．．混乱しそうだよ．．．」

記憶は・・・多分もう戻ることが無いだろう・・・

あの潜在意識・・・

いえ 深層意識に触れて・・・ ジャックとしての記憶を一部だけ
ど垣間見たのに記憶が戻ってはいないようだった。

そうシエリアは感じていた。

ここまでカイトとしての人格が完成した今・・・

仮に・・・再びジャックとしての記憶が戻ったとしても・・・

きっとカイトの方の自我の方が強い。

もしかしたら・・・二重人格になっちゃうかも・・・？

「アカーシャさん・・・ もしかしたら、今、アレと一緒に封印さ
れている貴女を助けちゃうかもね彼・・・ ジャックとしてじゃな
くカイトとして・・・ かも知れないけど 貴女にとつたら残念かも
しれないけど。」

シエリアはそう言うと・・・

空高く舞い上がり・・・

姿を消した。

s i d e o u t

つくね s i d e

「九曜!!」

九曜は・・・炎を自在に操りながら・・・

新聞部の皆を攻撃していた。

やっ・・・ やめてくれ九曜ッ！ 皆には手を出さないでくれ
ッ！お願いだから皆にはッ・・・

必死につくねは叫ぶ・・・

すると九曜はこちらを振り向く。

「・・・・・・・・ククク いいだろう ならば」

笑った・・・そして次の瞬間！

「お前から死ぬがいい！！！」

九曜の炎がつくねに襲い掛かる！！！！

「う・・・うわあああああああああああああ！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「うわあああああああああああああ！！！」

思わず布団から飛び起きる・・・

ここは・・・つくねの・・・部屋だった。

とらとらとは・・・

「……あれ？ゆ……夢？」

(「……オレの部屋じゃないか……なんでオレ……」)

つくねが頭を抱え……考え込んでいると……

「つくねっ!!！」

声が……聞えてきた。

「!!！」

振り向いてみると……

「気がついたのね……良かった！」

モカが料理を作ってくれていた。

「モ……モカさん……!!!? (わああ エプロン姿かわいい……
でもなんでオレの部屋に?)」

つくねが驚いていると……

「つくね……よかったー!!！」

鍋を片手につくねにダイビングー!!

あっ 中身が……

「うわぁー！ モカさん！ 鍋！ お鍋がッ！ あっちイイイ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

暫くして・・・モカの料理を堪能しつつ、生きている事を喜んで
いた。

「そういえばさッ・・・オレ昨日の記憶無くって・・・結局どう
やって公安と決着がついたの？」

つくねが悩みながら聞くと・・・

「ええ~~~~ッ 昨日のこと覚えていないの つくねっ！」

モカが驚きながら聞く。

「う・・・うん。 え？モカさん??」

つくねは驚いているモカに驚いていた。

（それなら・・・あの事は言わない方が・・・）

そう・・・つくねを助けるとは言え・・・

彼に妖である自分の血を注ぎ・・・バンパイアか吸血鬼化を促してしまった事だ。

この時モカには真実を話す勇気が無かった・・・

「ううん・・・大丈夫 きっともう何も心配要らないからね！つくね。」

そう言って笑うしか出来なかったのだ・・・

暫くして・・・

モカが電話でカイトに連絡を取った。

そして・・・つくねにカイトのことを告げる。

「！！・・・え カイトが？」

つくねは驚いた・・・

カイトは今病院にいるということだった・・・

「カイトは！！大丈夫なの！？」

つくねは思わずモカに掴みかかる。

「きゃっ！！！」

モカは驚き軽く叫び声をあげた。

「あーご・・・ごめん・・・モカさん・・・」

自分がしていることに気付き、直ぐに謝罪する。

「い・・・いやっ！大丈夫だよ！ そうだよね、驚くよね、そんなこと突然言われたらね・・・ ゴメン！説明なくてっ！！」

モカは苦笑しながら謝罪。

「いつ いやっ！そんな・・・」

つくねも慌てていた。

「カイトは 大丈夫だよ！ 様子を見に皆行ったときも大丈夫そうだったし、『オレじゃなくてつくねの方を見てやってくれ』って。」

「カイト・・・そんな事・・・ モカさん！カイトは何処の病院に??？」

つくねが・・・モカに聞いた。

「えつとね・・・ 私立陽海学園付属病院っていつて学園が運営する病院なんだけど・・・ つくね・・・起きたばかりだし・・・」

モカは安静にした方が良いんじゃないかと促すが・・・

「いや 大丈夫だよ。オレ・・・カイトにお礼を言わないと・・・
もちろんモカさんや他の皆にもだけどね。」

笑いながら言う。

どうやら 行く気満々のようだ。

「そう・・・だね。わたしも行くよ！わたしも心配だしね。」

「ありがとう。モカさん。」

そう言つて2人は病院へと向かつた。

【私立陽海学園付属病院】

ここは病院4Fの405号室。

病室は相部屋で4人まで入れるのだが。

今は貸切状態！

ノビノビ・・・とはできないが、気は使わずにすむ。

『はあ・・・とりあえず体のほうは大丈夫・・・だな、うん。』

2日もあつたら快復するわな。治療の術も使ってるし。』

手を開け閉め・・・体の具合を確認する・・・

『でも・・・頭の方は靄が掛かつたようだ・・・オレ・・・どうなつたんだ・・・？』

九曜がつくねを攻撃した所までは覚えてる・・・

そこから先が・・・急に真つ暗になって・・・思い出せない。

(この感覚・・・ここに来る前にもあった・・・な・・・どづい
うことだろう・・・?)

考え込んでいると・・・

「失礼するよ。」

誰かが入ってきた。

医師の由地 豊先生だ。

『あつ・・・先生どうも。』

軽く挨拶をする。

「ああ、診察の時間だよ。体の方は大丈夫かい？」

『ええ、おかげ様で。体の方は大丈夫です。』

体の方はもう本当に大丈夫だった。

「ふう・・・ここに来た時はかなり衰弱していた上に全身重度の
火傷・・・裂傷・・・いろいろあったと言っのに・・・驚異的
な回復力だよ君は・・・いろんな患者を見てきたけどね。全く驚
きだ。この分じゃ明日にでも退院できる。」

驚異的つと言いながら 半分以上はあきれ気味だったなあ・・・

『ははは・・・先生が優秀で良かったと言う事でどうですかね？』

苦笑しながら言う。

「ははは、どうも。」

先生の方もつられて笑い出した。

「そつだ 頭の鬮が掛かったって言うのは？」

思い出したように先生がカイトに聞く。

『残念ながら・・・そつちはまだ駄目ですね・・・ 思い出せない
みたいです。』

少し表情を落とす。

「やはり、ショックで一種の記憶障害が起きたんだろう。一部分だけのようだからそんなに心配する必要はないさ。唯、脳は本当に・・・強烈なまでの嫌なことがあったら脳自身を守るためにその事を忘れようとするから、思い出せないかもしれないがね。」

・・・なるほど。

聞いた事はあるけど・・・記憶障害・・・

まさか自分に起きるとはね・・・

あれ・・・？初めてじゃないような気がする・・・？

気のせい・・・かな・・・

暫く簡単な触診を受けていると・・・

「「カイト！！」「」・・・」

いきなり叫び声と共に誰かが入ってきた！

まあ・・・大体分かるが・・・

「「」・・・」

『は・・・ははは・・・』

丁度・・・今上半身の服を脱いでいたところだった為

皆顔を赤らめて若干フリーズしていた・・・

まあ・・・オレも恥ずかしかったけどさッ!!

あんな初心しんな反応はんされると苦笑するしかないじゃん・・・

先生は苦笑いして固まった3人を見ていた・・・

んで、中々復活しないので・・・

さっさと着替える事にした。

『ノック・・・あっても良かったと思うよ・・・?』

帰還してない3人に言っても・・・

聞えないかな？

苦笑

第134話 私立陽海学園付属病院（後書き）

ありがとうございました！！

第135話 病室にて・・・お礼と謝罪（前書き）

よろしく願います!..!

第135話 病室にて……お礼と謝罪

暫く……3分くらいかな？して、

とりあえず みんなは戻ってきたな…… 苦笑

「はははは……なにやら賑やかになってきたけど みんな、病院内じゃなるべく静かに頼むよ。それじゃ カイト君。またな。」

『あ！ ありがとうございます。』

そう言つと…… 先生は出て行った。

『いらっしやい…… みんな。つくねも無事で良かったよ……』
つくねの方を向いた。

他の皆には、会っていたけどつくねには会ってなかったからね。

流石に昨日のくるむとゆかりのハグー！攻撃は効いたな・・・
全身痛い状態だったのに容赦ないもんなー

嬉しかったけどな・・・苦笑

「うん。カイト・・・ありがとう・・・それに皆も・・・改めてありがとう。」

つくねはその場にいた　ギン先輩を除く新聞部のメンバーに言った。

「当たり前のこと・・・　ただだよ！わたしもつくねの優しさには助けられていたしさ！」

「そうですね！　わたしもですう！」

「うん！」

3人はそれぞれ・・・　答えた。

『友達だろ？俺たちはさ　友達の為なら大した事無いさ。　それに元々公安むいこうから喧嘩売ってきたんだし、買ったままでだよ。』

軽く物騒な事を言う・・・

若干皆苦笑い・・・

『それに・・・　オレも・・・悪かったな・・・』

今度は何故か、カイトが謝罪する。

カイトの上に飛びついて！

『ぐええ！ いやいやいや！ そう言ってくれるのは嬉しいけど、オレの上ではやめて！！ 流石にきつい！！』

2人はきついな・・・ 仮にも怪我人なのに。

今じゃな。

まあ・・・『重い！！』なんて事は口が裂けてもいえないけどね。

「あははは・・・ わたしも2人と同じ！ わたしとつくねを助けに来てくれたしね・・・ 本当にお礼を言うのはわたしだよ・・・」

「うん カイト。これからもよろしく！」

そう言っつつつくねは手を差し出す。

『ははは・・・ なんか照れるな。こちらこそよろしくな。つくね。』

カイトとつくねは、そしてがっしりと握手を交わした。

「2人とも・・・」

「えへへ〜 ですよ。」

「ぶぶぶっ」

3人とも微笑ましい笑顔で2人を見ていた。

『まあ・・・それは置いといて・・・』

カイトが目を閉じ・・・

そしてくるむ達の方を見た。

『お前らいい加減オレから降りろー！！！！』

カイトの叫びが病院に木霊する・・・

こんなに平和だと思えたのは何か久しぶりだ・・・

とても・・・楽しい時間だった。

病院なのにね

でもこの後・・・

カイト君達は、医師、看護師達にこっぴどく怒られたとさ！

苦笑

『うつむ……酷い目にあつたな……』

頭を掻きながら苦笑する……

「カイトも眠たいでしょう？ そろそろ おいとましましょうか。」

モカがそう言つと……

「えー わたし！ここに泊まってくもん！」

「くるむさんがそう言つんだつたら わたしもですう！」

……

中々帰りそうにないな…… 2名は特に。モカもコリア！つて怒つてるし……

『はぁ……くるむ、ゆかり、明日にはオレは退院するから心配するなつて……それに……部活もまってるからな、今日の所は帰って明日に備えていてくれよ。』

そう言つと……

最初は2人とも渋っていたが……

「」「じゃ……また明日ね！」ですう！」

最後には折れて渋々と病室から出て行った。

『あはは・・・賑やかなのがいなくなったら此処ってこんなに静かだったんだな。』

2人が帰り、予想以上に静まり返った病院に苦笑していた。

「じゃあ！わたし達もそろそろ行きましようか。」

「そうだね。」

つくねとモカもそれぞれ頷きあい、病室を出ようとしていた。

『あつ！ そうだ、2人ともちょっとまってくれないか？』

そこにカイトが呼び止めた。

「「?」?」

2人はカイトのそばまで来て・・・

「どうしたの?」

つと聞いた。

『ああつとな・・・ つくねとモカに頼みがあったな。』

そう言うと再び頭を掻いて苦笑する。

「え？」「何々??」

『裏のモカに助けられたんだろ？公安との件は、だからさ 直接・
・礼を言いたいんだモカにさ。構わないかな？2人とも。』

ちよつと照れくさそうに言う・・・

《・・・!!》

「あれ・・・？ロザリオが・・・？ 気のせいかな？」

「どうしたの？モカさん。」

カイトの話聞いた後、モカがロザリオを見ていた為つくねがどうしたのかと聞いた。

「んーん 何でもないよ！ わたしは良いよ。ロザリオにはお世話かのじょになりっぱなしだし、わたしも直接会ってみただけど・・・そうもいかないからね・・・ カイトわたしの分もお礼を言ってくれるかな？」

モカは笑いながら言う。

『あははは・・・ そんなので良かったらお安い御用だよ。』

「よろしくね じゃあ つくね！よろしく!!」

そう言うとモカはニッコリと微笑んで、つくねに頼みロザリオを外してもらった。

カッ!!

.....

いつもなら禍々しい妖気が出ていたのだが・・・

今回は省略パターンなのか？

割と普通に目覚めていた。

「ちっ・・・私に礼だと？ そんなものどうだって良いのに・・・

」

モカは目覚めると・・・そのまま顔を背けた。

「あははは・・・まーまーモカさん!! カイトもお礼を言いたいって言ってるだけなんだしさ!」

つくねが笑いながらモカの顔を見ると・・・

赤面しているモカの顔をモロに見てしまった・・・

「.....」

「あ”・・・」

つくねは殺気を感じた！

次の瞬間。

モカの軽い蹴りがつくねに炸裂！

バシンッ！

「つぎやあー！」

ドカツ・・・

そのまま・・・つくねは気絶してしまった・・・

第135話 病室にて・・・お礼と謝罪（後書き）

ありがとうございました!!

第136話 病室にて・・・告白(前書き)

よろしくお願いします!!

カイト君の決心ですね

では!駄文ですがどうぞ!!

第136話 病室にて・・・告白

つくねが倒れたあー！ー！！

つて・・・

『おいおい・・・ 病院で怪我人を増やしてどうするんだよ・・・』

カイトは苦笑する。

「ふ・・・ふん！」

モカはまだ何か怒ってるみたいだ・・・

『まあ・・・それはそうと・・・ ありがとうなモカ・・・最後はどうなったのか・・・ よく覚えていないんだ。 でも・・・ お前とつくねが・・・ オレを助けてくれた・・・ そんな感じがする。 一言でも礼が言いたかったんだ。』

カイトは笑いながら言う。

「・・・ かまわないさ。 私はやりたい様にやっただけだ・・・ よ。 それにお前の強さも弱さも見せてもらった事だ。」

『・・・へ？？どういっしょ？？』

・・・？強さと弱さ？

「ふふふ・・・秘密だ。」

モ力は楽しそうに笑っていた。

『・・・まあいつか。オレも楽しそうに笑うモ力を見れたんだ。それでわかんないこともチャラだ。』

「・・・／／／」

モ力は・・・はっとして後ろを向いた。

『ああと・・・さすがにここでは蹴らないでくれよ！ 一応怪我人なんだし・・・』

いつものパターンで蹴られるかもしれないと思ったカイトは、

とりあえず先手を打つ。

「私に怪我人を苛める趣味はない。」

そう言っただけで苦笑していた。

『それは良かった・・・まあいつもがいつもだったしなあ・・・ちよつと警戒してたよ。でもつくねを蹴ったじゃん・・・』

「・・・なんだ？お前も蹴られたかったのか？ならば趣味では

ないが望みならば望みどおりにするのだが？」

モカは不敵に笑う・・・って。

『いやいやいや！誰がそんなこと言ったんだ？望んでない望んでない！』

慌てて否定。

「相変わらず軽口が回る男だな。この私に向かって・・・」

モカは半分呆れていた。

『ははは、お前とはこういう関係もいいと思ってな、ずっと表モカの裏だったんだからさ。モカも女子高生なんだ。素の顔を出した方が可愛いし、何よりリラックスできるんだぞ？』

「！！・・・／／／ や・・・やはり蹴られたいみたいだ・・・キ
サマは・・・」

振りかぶる！！

『ちよい待ち！！ストレス解消はダメ。 さっ 次々！！次はかなり大切な話！ つくねのことだ！』

カイトが話題を聊か強引だが変えた。

「むう・・・ つくねがどうかしたのか？」

渋々攻撃態勢を解除！

危ないな・・・

とりあえず　一呼吸おいて・・・本題に入った。

『オレの記憶が飛ぶ前に・・・　確か・・・　アイツ九曜の炎を受けたよな・・・』

カイトの表情が険しくなる。

「！！　ああ。」

モカは隠さずに話す。

『・・・つくねを助けてくれたのはモカだよな？あの状況でつくねを助けられるとしたら・・・君しかない。それに九曜も・・・そこから先が思い出せないんだ。気がついたカタがついていた。』

「そうだ。私の血をつくねに与える事でつくねを蘇生した。成功率が低い方法なのだが・・・　成功してよかったよ。あの時はそれしか方法がなかったものでな。それにつくねに了解を得ることも出来ていないが・・・」

モカがそう伝えた。

『やっぱり、そうか。』

そう言くとカイトはベッドから起き上がった。

「おい！ まだ病み上がりなんだろう？寝ている。」

突然立ち上がるカイトを見て慌てながらモカが言う。

『大丈夫だ・・・モカ・・・』

ギョツ・・・・・・・・

そのままモカに倒れ掛かるように・・・抱きついた。

「なっ！！！！おい／＼／」

モカは驚いて突き放そうとしたが・・・

『オレは・・・大切な者を失うのが極端に怖い・・・んだ・・・
ありがとう・・・モカ。』

カイトが話した・・・

いつもと違う・・・何か弱弱しい感じがする・・・

まあいつもと違うカイトはよく見ているから さほどは驚かないけど・・・

とりあえずモカは大人しくしていた。

顔を一気に赤面させて・・・

『前に・・・言ったよな？オレは女には手を出さない・・・ 出さたくない・・・ そこにも繋がる事だな・・・』

「・・・」

モカはそのままの体勢で聞いていた。

『いつか・・・モカには話そうと思ってた。 あの時から・・・ 昔・・・人間界にいた時の・・・ある人との約束で・・・』

声には・・・悲しみのようなものが含まれていた。

『「女に手を出すなんて最低だ。」「そんなの絶対に許せない。」が口癖だったな・・・ そいつの。』

「・・・ほう・・・」

モカも・・・時折は言葉を出しながら聞く。

『ある時・・・そいつは・・・死んでしまった。自分の分まで・・・ 生きろっていつてな・・・ オレは・・・大切なものを・・・守れ

なかったんだ。情けないよな・・・それからだよ。そのことがトラウマになっちまってさ・・・女に手は出したくない・・・それはそいつとの最後の約束だったんだな・・・引きずってるんだオレは・・・まあ極端な臆病者になったんだな・・・呆れるよな・・・？情けない事だし・・・」

「・・・・・・・・」

『ん・・・？モカ？』

モカはカイトの顔に指を近付け・・・

デコピーン！！

バシィィィ！

『あたっ！！！！！！』

会心の一撃！

力の大妖のデコピンはまさに最強のデコピンだろう！！！！

・・・大袈裟じゃなく・・・

マジで痛そうだった・・・

『痛いよ・・・モカ。』

おでこを擦りながら言う。

「このバカが・・・誰が呆れるものか、それに・・・聞けばそれは自分の分もすっかり生きてくれといったんであるう？ならば今のお前を見たらきつと殴り飛ばすぞ！いつまで引きずってるんだつてな。お前がすっかりと生きなければ うかばれないだろう！それに生きるという事は唯生存するだけじゃないだろう？」

モカが顔を近付けながら言う。

『モカ・・・』

「いつまでも引きずるなどは言わん。それはカイト、お前の優しさからきているものだ。どうでもいい者との口約束とかでは、そこまではならんからな。だが・・・」

モカ少し笑顔を見せながら・・・

「だが、引きずりすぎるなよ・・・？　引きずりすぎて・・・磨り減って、そして大切な方の思い出まで、失ってしまうぞ？酷かもしれないが、思い出を胸に・・・しっかりと生きれば・・・それならばそいつもきつと満足だろう・・・　まあ私の考えに過ぎないが

な。」

そう言ってくれた……

『あ……ははは…… 今日はお前に何度も礼を言わなきゃならないようだ…… ありがとうな…… モカ。』

カイトの目には…… 薄っすらと涙が浮んでいる……

「ふん……」

モカは顔をプイツと背けた。

「ところで…… 確かお前言っていたよな？整理がつけれたら話す。そして 戦いはなまじ合あつと……」

モカは何やら思い出すようにそう言う。

『!!!? ……えつ……えつとお……ソーダツケ?』

冷静に保ちながら？言う……

「言っていたな。覚えていないのか？ そうか、なら詳しくは103話辺りを再度読んでみる。」

モカは変わらず淡々と……

『ちよ……んな身も蓋も無いこと……』

慌ててカイトが言う……

「それに……い……いつまでこの私に抱きついてくれるつもりだ!?!」

『あ”……それは……何かこう……来るものが……』

モカは赤面させながら……

「うるさい!! 身の程を知れ!」

ドガアア!!

『ぎゃあ!』

蹴りが炸裂!

ゼロ距離発射だった為……

もちろん 避けれない……

とりあえず受身は何とか成功したのだが……

『痛い…… ちょっとはて加減してくれよな。』

手足を払いながら出てきた。

「ふん……お前に手加減など必要あるものか。」

モ力は……口ではそういつつも……

楽しそうに笑っていた。

カイトに抱き付かれているのは不快ではないようだ……

だけど……やっぱり恥ずかしかったんだろう。

『それでも手加減は欲しいものだよ？オレは』

カイトもつられて笑う……

「そうだ。後、九曜を倒したのは私でもつくねでもない、お前だぞカイト。」

最後にそう言う。

『え？それはどういうこと？オレが？？』

確か……オレって連戦が祟って……特に天空魔法陣のせいで……
・五体満足に動けなかったし……

あれは、封印だな封印！いざって時のために！命がいくつあっても
足りんわ……

結構ボロボロにされて・・・動けなくなつて・・・

今やったらボロボロにしてやる自信はあるんだけど!!!!

(怒)

ううーん でも あの状態から？

オレが逆転？

できるのかな？？

モカがやったんじゃない・・・？

「混乱していると思うが嘘ではない。」

そうハッキリと言った。

嘘をついているようには見えない。

嘘をつく意味もないし・・・

『ええつと・・・どうやって？』

カイトは混乱しながら聞く。

「そこは秘密だ。貴様の強いところも弱いところもみた私のものだ。そこはな。」

そう言つとつくねの方へと向かった。

「おい。つくね！いつまで寝ている。」

いやいや・・・君がカツ飛ばしたんでしょうに・・・

「ギロリッ・・・」

なんでもないです！！

「あ・・・あれ？モカさん？どうしてたんだっけ？オレ。」

つくねは軽いショックで数分前のことを忘れていたようだ。

（オレと同じだなア・・・つくね　苦笑）

つて・・・

『教えてくれても良いだろ・・・』

私のもの・・・って言うてもな・・・

「ダメだ。」

キツパリ！

こりゃ早々に諦めるか・・・

強引に聞くには相手が悪すぎる・・・ (汗ッ)

なんか気持ち悪いけど・・・

『はいはい・・・分かったよ。じゃあ、いつか機会があったらオレみたいに教えてくれ。』

カイトはお手上げつといった感じで手を上げた。

つくねは何のことか分からず、唯ぼーっとみていた。首を左右に振りながら。

「そうだな・・・話せれたらな・・・」

モカは・・・話す事にはかなり抵抗があるのだ。

二度とあんなカイトを見たくない。

我を失いかけ・・・

全てを壊そうとするカイトなんか・・・

今日・・・カイトが・・・

己の心の傷を・・・話してくれたことと、あの暴走は恐らく関係があるだろう。

つくねが攻撃されたその瞬間・・・

カイトは壊れかけてしまった。

恐らく・・・あの時、今日話してくれたことが・・・一気に脳裏に
浮んできたのだろう・・・

今は話すべきじゃない。

彼自身が暴走してしまったとはいえ、仲間を傷つけようとしてしま
ったのだ。

(話さなくても・・・全く問題はないさ・・・)

モカはそう思っていた。

後・・・もう1つ・・・

気になる事があった・・・

カイトに抱きしめられた時だノノ

あの感じは・・・

(昔・・・あったような気がする・・・あの抱きしめられた・・・
あの暖かい感じは・・・って私は何を!!！)

直ぐに調子を元に戻そうと顔を振り、つくねを連れ、病室を後にし

た。

でもやはりモカは、何か引つかかる感じは拭えてはいなかった。

.....

.....

.....

そして・・・病室でカイトは1人きりになった・・・

今までの騒々しさが嘘みたいだ・・・

楽しかったけど・・・

いや・・・この学園に来て毎日が楽しかった。

まあバトル話以外はね・・・苦笑

でも・・・今日はそれ以上に楽しい・・・

こんなに楽しかった時って、

あいつが側にいてくれてた時以来か・・・な・・・

「……オレは 本当に……良い仲間に出会えたよ。でも何でだろうな…… お前の事……思い出そうとするだけで、締め付けられるような感じがして苦しくなったのに…… 今日……モカに話すことができた。 一歩……前進したのかな？オレも……」

その人はもうこの世界にも元の世界にも存在しない人だ。

オレの大切な人……だ。

本当に思い出すだけで……楽しかった思い出までも苦痛を与える物でしかなかった。

それはいくつもの年月を重ねても褪せる事は無い……

それが……今日はどうだ……

他人に……仲間に話せたし

……何より……心も安らいだ。

モカのお陰……だな。

モカは殴られるぞ！って言うっていたけど……

今のオレを見たら……どうだろう？ 喜んでくれる……かな？

(いや…… 浮気！……って言われそう……かな？ まあ……多分ありそうだ。勘弁してくれよな。 そっ……ちに行ったら土下座し

て誤るから)

カイトは軽く笑みを浮かべると・・・

ベッドに横になった。

そして、今日と言う日が終わりを告げた。

第136話 病室にて・・・告白（後書き）

告白は告白でも・・・ちょっと意識してたのと違う勝ったかも・・・

苦笑

心に引っかけたものを打ち明けたって感じですかね

これで・・・カイト君も女の口に弱いという弱点は・・・
解消されるのかなあ？？

されないような・・・

では！

ありがとうございました！！

第137話 理事長室にて（前書き）

非常に申し訳ありません・・・

こんなに投稿遅れたの初めてかも・・・ うつつ・・・ リアルに

PCすら開けず・・・

研修やらなんやら・・・

仕事やめてえーーーーー!!!

すみません!! 愚痴言っちゃいました!

・・・遅れてすみませんが・・・どうぞ・・・ ペコリ

第137話 理事長室にて

??? side

ここは・・・

【理事長室】

フードを深くかぶり顔の見えない男が1人・・・

イスに腰をかけていた・・・

「懐かしい・・・感じの妖気オーラだ・・・まさか アイツが戻ってきたのか？・・・フム・・・ 皆に協力を仰ぎ確認してみるか・・・」

そう呟くと・・・

どこからとも無く出てきた、黒スーツにサングラス・・・

全身真っ黒で固めたボディガードの様な屈強な男達が出てきた。

「頼めるか？」

男がそう言いつつ、

皆 了解 と一言だけ発し、

素早く退出して言った。

「……さて、もし アイツだったら どうするかな。 奴が復活した時……間違いなくアイツもあの場にいた…… 消え逝くアイツの妖力オーラも感じられていた。ふっ…… だが、殺しても死なん男だ。いずれは来ると思っていた。さて 前のように協力を仰ぐか…… もしくはここで働いてもらうか……」

ククク……と笑いながら再びイスに腰掛けた。

「参ったな……あいつと確定したわけでもないのにな…… 楽しみにしているようだ私は……」

表情は見えないが、凄く楽しそうな雰囲気を出していた。

アイツとは、嘗ての大戦を共に戦った戦友である……

かけがえのない友人の1人だ。

「つと……忘れていたな……アイツのこともあるがその前に彼女に連絡をしておかないとな…… 公安の件についてを」

そう言うと、デスクにある電話を使い何処かへと繋がった。

side out

??? side

1人の美しい女性が・・・座っている。

ロングの金髪を美しく靡かせながら・・・

愚痴を言っていた・・・苦笑

「やれやれ・・・最近は大人数しくしていたって言うのに・・・またアイツは悪さばかりしてんのかい・・・」

そしてため息を1つ・・・

イスに深く座り込む。

ピロピロピロリン スッポンピーン

「ふう・・・噂をすればなんとやら・・・この着信音は御子神さんだね。」

渋々携帯電話をとる。

《やあ、でるのが遅かったね。今はタイミングが悪いのかな?》

「そんなこと無いさ。・・・で今回はどうしたんだい? って聞かなくても無いけどね・・・また同族が何かしたのかい?」

うんざりといった感じだろうか？

本当にいやな顔をしていた。

「全く・・・ ちょっと前までは新聞部のあのコがいてくれたから大人しくしていたと思っただら・・・ 自分より実力が上のものがないといけないのかい・・・」

何とまあ性格が悪い・・・

今度こそとっちめてやろうか・・・

電話越しでもヒシヒシと感じる不機嫌モード、

お陰で御子神は中々本題に入れてないし・・・ 苦笑

《ああ ちょっといいかい？玉藻、お叱りのところ悪いんだが君の悩みの種ならばもう解決したよ。》

「へ？」

御子神の言葉を聞き思わずすつとんきゅーな声を出してしまった。

苦笑

《事実だ。先ほど確認も取れた。公安の本部は壊滅、九曜も病院送りとなっているよ。》

「・・・」

無言・・・

未熟とはいっても仮にも「妖狐」の一族が1人。

西洋風に言えば 大妖に分類される妖が病院送り？

「・・・肩の荷が下りたといえはそうなのですが・・・同族の身となれば・・・素直に喜んではいられないですね。でもまあ・・・やっぱり・・・肩の荷が下りた感の方があかな？」

結局はそこに行き着く・・・

九曜という男は傲慢な振る舞いをし、人間を心底嫌悪している。おまけに自分は全て正しいとする・・・

もちろんそれは自分より格が上のものがいなければの話だ。

共存を目指す御子神の陽海学園の事を支持する玉藻からすればまさに目の上のタンコブ・・・

《はは 相変わらずあっさりとした性格だな。変わってないようだ。》

電話越しでも伝わるようだ。御子神の笑い声は暫く続いていた。

「性格なんて変われるもんですか。あっさりと受け止めたほうが楽なんですよ。それより、九曜あおいを懲らしめてくれたコの方が気になりますね。今は。」

笑いながらそう聞くと・・・

「・・・確証は無いが懐かしい気配が一瞬だが感じられた。アイツの可能性がある。」

意味深に笑いながら答えた。

普通ならこれだけじゃわかるはずも無い！とつつこむのだが・・・

「なるほど、貴方がそんなに笑うっていうことは・・・彼が戻ってきた可能性があるってことね？」

付き合いの長い玉藻は分かっていたようだ。

御子神の笑い方・・・懐かしいという発言・・・

総合すれば・・・

帰ってきたかもしれないという事がだ。

「ふふつ・・・もし本当に彼だとしたら・・・私としては会って見たいなあ。話にしか聞いていないから。」

笑いながら答える。

《アイツは天然の女たらしだ。傷つくかも知れんぞ？》

「ご冗談。既婚の身の上息子もいるし。そんなことはまったくありませんね。」

サラッと御子神の話をさえぎる。

《くくくっ・・・そうだったな。》

「それよりも・・・前から言っていた例の件・・・良いかしら？」

そう 本当ならばこちらから連絡を入れようとしていたのだったが、逆に掛かってきたため 手間が省けたというものだ。

《ん？ああ、構わないよ。体験入学と言わず本当に入学してくれても結構だ。》

御子神はあっさりとOKをだす。

「あのコはね・・・ 自由奔放で猫みたいな正確だから・・・ 自分が気に入らないとその場にとどまってくれないのよ・・・ 腕は確かなんだけどねえ・・・ まあそこが可愛いんだけどさ」

「ははは・・・ 親バカは直っていないらしい。」

御子神は苦笑していた。

ここで少し紹介を入れると。

玉藻は「妖狐」の長。

古来は中国で大暴れしていた白面金毛九尾その人なのである・・・

強欲・・・欲深い人間という存在を根底から嫌っていた彼女だったが。

人間の闇ばかり見ていた彼女だったが。ある転機が訪れ命の尊さを知り・・・「人」を知ったのだ。

これはまた別の話である・・・

・・・って何が言いたいのかというところ、

そんな歴史的にも最高位に位置し妖気も凄まじいのだが・・・

弱点・・・がある。

弱点というか呆れるほど息子LOVE 【ラブ】 なのである・・・

この話題になればマシンガンのように息子の話しかしない・・・

もうちょっと自重してもらいたいものだが・・・

「失礼な事考えてないかしら？」

そして勘も鋭い。

主に息子に関しては、アイツの読心術をも凌ぎそうだ・・・

《気のせいだろう。まあ なんにしても琥珀くんが来てくれるのは歓迎しよう。手伝はたらいてってくれるというのであればもっと歓迎するのだ

がね。》

「ああー それはどうだろう？ まあ 期待しないほうが良いかも。さっきも言ったけど。」

そこばかりはどうにもならない。

愛してやまないコだけど・・・ねえ・・・

あの気まぐれだけは・・・ちょっと直りそうが・・・

でも！

「愛おしいんだなあ・・・そこが。」

.....

《本音はそっちだろう・・・》

やれやれと言わんばかり・・・

「猫は愛でるものよ？」

《まあ それはそれで構わないよ。》

あまりつつこみすぎると本当に話が終わらないからこの辺りで打ち止めにしよう。

電話代も無料タダじゃないし・・・ 苦笑

《！ ああ、わかった。》

電話越しに御子神の話し声が聞えてきた。

「ん？どうかしたのかしら？」

聞くと。

《例の公安を壊滅させた新聞部のメンバー全員を一通り確認したと
の報告を受けただけだ。詳細はそちらにも送っておこう。》

そう言うと玉藻のデスクにつけてあるFAXが動き出す・・・

ジジジジジジジ・・・

「へえ・・・このコ達が・・・」

5〜6人の男女の名前・写真付で送られてくる。

そして正体も分かる範囲で乗せてあった。

学園で正体を晒すのは校則違反だと思っけど・・・って玉藻はいい
たかったが・・・

気になる人物2人に目をつけたのでやめた。

「・・・この2人コの正体は分からないのかしら？」

そう聞くと。

《今のところ分かってはいないな。まあ 暴く必要はないが一応調査している。私が気にしていたのは一番右の男だ。》

そう言うと・・・玉藻も納得した。

「そうね・・・このコが一番妥当なところね。もう片方のコも正体は不明って書いているけど・・・悪いけど平凡すぎるわ。」

どストレートすぎるわ・・・

「御剣怪斗・・・」

プロフィールに目を通しながらら呟く。

《何か分かったら又送るとしよう。ではまたな。》

「ええ。琥珀にもこれは見せておくわ。興味もってくれるかもしれないし。」

《・・・期待しておこう》

ガチャ・・・

ピッ！

そして玉藻は何処かへとかけだした。

「早く出てよ」

第137話 理事長室にて（後書き）

このエピソードは読者の方にアドバイス&アイデアを貰いました。
ありがとうございます！

旨く出来るかわかりませんが・・・

寧ろ駄文だと思いますが・・・
ガンバリマス！

でもロザリオのほうは 更新安定さしたかったのに・・・ 涙
がんばります・・・はい。

第138話 駆け巡る噂(前書き)

よろしくお願いします!!

第138話 駆け巡る噂

翌日…

【陽海学園】

第三者side

生徒たちの間である噂が流れていた。

「ねえ… 聞いた？ アノ噂…」

「え？ 何何？？」

「一昨日の放課後の地下室で」

《公安の九曜と楓牙がやられたらしいよ！》

その噂で学園内はざわめいていた。

「ええええええ うっそだぁ〜 九曜ってメチャメチャ強くて誰も勝てないって言われてたのに！」

「だよな… それにあの楓牙もだよ？ 勝てるかもって思われてたのはアノ2人じゃん 九曜が楓牙を楓牙が九曜を… 同士討ちじゃないの？」

「それが違うらしいんだよ しかもね… やったのは新聞部の…」
ボソボソつと話を聞いた途端。

「えええ！！！ 片方は分かるけどもう片方はありえない？ だって あんなにさえないヤツが??」

「彼ら凄かったんだね 最強タッグ？なのかな？ あははは」

噂はあっという間に学園中に！

それを面白くないように聞いていた者がいた。

いや…者たちがいた。

「何が「最強」だ…コノヤロー」

ダンベルを振りながらその男はどこかへと消えていく…

そしてもう1人…

「へえ… やっぱり母さんが言ったの… 本当だったんだ。眉唾物だったんだけどなあ。」

男は階段の手すりに腰をかけていた。

「新聞部… できまり・・・だね。 九曜をとつちめたのは、さあ
て 直に見てみるか。あっ さっきのゴツイ人もなんか何かしそ
うだし もうちょっと様子見ながらかな？ 楽しみだ。」

クスツ… つと笑うとその男も何処へかと姿を消していった。

side out

【新聞部部室】

さて…久しぶりに…

ほんとに久しぶりに部活をするような気がしますね〜

『はあ…なーんか 長かったような気がするよ… 戦闘^{バトル}話。これで
落ち着いてくれたらいいんだけどなあ…』

一足先に部室で座っていたのはカイトくん！

退院したてだけど そこそこ体は問題なさそうだ。

でも…

『怒ってばかりだと顔の筋肉がつりそうになるし… たまにはの
んびり平穩に過ごすのが一番だからね〜 この学園じゃ無理な注文
かもだけど、今くらいは《ガラッ！》??？』

勢い良く開いたのは部室入り口、

そして そちらを見ようとしたその時！！

「おっはよーカイト？」ですう〜？」

2人そろってのフライングボディ―アタック！！

『ふげげ！！』

ドサーツ！！

何とか受け止めたけど、尻餅をついちゃったみたいだ。

「元気になったんだね？よかったよー！！」

くるむは相変わらずハグーー！！

『ちょ！くるむ！！大丈夫だから落ち着いて…』

いくら相変わらずと言っても、抱きつかれる事になれたわけじゃありません！

心臓バクバクです！！ 苦笑

「わたしもするですー！！！！」

ハギユ〜！！！！

後ろから抱き付いてきたのは魔女ツコゆかりちゃん。

『むぐっ！！！！』

後ろから抱きつかれた為…目の前のくるむの胸に……

……

……

……

「ちよつとお！！くるむさん！カイトさんを殺すつもりですかあ！」

ゆかりが怒ってる……

「なーに言ってるのよ！ゆかりちゃんが飛びつくからそうなったんじゃない！！！！」

くるむも怒ってる……

んでカイト君は……

『……ぼー』

放心してますねえ……

「おはよー！って カイト！！」

そこに入ってきたのはモカさん。

「大丈夫なの???カイト!?!」

放心していたカイトを抱きかかえた。

『は……はははは……大丈夫だよ、モカ。おはよう。』

まあ、病み上がりだし、倒れちゃったのかな?と思っただのは無理ないかと……

すると……

「あああ!!!モカ!!!何割り込んでるのよー!」

ツと言い出したのはくるむ。

「わあゝ 混ぜてくださいですゝ」

くるむもゆかり飛び掛る……

つて……

『……もうちよつと、穏やかにならないかなあ……』

心底そう思ったのは間違いないでしょう

羨ましい状況なのにネ…… 苦笑

暫くして……

まだ チョコチョコくるむたちのハツチャケ状態は続いたもの
こそこ鎮圧した頃……

「おはよう！みんな！」

つくねが入ってきた。

「「あ！！」」

ギリリツつと目を光らせたのは……言つまでも無いだろう。

「おっはよー？ つくね〜！」

まずはくるむが……ハグー！

「わぁーくるむちゃん！！」

驚きながらどきどきしながら……そんな感じだった。

くるむは抱きつきながらじーっとつくねを見る。

「??？」

そしてカイトの方も見る。

『???'』

「わたしね〜 カイトもちろんそうなんだけど……つくねの
事更にホレ直しちゃったんだあ？ だってあの時のつくね……ス
テキだったもん！！」

「?????へ? あの時?」

『何それ?』

カイトもつくねも何のことやら。

「えつとねえ・・・ほら!カイトを止めようとしたつくねが」
わーーーーーーーわーーーーーーー!!!」

くるむの話しはカイトとつくねに届いてなかった。当然だよねえ

モカの声・・・かなりでかかったから(笑)

「『??.?』」

くるむはジャマした、モカをもちろん怒った。

ゆかりもモカの行動がいまいち理解できてなかった為驚いていた。

「モカ!!!コラー!私とつくねの甘あい一時を!」

「違うの!! あの時には話さないで!! 実はね・・・」

モカが病院での事とつくねの事を伝えた。

「!!!!ええ? あの時記憶・・・2人ともないの??」

「本当なんですかあ??」

くるむもゆかりも驚いていた。

モ力はしーーーーっつと指を立てながらジュエスチャーすると、

「うん！だからまだ伏せておいて！ カイトもつくねもショックを受けると思うから・・・」

声が大きのような感じがしますが、これはヒソヒソ話です！

小説なので・・・

分かりにくいですがご了承下さい〜 苦笑

「ねえ・・・ ひょっとして一昨日の時・・・オレに何かあったの？」

『あつ！オレも聞きたいかも！（裏モ力が教えてくれなかったから・・・）』

そう言つと・・・

ギクツ！！としていた3人が・・・

「「ないない！！」ですう！」「そーよねっ！ たっ 確かに公安との決着はついたし！過去の話し！やめよう！」

そう言つと強引に話題をそらしつっ・・・

部活へ突入した・・・

「??」「??」

2人とも顔を合わしながら「??」を浮かべていた。

「いつたい・・・」

『何のこと??』

つくねたちが改めて聞いても・・・

「「「なんでもなーい!」「ですー!」

.....

だそつです・・・苦笑

第138話 駆け巡る噂（後書き）

ありがとうございました！

また遅れてしまいましたね・・・

ごめんなさい！ガンバリマス！！

第139話 突然の襲撃者・そして 2つの真実(前書き)

よろしくお願ひします!!

第139話 突然の襲撃者・そして 2つの真実

つくね side

つくねはトイレへいつていた、

生理現象ですから。苦笑

そして、モカたちの事が頭から離れない様だった。

(気になる・・・ おととい 一体何があったんだろう・・・
カイトも分からないみたいだし・・・)

考え事していると・・・

後ろから近付いてくるものに気付かなかった。

「・・・お前が噂の青野月音か」

そう言われ初めて気付き後ろを見ようとしたそのとき！

「バックがからあきだぞ！コノヤロー！！」

グオオオ！つとその男はダンベルを振りかぶりながら言うてきた。

「うわあああああああああ！」

まあ当然つくねはいきなりの事で驚いた。

多少の事なら陽海学園だし？驚かないつもりだったみたいだけれどこれはねえ……

するとその男は今度は人差し指をビシッ！！とつくねに向け。

「俺はプロレス研究部のチョッパー力石！今度スキを見せつけたらコブラツイスト！キメてやるからな！」

つと言い出した。

「（んなー！！）へ？？」

つくねは再び驚く、

続けて力石は。

「……で本当にお前らがやったのか？」

そう言い出した。

「はあ？」

訳が分からない……とうぜんですな。苦笑

すっとぼけた態度が癪に障ったのか。力石は睨みつけながら。

「とぼけんじゃねえッ！公安の幹部2人だよ！！九曜と楓牙！お前から！2人即ち、貴様と御剣怪斗が倒したんだろッ！！もうあちこちで噂になってんじゃねえかッ！」

「噂！！？（オレが・・・オレ達が・・・？ 九曜達を・・・なんだって！！）」

驚きながら力石を見ていた、

「九曜の首・・・勿論 楓牙の野郎の首も ずっと前からこのオレ様が狙ってたんだよ！！我ら！プロレス研が求めるのは「最強」！！ あの公安のトップ2を倒せばオレはまた一歩最強に近づけるはずだったッ！」

どこから出したのかマイクを持って叫びだした。

そして！

「その対戦相手を横取りするとはッ・・・どーなんですか！コノヤロー！ッ！ だから確かめに来たんだよッ！お前らがあの2人を倒したほどの強者かどうかッ！！」

グオオオッ！と巨大な手でチョップを繰り返そうとしているのは力石、

つくねはやっぱり身に覚えが無い、カイトはともかく自分がなんて！

「わああああ！それはきつと人違いです！！！！」

必死にそう言っていると・・・

「あながち、人違いって訳でもないでえ!!!」

トイレに入ってきたのはギン先輩だった、

「まあ、ちよい色々あったからなあ。」

笑いながらそう言う。

すると力石は後ずさりをしだす、

(森丘銀影・・・チツ こいつとも闘ってみたいがまずは噂の2人が先!つくねとカイト!)

「ジャマが入った!また来るぞ 青野月音!」

そう言って 姿を消した。

「はっはっはっ あの力石いう奴はな 強そーな奴の噂を聞けば直ぐに F・B・A フライング・ボディ・アタック あびせる夕子の悪い嫌われ者や またいつどこに現れよるかわからへんぞ!」

笑いながら用を足すギン先輩・・・

「！！ 何でそんな奴が野放しになってんですかアア！つていやそれより！何なんですか？オレが・・・つてカイトは兎も角！一昨日オレに何があつたんですかッ！」

そう言つと・・・ギンは用を足しながら振り向こうとした！！

「何や！！？お前ホンマに何も覚えてへんのかア！！！」

「わーーーーー！見えちゃう見えちゃう！！！」

つて・・・

つくね！何で赤くなってんの！青くなるとこだろ！！

ホ○かよ・・・苦笑

「まあ、ええわ せやな 映画とかで見たことあるやろ？ バンパイア 吸血鬼に血イ吸われてもうた奴は吸血鬼になるっちゅう奴 それと同じことがあつたわけや！」

笑いながら答える。

つくねはまだ意味が分からない。

「はあ？」

つて答えるしかなかったようだ。

「つくね・・・あの日の自分も一時的にバンパイア化しottaん

s i d e o u t

カイト s i d e

カイトもトイレに行こうとしたとき・・・

ギンとつくねの話を聞いてしまっていた。

『・・・は・・・はは、モカが秘密にしておきたかった理由・・・
分かったな・・・こんなことが・・・』

カイトはまるで、地面が揺れているかのような感覚に襲われていた。

『オレが・・・暴れた？ 皆を・・・傷つけようとした・・・？
大切な・・・友達を・・・？』

足元から崩れ落ちるような感覚だ・・・

以前とは違う・・・しっかり意識は持っているようだ。

罪悪感に漬されかけているのだろうか・・・

『オレ・・・が・・・』

その場に座り込んでしまった。

失う事への怖さ恐ろしさは誰よりも知っている・・・

自分が・・・そんな事を・・・？

暫く・・・カイトはその場を動けなかった。

つくねが慌ててトイレから出て行った様だが、そのせいで全く気付けなかった・・・

side out

??? side

「あれが・・・青野月音・・・んであそこで座ってるのが御剣怪斗か・・・」

校舎から見下ろしながらそう呟いた。

「ふうん・・・つくねって奴は、何か、不安定な・・・小さいけど、歪で・・・妙な感じがする。」

感覚の鋭い男なのだろう、

モ力が注入した血液を僅かだが感じ取っていたようだ。

「っで・・・カイトって奴は・・・なんだろ？ 分かんないな・・・感じる事は感じるんだけど・・・??? これは今までに無い感覚だからかな？ 何ともいえないや、」

妖気を出していなくても、妖気それを抑えている僅かな力をも察知することが出来る彼が何とも言えない感じの妖気と感じていたのは驚くべきことだ、

「あははは・・・母さんが言う事もたまには的中するんだね。興味・・・持ったよ・・・特にカイトって奴の方・・・さて・・・どうするかな？ 御子神さんには好きにしていって言われてるけど・・・」

腕を組んで考える。

「直ぐに行くのもいいけどあつという間に分かったりしたら、面白くないし・・・ちょっとゆっくり観察しようかな、学園コクに入ってもいって言ってるし、まあ離れすぎず・・・近すぎず・・・まあうん。その日の気分で、」

気まぐれな性格とはよく言ったものだ・・・

ココまで来れば分かると思うが、彼の名は・・・

.....

引き伸ばす意味無いけどね

「想像通りだと思っよ

」「コラ！..まじめにやれ！..」

.....はい.....

s i d e
o u t

第139話 突然の襲撃者・そして 2つの真実（後書き）

ありがとうございました！！

第140話 月音vs力石 … 覚醒（前書き）

遅くなりごめんなさい！

PC久しぶりに開けました・・・ 疲れたあ・・・

第140話 月音vs力石 … 覚醒

【陽海学園 屋上】

……

「……いくら仲良くなったって バンパイアにはなりたくないよ!!」

屋上でモカと別れ・・・考え込んでいた。

つくねは真実を知った・・・

自分の体に何が起こるのかわからないことも知った・・・

モカとは仲良くなりたい、そう言う気持ちは強く持っているのだが、

つくねは人間をやめたいとまでは思っていない。

いつかは親のいる人間の世界へ帰りたい・・・

そちらの方が強く持っているのだ。

そんな時、モカから血を吸わせて ツと言われた。

いつもなら何気ない唯の恒例行事みたいなものなのだが、今のつくねには、ギン先輩が言っていた言葉が頭から離れなかったのだろう・

モ力を今までに無いくらいに拒絶したのだ・・・

ガチャコーンッ!!

そんな時、屋上に上がってきた男がいた。

「おいイ！屋上で女と何してたかしらねえが・・・楽しんでますかコノヤロー 妖は闘いを忘れた時老いていく 遊んでいる暇があったら強さを磨くべきじゃあないのかッ!？」

力石だ！

相変わらず訳が分からない!! 苦笑

「!!!!!!(こんな時にッ!嘘だろ!!!!)」

意気消沈のときに殴りこんできたのは、ギン先輩が言っていた、厄介者・・・

「フフ・・・ また来たぜエ 屋上なら誰の邪魔もはいるまい 存分に闘いを楽しめるだろう・・・ さあア!かかってこおい!青野月音エ!!」

「うわぁああぁあ!!」

.....

side out

モカ side

「バカだなあ・・・わたし きっとこうなるのが怖かったんだね・・・それで九曜と戦った時の事・・・黙ってたんだ・・・人間とバンパイアの違いは・・・わたし達は絶対に超えられないのかな・・・」

モカは・・・階段で座り込んでいた・・・

落ち込み・・・考えていた時、ロザリオが・・・

《おい・・・ちょっと待て・・・》

話しかけてきた。

「きゃっ・・・」

《つくねがバンパイアになる・・・とか言ってたな お前たち何か勘違いしてないか？》

「え……？それってどういう……」

モカが体を起こしたその時、

ズズズズズズ……

建物が揺れるような感覚が……

「いやっ！揺れてる！？何この揺れは……!?!」

side out

【屋上】

「うわあああああああ!!」

カ石は本性を現しつくねを攻撃していた。

「……フフフ この姿を見ればやる気になるだろうっ」

その本性とは……

トロールだ。

唯でさえデカイ男が更にデカくゴツくなってしまうた……

むっごーい・・・苦笑

「さあ・・・お前も正体を現せ・・・そしてどちらが「最強」に近い男なのか・・・勝負だ！！青野月音エ！！！！」

巨大な手を振り下ろす！！

ドガアアアア！！

「うわああああ！！」

つくねは何とかかわすが、

いつまでたっても正体を現さないつくねに理不尽な怒りを覚えていた。

「コラア！何してやがる！！もうゴングは鳴ってんだ！真面目にやれッ！コラア！！」

しかし・・・

つくねは避けるばかりで何にもしてこない・・・

「何故正体を現さない！？本気で戦えコノヤロオオ！！」

つくねを捕まえようとした！

その時、

「つくねー！ーっ！これは・・・これはいつたい!？」

モカが上がってきたのだ。

「モカさん!？」

「・・・!!」

ガッ!!

それを見た力石はモカを捕まえた。

「きゃああ!!」

デカイ手でモカを握りあげる。

「モカさーん!!!!」

つくねは直ぐに立てあがる!

「くくく・・・どうやら この女に・・・お前気があるようだなア
ちようどいい・・・ 利用させてもらおう! 戦う気がお前に無
くて困っていたところだ。今からこの女の首をブチ折ってやる・・・
どうだ?ほつとけねえだろ青野月音エ 助けたければ本気になるこ
とだ!」

ぐぐっ・・・

巨大な手の巨大な親指をモカの首に押し付ける。

「な・・・や・・・やめっ！」

「ハハハ！力づくでオレを止めて見せる！でないとこのカワイイ首がぼきりといくぞオオ？」

ぐっ・・・ググッ・・・

徐々に力を入れていく・・・

そんな光景を見たつくねは、

「やめるー！ー！ー！ー！！！」

必死に叫ぶ。

「いいの・・・逃げてつくね。」

モカがゆっくり口を開く・・・

「わたしは大丈夫・・・例え首が折れたって大丈夫だから わたしは放っておいて早く逃げてつくね・・・」

つくねは驚愕の表情でモカを見た・・・

あんな・・・酷い事言ったのに

「・・・さっきはごめんね？つくねの気持ち・・・わかってあげら

れなくて・・・でも信じて・・・つくねがわたしの事どんなに嫌
つても わたしはつくねの事 好きだよ・・・」

涙ながらそう言った・・・

勿論力石は黙ってなかった。

「・・・チツ ナメやがつて この女アア 黙ってねえとその首ブ
チ折るぞオオ！！」

一気に力を入れようとしたその時！

「うっ うわああああ！」

つくねは弾かれた様に一気に力石の腕に飛びついた！

ガシイ！！！！

「ぬう！？」

（そうだ・・・オレ いつもこうだ・・・モカさんやカイト・・・
みんなに助けられてはっかじゃないか！ 今はカイトはいない。
守ってもらわないと・・・この学園では自分の身も守れないほど弱
い存在だから・・・）

迷いは吹っ切れる！

「オレだってモカさんが大切なんだッ！ モカさんを守るためなら

バンパイアにだつてなつてやるーッ！」

力石に掴みかかりながら叫ぶ！

「ハハッ！ やつとか？ 青野月音エエー！」

腕を振り回し・・・

ブン！

「うわっ！！！」

つくねを振り払った！

（くそ・・・今のオレにはバンパイアの血液が流れているんだろ！
それを利用できれば・・・！こんな奴！！）

つくねは諦めず飛び掛る！

《チ・・・つくねの奴め・・・やはり勘違いしてるな・・・仕方
ない、おい！ちよつとだけ私の命令を聞け！》

「え・・・？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ええー！！！！！！？そつ そんな事を！？」

《いいからやれッ！急がないとつくねが死ぬぞ》

ロザリオ・・・裏モカがモカにそう言った。

「一か八かだッ！！力を貸して・・・モカさんの血液よ・・・」

三度突っ込もうとしたその時、

「つくねっ・・・」

かぷっ・・・

モカは抱きつき・・・首元に噛み付く・・・

「は・・・？なっ・・・」

力石は・・・切れた！！

「何してやがるてめえらアア！！」

ドガアアアアアアアア！！！！

これまでで最大の力で一気に手刀を繰り出す！

屋上の床がぶち割れるほどの威力だ！

「こっちはマジなのにてめえらこのオレを愚弄しやがってッ！とんだ期待はずれだぜ青野月音エエ！許せんッ！息の根を止めてやるッ
ッ！！」

手でぐりぐりぐりぐりっつとすりつぶすよーに、してると・・・

「なっ！！」

自分の腕が・・・徐々に持ち上げられていく・・・

その腕の下には・・・

ドドドドドドド・・・ ザワザワザワ・・・

禍々しい妖気を放ったつくねが立っていた。

「きつ・・・効いてねえこいつッ！ 岩盤をも砕くオレの手刀を片手で！！！？？」

瞳は・・・赤く・・・裏モカのように縦長に細く・・・鋭くなっている・・・

《間に合ったようだな・・・》

口ザリオから声が聞えてきた・・・

《わかるか？つくね、お前に私の・・・バンパイアの血液を再び注ぎ込んだお前はその血液の「妖力」が切れてしまうまでバンパイ

アになれる》

そう・・・ほんの数分間の・・・仮初のバンパイア・・・少なくとも今の段階は・・・

メキ・・・バキバキ！メキヨ！！

つくねは力石の掌を握りあげる！！

「がああああ！何て力！！これが・・・九曜を倒した！！！」

「うおおおおお！」

つくねはそのまま握り上げ、一本背負いの要領で・・・

ブアアアア！！

投げ飛ばした！！

（あ・・・あなどっていた・・・まさかここまでとは・・・）

そう思っていた次の瞬間！

メキヨ！バキバキメキボキッ！！

屋上のフェンスに直撃し・・・その勢いはとどまることなく・・・

モ力は・・・

「・・・・・・・・」

無言で・・・申し訳なさそうに頷いた・・・

(今度は・・・わかる・・・覚えてるよ。冷めているのに優しいもう1人のモカさんの声・・・)

「モカさん・・・オレの血・・・吸ってもいいよ」

つくねは笑いながら言う。

「!!!!?ええっ　つくね・・・なんで??」

モ力は驚きながら言う。

「やつ・・・オレつい酷い事言っちゃったし、カイトがあそこにい
たら・・・ぜーったい怒られそうだしね!お詫びに・・・さっ。」

そう言つと・・・頭をかきながら。

「今日は本当にゴメンね!オレ　もっと強くなる・・・モカさんや
カイト・・・皆に心配をかけないように・・・もっともっど・・・」

そう言つと・・・

モ力は涙目になった・・・

第140話 月音vs力石
：覚醒（後書き）

ありがとうございました！

第141話 失踪・・・足りないもの（前書き）

よろしくお願いします・・・

今回は結構頑張ったのですが・・・駄文です・・・きっと！

ううう・・・

ガンバレ！じーく！って自分で言ってみました！ 苦笑

では・・・どうぞ・・・！

第141話 失踪・・・足りないもの

チョッパーカ石との件も無事終わり・・・つくねとモカの決別・・・

までは行ってないと思うけど！ 苦笑

その件も仲直りし・・・無事終わった。

血は吸われていたけどね

そして、

いつも通り・・・学園が始まる。

何も代わらない学園風景なのだが・・・

1つ・・・足りないものがあつた。

それは・・・

「御剣怪斗君！・・・あれ？今日は休みなのかしら？」

出席を取っていた猫目先生がそう言った。

「おかしいなあ・・・そんなこと聞いてないけど・・・？」

不思議そうにいない席を見ていたが・・・

中断するわけにも行かないので、すぐに次の生徒を呼び、HRを続けていた。

「カイトが休むなんて珍しいね？何か聞いてない？つくね！」

モカが少し心配そうにつくねに話していた、

「モカさん・・・オレも何も聞いてないんだ、何かあったのかな・・・？」

つくねも心配そうにしていた。

そして、暫く無言でHRを受けていた。

つくねは何か思いついたのかモカの肩を叩くと、

「ん・・・そうだ、モカさん。帰りにカイトの部屋に尋ねてみる？もし体調を崩していたんだしたら、お見舞いがてらさ！」

つくねがそう言った。

そしてモカは笑顔になり、頷いた。

「そつだね！」

そして、学園も終わり、2人はカイトの寮室へと向かっていった。

.....

.....

.....

「確か・・・ うん！ここだ。」

表札を見ると、御剣 怪斗と表示している。

間違いなくカイトの部屋だ。

コンコン... コンコン...

「カイトー？いる？」

とりあえず、つくねがノックをする・・・

しかし・・・

.....

.....

.....

反応は無い・・・

「あれ・・・？ カイト・・・？ いないの??」

学園を休んでいると言う事は、十中八九、ここにいるはずだと思っ
てた2人はいない事に戸惑っていた…

「カイト・・・ いないみたいだ・・・」

つくねがモカにそう言う・・・

「そう・・・ 心配・・・だね。」

モカも再び表情を崩した・・・

「何か用事でもあったのかな？ でも、猫目先生は知らないって言
つてたし・・・」

いくら考えても・・・

分からなかった・・・

暫く考えていたのだが、

「とりあえず、今日は帰ろう。きっと明日になったら戻ってきてくれるよ。」

横でモカはずっと心配そうな表情かおをしていた・・・

そんなモカの表情かおは見たくない・・・とおもったつくねが

元氣付けるようにつくねがそうモカに言う・・・

「そう・・・だね。」

モカは頷くと・・・ 2人はその場を離れていった。

次の日には・・・いつもと変わらない笑顔で来るだろう・・・

そう思っていたのだったが・・・

2日・・・3日・・・

カイトは姿を見せなかった・・・

「ううん・・・困ったわね。カイト君学力は問題ないけど、出席日数足りなくなっちゃったら進級できなくなるのに・・・つくね君は何か知らない?」

猫目先生が聞いてくるが・・・

「すみません・・・昨日 寮の部屋の方へ顔を出したんですが・・・
戻ってないようでした。」

つくねはそう言う・・・モカも頷いていた。

「そうなんだ・・・カイト君に限って何かあったなんて考えにく
いけど・・・心配だね・・・」

猫目先生もやはり心配みたいだ・・・

「あーん・・・結構お仕事溜まっちゃってるのに・・・」

「「そこですか!!」」

猫目先生はクラスの仕事を結構・・・というか、かなりカイトに頼
んでいるらしい・・・

元々学級委員長になって!!って頼み込んでいたらしいんだが・・・

『級長にはなりたくない!!』っとキツパリと言い。

それが条件で、渋々手伝っていたらしい・・・

・ 渋々の割にはかなり効率よくテキパキとこなしてくれているので・・・

依存症になっちゃったの・・・かな? 苦笑

おまけに新聞部の手伝いも・・・

「ほんとーに！カイトを心配してるんですか？？先生エー！！」
つくねがツツコみを入れる！

「もちろんよ」

しっぱを振り振りしながらそう言いきった！

何か・・・説得力ねえなあ・・・苦笑

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【新聞部部室】

その日の授業も終わり、放課後の部活・・・

「カイトさん・・・今日も休みです？」

ゆかりがつくねに聞いていた。

「うん」

元気なくつくねはそう言った。

「カイトどうしちゃったのかなあ・・・」

くるむも表情を曇らせる・・・

カイトが休むところなんて今まで見たこと無かったらしい・・・

心配なのは無理ないだろう・・・

そこへギン先輩が、

「まだ たったの3日やろ？そこまで心配することかいな・・・」

っと悔しそうに呟く。苦笑

「部長！！ と違って・・・ カイトさん 真面目だから・・・
来てくれないとはかどらないですう・・・」

「そうよねえ・・・ 部長！！ っと違って、カイトは素敵だ
し・・・」

くるむとゆかりの容赦ないコメント炸裂！！

「こらー！！言い過ぎやろ！！お前ら！！ ってか 素敵って！！
今カンケーあるかい！！」

ギンも 猛講義だ！！

「「当然よ！！」です！！！！」

真っ向から言い切っていたのはハモツた2人。

そっくだよねえ・・・ 部活中は優雅に珈琲でくつろいでるし・・・

隙あらばセクハラしてくるし・・・ e t c

など諸々をギンにぶちまけると・・・

流石に何も言えなくなってしまうたみたいだ・・・

「カイトがいなくて・・・皆心配してるんだね・・・」

モカはそう呟いていた。

「うん・・・」

つくねもだ、

このメンバーの言い合いと言うかジャレ合いと言うか・・・これはもう恒例行事だ。

ギンがセクハラしたり・・・盗撮したり・・・等も・・・
よい子は真似しないでね（

それでも・・・いつもよりキレがないようにも感じる・・・

楽しそうに言い合ってるようにも見えなくはないが・・・どこと無く、皆元気が無い。

勿論 ギンも例外ではなさそうだ・・・

「カイト・・・ちょっと部活が終わったら、わたし探してみる。」

「

モカがそう言うど・・・

「あ！わたしも！！」「わたしも行くです！！！」

2人もモカに賛同！

「うん・・・ オレもいくよ」

つくねも賛成のようだ。

「ってか・・・ 部活してからにせいや・・・」

口ではそう言ってもギンも珍しく早めに手伝いに入ってくれていた・・・

早めに終わらせ様とするかのように・・・

勿論皆そんな風には思ってたけど

そんな感じで仕事は超特急で終わらせよう！ってことで、再開。

いつもよりも士気を上げ取り掛かっていた。

.....

.....

.....

部活も終わり・・・

「じゃあ、皆！手分けして色々探してみよう！」

の号令の元。

モカ達はカイトの行方を捜索していた。

（ギン先輩は帰っていった・・・つくねはきつと探している！っていつてたけど・・・約2名は信じてないみたい・・・苦笑）

元々スクープを探するために、学園を探索した事もあり、この手のこととは皆慣れっこのようだ。

効率よく・・・いろんなところを探していたのだが・・・

見つからないようだ・・・

予め言っていた、集合時刻・場所に皆集まっていた。

「・・・はあ カイトお・・・」

くるむは・・・メチャクチャ落ち込んでいた・・・

「本当に・・・どうしたんでしょう・・・カイトさん・・・」

その先には……

「き……君は……」

「さつき……ちゃん？」

「ええつと……カイトさんのおっかけですう……」

「なんであんたがここに？」

そう……

かの有名な！！カイト君 親衛隊 四天王の一角！！ 鳴神 五月
その人だ！！

つて 勝手に周りが言ってるだけなんだけどね〜 苦笑

くるむは何やら不機嫌そうだ…… ライバルが来た……つて感じかな？それとも…… しょつちゅうカイトを追っかけているからかな？

「ちよつと！！カイト君の事よ！！彼に何したのさ！！！！」

五月は怒りながら詰め寄ってきた。

「えっ？」

つくねが一番前にいたせいか…… つくねの目の前まで来た。

「あんなカイト君…… 初めてだよ！！ 一体アンタ達何したの

「!!」

頭の至る所に四ツ角マーク！ をたーくさんつけて 殺気をバンバン出して…… にじり寄ってくる……

こわっ……

って……

「カイト？どk「失礼ね!!! 何にもしてないわよ!!!」」

つくねの直ぐ側にいたくるむが反応する！

つくねが大事なところを聞こうとしてたのに!! 苦笑

「なによー!!!!」「このー!!!!!!」

そして…… まあ 恒例…… かな？ ポカポカ叩き合いが始まっていた……

「ちよつとー!! タンマタンマ!!」

つくねがそう言うけど…… 止まってくれそうに無い……

そこへ。

「つくね!!」

モカとつくねが目を合わせながら頷き……

「五月さん!!ちよつと!!!!」「こつちに!!」

2人がかりで引き離し、五月を抱えて走り出す!

あの場所じゃくるむがジヤマして・・・話が出来そうにないから・・・
・ 苦笑

いつものくるむなら・・・気付いたと思うんだけど・・・相手
が相手だからねえ・・・

つてなわけで・・・

「ちよつと!!五月の味方すんの!!!!モカア!!!!」

つくねもいるんですけど・・・

まあ そんな罵倒を聞き流しながら・・・

その場所を離れていった・・・

ゆかりは必死にくるむを抑えていました

そして・・・ここは

【陽海学園中庭エリア】

もう 下校の時間はずっと過ぎており、いつもなら・・・ 仲間

同士で溜まり場をつくったり、昼寝してたり・・・中には読書をしてたりした生徒がいつもはいるのだが・・・辺りには誰もいない静寂な空間となっていた。

「で！？私をどうするつもり！！」

五月はまだ怒ってた・・・

突然拉致されたみたいに担ぎ出されたんだからしかたないかな・・・
苦笑

「あ！！ゴメン！五月さん。」

「五月ちゃんごめんなさい。」

モカとつくねは直に下ろした。

「その、カイトなんだけど・・・わたし達何もしてないよ！今だつて、心配だったから皆で探していた所なんだよ？」

モカがそう言う・・・

「そんなの信じられないわよ！！」

まだやっぱりご立腹だ・・・

「カイトは大切な友達なんだ！！何かするわけ無いじゃないか！」

つくねが声を上げ・・・五月を見つめながら・・・訴えるように言う。

「……………」

真摯にくる感じの訴えだった為か、五月は黙って目を見ていた。

「教えてくれないか？ 五月さん。あんなカイト……って言うていたけど…… 何処で見かけたの？？」

つくねがそう言う……

「……………ほんとに……何にもしてないし、知らないみたいなんだね……アンタ達は。」

静かに口を開く。

「当然だよ！大切なクラスメートだし……何より……大切な……大切な友達だもん！」

モカも真っ直ぐ五月を見つめていた……

「……………わかったわ……………」

ふう……つとため息を出しながらそう答えた。

五月も100%本気で疑ってたわけじゃないようだったが……

カイトが……他人を拒絶……近付いてはいけない^{オーラ}気配を出していた……為か少し取り乱したようだった。

まあ・・・50%くらいは本気で疑ってたらしい・・・苦笑

「・・・バス停の側、ジャックオーランタンがある時刻表の側の海側の崖で座ってたの・・・凄く・・・悲しそうな顔をして、」

そう言うと、五月の表情が曇りだす・・・

「何度か話ししようとして・・・気付いてもらったけど、上空で感じて・・・いつものカイトじゃなかった・・・」

五月も・・・いつもなら絶対しない表情かおだった。

「そつか・・・わかった。ありがとう五月さん。オレもカイトに何があつたか聞いてみるよ・・・だから元気出して・・・」

つくねがそう言う。モカも一緒に頷いた。

「ふ・・・ふん！カイト君が元気ないと！やってられないのよ！！早く行きなさい！！あなた達がいつて更にカイト君が落ち込んだら許さないわよ！」

五月がテレを必死に隠しながらそう言った。

「うん！わかった！」

モカとつくねは笑顔でそう言い、その場を離れバス停へと向かった。

第141話 失踪・・・足りないもの（後書き）

ありがとうございます!!

完全オリジナルな話なので・・・ちょっと内容に自身が・・・苦笑

では・・・最大の敵（現実）が迫ってきてますんで!ぶっとばし
てきますー! 無理か・・・

では!!

第142話 裏モカとカイト（前書き）

よろしく願いします!!

よーやく接触です!

後誤字報告してくれた方!ありがとうございます!!

ひよつとしたら・・・ チョコチョコアルと思います!! ごめん
なさい・・・

では 駄文ですがよろしくです!!

第142話 裏モカとカイト

【陽海学園前バス停】

そこに・・・一人、海を眺めている男がいた・・・

『・・・・・・・・・・』

カイトだ。

表情は・・・少し暗め。

でも不穏なオーラを纏っているみたいだった。

『オレは・・・あいつらと一緒にいいのかな・・・ 傷つけようとしたんだ・・・オレ・・・』

ずっとこの解を追い求めているようだ・・・

この解ならば直に答えを出してくれる・・・ あの新聞部の皆なら、皆・・・本当に良い友達なのだ。

「いてくれていい！」

と言ってくれるのはわかる・・・

だけど・・・

カイトは自分自身が許せなかったようだ・・・

『・・・・・・・・・・・・・・・・オレは どうしたら 答えが出せるの
かな？ ゆきな・・・・・・・・女の子に暴力を出すなんて最低・・・・・・・・今
のオレは最低・・・・・・・・ いや それ以下だな・・・・・・・・女の子・・・・・・・・友
達を傷つけようと・・・・・・・・ しかもモカとつくねが止めてくれなかつ
たら下手をしたら殺そうとしてたんだ・・・・・・・・』

悩んでも悩んでも答えは出ない・・・

もう3日もたっていた事など分かってないだろう・・・

ザッザッザッ・・・・・・・・

そこへ足音が・・・・・・・・聞えてきた・・・

「お前は・・・・・・・・こんなところで何をしているんだ？」

その人物はカイトに声を掛ける。しかし・・・

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

カイトは気付いてないみたいだ・・・

「おい。カイト！」

近付いてきた者がカイトの肩を掴む。

『・・・？ モカ・・・か？ なんでココに？』

そう・・・近付いてきた足音の主は、

モカ（裏）だった。

（数分前）

モカ・つくね side

2人はバス停の側にやってきた。

「いた！あそこー！」

モカが指をさした！

「ほんとだ！良かったー！」

つくねも安堵の表情を浮かべる。

いつもと違う表情のキイトと聞いて、心配はしていたのだが・・・
姿が見れただけでも・・・嬉しかったみたいだ。

2人とも、喜びの表情だった。

だが・・・

少し近付いただけで・・・五月が言っていたことが良く分かる・・・

不穏な・・・負のオーラのようなものが感じていた・・・

「ほんとだ・・・あんなキイト初めてだよ・・・どうしたんだ
ろう・・・」

つくねも近付くのを躊躇ってしまったようだ。

初めての事で・・・

それほどまでの不穏なオーラだった。

「・・・・・・・・・・」

モカもじつとキイトを見つめていた。

モカは・・・大体想像がついたようだ・・・

恐らくは・・・ 病院でもう1人の私と話していたことに繋がっているのだろう・・・

話しの内容・・・ 細かくまでは思い出せないが・・・ 覚醒時でも僅かだが意識はある・・・

あの時は裏の私に対するお礼だったから、聞かないようにしていたのだが・・・

悲しそうな顔をしていたこと・・・ それをもう1人の私が励ましていた事・・・ それは覚えていた。

「聞えるかな？私・・・」

モ力はロザリオに話しかけるように・・・ そう話す。

《・・・ああ》

直に返答があったようだ。

モ力は喜びの表情を見せていた。

いつもはたまに一方的に声が聞えるだけで自分からの接触は出来なかったのだが、今回出来た事に喜んでいたようだ。

「あなたなら・・・分かるよね・・・？ カイトがなんで・・・ あんな・・・になっただか。あの時のお話・・・ 私は聞かないようにしてたんだけど、そこにきつと繋がってると思うんだ。」

ロザリオに触れながら・・・ モ力が話しかける。

「あなたじゃないと・・・ カイトに伝わらないって思うんだ。何も聞いていない私たちじゃ・・・」

モカは少しだけ表情を暗くする。

自分じゃ力になれないかもしれないと認めているからだ。

《・・・・・・・・・・む》

モカは・・・裏モカは少し言葉を詰まらせてしまっていた。

どうやら正解のようだ。

少なくとも裏モカの考えと表モカの考えは同じだという事が・・・分かった。

「モカさん？ どうしたの？」

つくねは独り言を始めていたモカに話しかけた。

「あ！あのね・・・ ロザリオ・・・ もう1人の私と話していたの・・・」

「モカさんと・・・？」

「うん・・・ あの つくね・・・ お願いがあるんだ。」

そして、つくねはモカのロザリオを外し 開放したのだった。

「・・・ふん」

モカは、口調こそは不機嫌のように振舞ってはいるが・・・

やはり 心配している気持ちは皆と同じようだ・・・

「モカさん・・・」

つくねも察していた。

「つくね、カイトと2人で話したいんだ。ちょっと外せ」

モカがそう言った。

「え？どうして？オレもカイトのこと・・・」

心配なんだ！といおうとしたが。

モカの表情が真剣な・・・顔だったため 最後までいえなかったよ
うだ・・・

「・・・アイツと話すことの内容は・・・カイトにとってはきつい
ことなんだ。」

いつもより・・・モカさんの目は真剣そのものだった・・・

「モカさん……」

つくねは……何もいえなかった。

「アイツの口から……お前に話すまでお前たちには待つてもらいたいんだ。それ程までの闇を持つてるんだ。カイトは……我を忘れ……暴走するほどにな……頼む」

初めて……モカが他人にここまで言ったんじゃないかな……

つくねはそう思っていた。

「うん……わかった。また……カイトが話してくれるまで、待つよオレは……カイトを頼むね。モカさん。」

そう言う……軽く手を振り……離れていった……

(悪いな……つくね……)

内心は穏やかではいられないだろう……大切な友達の力になれない……と言うのだから。

そんな感じをした後ろ姿だった。

「必ず連れて帰る。部室でも待っていてくれ。」

モカはそうつくねに言う。

つくねは振り返り手を振った。

s
i
d
e

o
u
t

第142話 裏モカとカイト（後書き）

ありがとうございました！！

第143話 光をくれた…（前書き）

よろしく願いします！

遅れてごめんなさい・・・

では、駄文ですがどうぞよろしく願いします！

第143話 光をくれた…

その場にはモカとカイト唯2人・・・

後は波が崖に打ち続けている音しかしない。

『モカ・・・』

カイトは振り返った・・・だが 直ぐに海の方を見ていた。赤い海を・・・

『お前が・・・ 言ってた事 分かったよ。強さと弱さ・・・か。なるほどな・・・』

海を唯眺めていた。

「・・・」

モカは少し黙り・・・

「いつまでそこにいるつもりだ・・・？カイト。」

静かに口を開いた・・・

『いつまで・・・？　そうか・・・　そんなに時間たったのか。』
海を眺めるのを止めなかった・・・

『なあ・・・　モカ・・・　オレ皆といていいのかな・・・？』

そう呟く。

「あたりまえだろ！」

モカは即答した。

その事は・・・カイトは嬉しかったようだ。

口元が僅かに緩んでいた。

『そうか・・・　ありがとな。モカ・・・　でも　オレはオレを許
せそつにないみたいだ・・・』

「！」

カイトはゆっくり立ち上がった。

『お前たちなら・・・　そう言ってくれる、そう思ってたよ。皆・・・
良い仲間・・・　友達だからな。』

そして、モカの方をむく・・・

あ…の時のような…瞳だ。

「ッ！」

その目を見てモカは、たじろいてしまった。

『俺の中で…守ると決めていた事を、破ってしまったんだ。』

仲間を…守る事…

そして…ゆきなとの約束…

それなのに…仲間を傷つけ…

『くッ…』

後悔…罪悪感…様々な感情が…一気に心を支配する。

『オレは…消えた方が…』

そう呟いたその時！

「ッ！！カイト！！！」

ガシッ…

モカが後ろから抱きついた。

『モ…カ…？』

「カイトしつかりしろ!!そんな事・・・消えるなんて・・・
言うな!!」

強く・・・強く・・・モカはカイトを抱きしめた。

「お前は・・・覚えていないかもしれないが、守れたんだ!あの時もな!つくねを・・・皆を・・・」

『モカ・・・』

モカは抱きつきながら続けた。

「本当なら、直ぐに、言うべきだったんだ。なのに、あの時のようなお前を見たくない・・・そのせいでここまで・・・」

いつものモカじゃ・・・無い。

だからこそか、頭の中・・・心の中に響いてきた。

『全部オレの弱さのせいだ。モカのせいじゃない・・・オレが弱いから・・・』

「強いだけじゃ・・・強さだけじゃ駄目だと言う事をお前は知ってるはずだ! そうだろう?カイト」

モカが訴えるようにカイトに言う。

「1人・・・そんな奴がいるだろう。弱い・・・間違いなく弱いのに・・・皆を必死に守ろうとした奴が。それだけで... 救われている奴だっている!」

『つくね……』

妖の学園の中での人間……

「……それに、お前がいなくなれば皆間違ひなく傷つく、あの時以上にな！」

モカは強引に前を向ける。

「それでいいのか！カイト！？仲間は絶対に守るって言った事は嘘だったのか！？」

『ッ！』

体を強く揺さぶる。

「それに……あの時私は言っただろう！唯生きているだけでは駄目だと！……しっかりしろ！お前を待ってってくれる者たちがいる事を忘れないでくれ。」

そう言って再び抱きしめた。

『……モカ。何で……そこまで……』

「バカたれ！！」

デコピーーン！

ビシィィィ！！

『いたああああ！』

デコピン再び！！ 苦笑

「……ッ 私はお前のことが……」

最後の方は聞えなかったけど……

痛いほど…… 文字通り痛いほど伝わった……でも、

『いて……てて…… は……はは…… こんな情けな
いオレにここまで言ってくれるなんて…… 本当にオレって』

ビシィ！！

モカは口に手を当てた。

ツと言うより逆水平チョップ？

『ブツ！！ ふがつふがつ！！』

「もうそれ以上言うな！お前には…… 私も……ここにはいないが・
・皆も世話になってるんだ。それに今もお前を必死に探している。
互いに助け合ってるんだ。お互い様だろう？」

しっかりと真っ直ぐカイトの目を見ていた。

『……』

カイトもモカを真っ直ぐ……見つめた……

そして モカはゆっくりと手を放す。

カイトは…… 光を見た……

まぶしすぎて……直視しにくいほどの光だったが……

真っ直ぐ……モカをみた。

「気分は……どうだ？カイト。」

『ああ……気分は晴れた……ずっと暗闇にいたんだが……モカが光をくれたな……すまない……いや……違う。ありがとう、モカ。皆にも伝えるよ。大分サボっていたみたいだからな。』

「……ふん／＼／」

すっと抱きつく。

いつもなら……抱きついたらぶっ飛ばしだったんだけど……

今回はそうではない……

暫く、と言っても数秒ほどだ。

なぜなら…

「あーカイトさん！見つけたですー！」「カイトー！」「やれやれ…世話かけよってからに…」「あははは…（モカさんゴメン…）」

新聞部の皆さん登場！

まあ…この後の展開は想像がつくかと…

「あああああああああ！…！！！！　モカアアアアアア！…わたしのカイトに…！！！！！！」

くるむが真っ先に気づき、抗議？いや突進していく！

「わああ！わたしも混ぜてくださいですっ」

ゆかりは笑顔になって飛びつこうとする。

「なんで カイトばつかなんや……………」

「モカさんがモカさんがモカさんが……………」

ガーンガーンガーン…

つと落ち込んでるのは男2人…

んで……肝心のモカはというと…

「ちっ…違っわ！ばか者！！」

ドガアアアア！！！！

回し蹴り炸裂！！

「ひやああああああ！！！！」

ゆかり&くるむは空高く　飛ばされていった…

「こっ　これはだな！！　カイトの馬鹿が！そこから飛びおりようとしてたから　咄嗟にだなっ！！」

っと言ってるけど…

『あー… モ力？』

肩を叩きモ力に話しかける。

「なっ！なんだ！！」

顔を赤らめながら答える。

『…誰に説明してるつもりかわかんないけど… 2人とも気絶してるぞ？』

そう言つて2人の方に指を刺した。

ああ…

本当だ。きゅ～～～～って感じでのびてた…

「むっ… むむむ…」

でも… モ力はまだ、言い足りないのか、納得してないような表情をしていた。

『…まあ 男性陣達には聞えているみたいだけど。』

つくねとギンはしっかりと聞いていた。

「…ほっ」「それでも羨ましすぎるわ！カイトオ！！」

つくねはあからさまに安堵の表情、ギン先輩は嫉妬の炎…

でも、あの無茶な、説明でよくばれなかったなあ……って思うね。
苦笑

……
……

この後……

カイトは無断欠席していた事を皆に詫び、探してしてくれたことも
礼を皆に伝えていた。

モカとの抱きつきシーンについては……

モカのメチャクチャ強烈な殺気を受けながら……何とか、誤魔化
せたと思う……

滑って落ちそうになってたところを助けてくれたってことにした！

流石に自殺しそうだったって言うのは…… ねえ……

モカの嚴重な監視の下…… 無事、今回の事件…… カイト君
失踪事件は幕を閉じた……

『オレは…… ここにいてもいいんだな…… 何 変に考え込
んでいたんだろうなオレ。』

自然と出てきた言葉だ……

それを・・・モカは聞いていたようだ。

「全くだ。世話のかかる奴だなお前は。」

後ろにモカがいた。

『あ・・・ははは・・・これからもこんなオレだけど・・・これからも よろしく。モカ。』

「…………ふん。」

2人はしっかりと握手を交わした。

第143話 光をくれた…（後書き）

とりあえず・・・立ち直り！はっ！！！！

突っ込みどころ満載かと思えますが・・・軽くスルーを・・・苦笑

ありがとうございました！！

第144話 期末試験とそれぞれの勉強会（前書き）

よろしく願いします!!

ふう・・・

やっとですねえ・・・ 他の小説はストックがあるんですが・・・
こちらはなくて・・・
更に・・・PCも中々開けず眠ったり・・・

はい！恒例の言い訳&愚痴です

ごめんなさい・・・

では！どーぞ！

第144話 期末試験とそれぞれの勉強会

3日ほど…離れていたせいか…

新聞部は結構な修羅場に!!

「まったくー カイトのアホがおらへんから、オレ大変やったんやで???」

ギン先輩からお叱りの言葉が…

が…

「何言ってるのよ!」「部長は何もしてないですう!」

2名ほどから罵倒が…

一蹴される哀れな部長…

『ほんとーにごめん!みんな…』

とりあえず…謝罪…

「それ 何回目よ、カイト！いって！！戻ってきてくれただけで
私はうれしーよ！」

くるむはハグー！！

「ああ！わたしもするですー！」

ゆかりもダーイブ！！

「お前ら部活せーやー！」

「部長が言^ゆなー！！」「」

.....

まあ…こんな感じで変わらない部活風景だった…

やっぱり…居場所は…ココなんだな…オレの…

「カイト！」

つくねが話しかけてきた…

『ん？ ああ、つくねにも心配かけたな… 悪い。』

「いや、俺もカイトには世話になってるし お互い様だよ。」

つくねは笑っていた…

『つくねは強いよ… オレと違ってな。』

つくねも… 事实は知ったはずだ。

あの時、ギン先輩から直接聞いたのだから…

「オレ…?」

つくねはきよとんとしている。

『いや、なんでもないよ。とりあえず、ありがとう。それに…
モカもな…』

つくねの後ろにいたモカにも礼を…

裏モカにはちゃんと礼は言ったけど、こっちのモカにはいってなかったからね。

「いいよ！私も戻ってきてくれただけでうれしいから」

新聞部…

本当にいい仲間達です。

『みんな。』

カイトは皆に言う…

『これからも…よろしく…』

そう一言。

皆は笑顔でカイトを見て頷いていた。

??? side

「ふーん… 彼つて、 凄く脆い面もあるんだ… でも 意外だったね、あの九曜を完全にノックアウトしたって言うてたのに…」

外から 新聞部をのぞいていたものがいた…

「でも… なんだろ… 彼の正体、 やっぱ そっちが今は一番興味があるな。 母さんも分からないって言うてたし、 御子神理事も不明って言ったから…」

腕を組み、考え込んでいる。

「でも… まあ やっぱりそう焦ることでもない… ね。 うん 当初の通りジツクリ行こう。 その方が面白そうだ。 彼ら見てて飽きないしね。 あれが共存… における最も大切なことかもしれないからね。」
信頼関係を持つ…

妖は個々の自我が強すぎる面もあり… 中々そういった関係を作るのは難しいのだ、

組織を作ることや、仲間で（同じ種族）群れを成すことは別として
も。

全く異なる種族が互いに信頼する…

簡単なことじゃない、

人の世も戦争と言う争いはいつの時代も起こっていることだ、

そういった意味では…

最高のメンバーだね… 彼らは。

「うん。もっと気を長くして観察しよう… それと九曜もみとか
ないかね。」

そう言うと…

その場から姿を消した…

S i d e o u t

…そして…

恐怖の期末試験が目前に迫ってきました！！

「えー この解を ・ とおくと… Xの係数がaの方程式ではこうなります…」

数学の授業です。

妖怪の学園といえども人間との共存を目指すと言う教育方針上学園は必須である。

人間の学校をモデルにしているこの学園ではそのレベルも決して低いというわけじゃない。

そして…

後ろのから見ていると良く分かる。

(つくね… 後姿でも分かる、青ざめてるな…あれ 苦笑)

はい。見てて良く分かります！

と言いつくね君は…

(わからない…いつの間にこんなに授業進んでたんだ！？オレ…勉強全然わかんなくなってるよオオ！！)

今…当てられたら…

(ってベタな展開になんか…)

「じゃあコレを使ってココの問いを… つくね君解いてみて」

なつた…

案の定、つくね君は動揺しまくり、教科書落とすわオロオロしまくるわ…

もちろん…

答えられない。クラスは笑いに包まれ…先生に注意され…

そして、期末試験があると告げられると…

「やつべエエエエエ このままじゃオレ赤点ホルダーだアア!!」

叫びまくり!!

(ちょっとおちつけ!つくね!うるさいし!!)

「うっ…だっ…」

つくねは落ち着かない…

そのまま… 授業が終わった〜

「おねがいー!!カイト!モカさん!!数学を教えてください!!」

ええ…って言いたくなっただけど…

つくねのミイラみたいな顔見ると…ねえ…

「…ほら 最近…ヤバイ目にあつてはつかで… オレずっと勉強上の空になつてた… それで 気付いたらコレだよ… 特に数学！助けて！！2人とも！！この通り！！」

つくねが拝みながら… お願いを…

コレを断るのは流石に…ね。

「う…うん いいよ！私で力になれるのなら。」

モカも同様のようだ。

『オレも良いよ。』

今回はオレも簡単にOKをだす、

確かに大変な目に遭つたからね、特につくねは人間なのに… 苦笑

『お！』

ちよつと思いついた。

「ん？どうしたの？カイト??」

モカが気になつたのか、カイトに聞いた。

『ん？ちよい 猫目先生に用事が頼まれてたのを忘れててな。悪いけど、モカつくねに教えてあげて。』

つくねにウインクしながら言う、

「!」

「それは仕方ないね。じゃあつくね!一緒に勉強しよう」
そう言っつてカイトはその場を後にする…

その後 つくねの叫びが木霊した…

血を吸われたんだね…

『ははは… ま モカと頑張れ!つくね!』

2人にさせてあげた方が、気合はあるだろう、つくねは。

猫目先生との用事はないんだけど…

『オレは… 先約があつたんだよね…実は』

向かった先とは…

「カイト」

くるむです。

「約束覚えててくれたんだね」

ハグー…!!

『あはは… まあね、じゃ、やろっか?』

勉強会が始まりました。

くるむも・・・試験どーしよー！って言うてて・・・それで、お願いされたんだ。

…が、

「私もするですう！！カイトさーん！」

「ちよつと！！ゆかりちゃん！邪魔しないでよ！今2人でやってんだからあー！！」

ゆかりが乱入…

『ちよ！！落ち着いて2人とも！』

勉強を教える時間よりなだめる時間の方が長かった… 苦笑

『ふう… こんな感じだけどどう？』

暫く…3人で勉強していた。

「さすが…カイトさんですう 的確ですう！！」

ゆかりは大絶賛、でも…

彼女の方が頭いいと思うんだけど?? 苦笑

『でも…意味あるのか？ゆかりちゃんのほうが頭いいと思うんだけど… 順位見てもさ』

「意味ないなんてないですよお！私だって復習になりますし！何より！！楽しいです！」

そう言っつて抱きつく

………

??あれ??

いつもなら…くるむが乱入してくるんだけど…

つて一瞬思っつて 静かなくなるむの方を見ると…

固まっつた…

いつから!!

「ありやりや… 頭の容量オーバーしちゃったみたいですよ…」

くるむを覗き込んでゆかりが確認した。

『たははは… 大丈夫かな？くるむ…』

心配だね…

教えてる身としたら。

「まあ 好都合ですう！カイトさんとの2人の勉強会です！！」
ゆかりは大ハシヤギ！だけど…

「それはゆるさないわよー！ー！私も！ー！！」
くるむふっかーっ！ー！

『わああ！ー！』

マタマタドンパチが…

『疲れた…な。 なーんか ドツと…』

そう眩いてもおかしくないと思いますね… 苦笑

第144話 期末試験とそれぞれの勉強会（後書き）

期末試験・・・いやーな響きですね・・・

さーて・・・作者さんの成績は・・・×××・・・です！ 苦笑

ありがとうございました！！

第145話 異常な教育（前書き）

よろしく願いします!!

連続投稿できたぁ・・・!!

では!駄文ですがヨロシクデスー!

第145話 異常な教育

そして…

次の日、

『つくねはあれからどうなったんだろ？ちゃんと勉強できてんのかなあ』

ちょっと気になったので、最初はモカと2人でさせようと思ったけど…

様子を見ることにした。

「カイトさーん！」

『ん？どうした？』

ゆかりが追いかけてきたので、立ち止まった。

「つくねさんの様子がおかしいんです！」

『え？アイツならモカと勉強してるはずだけど…』

そう言つと…

「違うんです！つくねさん…リリコ先生と勉強してるみたいで…それで…様子が！」

『リリコ…ああ 数学の、なんでそれでつくねが…？って言うか、様子がおかしいってどんな？』

ちよつと驚きながら聞く、

まあ… 数学の教師に数学を聞くのは普通だからあまり深く考えてなかった。

「急に… 頭がよくなったみたいんですけど… なんだか… ぼーっとしてて… 以前、別の生徒がリリコ先生の補習を受けてたんですけど、その人もつくねさんと同じ様子だったです…」

ゆかりが不安になりながら話す。

『… なるほど、ちよつとつくねの様子を見てくるよ、心配しないで。』

そう言つてゆかりの頭を撫でる。

「はい… あ！私も行くです！」

『ん、わかった。』

そう言って2人はつくねもとへと向かった。

つくねは比較的直ぐに見つかった。

どうやら、モカと話をしているようだ。

どうやら・・・ゆかりの言ったとおり・・・

『・・・あれは。』

様子がおかしい・・・目は空ろで・・・何よりモカと話しているのにつくねに反応がなかった。

モカ side

モカがつくねの前に行く。

「つくね・・・私も やっぱり少しは協力したくて・・・ テスト対策ノート作ってみたの・・・ このノートよかったら・・・つくねに使って欲しいな・・・ 一生懸命作っただよ・・・」

ドキドキしながらつくねの返答を待っていた。

ぼーっとしてるのは勉強の疲れだろうと思っていたため、直ぐに返事してくれると思ってたモカだったが・・・

「・・・」

ぼーっとしていた・・・

「あれ・・・？えっ・・・？大丈夫？どうしたの？？」

反応のないつくねを心配していると・・・

「くらくらくら 何をしてるの？モカさん！」

リリコ先生がやってきてノートを奪った。

「リッ・・・リリコ先生！」

突然の事でモカは驚いていた。

「何これ？余計な事止めてくれる？ こんなものでつくね君を誘惑しようとするなんて あさましいっ！」

そう言ってモカにノートを放り返した。

「そ・・・そんなつもりじゃ！！！」

「いらっしゃい つくね君こんな子に構ってないで先生とお勉強しましょうね。」

そう言つと・・・

つくねを連れて行った・・・

side out

リリコはつくねをつれ、足早にその場を去ろうとした。
が・・・

『ちょっとまって もらえますか？』

カイトが前に立つ。

「あら なーに？ カイト君。カイト君も先生と補修したいの？
でも 君は成績いいからねえ・・・」

今はつくねだけしか興味ない、といわんばかりの反応だ。

『つくね・・・』

カイトはつくねの目を見る・・・

『メンタル・アナリシス
精神解析』

目を媒介にし、相手の状態を知る^{ちから}目だ。

主に、治癒する時とかに効果的な力。

これによって、相手の状態から効率のいい治癒が出来るからだ。

「・・・なっ なにかしら・・・？」

突然赤くなったカイトの目を見て少し驚きながら話した。

『なるほど・・・リリコ先生・・・貴女、つくねを洗脳してますね。教育熱心なのはわかりますが・・・やりすぎですよ?』

静かにそう言いはなった。

「なっ・・・何を言うの！洗脳？ 私は唯つくね君に、つくね君のために勉強を教えているだけよ?」

僅かだが動揺が見える・・・

『とぼけても無駄・・・早くそれを解いてください。他にも、貴女の犠牲者がいるようだ。そんな事して本当に先生なんですか？生徒達の自主勉強を否定して・・・』

静かだが・・・カイトは怒気を込めていた。

友達を洗脳し・・・友達の努力を踏みにじった。当然だと思う。

「・・・何を偉そうに・・・生徒の分際で・・・」

リリコは・・・徐々に正体をあらわにしていった。

「私は「教育」に自分の全てをかけています！貴方に土足でこの領域に踏み込むことなんて許しません!」

その正体は・・・ラミア。

下半身が爬虫類の姿をしている人の精神を支配する能力の持ち主だ・・・

『どこに・・・教育があるんですか？今の貴女に・・・』
ため息交じりで答えた。

『貴女がしているのはただの自己満足。そして相手の精神の支配、
・・・その何処が教育なんだ！』

更に・・・怒気を込める・・・

「カイト！」さん！」

モカとゆかりが近付いてきた。

『こっちは大丈夫だ。つくねを頼む。2人とも！』

カイトはつくねを2人に任せ、リリコをにらみつけた。

「・・・これ以上・・・私に逆らうというのなら・・・
貴方も私の「能力」で従順な生徒にしてあげるわ・・・」

リリコはそう言い、蛇のような下半身をカイトに向けた。

『そう出るんだな・・・やはり、お前なんかよりモカの方がよっぽ
どつくねの為に頑張ってるよ・・・』

モカの方を見る。

『誰かの為に・・・必死になって教えてる姿を見ると、お前は唯、
妖の本能に従い、支配しているだけ、教師としての格は遥かにモカ

の方が上だ!』

ブチッ!!

「ふざけるな——!!」

ブオン!

下半身の蛇を振り回し攻撃してきた!

ヒュ……

が……カイトにはあたらなない。

「この!!生徒の……生徒の分際で——!!」

つくね side

(なんだ……誰かの……声が……)

《つくね……一緒に頑張ろっね……》

つくねは・・・精神を支配されながらも・・・確かに聞いていた。

《つくね・・・がんばれよ？勉強なんてがんばりゃできる！（オレは・・・地獄だったからなあ・・・）苦笑》

カイトと・・・モカの声が・・・聞えてくる・・・

（モカ・・・さん・・・カイト・・・）

そして・・・

モカが作ってくれたノートを無視している自分の場面が見えた・・・

（あれ・・・なんで俺・・・受け取らないんだ？モカさんがオレの為にがんばってくれてるのに・・・なんで？）

そして・・・リリコが・・・それを放り投げていた場面を直視する・・・それはモカに当たって・・・モカは倒れそうになっていた。

（モカさん・・・！モカさん・・・！！）

「モカさん！！」

つくねは・・・精神支配から・・・自力で帰ってきたのだった。

side out

「この・・・！！」

リリコが攻撃を加えるが・・・

あたらない。

「くっ・・・なんてすばしっこい！」

『あんな・・・ 本当に間違ってるって思わないのか？少しも？』

攻撃を避けながら、言う。

「何が！！私はつくね君のために！してるのよ！」

聞く耳持たず。

「生徒と教師の信頼関係を作ってるだけじゃない！」

ここまで来ると・・・狂ってるとしか思えない・・・

『信頼・・・ねえ・・・ あんたにもっとも遠い言葉だ。信頼
つてのは自分と相手・・・ 両方が互いに信じて、信じられて初め
て成り立つものだ。相手を洗脳している時点でその言葉を使う資格
などお前にはない！』

そう言い風力で吹き飛ばす！！

ドゴオン！！

「きゃあー!!」

壁に叩きつけられたリリコは顔に若干の傷を負った・・・

「!!!・・・よくも・・・」

傷を見て更に逆上!!

「よくもー!!!!!!」

カイトに飛び掛ろうとするが・・・

ガシッ!!

腕を誰かに掴まれて動けなかった。

「誰!!」

後ろを振り向くと・・・

裏モカがたっていた。

「赤夜萌香ッ・・・お前までジャマするか!!生徒の分際で!!!」

逆上した怒りをそのままモカにぶつけたが・・・

ドガオオオン！！

モカの蹴り一閃！

グギャツ・・・メキヨ・・・

アゴにヒットしいやな音を出していた・・・痛そう・・・苦笑

「ぐふえアあああ！！！」

そのまま吹き飛んだ。

「勘違いするな私はお前の生徒じゃない・・・それにアレだけカイトに言われて少しも変わらんとはな・・・愚かも甚だしい自分に酔ったナルシストが・・・」

そして・・・ばっさりと言い放つ。

「お前に教わることなど何もない！身の程を知れ！」

そう言って・・・カイトの方をむいた。

「相変わらず・・・女には手をだせんのだな・・・はあ・・・」

モ力はやれやれといった様子・・・

『・・・ま・・・まあな・・・言葉で止まってくれないかな？とか思ってたんだけど・・・あそこまでイツちゃってたとおもわないしな』

カイトも苦笑していた。

「ふん・・・まあ、最初の攻撃・・・傷を与えただけで少しは成長しているようだ・・・よし、私と戦い合っぞ！」

今回は・・・戦い合っつと書いて話し合っじゃないようだね・・・

『え？』

キョトン・・・としているのはカイト君。

「約束していた事だ、拒否は認めん。」

約束って・・・

そんな昔の話し・・・

「忘れた・・・とは言わんよな？」

ギロリ・・・

にらまれたら・・・なんとも・・・

『・・・はい』

カイトも堪忍したようだ。

そして・・・テストもあるというのに・・・

つくねやゆかりをそっちのけで、組み手が始まった！！

あたりの建物を破壊しながら・・・

組み手ってレベルじゃないぞー！！！！

そんなに欲求不満だったのかなあ・・・ 苦笑

翌日・・・

リリコ先生は他でもあった そのいきすぎた教育が問題となり、二週間の謹慎処分となった。

つくねは・・・洗脳が解けると知識は全てなくなっていた・・・勉強はふりだし・・・

おまけに、カイト・モカの組み手という話し合い？じゃない戦い合いに巻き込まれ・・・

勉強時間大幅ダウン！！

でも・・・

その日の夜、つくね・モカ・カイトの夜通し勉強を部室で行った！

そして・・・次の日はモカとマンツーマン！

もちろん・・・くるむやゆかりも乱入してきたのは言うまでも無いね・・・苦笑

そしてテスト当日・・・

「ええつと・・・これなんだっけ・・・」

ブツブツ・・・ガタガタ・・・震えながらテストを受けていたつくね君・・・

『体痛いな・・・結構良いのもらったし・・・モカのは防いでも痛いんだよな・・・』

筋肉痛と打ち身に耐えながら頑張っているカイト君・・・

モカは・・・ただただ頑張っ・・・つと2人を見ていた。

テスト終了後・・・

「どうだった？つくね！カイト！手ごたえは？」

モカが早速といった感じで近付いてきた。

「う……ん……どうだろう？自信ないな」

『まあ、それなりにな。』

それぞれがそう呟く。

『まあ 変なことになってたけど、最後のほうはあれだけ頑張ったんだ。きつといけてるだろうよ。』

そう言っつつくねの肩を叩く。

「うわっ！ はは……だね…… 悔いはないよ。モカさんにもカイトにも感謝してるんだ。最後まで諦めず教えてくれてありがとう。」

そう直接言われると……やっぱり照れる…… 苦笑

モカは……涙目になり……

「つくねー？」

つくねに抱きついた。

『ははは……』

その2人を微笑ましそうに……見つめていた……

けど……

「カイトー！勉強教えてくれてありがとねー！！」

くるむがダイビングヘッド！！

『ふげげー！！』

そのままモカたちに倒れこむように・・・その場でもみくちゃんにな
っていました・・・ 苦笑

テスト結果は・・・

モカ 95点

カイト 92点

つくね 89点

ゆかり 100点

おお！皆高得点じゃん！！

.....

.....

.....

あ……残りの子は……

「あーん！頑張ったのに……！なんでえ……！」

くるむ…… 49点

惜しい！！

ゆかりは……くるむを見ながら……

「折角カイトさんが教えてくれたですのに……」

つとため息混じりにあきれていた。

第145話 異常な教育（後書き）

ありがとうございます！

原作より短縮しちゃいましたが・・・ 苦笑

そろそろ 例のDMさんとの出会いかなあ・・・

どういう展開にしようか・・・ 悩むところです・・・ 苦笑

第146話 夏休み 人間界へ(前書き)

よろしく願いします！

結構時間かかっちゃいました… 12月… 流石師走…いそがしすぎだー！

愚痴

では！あまり進みませんが… どうぞ！苦笑

第146話 夏休み 人間界へ

とりあえず… 期末の試験も無事終わり… (1人を除いてだけど
苦笑)

今つくねは ジャックオーランタンのバス停の前で… ドキドキ
そわそわとしていた。

なんで そんなことをしているのかと言うと…

「おはよー つくね!」

モカを待っていたからだった 苦笑

「モカさん!!」

モカは私服姿だった!

「早いね? まだ集合時間30分前だよ?」

髪がサラっとしてて… キラキラ輝いてるようで…

(かわいいー！今日の私服姿も何て可愛いんだモカさんー
ーッ！)

つくね君は直視できない様子だ…

暫く… つくねは 神々しいオーラが出ているモカを直視できてい
なかった… 苦笑

「いよいよ今日から夏休みだねつくね！ 休み中も家に帰るの禁止
って言うのがつくねには残念だろうけど… 楽しみだね！今日の旅
行！」

家に帰るの禁止という規則はつくねにとって酷とも言えることだっ
たのだが…

「うん！ そうだね。」

今日のつくねの顔は実に晴れ渡っている…

モカと一緒にだからという理由だけではない。

実を言うと…

あることが突然決まったからだ。

3日前…

【新聞部部屋】

『「「「ええー！合宿ー！ーッ！」「」』』

一同突然の先生の発表に戸惑いを隠せない！

『ほんとにいきなりですね… 事前に言っておいて欲しい気がするんですが…』

とりあえず 冷静を保ちながら… 苦言を一言…

「まあまあ！固い事いわないの 何しろもう直ぐ「夏休み」ですからね！私たち新聞部も休みを利用して何か活動をしようというわけです！」

にゃーん！！って擬音… じゃなく 泣き声？をつけたい… 変化するきないのか…猫目先生は尻尾…耳…猫手ポーズ…全面解放！してた…

突っ込むと引っかき攻撃が来るので軽くスルーしますが… 苦笑

猫目先生の仰天合宿内容はここからが本番だった…

「そこで… 夏休みは「取材」を目的に「人間界」に合宿に行きたいと思いま〜す！」

.....？

.....???

『って多分ですか!』 「うわ!!! いいかげんだアア!!! あいかわらず!!!」

男子達は先生と楽しそう?に質問タイム中に女子はといつとつくねとカイト...

(人間界... すごい!でも カイトとつくねが一緒なら 何処に言ったって...)

くるむは緊張しながらも... いつも通り!

モ力は... 人間界にいたことがあるのだが... やはり不安はあるようだ... 神妙な顔をしていた。

中でも一番不安そうにしていたのは...

「人間...界...」

魔女であるゆかりだった。

僅かに体を震わせていた...

そんな部員達にお構いなく... 猫目先生は...

「まあ...とにかく今回は軽...い キャンプ気分で行ってみましよ...! 泊くらいで」

ノー天気... そう言ってムリヤリ締めくくった... 苦笑

(モカさんや皆と人間界：本当にいきなりすぎて素直に喜んでいられないよ……)

つくねにとっては、最初の頃には夢にまで見た人間世界への帰還だったのだが……

それがひよんなことからあっさり実現してしまったせいか……あま
り実感が湧かないみたいだ……

「ドキドキする……」

モカがそう呟く……

「言ったよね……私も 人間界で中学まで暮らしてて……ずうっと
人間が嫌いだったって……」

モカは不安そうにそう答えた。

「まさか……！モカさん人間界に行くのが……」

「うん…… 本当を言うとまだ ちょっと不安……かな？ あの頃のつ
らさとか……色々と思い出しちゃって……」

モカがそう告白すると……今度はつくねが不安そうな顔をする……

不安というよりは… モカの心配をしているんだけど… 人間界が
クライ＝自分のことも… に繋がるのだろう…

モカはそんなつくねを見て慌てて、

「あつ でも平気だよ！つくねもいるし！カイトもいるし！不安よ
り楽しみのほうが大きいくらいだもん！」

両手を振り平気平気！！とつくねに言う。

「…モカさん…」

つくねは少し… 表情が明るくなったようだ。

「頼りにしてるからね つくね！」

「モカさん…」

いい雰囲気は…？

だけど…

「いやですう…！」

叫び声が聞えてきた為… がくっ… っとなってしまうていた。

苦笑

お約束…

「私… やっぱり人間界なんかいきたくないですう…！」

再び叫び声が…

見てみると… くるむとゆかりだ。

「おはよう！どつしたの？くるむちゃん！」

つくねが近付いていく。

「あ… おはよー？ つくねっ！それがね… さっきそこで会ったんだけど ゆかりちゃんが行きたくないってごねだしちゃって…」

ゆかりの表情は… とても暗い…

「あつ！それより カイトはまだ来てないの？」

くるむがキョロキョロあたりを見ながらそう言う。

「うん。 まだみたいだよ？ 今日はオレが一番先について、次にモ力さん… その後にくるむちゃんゆかりちゃんだから。」

「そーなんだ… まだかなあ…」

そわそわ… さっきのつくねみたい… 苦笑

『ん？オレなら来てるよ？』

つくねの背後からすっと出てきた！

「ってわー！びっくりした！！ カイト！何時からそこに？」

「あ！おはよー！カイト」

つくねは驚きながら…

モカはマイペースに！

それぞれ挨拶

『まあ… それは… 空気を読んだつもりなんだけど…』

つくねをじっとみる…

そしてため息…

「あ”！！（さっきの見てた？）」

『やれやれ… じつじつ運命こめいってやつなのかね？つくねくんは…』

苦笑いしていた…

「ちよつと〜！！カイト！！いるんならいるって言ってよ！！…」

つくねがカイトに向かって大慌て！

さっきのモカとのシーンの時にはっちりいたようだ…

『あんな時に誰が話しかけれんだよ！誰が！！』

そりゃ… 話しかけるのは野暮だね… 苦笑

野暮っていつか… 無理？ 苦笑

「わぁー！カイト？ おはよー！」

『おはよー！ 皆！』

そして… 全員揃うが… やはり、ゆかりの表情は優れない。

「もー！折角いい気分なのに〜！ まっ… たぶん 見知らぬ世界にビビっているだけでしょ？ しょせんは子供よね〜」

くるむはやれやれといった感じでため息1つ…

それがゆかりの癪に障ったようだ。

「くるむさんみたいな単細胞にはわかんないですう！！」

怒ってステッキを振るう！

「名にイイ！誰が単細胞よ！コラア！ 《ガン！！》ゲフツ！！」

『「まあ まあ…」』

喧嘩が始まったから… とりあえず モカとカイトでなだめて…

つくねはこれからの事になにやら不安を感じているようだった…

苦笑

なにやら…

後部長がない気がするけど…それは、期末で赤点取ったから補習なんだって。

『？あれ？？くるむはだいじょうぶ』わ〜〜！早くの乗ろっ！！
カイト！！バス来たよ〜〜」

つと焦りながら…カイトの背中を押す！押す！！

実はといたしますと…

サボったらしいんだ

「あ…ははははは…」

くるむは笑って誤魔化しながら…バスへ。

新聞部一同も（1名を除き…）バスへと乗り込んでいった。

第146話 夏休み 人間界へ（後書き）

ありがとうございました！

カイト君の出番が少ない話でしたね…

こんなときもある！ということ…スルーを… 苦笑

第147話 合宿・バスにて（前書き）

よろしくお願いします！

さて… まあ… なかなか… あえないですね… 長女の女の

ことか… 新聞部元部長とか…

でも！会えるまでガンバリマス！！

つてかあつた後でもガンバリマス！ 苦笑

第147話 合宿・バスにて

「おはよー！皆！」

バスの中で迎えてくれたのは猫目先生。

でも・・・それぞれいろんな意味で緊張しているせいかな、殆ど無言でバスへ。

（大丈夫！きつと楽しい旅行になるよな・・・俺は人間なのに妖怪の学園に入学しちゃったあの荷からずっと人間界にもどれる日を夢見てたんだ・・・きつと・・・）

ドキドキしながら・・・考え事しているのはつくね・・・

人間である身で、この学園でやっていくと言うのは相当な覚悟だったのだから・・・

たとえそれが恋のためだったとしてもね・・・苦笑

『…あっさり帰れてしまうこの状況にちょっと浮かれてるな？つくね？』

その後ろでカイトがつくねに言った。

「う・・・うん。やっぱり夢だったからね、皆がいて・・・とても楽しいけどやっぱりオレは・・・人間だから・・・」

それはそうだろうな・・・やっぱり・・・

でも吸血鬼化するようになった時点で人間なのかな？・・・苦笑

『ははは・・・まあ 気持ちはわかるよ。でも・・・あんまり浮かれすぎには注意しろよ？ なんとって・・・』

「これは・・・陽海学園しんぶんがくの合宿だからねえ・・・ヒヒヒッ・・・」

言葉を繋げたのはバスの運転手・・・

「え・・・？」 『ん？』

つくねとカイトがほぼ同時に運転手の方を見る。

「久しぶりだな 少年達~~~~」

(ああ！オレを陽海学園につれてきた運転手さん！！)

つくねはびっくり！ そりゃそうだ。雰囲気も・・・あれだし？ 苦笑

『バスと言ったらやっぱり貴方ですよ。久しぶりです。』

カイトは割りとナチヨラルに会話をしていた。

「ヒヒヒ・・・ 君たちはいい関係のようだ・・・ よかったなあ 少年。

彼がいなかったら、公安のとき… 取り返しの付かなかった事になつてたかもだぞ〜？」

不気味な笑顔で…そんなこといつちゃ駄目だつて… ほら…つくねの顔が引きつってる！

「なんで…そのことを？」

引きつってたわけじゃなかったみたい… 苦笑

純粹になんで知っているか不思議だつた見たいだ。

「しってるさ〜 わしは君を連れてきた責任があるしね〜 でも注意する事に越した事はないぞ〜？少年たち。」

「あ… はい…」 『そうですね。人間界で無茶なことが起きたら最悪だし…』

そちらの方が心配…

問答無用で退学のケースだつてあるらしいし…

『さっ つくね。早く後ろに行つてくれ、オレの後ろがつつかえてる。』

カイトの後ろにはまだくるむとゆかりがいたのだ。

くるむはまだゆかりと睨み合つてたみたいだから、まあ そこまで急がなくても気付きそうにないけどね？

そして… 後ろへ行こうとした時。

「あぁと… 待ちたまえ… 少年。」

少年… だけじゃどつちか分からないけど… 苦笑

位置的には… カイトみたいだ。

『はい？なんですか？』

「バスの… 最後尾に 1人お客が乗ってるんだが 君と話がしたい
見たいらしいんだ… 」

そう言つて、葉巻で指差す。

その先には…

長髪の男？が座っていた。

『ええつと… 誰？』

カイトがちよつと不審に思つて聞いてみる。

「ヒヒヒ… 警戒は無用だよ… 君には感謝しているそうだから
」

そう言つてまた笑う…

質問の答えになつてないよ？

『はあ・・・ まあいいや、とりあえずオレに話があるんだね？
っていうか、この人間界行きのバスに乗ってて大丈夫なの？』

そう聞くと・・・

「彼は… まあ 学生じゃないからね・・・ 最初は御子神のやつ
は…生徒になってもらうって言ってたけどな… 何分コントロール
が難しいやつみたいなんだ。」

難しい？何それ？

『???良く分かりませんが… とりあえず話しは聞いてみましょう、

』

そう言つて、新聞部の皆にこの事を伝え、彼？に話を聞きに行くこ
とにした。

見たことない妖ひとだったから、ちょっと皆不信感を持つてたみたいだ
けど・・・

カイトに感謝してる・・・っていう、運転手さんの説明？のおかげ
で・・・とりあえず 不信感はなくなつたみたいだ。

そして、バスの最後尾。

席に後何メートルかって所で、瞑っていた目が開きこちらを見る。

「やあ… はじめまして… 御剣怪斗君。」

そう答えた。

『こちらこそ……って言いたいけど、オレは君のこと知らないけど、君はオレを知ってるんだね？運転手さんに聞いたんだけど　とりあえず、何に対しての感謝なのかな？君が感謝してるって聞いたんだけど。あと名前もできたら。』

そう言っつて、相手の目を見た。

目を見たら大体分かる……

相当……できる男のようだ。

中性的な顔立ちだけど、声やその発音で、男であることが分かった。

「ああ……そうだったね。　まず僕の名は葛乃葉くさのひ　琥珀くわくって言うんだ。そして　感謝って言うのは……これかな。」

そう言っつて一枚の写真を見せる。

その写真は……

『……公安の九曜か……若干若めだけど。』

写っていたのは九曜だった。

九曜……公安のトップの一角「妖狐」……

『なるほど……感じた事ある妖気だと思ったわけだ……君も「妖狐」ってことか？』

『よしてよ。オレは友達の為にやった事だし・・・（暴走しちゃうんだけど…）それに、第2ラウンドが始まりそうなのを止めてくれた君にも礼を言うよ。』

そして、カイトもお礼を・・・

2人して頭の下げあい・・・

「『ふっ』ふっ」

「『あははははは・・・』」

最後には互いに笑いあっていた。

「君は良いよ。やっぱりね、僕はいろんな妖を見てきたけど、その中で一番興味を持ったね。変な意味じゃなくてさ。」

『それは・・・喜んでいいのか困る話しだな。変な意味じゃないって言われて良かったかな？男に興味もたれて喜ぶ趣味は無いほうだから。』

苦笑・・・

「ははっ・・・普通はそうだよ。でね・・・ちよーっとあつかましいんだけど・・・」

そして・・・何かを媚びるような目で見てくる。

『ん？何？』

「君の正体って何なのかな？ 母が言うには… ジャック…
エレメント・マスター精霊使いっていったけど… 本当なの？」

……

『……（エレメント・マスター……？ それは……確か……
当初につけてもらう予定だった能力なんだけど…… どういうこ
とだ……？それに……またジャック……って……ん……
まあ良いや 君の正体も教えてもらったし。オレはエレメンタル・マスター精霊魔導師だ
よ。名は似てるけど…… 多分違うと思う。』

そう言った。

「……なるほど…… でも根源の大妖…… だったんだ……
・ 感じた事ない力のはずだよ……」

そう言って苦笑していた。

『後さ。ジャックって誰のことなんだ？』

核心に…… 触れるような…… そんな感じがした。

何度か聞く名前…… そして…… 今聞いたその男の力……

自分が本来持ちたいと願った力を持つ者がいると言う事なのか……
？

だから・・・自分に能力付加されなかったのか・・・？

そう言った仮説が頭を過ぎっていた。

「ん・・・僕は話しに聞いたただけだけど、かの三大冥王は知ってるよね？」

「ん？ああ、それは知ってるよ。退魔師^{エクソシスト} 妖術師 そして、真祖の吸血鬼・・・だったかな？」

これは・・・ある意味有名な話だ。2000年ほど前にアルカードと呼ばれる真祖の吸血鬼を倒したと言われる伝説の妖怪たち。

まあ・・・確か・・・その1人は陽海学園理事長だけど。

まだ あってないな・・・そういえば・・・苦笑

「そつ、でね。これは事実かどうか・・・僕は知らないんだけど、母が言うには冥王はもう1人いたらしいんだ。それが ジャック・^{エレメント・マスター}精霊使いなんだって。」

・・・

・・・

『・・・それは・・・知らなかった・・・な、どうもありがとう。』

「いやいや そんな大したことしてないよ。」

そう言って琥珀は笑っていた。

その笑い声につられてか……

他の皆もいつの間にか会話に入ってきた。

さっきまでのシリアスな話しは一瞬だけ。

自身の正体を明かしたその時だけだ。

一瞬警戒したようだが……

九曜をやっつけてくれてありがとうって言いたかった。

と言って時 警戒は解けた。

彼の笑顔は……屈託のない笑顔だ。

とてもじゃないけど……嘘をついてたり……って感じは全くしない。

「あはは……君たち面白いね？ うう……ん……学校にはぜーったい行きたくないけど……まあいつか。会おうと思ったら会えるんだし……」

そう言って笑っていた。

「ええー 学校は大切だと思うよ？ 琥珀君！」

「なら、くるむさんは勉強をもつと頑張るべきです……」
いつもより……ゆかりの毒舌にキレがなかったのは……やっぱり、人間界に向かっているせいなのか……

でも、琥珀と話している時は時折笑顔が見えていた。

「ははは……」

つくねも笑っていて……少し期待もしていた。

このまま、ゆかりちゃんが……笑顔でいてください……と。

そして、楽しく話していたとき。

「ヒヒヒ……楽しそうなところすまないが、そろそろ……トンネルに着く……「四次元トンネル」と呼ぶものもいる人間界のトンネルに繋がっているトンネルだ……こいつを抜けると妖の世界としばしお別れというわけだ。楽しそうだが……少し心の準備をしないとの方が言いぞ……」

そう言って……笑っていた。

すると……皆に緊張が走る……

そして……

トンネルへ……

「じゃっ！また縁が会ったら合おうね？新聞部の皆！」

そんな声が聞えたような気がした。

カイト以外は皆聞えてない様子だったけど・・・苦笑

皆緊張してたからねえ・・・

長い長い・・・トンネルを抜けると・・・

そこはつくねにとって・・・待ちに待った人間の住む世界が広がっている・・・

「ああー！人ですう 本物の人間が・・・」

「当たり前よ！人間界だもん。」

「すっごい日差し・・・ こっちも夏休みかな？」

「・・・・・・」

『・・・ははは・・・』

皆・・・それぞれ、人間の世界に興味津々・・・

そして、つくねは帰ってきた事に対して涙ぐんでいた。

若干涙ぐむつくねをみて・・・ つい笑みを零していた。

「はあ・・・ 人間界かあ・・・ 琥珀君は来た事あるの？何か静かだけ・・・

「ど……っってあれ??」

くるむが振り返ると…そこには誰もいなかった…

「あれー！琥珀君！？何で？いなくなってるよ！」

突然の失踪に驚くるむ…他の皆も同様だった。

『この感じは…妖力…だな。彼、妖術にも長けてるようだ。』

カイトはほのかに香る…妖気を感じていた。

と言うか、葉っぱ…落ちてるし…

「ヒビヒ…彼は同じ場所にとどまったりしないよ…その日の気でフラフラ出かけるらしいんだ…」

そう言って笑う…運転手さん…

(気まぐれって!!…そんなのあるの!!?)

つくねは驚き…

「あはは…変わってるね…」

「あれじゃ、学校嫌がるの分かる気がするわ…」

「です…」

他の皆も…苦笑…

「でもね〜 彼があんなに楽しそうに話すのは 初めてだねえ〜
またひよっこり現れるかもしれないよ〜 その時はよろしくやっ
てくれ・・・」

そう言って、バスを走らせた。

第147話 合宿・バスにて（後書き）

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0415u/>

ロザリオとバンパイア ~ Another story ~

2011年12月23日00時53分発行